
烏壬かぐやと蛇神の森

瓦vもすけ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

烏壬かぐやと蛇神の森

【Nコード】

N6961H

【作者名】

瓦Vもすけ

【あらすじ】

獣化、獣人化、対怪物。神から奪った勾玉（魂）を修験することによって、人は〈修験者〉となり、超常の力〈陣〉を操れるようになる。架空日本。年代は幕末ながら山や海に神妖がひしめくため、領土拡張が難しく比較的低人口、なので戦国や平安の雰囲気も。主要登場人物。烏壬かぐや（お姫さま）。烏壬剣十郎^{ドロップアウト}。烏壬宵子（小さな女の子）。バハムート（猫）。

001 VS史上最悪の妖(一)

妖あやかしの軀からは、うっすら赤い色をした妖氣がたち上っている。

相対する剣十郎の身体も、青白い靈氣に包まれている。

彼が手にする〈闇色の日本刀〉も、青白い靈氣によって鎧よろいわれていた。

これら修験者や神妖が身にまとう固有の色を持った靈氣は〈陣じん〉と呼ばれている。

意識によって制御された靈氣であり、身を守る鎧にも、敵を打ち砕く剣ともなる。

自分以外の〈色〉を持つ存在に困惑しているのか、妖は『きしやり、きしやり』と威嚇しつつも、なかなか動こうとはしなかった。剣十郎も、焦ることなくじっくり妖を観察している。

2

先に動いたのは、妖だった。

動き出すと、その行動に迷いは見えない。

一五対の脚を器用にうごめかせ、木々の間をすり抜ける。

足運びのわりには直線的な動きで、剣十郎めがけて襲いかかる。

妖は、左右併せて三十本の長い脚を大きく広げて、剣十郎に覆い被さる。

そうやって退路を消して、肉食の昆虫が獲物相手に取る行為そのままに、鋭い牙を突き立てようとした。

だが、剣十郎は容易い獲物ではなく、修験者だ。

剣十郎は自らも踏み込み、太刀を一閃させた。

妖氣に護られているはずの妖の左脚が、三本、飛び散った。

妖の牙をすれ違うようにかわし、剣十郎は出来たばかりの隙間からあっさりと抜け出る。

妖の背に飛び移ると、真黒の刃を突き刺し、捻る。

赤緑の体液が飛び散り、妖は『ぎじゃあ』と鳴いた。剣十郎を振り落とそうと、転がるようにのたうち回った。

剣十郎は素早く太刀を引き抜き、跳躍して大地に下りる。

再度、剣十郎と妖が対峙する。

剣十郎は、面倒くさ気に突っ立ち、妖の体液で汚れた黒刀の背で肩をとんとんと叩いている。

しかし視線は、妖を見据えて放さない。

妖は、じりっじりっした後ずさった。

そして二七本となった脚をうごめかせ、方向転換、脱兎のごとく逃げようとした。

「ふん。たわけが」

剣十郎は小さくあざけり、地を蹴った。

妖の先手を打つように木々の間を駆け回り、存分に剣を振るった。妖の胴体を守るようにそびえる脚が、一本、二本と切断され、散っていく。

からすみ
烏壬剣十郎。

彼の乱雑に切り散らされた黒い髪は、左右の長さすらあっては居なかった。

どんな状況にも揺るがない冷えた眼と、精悍な顔立ち。

黒一色だった道着は、ゆったりとした簡素な羽織袴。ほどよく色が落ちて、井鼠色になっている。

羽織から覗く肉体は、赤銅色。

鍛え上げられ、研ぎ澄ました業物のように、引き締まっている。

腹には、えぐれた、大きな疵痕。

抜き身の業物は、神妖の血肉で鍛えられた、宝刀・小烏丸。こがらすまる

足下は、足袋に脚絆に、草鞋履き。

烏壬かぐやは、そんな剣十郎を今日ほど頼もしいと思ったことはなかった。

烏壬かぐやは、顔を歪ませ、目を逸らしながら、ちらりちらりと両者の戦いを盗み見るように見守っていた。

烏壬かぐやの横には、同じ学院に所属する修験者、久遠寺双葉がくおんじふたば立っている。

二〇センチほどかぐやより高い位置にある彼女の顔は、青白くなつて強張っていた。

かぐやは彼女の怯えた顔を初めて見た。

いい気味だと思い、かぐやは唇の端を嘲笑の形に持ち上げた。しかしひくっひくっ引きつった笑みにしかなかったので、冷笑することを諦めた。

二人の女性の後ろで、真っ白な髪をした少年、鹿村雪兎しかむらゆきとはいつものように微笑んでいるが、彼も戦闘に参加しようとはしなかった。

修験道寺院は、それぞれの規模や環境に応じて、〈浄域じやうぎく〉と呼ばれる縄張りを持つ。

五山の一つ、烏壬本山では、歩いて一〇日程度の距離が〈浄域〉となっていた。

本山から独立して五ヶ月。

桃山に居を構えた〈烏壬かぐや学院〉の浄域は、未だ確定していないが、三日程度の距離で落ち着きつつあった。

学院の規模を考えると、これはかなり広い〈浄域〉になる。

〈浄域〉で発生した諸問題——特に神妖の関わる問題の解決は、慣例として、寺院が受け持つことになる。

一種のご近所づきあいであり、大した謝礼は望めない。

しかし健全な寺院経営の第一歩としては、手を抜けない活動ではあった。

お膝元の広さと安定は、寺院の信用と格を決める重要な判断材料となるからだ。

烏壬かぐやは、〈浄域〉の村からの懇願を受け、今日も妖の調伏にかり出されていた。

五ヶ月の間には、二匹の神と、それなりの数の妖を調伏して来ている。

戦うことにも、血の臭いにも随分と慣れ、自信も付いた。

純粹な戦闘力で判断すれば、今回の妖は、今までと比べても容易い部類に入るだろう。

……その容姿を、考慮しなければ。

平べったい胴体に、一五対の不釣り合いに長い脚。

本来のサイズでも、近寄りがたい異形をした節足動物。

その名もへげじげじ。

ヤツが妖化し、胴体だけでも人間と大差のない大きさまで、成長していらっしやった。

剣十郎が、色々と見たくないものを飛ばしつつ、妖を削っていく。その醜怪な様相に顔を青くしつつ、

（早く終わってほしい！）

かぐやが祈っていると、剣十郎と視線があった。

ばつが悪そうに剣十郎が、苦笑いを浮かべる。

彼はちらりと赤黒く汚れた真黒の刀身を見てから、かぐやを見返した。

（そう、早くとどめを刺しなさい！）

その想いを込め、かぐやは強張った顔で、強く強く、頷いた。

001 VS史上最悪の妖（二）（後書き）

日本であって日本ではない、ほぼ異世界ファンタジーです。

主人公たちは修験者ですが、鋼の錬金術師の錬金術以上に、一般的な修験道のイメージとはかけ離れています。まあ、ジャンルとしては怪獣系異能者バトルです。

002 VS史上最悪の妖(二)

妖の脚は間引かれ、一二本にまで減っていた。
胴体からは赤黒い体液が流れ出て、深い切り傷からは臓物がはみ出ている。

妖の動きは鈍っていた。

身にまとう妖気も、消えかけた火のように頼りない。

やけくそ気味に剣十郎への反撃を企てているが、振りかざした脚は、逆に剣十郎の太刀によって、切断されていく。

取るに足らない相手であるが、剣十郎は勝負を急がない。

神妖との戦いは、慎重の上にも慎重でなければならぬ。

捨て身の反撃があり得る分、手負いの神妖は、無傷の神妖よりも、危険な存在ともなりえるのだ。

ほんの些細な油断から、命を失いかねない。

だから剣十郎は、とどめを急ぐことなく、じわじわと妖を無力化していく。

半分以上の脚を失って、妖は逃げるのを諦めたのか、動きを止めた。

剣十郎も足を止めた。

妖の向こうに、かぐやたち三人の姿が見えた。

いつも「出しゃばるな！ 姫を立てろ！」と口うるさい双葉が、呆れているのだろう、顔を歪めてそっぽを向いている。

雪兎はいつもの胡散臭い笑顔で微笑んでいる。

そして本家のお姫様、烏壬かぐやは、唇を噛みしめ眉根を寄せるように、烏壬剣十郎を睨んでいた。

ばつが悪そうに剣十郎は苦笑した。

妖の調伏は、何も妖を駆除することのみが目的ではなかった。

烏壬かぐやを成長させること、烏壬かぐやに経験を積ませること、それこそが学院の重要な目的だった。

剣十郎が一人でやり遂げては、意味がない。

かぐやが闘わなければ。

剣十郎は（やりすぎたか）軽く反省しながら、妖を見て、黒刃を見て、かぐやを見る。

彼女が頷くのを確認して、剣十郎は妖への攻撃を中断した。

妖は『きしゃ、きしゃ』と哀れな鳴き声で剣十郎を威嚇していたが、剣十郎が動かないことを確認してから、一步、二歩と後ずさった。

妖が後ずさった距離を、剣十郎はゆったりと詰める。

追い立てられるように、妖は更に下がっていく。

剣十郎がその隙間を前に出て消す。

妖はぎこちない動きで振り返ると、剣十郎に背を向け、逃げ出した。

剣十郎も、走る。

妖の退路を断ちながら、刀を振り、妖を誘導していく。

……烏壬かぐやの方に。

ゲジゲジの妖が、剣十郎に追われるようにして、かぐやに向かってくる。

「なっ、なっ、なっ」

あまりのことに、かぐやは喉を引きつらせて言葉に出来ない。
体中から体液をほとぼらせ、折れ曲がったり引き裂かれた脚をぎ
こちなく動かし、怒り狂った大きなゲジゲジが近づいてくる。

「ふっ、双葉！」

かぐやは双葉の腕を強く掴んだ。

「なんだ！ 姫」

「行きなさい！ 行って、死ん——！ いいえ、殺して来なさい！」
身体全体で双葉を押すようにして前に出す。

「姫！ 私は戦いが嫌いだ！」

双葉が抵抗して後ろに下がる。

「ありえません！ あなたは立派な戦闘狂です！ 戦いが嫌いなのは
ずはありえませんか！」

かぐやの指摘に、双葉は素直に言い直した。

「姫！ 私はゲジゲジが嫌いだ！」

「私だって嫌いです！ それに嫌いなら、とっとと戦って仕留めれ
ばいいでしょう！」

「屁理屈を言う姫も嫌いだ！ それにその理屈なら姫が戦って倒せ
ばいいだろう！」

二人の女性はお互いの衣服を引っ張ったり押したりして、もみ合
っている。

そしてもみ合ったりしていたため、逃げるタイミングを逃した。
その過ちに二人が気付いたときには、ゲジゲジはすぐそこに。

『キシヤアアアー——』

二人の身体が強張り——

「うわああああっ！」

双葉はかぐやを力一杯、振りほどき、突き飛ばした。

単純な筋力では、小柄なかぐやは双葉の敵ではなかった。

かぐやは身体のバランスを崩し倒れた。

生け贄よろしく、ゲジゲジの眼前に。

「ひやっ！ ひやっ！ ひやあああああ！」

迫りくる殆ど惨殺死体寸前の妖を前に、かぐやは絶叫した。

口を開けた状態から叫んだので、「いや」が言えずに「ひや」になっていた。

妖が、かぐやに覆い被さる——寸前、

辺りの温度が一気に下がり、氷のつららが数十本、出現した。

四方八方から妖の軀を貫き、空中に縫い止める。

妖は、座り込んだかぐやの頭二つ手前で、絶命し、停止した。

「ひやっ、ひやっ、ひやっ」

涙と鼻水に濡れた顔で、かぐやはひきつけを起こしていた。

白髪の少年、雪兎がかぐやに横に歩を進め、さわやかに微笑んだ。

今の彼は白い粉雪のような〈陣〉をその身に纏っていた。

妖を貫いた氷のつらは、雪兎の験力・〈神通力〉である。

「危なかったね、かぐやちゃん。僕が居なければ——」

ふあさり、と髪をかき上げ、恩を着せるように雪兎がそこまで言ったとき、ずたずたに引き裂かれ、射抜かれた妖の亡骸から、大量の体液が、

ぼとぼとぼとぼ、――かぐやの上に、降り注いだ。

雪兎は気まずそうに顔を逸らした。

五秒の放心の後。

烏壬かぐやは、

「いやややあああ――――っ」

臆面もなく泣きながら、すぐ横にいた雪兎の胸に飛び込んだ。

「かつ、かぐやちゃん。大胆だね！ 感謝の気持ちは、ほっぺにキスで――」

嬉しそうだった雪兎の声が途切れる。

かぐやは抱きついたというより、ごしごしと自らの顔や髪に付いた妖の体液を、雪兎の服に擦り付けていた。

雪兎は少し「うっ」と呻き、苦しそうに顔を歪めたが、すぐにぎこちなく微笑み、優しい男の常として、かぐやの背中を撫でた。

さわさわさわと。

下に向かって手が動き。

「ぐふう」

腰骨辺りに手が達したとき、かぐやの拳が、雪兎の顎に命中した。倒れた雪兎の袖で、かぐやはまだ顔を拭っていた。

震える雪兎の手が、かぐやの頭を撫でた。

かぐやは雪兎のお腹を踏みつけた。

烏壬かぐやは半狂乱になりながら、雪兎の服で、不快な汚れを拭き続けた。

雪兎は触るたびに殴られ踏まれていた。

おしりに指が触れた時にはのど元を全力で踏まれ死にかけた。

「ごめんな、姫」

少し情けない声で、ちよつと離れたところから、久遠寺双葉は謝罪した。

そんな三人を無視して、ゆっくりと剣十郎は、妖の亡骸に近づいていく。

屈み込み、妖の亡骸に手のひらを当てる。

その様子に、三人の修験者が後ずさって距離をとった。

剣十郎は目を瞑り、意識を集中させ、〈気〉で妖の内部を探っていく。

「ここだな」

呟き、目を開いた。

ゲジゲジの胸元、心の臓の近くに、ゆっくりと、注意深く小烏丸を差し込んでいく。

それから刀を慎重に操作し、こぶし大程度の肉のかたまりをくり抜く。

仲間達が顔を歪めて離れるのも気にせず、剣十郎は、くり抜いた肉のかたまりを、両手でほぐして選り分けていった。

中できらりと光る〈何か〉を見つけ、剣十郎はほんの少し口元を緩ませる。

まがたま
〈勾玉〉である。

勾玉とは、神妖のみが持つ、神霊器官だ。

神妖化した魂を核として、神妖の中で、真珠のようにゆっくりゆっくり形成されていく。

その小さな宝石のような器官の中に、肉体以外の神妖の全てが閉じこめられている。

「やはり、妖だな」

一粒の小さな点滅する砂粒をつまみ出し、剣十郎が呟く。

勾玉がある一定以上、米粒程度に成長すると、万物は〈陣〉を持てるようになって神妖と見なされる。

しかし米粒程度の勾玉は脆く、修験には適さない。

人が修験に利用出来るのは、その三倍程度に成長した勾玉からである。

山界では、修験に使える勾玉を保有する神妖を神（または保有していないような神妖を神）と呼び、それ以下を妖として区別する。

「どうする？」

剣十郎が、手の中の勾玉をかぐやに差し向けた。

かつての山界では、使い道のない妖の勾玉は破壊が原則だった。

しかし近年では、最低等級の勾玉でも、持ち帰ることが多い。

今はまだ修験には使えないが、いずれ成長する可能性もある。

何かしらの研究材料にもなる。

かつてと違い、山界はどん欲にありとあらゆる万物の使い道を模

索していた。

「近づくな！ 捨てる！ 壊しなさい！ そんなもの絶対に笹原にだけは渡してはなりません！」

かぐやは近づいてこようとする剣十郎に甲高い声で命じると、石を拾って投げつけた。

003 月夜視のかぐや

山域の村には、旅人が逗留できる客殿が必ず一つはある。

修験者や隊商を持てなすためだ。

特に修験者の来訪や逗留は、山賊や妖に怯える村々にとっては何よりも有難かった。

だから客殿は、往々にして村でもっとも立派な造りになっている。大きな村なら複数の来客に備えるために、複数の客殿を備えていることもある。

妖退治を学院に依頼した〈柿ノ木村〉にある一つ限りの小さな客殿で、一行は戦いの疲れを癒していた。

「それで、かぐやちゃんは？」

鹿村雪兎の問いかけに、

「まだ風呂に入ってる」

かぐやの様子を見に行き、帰ってきたばかりの久遠寺双葉は、ぶっきらぼうに答えた。

「綺麗好きだなあ、かぐやちゃんは」

何を想像しているのか、赤く染まった締まりのない表情で雪兎が笑う。

その横顔を双葉は呪い殺しそうな眼差しで睨み付けたが、直ぐに顔をそらして溜息を吐いた。

かぐやが客殿の風呂を占拠しているため、他の三人は村長の住居で風呂に入り、村に預けておいた荷物から、替えの衣服を出して着替えていた。

先ほどまで雪兎の両脇では、村の娘がべったりと寄り添って酌をしていた。

双葉が丁重に――部屋からだけでなく客殿からも――全ての村人を追い払ったところだった。

出された料理を美味しそうに食べている雪兎を見ながら、

「良く、食えるな」

呆れた顔で、双葉は呻いた。

どっかりと座布団の上に座る。

卓の銚子を手に取り、自酌する。

「それは、僕だってかぐやちゃん心配だよ。でもさすがにお風呂にまで慰めに行くのは……行ってみたいけれど、後が怖いからねえ」

雪兎の戯れ言に、苦い顔で双葉は、杯を口元に運ぶ。

酒を一気に飲み干してから、

「姫の心配もだが、あの妖と戦った後で、よく飯が喉を通るな、と言っているんだが」

「出された料理は食べておかないと、村の人たちが気に病むからね」雪兎の言葉に、双葉は食卓の上を眺め、目を見張った。

四人ではとても食いきれないほどあった料理は、かぐやと双葉の分を残して、大半が片付いていた。

いつも給仕の娘たちにも酒を振る舞い、料理を食べさせる雪兎の行為には、

「なるほど。スケベ心以外にも、そう言う配慮もあったのか」と、双葉は感心した。

「酷いな」

雪兎は苦笑した。

「良い関係を構築したければ、接待される側も気を遣わなきゃ。近寄りがたい寺院には、当たり前だけど村人は近寄らないからね。そうなる所こっちからも気軽には頼み事が出来なくなるし、貴重な噂話、情報も入らなくなる。常識でしょ？　少しは君たちも気を遣っ

てよ。かぐやちゃんは仕方ないとしても、二人とも僕よりも年長者なんだし。剣十郎なんて〈流浪〉やってたんだから分かるでしょ？」

雪兎に話を振られ、部屋の隅で刀の手入れをしている剣十郎は、顔も向けずに、

「ほざけ。俺の仕事は戦うことだ。愛想振りまくのはお前一人で十分だ」

素っ気なく答える。

雪兎と双葉が学院に参加してからまだ二ヶ月程度だが、剣十郎とかぐやは〈浄域〉の村々と五ヶ月になる付き合いがあった。

信頼を得るに足る、密接な五ヶ月だった。

今さら多少、多すぎる飯を残したところで、崩れるような関係ではなかった。

それに雪兎が剣十郎に絡んでくるのは、今日に始まったことではない。

それを剣十郎が適当にあしらうのもいつものことだった。

「酷いなあ」

雪兎は呆れたように首を横に振る。

「本当に剣十郎は酷いやつで子供だな。猫みたいに自分勝手に気まぐれで。今日だって棒の先に毛虫乗っけて追いかけるみたいな嫌がらせして、かぐやちゃんは泣かせるし。少しはバツハの爪のあかでも飲ませたいね」

バツハとは、かぐやが飼っている式神の小猫の名前だ。

「泣かせたのはお前だろう？」
と剣十郎。

「いや、あんだだろう。……いや、双葉が最大の原因だった気がするな」

雪兎が顎に指を当て、呟いた。

双葉は頬を赤く染め、暗い顔で俯いた。

守るべき姫を妖の前に突き飛ばしたことを——致し方ない事情が有ったとはいえ——彼女なりに後悔していた。

剣十郎が、無表情のまま、

「気にするな。かぐやには必要な経験だ。汚れることを嫌って戦えるわけがない」

双葉はむっと唇を尖らせる。

気にするなど言っているが、汚れることを嫌った双葉には、責められているようにしか聞こえない。

「たといかなる理由でも、それが恐怖でも嫌悪でも憐憫でも、敵を前にして怯む修験者は、山域では長生き出来ないからね」

雪兎が白い髪を揺すり、楽しそうに笑った。

双葉に向いた彼の視線には、少し揶揄する光があった。

それから雪兎は、小魚の天ぷらに塩を付けて口に運び、頬を緩ませる。

駆け出しの修験者が最初に学ばなければならないのは、汚れること、である。

戦いは決して優雅ではなく、総じて血生臭いものだった。

殺すことや汚れることを恐れていては、戦うことなど出来ない。

双葉も駆け出しの頃、一応はその洗礼を受けてはいた。

おかげで獣の血や臓物に怯むことはなくなった。

だが、雪兎や剣十郎ほどには、現場仕事に慣れていない。

人の死を前になると、未だに目を背けたくなるし、害虫的な神や妖は苦手だった。

もっともへ巨大なゲジゲジを喜々として切り刻めるほどに達観してしまふのなら、

——ちらりと剣十郎に視線を投げ——、
熟練したいとは思わないし、修験者など辞めたいとも、双葉は心から思う。

「でも、さすがに今度の妖は、刺激が強すぎたようだけど」
天ぷらを咀嚼してから、雪兎が言う。

雪兎は「気持ち悪いもの」を「気持ち悪い」という理由で怯む修験者ではないが、「気持ち悪いもの」を「気持ち悪い」と思う程度の感受性は持っていた。

双葉も弱気な声で、

「さすがに、ゲジゲジはなあ」

「ただのゲジゲジじゃなくて、斬り刻まれたゲジゲジだからねえ」
雪兎と二人、神妙な顔で、頷き合う。

双葉は、酒をちびちびと舐めている。

村人が気に病んだとしても、彼女は今夜は飯を取らないことに決めていた。

「遅いな、姫」

双葉は心配そうに、風呂のある方を見た。

烏壬かぐやは、一三歳だった。

線の細い、すらりとした体型なのだが、少々、背が低い。

そのために、年齢よりも、幼く見られる。

艶やかに伸ばした細い髪は、色素の乏しい薄い灰色であったが、

美しい絹のような光沢を持っていた。

肌も、月明かりに照らされた雪のような、淡い神秘的な白さを放っている。

目鼻立ちも、冷淡に整っていた。

冷淡に、というところが重要で、彼女は滅多に笑わなかった。

時たま口元を、小さく歪めるくらいだった。

愛嬌や親しみをあまり感じさせてくれないと、一族の男たちは苦笑していた。

女たちは、能面、と陰口を叩いている。

滅多なことでは上がりも下がりもしない真横に伸びた綺麗な一文字眉が、さらに彼女の表情を読みにくくしていた。

人形然としたその無機的な美しさから、人形姫、という呼び名も頂戴していた。

しかしその苦笑や陰口やあだ名などは、烏壬かぐやにとって、どうでもよかった。

耳に届けばあいまいに、小さく口元だけを歪めて、期待に応えてあげるくらいだった。

烏壬かぐやは烏壬本家の三女で、烏壬の本流である。

年長者といえどもたかが支流にあたる者たちに対して愛想を振りまく必要などない、と考えていて、事実その必要などなかった。

ただし、子犬さま、と陰で呼ばれるのは嫌いだったし、面と向かって言われるのは、もっと嫌いだった。

いずれ目に物見せてくれようと思っていた。

だけど、それは山頂にいた頃の話。

山を下りた彼女は、この五ヶ月で、とても感情表現が上手になった。

形の良い眉も鼻も、ひくひくと良く動くようになった。

今も、ひくっ、ひくっ、と鼻を動かし、
……泣いていた。

杉の木で組み上げられた、真新しい湯船に、

「おのれ、おのれ」

凹凸の少ないほっそりとした裸身を肩までしずめ、

「おのれ、雪兎め」

手拭いで身体をこすり、こすり、こすりつつ、

「双葉め」

烏壬かぐやは、ひくっ、ひくっ、と時たま鼻を鳴らしながら、恨みを込めて、

「剣十郎め」

仲間達の名前を、呪詛っぽく上げていく。

烏壬かぐやは一二年と半分ちよつとの間、山頂で何不自由なく暮らしてきた。

下界のことに詳しくないのは当たり前だし、烏壬本山の山頂で、敵となる妖と遭遇することなどなかった。

例えあったとしても、彼女が闘う必要などはないだろう。

なぜならかぐやは本家本流の三女だから。

妖の駆除など、下々のやる仕事だ。

だから烏壬かぐやは、山を降りるまで、害虫型の妖と遭遇することが必要ならなかった。

神でない下等な妖や害虫など、修験者でない人と同じく、烏壬本家本流三女のかぐやが興味を持つべき対象ではなかったのだ。

そして、その頃のかぐやは考えもしなかった。

それなりの覚悟を決めて山を降りたときにも、考えもしなかった。まさか烏壬本家本流である自分が、一族のはみだし者に巨大なゲジゲジを喰けられ、叔母の織姫から頼りになると借り受けた修験者

に突き飛ばされ、叔父の青竜王から頼みもしないのに押しつけられた修験者に、妖の粘液をぶっかけられようなどと。

日頃の彼らの態度から、きつと示し合わせてやりやがった、と烏壬かぐやは信じていた。

おそらく、あの女も、笹原志織さきはらしおりも一枚噛んでいるのだろう。

烏壬かぐやの雪のように白い肌は、擦りすぎて赤くなっていた。その赤くなった身体をしつこく手拭いでまだ擦りながら、今こそ、戦うときだと。

思い知らせてやる時だと。

烏壬かぐやは確信していた。

修験者としての経験は乏しいが、それは認めるが、しかし烏壬かぐやは本家本流である。

かぐやの宿した神は、仲間三人まとめて相手してお釣りが出るだけの力を持っている。

そのことを、奴らに思い出させておく必要がある。

二度とこんなふざけた事をしないように。

泣かせてくれる。

血の涙を流すまで。

強い決意を小さな胸に、湯船から出た烏壬かぐやは、身体を乱雑に拭うと、薄い衣一枚を羽織った。

裸足のままで、野外に出る。

夜空に、美しい月が輝いていた。

かぐやは口元を歪め、微笑んだ。

今宵の月も、気高く美しく、頼もしくも靈力に溢れている。

全開に両手を広げ、かぐやは全身に月光を浴びた。

神から奪った勾玉を、生まれてから魂が固まるまでの三年の間、修験することによって、人は〈修験者〉となり、超常の力、〈陣〉を操れるようになる。

しかし人間の魂を短い間、神の神性で染め上げただけで、神そのものになるわけではなかった。

修験者の、人の魂が持つ霊気は、長い年月を積み重ねた神の魂が放つ霊気とは、比べようもなく、弱い。

神の魂を宿した修験者の本領は、その次にこそあった。

本来、神の持つ霊気は神固有の〈色〉であり、ごく僅かな例外を除き、他者に扱うことは出来ない。

しかし神と同色に染められた修験者は別だ。

同じ色に染まった〈人魂〉の気を呼び水として、身内に宿した神の勾玉から同質の神性を借り受ける事が出来る。

神が眷属を自在に操るように、修験者は眠れる神の力を我が物として自在に引き出して、行使する。

それが、〈人魂^{じんこん}〉と〈神魂^{しんこん}〉の〈二魂^{にこん}〉を宿す修験者の強さの秘密である。

月明かりの中、かぐやが神の力を解放する。

数百年の時に鍛え上げられた強大な神の力を。

かぐやの身体が白銀の光に包まれ、白銀の光を発し、その光が光量を増し膨張して――。

少女の姿が光に飲まれ消え、その数十倍に達する輝く白銀の月色を持った強大な犬が、月明かりの下に出現していた。

004 やつあたり

部屋の隅で、刀の手入れをしていた剣十郎が立ち上がった。

「おい、どうした？」

双葉が尋ねた。

しかし客殿の近くで膨らんだ神気に双葉もすぐに気づき、顔色を変える。

「……月夜視^{つきよしみ}」

神気の発する方向を眺め、箸を置いて雪兎は呟いた。

障子の向こうの月明かりが、眩しいくらいに強くなっていた。

この気配は間違いなく、月夜視の犬神。

烏壬本家に伝わる、守護者。

神の中の神、月の大神。

五山筆頭、烏壬本家が所有する勾玉の中でも、最上級に数えられる一つ。

今は、烏壬かぐやがその小さな体に修験している。

単体で、妖どころか、神すら屠れる力を有している。

「月夜視が？　なぜ？」

かぐやが神化し戦闘態勢を取ったと言うことは、敵がいるということか。

その敵は、妖か、神か、修験者か。双葉は真剣な表情で、剣十郎に視線を移す。

「いや、何も感じない」

剣十郎が小さく首を横に振る。

三人の中でもっとも感覚の鋭い剣十郎が気配を掴めないとなると、敵は相当に熟練した修験者なのか、それとも、――女の敵か？

双葉は、雪兎の顔を見る。

「覗いたか？」

「いや、僕はずっと此処にいたけど？」

「となると、新手の覗きか」

「そいつは許せないな！」

雪兎が、鬼の形相になって屋敷を飛び出した。双葉も続く。

客殿の箱庭で月を背にし、白銀の光を発する白い犬が、二人を待ちかまえていた。

客殿が、犬小屋の用をなせないほどの巨体である。

ふさふさとした白毛に覆われた、精悍な犬だった。

三角耳が、ぴんっと立っている。

くるっと尻尾が、お尻の上でふさふさ丸まっている。

薄墨色のお鼻は、少々湿っぽい。

銀色の瞳は、きらきら輝いている。

その銀の瞳に、白い犬は涙をためながら、恨めしげに、双葉と雪兎を遙か高見から見下ろしていた。

二人は警戒するように、辺りに視線をさ迷わせた。

しかし何もない。

怪しい気配は感じない。

「どうしたんだい、かぐやちゃん？」

雪兎がやさしい笑みで、そう問いかける。

「覗かれたのかい？」

潤んだ瞳をした犬は、首を横に振った。

「じゃあさ、どうして月夜視になんて――」

白い犬が、ゆっくり頭を下げ、雪兎に顔を近付けてきた。

雪兎は考えた。

あれだ、きっと。

キスだ。

妖退治の時、ほっぺにキスの約束を取り付けていたっけ。

きっと人の姿では恥ずかしくて、考えた末に神化することを思いついたのだろう。

何ともかぐやちゃんらしい、

シャイだな、

と雪兎は嬉しそうに両手を広げ、巨大な犬の顔を迎え入れようとした。

白犬は、大きく口を開け。

がぶり。

大きなお口で、雪兎の上半身を丸ごと、かじった。

ぷらんぷらんと、二本の足が、お口の外で揺れている。

「なっ」

呆然とする双葉の前で、月夜視が、前肢を上げた。

——お手か？

一瞬そう考えて手を出しかけてから、はっと、双葉は気づき、緩んでいた表情を引きつらせる。

（私の手では、受けきれない！）

その時には、完全に回避不能の間合いだった。

「ま、まてっ、待ってくれ姫！ はっ、話し合おうじゃないか！」
白銀の光を発する巨大な犬足が、双葉にのし掛かってくる。

「うわああああああ」

巨大な白犬は、双葉をげじげじと踏みつけ、雪兎をがじがじと噛み続けた。

ふすまの隙間から、それを確認した剣十郎は、気配を殺し屋敷の裏手から、帰途についた。

004 やつあたり（後書き）

以上、プロローグでした。

この物語の主要登場人物は、

烏壬かぐや。13歳。

修験道最大組織のお姫さま。けなげに可愛く格好よく。

烏壬剣十郎。19歳。

殺伐ワールドに頼れるお兄さん。

烏壬宵子（7歳）＋バハムート（子猫）。

かげ、薄いです。

実質的に、剣十郎とかぐやのバディ物です。

異能バトル、獣化。

基本的にライトノベル一冊分。

「蛇神の森」自体は単純なバトル物ですが、シリーズを続けるとしたら、かぐやちゃんの霊山経営物語でしうか。

005 烏壬かぐやの参謀

烏壬かぐやには、いずれ目にももの見せてくれよう。
そう思っている人間が何人か居る。

具体的に名をあげると、烏壬青竜王^{せいらぎゅうおう}であり、剣十郎であり、雪兎であり、双葉であり、笹原志織である。

彼女にとって烏壬青竜王は、越えねばならない高い山だった。

そして、剣十郎、雪兎、双葉の三人は、自分のことを認めさせた仲間である。

最後の一人、笹原志織は、諸事万端を司る彼女の参謀であり、事実上の学院の運営者であり、烏壬かぐやが山を下りる手引きをした人物であり、そして純粹に、本当に言葉の通りに、いつか必ず目にももの見せてくれよう、そう思っている相手でもある。

そんな笹原志織は、青色のジャージを着ていた。

その上に、研究者的な白衣を羽織っている。

縁のない眼鏡に、ぼさぼさのポニーテール。

だらりと椅子に座り、組んだ足の先で、薄べったりした薄汚れたスニーカーをぷらぷらさせている。

安っぽい湯飲みで、怪しげなお茶を飲んでいる。

そんな状態で〈烏壬かぐや学院〉の〈笹原学級〉の指導者である、笹原志織・年齢不詳・自称一七歳・推定二八歳前後、は、

「独自ルートで、すごく美味しい情報、手に入れちゃいました。」

なんか山の中で、神が居るっぽい。縄張りの外だけど、これ絶対、お買い得だと思う」

ちちちつと指を振って、片目を瞑って、告げたのである。

場所は学院内にある、笹原の執務室である。

烏壬かぐやは、烏壬本家本流のみに許された巫女装束――千鳥に金羽根の紋様が散らされている――を纏い、袴は、朱の行灯袴。

足下は、丈の高い朱色の下駄である。

執務室のホコリっぽいソファーには座らず、立ったまま、表情を動かすことなく、特に眉は動かすことなく、感情も込めずに、

「また、押しつけられたのですか？」

かぐやは、笹原に問うた。

笹原が悲しそうに、顔を伏せた。

「心外です。かぐやちゃんのコトを想って、かけずり回って手に入れた情報なのに」

しめっぽく言ってから、ずずず、とお茶を飲む。

「押しつけられたのですね？」

かぐやがなおも詰問すると、笹原志織は、指先で目頭を拭いて、

「ひどい」、泣き真似を始めた。

年増のくせに。かぐやは心中で毒づく、小さくため息を吐いた。この五ヶ月、かぐやはひたすら〈浄域〉をかけずり回り、妖を調伏してきた。

そして時たま、笹原の持ち込んでくる怪しい情報を元に、〈浄域〉の外に、勾玉を求めて繰り出した。

結果は一度を除いて全て不発。明らかに勾玉を持たない小物ばかり。

近隣に害をなす妖退治を、押しつけられただけだった。

剣十郎曰く、

「こんな人里近くに、神が放置されてるはず無いだろう？」

やはり今度もそうなのだろう、と笹原の態度を見て、かぐやは確信する。

「それで、今度はどのような神でしょう」

諦め気味に、かぐやが尋ねる。

本来、妖の調伏など、末端の修験者がする仕事だ。

しかし引き受けた以上は放置出来ない。

学院の信頼に関わる。

それにかぐやは、この仕事が嫌いではなかった。

修験者にとって取るに足らない妖も、常人にとっては危険な存在である。

それを退治してくれる修験者は、彼らにとって英雄だ。

心の底から感謝され、賞賛され、持てなされる。

妖を退治した後、村に凱旋する時の鼻高々さは、何度味わっても気持ちがいい。

本山の山頂でふんぞり返っているだけの年寄りたちには、一生体験できない愉悦である。

思い出しつつかぐやはぷくりと鼻を膨らませた。

笹原は泣き真似を止めて、にやにやとかぐやをのぞき見ていた。かぐやはすました表情を作り、こほんとわざとらしく咳払いしてから、

「それで、今度はどのような神でしょう」
同じ質問を繰り返した。

「蛇の神様です」

笹原は何故か両手を盛大に広げて、明るく答えた。

「特徴は？」

「こうひよろひよろと細長くて、足はなくて、ぬるぬるしてる感じで」

椅子に座ったまま、手をくねくね、体もくねくねさせながら言う笹原に、

「……うなぎですか？」

「え？　じゃあ、ぬるぬるはなしで。胴体がびよーんと長くて足が無くて、牙とかあって、噛みつかれると——」

「蛇の詳しい特徴ではなく——今の説明が詳しいかどうかは別にして——神の特徴を聞いています。神性や等級を、です」

笹原のはぐらかしに、かぐやが、きつい口調で尋ねる。

笹原は露骨に顔を歪めた。

「神を等級分けするのって、わたし、嫌いなよねー」

嫌そうに顔の前で手をぱたぱたと振った。

「そーいう取って付けた分類ってさ、お洒落なだけで意味がないと思うのよ。ごく普通の神に見えても、特定の条件下によっては神霊と化す神もいるし、あなたのように昼と夜とで豹変する神もいるし、ね」

神妖や修験者は、森羅万象の影響を少なからず受ける。

その中でもかぐやの宿している〈月夜視〉は「月夜視は月夜のみ」と言われるほどにその傾向が顕著で、日中はその力の大半を発揮することが出来ない。

「少年よ、昨日の神が今日と同じとは思うなよ、ってやつ。私が今作った言葉だけど、凄く良い言葉だと思う」

うんうんと頷き、

「下手な先入観なんて、持たない方がいいって。これは、夢見る少年たちの為に言っておく」

最後には真面目な顔になって、人差し指を一本立て、かぐやを見据えた。

「……わたしは少年ではなく少女ですが。つまり何一つ、はつきりとした情報はない、と」

「そこに、神が居るらしい、それも蛇っぽい、という確たる情報があります。……しかしそれ以外の情報など……」

かぐやは笹原の口上を手を上げて制した。

「つまり、今回も満足な情報はない、わけですね」

「はい、そういうことになりました、です。たぶん蛇っぽい神だと思うけどね」

言って笹原は、話は終わったとばかりに、大きく欠伸をする。

かぐやの口の端が、小さく引きつった。

が、直ぐに収め、

「蛇だと思ふ理由は？」

「蛇っぽいって、言っていましたから」

「竜神だと言われて、行ってみたらミミズの妖だった、例もありますか？」

「そう？」

「前回などかわいい猫神だと言われて行ってみたら、ゲジゲジの妖でした」

「うわっ、最低ですね、それ」

欠伸混じりに、眠そうに、笹原。

かぐやの顔が引きつり、ほほが赤くなる。

彼女が、笹原が姉の、烏壬当主・烏壬天女の乳兄弟で、かぐやが参謀として採用する時に絶対に噛まないとの約束をしていなければ、かぐやは疾うの昔に、もちろん今も、歯形が残るほど噛みついているところだ。

かぐやは小さく深呼吸し、怒りを抑えてから、少し疲れた声で、

「もう少し確認してから、受けるようには出来ないのでしょうか？」

「難しいですね」

「なぜでしょう？」

「だってわたし、疑り深い人生、嫌いなものね」

笹原は目を堅く瞑って、首をふりふり。右手もふりふり。お尻はぽりぽり。

烏壬かぐやは、鼻をひくっひくっ動かし、犬歯を剥き――。

しかし、大きく息を吸って、息を吐く。踏みとどまる。

喚いてみても、笹原には通じない。不当に子供扱いされて終わるだけだった。

それに今日こそは笹原に約束させたい重要事項もあった。

もう幾ばくも時間はない。

この程度の安っぽい挑発に、いつまでも乗せられている烏壬かぐや様ではないのだった。

かぐやは胸を張り、意識してゆっくりと言葉を紡ぐ。

「……そうですか。では、等級うんぬんの話は、やめましょう。しかし——」

挑む視線で、笹原を見据える。

「あなたもご存じでしょうが、この三ヶ月で、阿久津美咲、城島幽刹、太田宗次、の三名が、当学院から引き抜かれたり、ふらりと居なくなったばかりです。そして先日、双葉と雪兎が揃って負傷しています」

「……かぐやちゃんに襲われてね」

「それはそれとして、現状、当学院で動ける修験者は、遂にわたしと剣十郎、二人となりました……あなたと宵子を含めても、四人です」

かぐやは一端、言葉を切った。

口元に、挑戦的な笑みをつくると、すぐ真顔に戻って、言葉を続ける。

「烏壬当代本家本流である私の名前で学院を興せば、修験者百人、集めてみせるという、あなたの大言壮語は、いったい何処に行ったのか、それはまあ、今は言わないで置くとしても。さて！ 現状で、奥駆けに向かう余剰人員が、この学院には、随分と不足しているように、わたしには思われるのですが？ あなたは、いかがお考えなのでしょうか？」

見方によっては嬉しそうに、かぐやは棘のある声を放った。

「確かに、ちょっと心許ないですね」

沈んだ声で、笹原が認める。

「それが分かっている、何故そのような雑事を引き受けたのですか？」

軽快に攻めるかぐや。

しかし笹原が、うふふっ、とかぐやを見上げて笑った。
かぐやは心の中で、身構える。

「人手不足は、かぐやちゃんの責任でもあるでしょう？ 引き受けた後に、誰かさんが人手を減らしてくれたりして。ねえ、かぐやちゃん？」

笹原の逆襲。

「心当たりはありえませんか？」

堂々とした態度で、かぐやはしらばっくれた。

「ほう、そうですか。では、言って差し上げましょう。初めから全部言っておきましょう」

笹原志織は、大きく息を吸い込んで。挑戦的な烏壬かぐやの視線に、挑発的な視線を投げかえした。

「阿久津美咲ちゃんなんて、とっても真面目で良い子だったのに、ほんのちよつとしたミスに『ふん、仕えない女ですね。胸がでかいだけで』って苛めたのは何処のどなたですか？ 城島幽刹くんが勇気を出して告白したのに『下郎が。身分をわきまえない！』って振っちゃったのは誰なんでしょうか？ そして先日、せっかく補充した雪兎君をガジガジ噛んで双葉ちゃんをげしげし踏んだのは誰でしょうか？」

「わたしですが。しかしそれに何か問題でも？」
堂々とした態度のまま、かぐやは言い切った。

「……そう来たか」

笹原志織は、鼻の頭をこりこり搔いた。

「かぐやちゃんさえ、もうちょっと可愛らしくしてくれてたらなあ……あと五人は確保できたはずなんだけど……」

笹原志織は、深く、ため息を吐いた。

「……五人……百人ではなかったのですが？　それに、」

眉を寄せ言ってから、かぐやは、

「わたしは、間違いなく可愛いですが？」

小首を傾げて、かぐやは微笑んだ。灰色の髪が、さらりと肩口を流れ落ちて、可愛い。

「……そういうかぐやちゃんを先生は大好きですが、たまには言われる方の身にもなってあげてくださいね」

顔を上げ、笹原は真正面からかぐやを見つめて微笑み返した。

「……大丈夫です。こんな冗談、あなたくらいにしか、言いませんし……」

かぐやは頬を赤くしこほんと咳払いした。水守の村の村長の娘から伝授され、雪兎に絶大なる効果と剣十郎にすら僅かな動揺を与えた必殺の技は、しかし笹原には通じなかった。

ふふん、と笹原は微笑んだ。

そして「仕方ないな」と小さく呟いて笑い。

「そっか、かぐやちゃん……」

笹原志織は、椅子に身をもたれさせ、意地悪く、
「奥駆けに行くのが、遠出するの、怖いんだね？」

かぐやは頬を赤くしたまま、笹原を険悪ににらみ付けた。

「烏壬本家本流であるわたしを、愚弄する気ですか？」

笹原はぞんざいに手を振って。

「ああ、ああ、ごめんごめん。そんなつもりじゃないって。仕方ないよ、かぐやちゃん、まだ——子供なんだからさ」

椅子を軋ませ身を乗り出し、両手を拝むように合わせて謝りながら、しかし笹原は口元にぷくくくくとした笑みを張り付かせて。

「これは先生が悪かったです。では本山に事情を説明して代わりの修験者を派遣して——」

「……良いでしょう」

烏壬かぐやの抑えきれない抑えた声に、苛立ちが混じっている。

笹原のペースを乱してやろうと可愛く振る舞ってみたが、どうにも自分だけペースを崩してしまったかぐやだった。

笹原は、したり顔で、下からかぐやをにこにこ見上げている。

かぐやは小さく、深呼吸する。

かぐやは、口の端を嘲笑の形にして、あごを逸らすようにして、座っている笹原を——ちよっとただけけど、見下ろした。

「確かに、此処であなたの相手をしているよりも、山で神と戯れていた方が、随分と有意義でしょうから」

「行ってくれますか。先生、助かります。では、宵子ちゃんも連れて……」

「宵子を、ですか？」

かぐやが困惑顔になる。

宵子は七歳の女の子だ。

実戦経験が皆無、と言うわけではないが、数えるほどしかない。

「浄域の外は、まだ宵子には早いのではないですか？　まして、神が居るのでしたら――」

「修験者に危険はつきものです。それに剣十郎君も含めて青竜王のお子さん達は、みんな五歳で奥駆けに参加してますよ」

む、とかぐやが眉を寄せた。

組織としても個人としても、烏壬青竜王を超えることは、かぐやの目標である。

宵子を立派に育てることも、かぐやの大事な目標だ。

そして寝る子は育つと言うが、寝ているだけで修験者が育たないことは、かぐやは自ら身をもって知っている。

葛藤するかぐやに、笹原が追い打ちを掛けた。

「なるほど。そういうことですか」

「そういうこと、とは？」

笹原は優しく微笑み、

「どうしても、かぐやちゃんが剣十郎君と二人っきりで出かけたいのでしたら――」

かぐやの頬に、朱が混じった。

下駄の足を、一歩前に踏み出し、高らかに音を立てる。

「いいでしょう！　宵子も連れて行きましょう！」

かぐやは笹原が苦手だった。

しかし何時までもこの境遇に甘んじているつもりはない。

深く深呼吸して、気持ちを落ち着けてから、

「ただし！」

かぐやは声を張り上げた。可愛いお目々が、少々、吊り上がっている。

要求すべき事は決まっていた。
剣十郎との契約期間は半年であり、後一月で彼は学院を去ることになる。

この人手不足で彼まで居なくなってしまうと、もはや学院の活動など不可能だ。

一ヶ月以内に、彼の代わりを務められる修験者の獲得か、それが出来ないのなら笹原、あなたの責任で剣十郎との再契約を――。

かぐやが言葉にする前に、

「良かったあ」

笹原は立ち上がると両手を盛大に広げ、かぐやの頭をジャージの胸元に埋めるように抱え込み、抱きしめた。

「先生、大助かりですよ！」

抱きしめたかぐやを、かぐやが嫌がる前に、笹原は手早く解放すると、

「まあ、かぐやちゃん、お茶でも一杯」

笹原は何事もなかったように、お茶を来客用の湯飲みに注ぎ、かぐやに差し出した。

乱れた髪を直し、かぐやは、そのお茶を引ったくるようにして、赤い顔で受け取った。

ぐびっと一呑みにして、

「ただし！ うぐう」

かぐやは口元を押さえる。

「……何ですか？ これは？」

赤と青の混じった顔で、笹原に問いかける。

「蛇茶」

「なに……茶……?」

「蛇茶です。ほら、茶の道は蛇って、言うじゃないですか?」

「……言いません、それは蛇の道です、うぐあ」

かぐやは口元を押さえたまま、執務室のドアを押し開けて、下駄を高らかと鳴らして――途中で下駄を脱ぎ捨てて――廊下を駆け抜けていった。

005 烏壬かぐやの参謀（後書き）

笹原志織の出番はこれだけです。

ちなみに双葉と雪兎の出番もあれだけです。

かぐや、剣十郎、宵子を中心に、人数は少なめに展開していきます。

006 金峯山の手配書

烏壬かぐや学院は、かつて桃山砦ももやまとりでと呼ばれた烏壬系の寺院砦跡を再利用する形で、建てられていた。

桃山も含めた近隣の山々を、百山ももやまという。

木々の生い茂った穏やかな丘陵が、波打つように連なる地形から、その名が付けられていた。

桃山砦も、古くは百山砦と記されていたが、五十年ほど前、茶目っ気のある砦の修験者が桃の木を移植してから、桃山と記すようになった。

しかし、二百年近い歴史のあるその砦は、七年前に廃山となる。そして一時は山賊の拠点にまで荒廃した砦は、剣十郎たちが学院を興したこの五ヶ月で急速に輝きを取り戻しつつあった。

空は晴れ渡っていた。

この数ヶ月、かぐや学院から鋸をひく音、槌を打つ音の絶えたことはない。

学院に在籍する修験者は、現在僅か六人。

修験者以外を含めても、十人だ。

しかし昼時の学院には、大勢の村人がやって来る。

村人たちの大半は、桃山の裾野、〈学院村がくいんむら〉に駐留ちゅうりゅうしていて、そこから定刻に鳴る鐘の音を合図に、山を登って来る。

学院村は正式な村ではなく、あくまで近隣の村人達の一時滞在用の長屋の集まりであり、学院の施設の一部、という位置づけである。

桃山の至る所で村人たちが競うように働く様を、いつものように剣十郎は、山頂で最も高い、つまりは桃山で最も高いなかば指定席となった楓の木の枝に寝そべり、ぼんやりと見下ろしていた。雀が

一匹、剣十郎から少し離れた枝に留まって、同じ景色を見下ろしている。

時には村人の仕事を手伝うこともあるが、修験者の力が必要な作業以外では、出来る限り剣十郎は手を貸さないようにしていた。

浄域の村々は対抗意識が強いために、どこかを偏って手伝うと、他の村からとても悲しそうな顔をされる。

泣かれたこともある。

手伝い方を誤ると後で宥めるのが大変だった。

その慰め方を謝ると更に後で大変だった。

ただの競争意識だけでなく、烏壬支配の二百年と、更には捨てられた混迷の七年に根ざした村々の関係が根っこにはある。

気長に時間をかけて、解きほぐしていくしかないだろう。

たったったった、と軽快に駆けてくる足音がする。

楓の木の下までくると、足音は止まって。

「剣十郎さま！」

大きな声で呼びかけられ、剣十郎は木の下に視線を向けた。

紆余曲折を得て、学院の炊事を任されている美鈴みすずという一七歳の少女だった。

学院に所属する修験者以外の一人である。

役職は「シェフ」。

炊事だけでなく料理の研究、具体的には献立書の解説や作成もシェフの仕事の内だが、まだ彼女は読み書きを（剣十郎や笹原たちから）習っている最中であり、献立の再現能力には難があった。

食事関係以外にも掃除や洗濯も任されていて、日々忙しく暮らしている。

「大根の煮付け、作りしたので味見して頂けませんか!？」

美鈴は頭上を見上げ、元気な声を張り上げる。

「ああ」

下に聞こえない程度の声で答え、剣十郎がふわり枝から飛び降りる。

十メートル近い高さからだが、とん、たん、とん、と三回ほど空中に〈陣〉を張り、その〈陣〉に足をついて、軽やかに大地に降り立つ。

美鈴が頬を赤く染めて、たっぷりとだしの染み込んだ大根の盛られた皿を、差し出した。

剣十郎は手を裾で軽く拭うと、素手で一つつまみ、口に放り込んだ。

あまり繊細でない剣十郎の舌でも、大根にほのかに浸みた青じその味は確認出来た。

他にも何か工夫があるようだが、それは分からない。が、

「ん、美味しいな」

指をなめつつ、剣十郎が言う。

「ありがとうございます!」

ぱあっと花が咲いたような笑顔を浮かべ、美鈴は握り飯と、竹筒を腰の袋から取り出した。

剣十郎は握り飯を受け取って頬張る。

こちらは梅干しの入った普通の握り飯だった。

「ん。悪くない」

竹筒を受け取って飲む。

中は程よい冷たさのドクダミ茶だった。

学院の地下には氷室がある。

雪兎の験力で創られた氷が貯蔵されていて、いつも冷えていた。

その時、学院の本院のドアが大きな音を立てて、開いた。

かぐやが出てきた。

なかなかの剣幕だ。

剣十郎を見つけると、ずんずんと剣十郎めがけ、歩いてくる。

美鈴は、一步剣十郎から離れた。

「お食事の用意が出来ました」

微笑んでかぐやに深くお辞儀すると、いそいそと逃げていった。
かぐやは彼女に軽く会釈を返してから、剣十郎をにらみ付け、

「笹原を見かけませんでしたか！」

「ああ。見かけた」

のんびりと剣十郎が答える。
握り飯を頬張る。

「どこですか!？」

かぐやが勢い込んで尋ねる。

剣十郎は口腔の飯を咀嚼して飲み込んでから、

「ん。旅支度して出て行った。本山絡み、天女からの呼び出しらしい」

「あ、姉からですと」

かぐやが悔しがる。

烏壬天女。

烏壬当代本家本流の長女であり、つまりは烏壬の現当主。人間ではかぐやの唯一の上位者だ。

じたんだ踏んで悔しがるかぐやを横目に、剣十郎は握り飯を食べ終えて、竹筒から茶を飲む。

ちなみに天女からの呼び出しはまっ赤な嘘だった。

笹原は浄域の村の隠れ家に潜んでいることを、ちゃんと剣十郎に告げてから山を下りていた。

何か不測の事態が起こったときに、連絡が取れるようにだ。

しかし、かぐやに教えてやるつもりはなかった。

笹原から貰う銀貨一枚の口止め料は、剣十郎の大切な不定期収入である。

ひとしきり悔しがった後、かぐやはこほんっと咳払いしてから、すました表情で、

「仕事です、剣十郎」

「また、妖退治か？」

かぐやは、少し鼻を膨らませて、自慢げに手にした紙束を、軽く掲げた。

「奥駆けです」

浄域の外、神を求め山に踏み居る事は、広く奥駆けと呼ばれていた。

剣十郎は、かぐやから紙束を受け取って、ぱらぱらとめくり、確認する。

何枚かの地図や、白い蛇神の情報や生息する地形、それに五枚ほどの文章。

「こいつは……」

へかぐやちゃんへ。蛇茶、そんなに美味しかったですか？（中略）ここに神さまの資料、置いていきますね」

と書かれた紙を、剣十郎は斜めに読んで、かぐやの顔をちらりと見てから手元に視線を戻し、次を捲った。

剣十郎や宵子宛に書かれた笹原の手紙も混じっていたが、殆どの図や書は、笹原とは違う見慣れない筆跡で形式通りに書かれていた。ただし、作成した人物の署名はない。

「……いつになく詳しいな」

「本物ですか？ 独自ルートで手に入れたと言っていましたか？」かぐやの目は、すこし期待に満ちていた。

「いや、どうだろうな。笹原のことだから」

「……そうですね。笹原のことですから」

「まあ、とりあえず、中に入って飯を食おう。話はそれからしよう」

言って剣十郎は、本院に向かって歩き出す。

たたたと早足でかぐやが、その横に並んだ。

「あなたはすでに食べたのでは？」
軽く嫌みを言った。

「味見を頼まれただけだ」

「……お握りをですか？」

「握り飯もな」

「……………」

かぐやはちょっと立ち止まって。
直ぐに早足で剣十郎の横に並んだ。

かぐや学院の本院、会議室。

新しい木の香りが満ちている。

木造の椅子に座らず、剣十郎は立ったまま、一枚の紙を手にして、読み進める。

その隣では、かぐやが同じように立ったまま紙を手にして、真剣に見つめている。

机の上には、奥駆けの資料が広げられていた。剣十郎は、全ての資料に何度か目を通してから、

「やはり、これは金峯山きんぷせんの手配書だな」

「金峯山の？ 他山の手配書ですか？」
かぐやは蛇神の絵が描かれた紙から、剣十郎に視線を移して尋ねる。

「ああ。印字や証明はないが、この形式はまず間違いなく金峯山の写しだな」

「どうやってそんなものを？」

「笹原が手に入れたのか、か？」

こくりとかぐやが頷く。

「さあな。笹原にでも聞いてくれ。まあ、よくあることだ」
剣十郎は、手に持っていた紙を机の上に置いた。

金峯山は、烏壬とならぶ五山の一つだった。
比較的、距離も近く烏壬とは友好関係にある。

それでも、他山に神の情報を渡すことは、公式ではまずありえなかった。

ただし、この手の情報は、金になる。

金になるのだから、末端の修験者や山徒から虚実入り交じって横流しされることは、ままあった。

「それより、遠いぞ」

「どのくらいですか？」

「最短で十日はかかる」

「十日。そんなにですか？」

「順調に進んでな。多少の足止めも考慮すると、片道で一月は覚悟した方がよい」

「……そんなに」

「どうする？ 止めておくか？」

「……………」

かぐやは、すでに笹原に行くと言言してしまっていた。
その笹原は本山に所用で戻っている。

となると、この話は本山の姉にも伝わっているだろう。

「……おのれ笹原め」

かぐやは、きりりと、歯ぎしりした。

「行くにしろ、せめて雪兎か双葉が復帰してからの方が無難だな」
剣十郎の言葉に、かぐやが情けなそうな顔をした。

「……雪兎は今どこに？」

「雪兎は〈りゅうぐうじょう竜宮城〉、双葉は〈おりひめしやう織姫の庄〉に帰還している、と笹原は言っていたな」

「……ということは？」

「お前が負傷させたことは、知られるだろうな、竜王にも織姫にも」
かぐやの顔がさらに曇る。

竜王こと烏壬青竜王はかぐやの伯父であり、烏壬織姫は伯母になる。
どちらとも烏壬先代本家本流であり、山界の実力者だ。

そして雪兎と双葉は、その両者から半年の期間限定で二ヶ月前に
借り受けた修験者である。

借りた修験者を八つ当たりで噛んで踏んで、人手が足りなくなっ
たので奥駆けに行きませんでした。

……ちよつと格好悪いかもしれない。

「剣十郎なら、この距離、この規模の旅は何人くらいで出かけますか？」

「この程度の旅なら一人で」

つい軽く答えてから、剣十郎は言い直す。

「ただの旅なら一人で十分だが、勾玉を目的とする奥駆けなら、別だ。最低で三人。出来れば手練れで五人は欲しいな」

かぐやが目を瞑ってから、深呼吸した。

しばらく黙考してから目を開け、不適に微笑んだ。

「あなたとわたしと、宵子よこいで三人。それにバツハも居ます。お釣りが出ますね。行きましょう」

剣十郎は、露骨に顔をしかめた。

「なにか、不服そうですね」

「不測の事態を危惧しているだけだ。ところで、本気で宵子も連れて行く気なのか？」

笹原が記した指示書には、奥駆けの陣容の中に、宵子とバツハの名も朱で大きく書かれていたが、剣十郎は宵子を置いていくつもりだった。

しかし、

「そのつもりです」

怒ったような笑顔を浮かべてかぐやが言う。

「確実に荷物になるぞ」

「乗り越えるまでです」

かぐやが意固地になっていた。

こうなったかぐやの説得は容易ではない。

「その荷物を背負うのは俺なんだがな」

剣十郎が溜息を吐く。

剣十郎は、四歳の頃には〈陣〉が張れるようになり、刀を手にして妖を狩っていた。

五歳の誕生日を迎えたのは、奥駆けの途上だった。

剣十郎を基準にすれば、宵子の七歳は決して遅い遠出ではないだろう。

しかし二十に近い齢を重ねた今だから、剣十郎にも分かる事実があった。

足手まといになる子供よりも、足手まといを連れて行く大人の方が、どうしようもないほど苦勞するということを。

「まあ、いいさ。いけるところまで行ってみよう」

自分もそうやって成長してきたのだ。

それに、考えようによつては宵子が居た方が、途中で引き返す必要があるとき、かぐやを説得する材料になる。

と努めて良い方向に考えることにした。

「ただ、行っても何も居ないと思うぞ？ 笹原だつてこの、」

剣十郎は机から一枚の紙を拾い、手で叩いて、

「手配書とおりに修験者を食ったという〈蛇神〉が居るのなら、まさか宵子まで連れて三人で行けとは言うまい。いつもの……いつも以上の嫌がらせだろう。きっと偽情報だ」

「かまいません。そこに神が居ないのなら、それは笹原の責任であって、私の責任ではありません。勾玉のかわりに、何か辿り着いた証拠を持ち帰りましょう。更にはそこに辿り着いた証拠を刻んで、念入りに刻みつけて、帰ればすむ話です」

「……まあ、いいけどな」

剣十郎は、ぼりぼりと頬を搔く。

「浄域の掃除もあらかた片づいたし、そろそろ遠出を経験すべき頃合いだしな。とりあえず、」

剣十郎は、笹原が用意した簡略された地図に、鉛筆で線を描いていく。

「状況に応じて変更するが、だいたいはこの道筋になる」

「道筋？ 道を外れていますか？」

地図を見て、かぐやが指摘する。

近辺に道のない最終的な目的地付近は別にしても、数カ所、剣十郎の引いた線は、地図上の道から外れていた。

「迂回してると無駄に時間を食うからな。もしこの手配書が本物の写しなら、金峯山の修験者と競争になる」

「金峯山と競争、ですか？」

「そりゃそうだろう。この情報が何時のものかは分からないが、本物だとすれば奴らが向かうのは当然だ。資料には、所属する修験者が一人食われてる、と記載されているし尚更だ。早い者勝ちになる」

「なるほど。では、急ぎましょう」

「それに、地図では道じゃないが、これも修験道だ」

とんとんと、剣十郎は、自分の書いた森を抜ける線を指で叩いて

から。

「他にも――」

地図上の道と道の間に、線を五本引いて。

「これが、本山派の……廃棄された道もあるが……通り道だ。そしてこっちが」

破線を七本引いて。

「竜王派の通り道だな。まあ、他にもあるだろうが、この十二本が俺が実際に使っている近場の修験道だ。きっちり道として整備されてないから荷馬車や馬は通れないが、修験者なら通れる」

「なら、問題はありませんね。宵子も一緒なので、少し心配しただけです」

言いつつかぐやは、じっくり地図を見て、その位置を覚えようとしていた。

「だいたいの線を引いただけだぞ。それに目印も分らず踏み入ると確実に迷う」

「目印は？」

「木や石や地形、風景そのものだ……必要があれば自然と覚えていくさ」

机の上の書類をかき集める。

「で、いつ出る？」

「早いうちに行きましょう。金峯山に出し抜かれないように」

「出し抜こうとしてるのはこっただけだな。じゃあ、明日でいいな。明日の朝出よう。長旅になる。装備はいつもと同じで十分だが、『帯』や着替えは心持ち多めに携帯した方が良好だろう……自分で持てる範囲でな。雪兎と久遠寺が居ない以上、持っていける物も限られるし、食料や水は、旅の途中で確保していく。多少、ですむかどうか、不便な旅になるぞ？」

「……致し方ありませんね」

「とりあえず、俺は宵子の様子を見てくる」

「ああ、私も行きます」

剣十郎が戸惑った顔をした。

「なにか？」

かぐやが微笑む。

剣十郎は、宵子の様子を見に行く前に、本当は笹原の隠れ家に立ち寄り、幾つか聞いただしておきたかったのだけれど。

「いや、何でもない。行こう」

かぐやが一緒なら、諦めるしかなかった。

ちよっぴりシャギーのかかった栗色のショートボブは、埃まみれで蜘蛛の巣まで引っかかっている。

その下で、大きな丸い瞳が、爛々と輝いている。

にゃっほり曲がった猫のような唇からは、妖気漂うほどの悪戯っ子属性が、滲み出ている。

烏壬宵子。
からすみよいこ

年の頃七歳。

小さき暴君だ。

服は、全て笹原のお手製。

上着は、二の腕の半ばまでしか袖のない、白いセーラー服。

腰の辺りで紺色の短いスカートがヒラヒラしていて、しかしその下には伸縮性のある白色の長ズボンを履いている。

足下は、笹原とおそろいの白いスニーカー。

近代修験者を自称する、腕白盛りの女の子である。

獲物を前に、彼女は「にひひ」と、勝ち誇った。

壁に半分隠れるようにする彼女の目の前に、無防備な二五匹のネズミ。

ただし亡骸だ。

宵子とバツハのねずみ取り合戦は、現状では大きくバツハがリードしていた。

宵子が捕らえた鼠の数は、0匹だが、バツハはすでに二五匹の鼠を抹殺しているのである。

だが、まだ勝負は終わっていない。

バツハの二五匹が不思議なことに宵子の二五匹に変わっちゃえば、二五対0で宵子の完勝なのである。

「ふふふ、大切なお宝をおいて行くとは不用心な猫め」

悪い人っぽく、呟いてから、差し足忍び足で、宵子はバツハの戦果に接近していく。

セーラー服は、泥だらけ埃だらけに蜘蛛の巣まみれ、手にした巾着袋も同じ有様だ。

宵子はネズミの死骸を軍手の手で掴んで、その巾着袋に放り込んでいく。

一匹二匹三匹と。

宵子が一二匹までネズミを強奪した時に、物陰から小さな影が躍り出てきた。

真っ白な長い毛に覆われた子猫である。

口にはネズミをくわえていた。二六匹目の戦果だ。

愛称、バツハ。

異国の神の名を冠して、バハムートと名付けられた、異国種の猫である。

かぐやの飼ひ猫で式神で、宵子の好敵手で、宵子の最大の被害者だ。

バツハは、くわえたネズミを、ぼとりと落とした。

「しまった！ 見つかった！」

宵子が叫ぶ。

『ふしゃあーっ』

子猫が、少女に飛びかかる。

「てやあ！」

宵子は手にした巾着袋を振り回して、それを迎え撃つ。

女の子をひっかいて噛みつく子猫。

その子猫を巾着袋でぶって、噛みつき返す女の子。

審判を任された村人はもとより、通りがかった村人も、微笑ましそうにそんな彼女たちを見つめている。

数ヶ月前には、「ネズミ退治など、修験者様にそのようなことを！」と恐縮していた村人たちも現状に慣れてしまっていた。

宵子とバツハのねずみ取り合戦は、これが始めてではなかった。浄域内の村々で繰り返されてきた伝統行事である。

回数を重ねる内に、ネズミの駆除より対決が目的に変わりつつある。

この村で二ヶ月前に執り行われた時は、バツハが一〇四対五（五匹、バツハから宵子が奪った）で勝っていた。

だいたいはバツハが勝つが、時には宵子が勝つこともある。

もちろん、バツハから獲物を強奪してだが。

ネズミの駆除には、宵子は邪魔者以外の何者でもないが、幾つかの形跡を材料にネズミを探して捕らえる、更には互いに戦略を練っ

て奪い合う、と言う行為は、笹原曰く、大切な修験者の修行、だそうである。

宵子に手が回らない時、バツハにお守りを押しつけている側面もあったりもするが。

『ふしゃーっ』

「くらえ！ 宵子斬りいーっ！」

少女と猫は、大きくもない村の中を、駆け回って喧嘩した。

剣十郎とかぐやが迎えに来るまで、その喧嘩は続いた。

008 旅立ち

朝日が昇るか昇らないかの早朝。

烏壬かぐや学院を、青年と、青年の胸元くらいの身長少女と、少女の肩ほどの女の子と、一匹の白い子猫が旅だった。

かぐやは、金羽根の巫女装束を纏っていた。

しかし着ぶくれて、いつもより、いくぶん丸い。

足下は、さすがに下駄ではなく、登山靴を履いている。

渡来品を改良してしつらえた、烏壬製の靴である。

小さな手には、皮の手袋をはめていて、頭には、つばの広い麦わら帽子を被っている。

宵子は、セーラー服を着込んでいた。

袖まで生地がある厚手のタイプだ。

その上にジャケットを羽織っている。

腰の辺りで短いスカートがヒラヒラしていて、しかしその下には伸縮性のある長ズボンを履いている。

足下は、かぐやとお揃いの登山靴。

手には宵子専用の短い薙刀が握られている。

剣十郎は、いつもと同じ格好だった。

かぐやと宵子は小型のザックを、剣十郎は少し大きめのザックを背負っていた。

烏壬製の最新ザックで、防水加工が施されている。

そして、かぐやの足下では、真っ白な長い毛に覆われた子猫が、

つんと顔を上に向けて、背を伸ばし、犬のように歩いている。

先頭を歩く宵子のはしゃぎっぷりは、恐ろしいほどだった。

宵子は、飽きることなく、

「パイナップルパイナップル。ジャングル奥地にパイナップル。パイナップルパイナップル。私のお口にパイナップル〜」

笹原作詞の歌を歌っていた。

学院を出てからずっとだ。

宵子は食えること全般で幸せを感じる女の子だが、特に外洋からもたらされる異国の果物には、魂を奪われるほどに魅せられていた。そんな宵子の背中を、保護者のような眼差しで、かぐやは見つめ、微笑む。

知らず知らずのうちに、宵子の歌うリズムに合わせて、わずかに体を躍動させつつ歩いている。

宵子が奥駆けに出るのは、初めてである。

かぐやが学院を興してから、その支配域から出るのも、初めてである。

ずっと籠の鳥よろしく、安全の約束された地域のみで暮らしてきた。

もっとも、まだ二日ほどは、安全な学院の〈浄域〉内ではあるが。

五ヶ月前には獣道だった山道は、随分と整備されていた。

道の幅が広くなり、道脇の雑草も、刈り取られている。

所々、道の途切れていた箇所も繋がっていた。

かぐやたちが、桃山に居を構え、近隣から妖を駆逐したことによる成果だ。

今では山賊たちも寄りつかず、村人たちは、安全に山で作業できるようになった。

両手を使わなければ登れなかった丘の斜面にも、杭と木板で区切られた階段が造られていた。

宵子がその階段を駆け上がっていく。

宵子に競争を仕掛けられたバツハが、子猫のまま、一段一段、飛び跳ねて登っていく。

その後ろを、きびきびした動作でかぐやが続き、剣十郎は、だらしとしんがりで、仲間たちの背中を見守る。

階段を上がりきった先は、峠になっていた。

峠の様相も、大きく様変わりしていた。

生い茂っていた低木が刈り取られ、円形に平されていた。

ふちには、柵まで設えられている。

柵のすぐ外で、綺麗な秋桜が連なって花を咲かせていた。

薄い桃色や白色の小振りな花が、朝露に濡れて、上品に輝いている。

季節は夏が過ぎ、秋になろうとしていた。

かぐやはしばし、目を奪われた。

「ふじばなの村人が植えたな」

遅れて上がってきた剣十郎が、楽しそうに呟いた。

ふじばなの村は、浄域に点在する村々の中で、もっとも規模が大きく、学院のもっとも近くにある村だ。

二千人近い人が暮らしている。

かぐやは誇らしい気持ちで、秋桜の花を、指先で優しく撫でた。
剣十郎が、にやりと笑いつつ、

「この峠はちょうど学院と村との中間だからな。分かりやすい目印があると迷いにくくなる。さしずめ〈秋桜の峠〉だな。一つ一つ、こうやって〈浄域〉が整備されて名前が増えて行って、本当の意味で山が〈浄域〉に育ていく。苦勞したかいがあったと感じるだろう？」

「ええ、確かに。ですが、なぜあなたが名前を決めるのですか？」
糾弾する内容の割には上機嫌でかぐやが言う。

〈浄域〉内にある各所の名称は、寺院の当主、つまり学院の主であるかぐやが決めることになっている。

「いや、別にお前が決めたらいいいけどな」

「では、秋桜の丘で」

「丘か。……何のこだわりだ、その差は」

「どうしてもというのでしたら、秋桜の峠でもかまいませんか？」
「すきにしろ」

剣十郎が、わざとらしい溜息を吐く。

かぐやが口に手を当て楽しそうに笑う。

峠をすでに下り終えている宵子が、下で手を振っていた。

彼女の足下では、バッハが宵子の靴に噛みついてた。

ふじばなの村に到着すると、早めの昼食を馳走になり、先を目指

す。

烏壬の三人と一匹は、川に沿って歩いていった。

先頭ではしゃいでいた宵子が、そろりそろりと、列の後ろに下がった。

「どうしました？」

すれ違う時に、かぐやが尋ねる。

「しーしー」

口に指を当てて、宵子。

そのまま、そろりそろりと列の最後尾。剣十郎の後ろに付ける。かぐやは苦笑すると、何事もないそぶりで歩き出す。

しばらく進んでから。

じーと、無言で剣十郎の背中を伺っていた宵子が、
「危ないお兄ちゃん！」

後ろから剣十郎のお尻を突き飛ばそうとした。
ひらりとかわされて、

「うきゅっ」

小柄な身体は茂みに突っ込んだ。

「どうした？ 宵子？」

剣十郎がしれっと尋ねる。

「いや、ママシが……いたから……」

「そうか、そいつは危なかったな」

「うくっ」

顔に付いた草きれを払いつつ、宵子は、

「……よく見たらテントウ虫でした」

「そうか、そいつは危なかったな」

剣十郎は宵子に背を向けるとのんびり歩き出す。

宵子が口を尖らせ、

「……せっかく、助けてあげようと思ったのに」

「気持ちだけ受け取っておく」

少女がぷくうと、頬を膨らませた。

「宵子ちゃんはまだもう凹みました。もう助けてあげませんか？　口も利いて上げません」

「そいつは残念だ」

宵子が剣十郎のお尻に拳を叩き込もうとし、よけられてたたらを踏む。

薙刀で足下を払おうとして、かわされる。

しばらく二人のじゃれ合いが続いた。

かぐやがそれを見つつ、口に手を当て笑っている。

五分後。

「お腹すいたー。お兄ちゃん、パイナップルまだですかー」
「俺とは口を利かないんじゃないかなかったのか？　それに昼は食ったばかりだろう」

「かぐやちゃん、パイナップルまだですかー」

「まだまだ。辿り着くまで十日はかかります」

「パイナップルー」

何故だか宵子は跳ね回った。

浄域内の旅は、順調だった。

宵子はずっと元気だった。

鞆に収まったままのなぎなたを振り回してバツハを追いかけて廻したり。

バツハに追いかけられたり。

剣十郎の背中に飛びのったり。

かぐやの手を引っ張ったり、一人で跳ね回って川に落ちたり。

日が陰りつつあった。

そろそろ、次の村が近くなっている。

今日はそこで一夜を過ごすことになる。

先頭は宵子だ。歌いつつ元気に歩いている。

最後尾はバツハだ。疲れはてたように俯いて歩いている。

三番目を歩く剣十郎は、二番目を歩くかぐやに追いつき並んで、小声で呼びかけた。

「かぐや」

「何ですか？」

「パイナップルって、何だ？」

「パイナップルは、外洋の果物です」

そんなことも知らないのですか、言うような顔で、かぐやが剣十郎に視線を送る。

「いや、それは知っているんだが」

剣十郎は、宵子の背中を見る。

「ばいナップーるん♪ ばいナップーるん♪」

弾むような足取り、怪しげな音律で歌っている。

「なぜ、あいつが、連呼している？」

「それは、宵子だからです。パイナップルは宵子の好物です」

だからそんなことも知らないのですか、言うような顔で、かぐやが剣十郎を見る。

「それだけか？」

「と、言うത്？」

「歌がいつもと違い、パイナップルに限定されすぎている気が、す

「……………パイナップル、以外はな」

剣十郎とかぐやは、顔を見合わせ、どちらからともなく、頷きあった。

それから、剣十郎はアリスにぎこちない笑顔で微笑みかけ、

「なあ、宵子。一応聞くが、奥駆けって何だ？」

「神様を倒して、パイナップルを収穫する！」

かぐやが小さく首を左右に振る。

「意味が分かりません」

嘆息した。

剣十郎とかぐやは、顔を寄せ合い、

「言っておいた方が、良いと思うか？」

剣十郎の小声の質問に。

かぐやは唇に指を当て、すこし逡巡してから、頷いた。

二人はじつと睨み合ってから、ジャンケンをして……………剣十郎が負けた。

剣十郎はため息を吐き、宵子に向き直る。

微笑みながら、直球で。

「宵子、パイナップルは無いぞ」

「え？」

何を言われたか分からない顔で、宵子。

「いや、あれは外洋の果物だから、奥駆けでは手に入らない。何か勘違いしてるようだが、神を倒して出てくるのは勾玉だ」

「だって、……ジャングルに」

「ジャングルは、外洋の向こうだ。パイナップルはない。日本の山には自生していない」

「え？」

宵子は真っ白な灰になって、崩れ落ちた。

這いつくばったまま、力なくかぐやを見上げる。

よろよろとかぐやに震える手をのばし、震える声で、

「かぐやちゃん、言ったよね？ この前の奥駆けでお腹いっぱい、パイナップル獲って食べたって言ったよね？ 奥駆けに行くと、たらふくパイナップルが食べられるって、言ったよね？」

「……い、言ったような、言わなかったような」

宵子は跳ねるように立ち上がり、

「言ったよ！ 絶対言った！ ジャングルはパイナップルの宝庫でパイナップル食べ放題だって言った！」

宵子に詰め寄られ、かぐやが視線を泳がせた。

かぐやは宵子相手に事実を脚色して話す癖が付いていた。

何というか、そのまま話すと情けないことが多すぎたのだ、この五ヶ月。

「……笹原じゃなくお前じゃねーか、原因」

剣十郎が、眉間を抑えて、呻く。

「どうすんだよ。食べ物の恨みは怖いぞ。宵子の場合は特別にな」

かぐやは無表情を装っていたが、瞬きの回数が多くなっていた。宵子がぐるりと勢いよく剣十郎に向き直る。

目に涙を溜めた鬼の形相で、

「それにお兄ちゃんも言ったよ！ 『ああ、美味かった！』 って！」

「……いや、言っていないぞ？ おれは、そんなこと」

剣十郎は二歩、後ずさった。

しかし宵子が五歩、詰め寄った。

宵子の目から涙が、だらだらと溢れ出る。

「言ったよ！ 雪兎の氷、斬りながら言ったもん！ 私が八連続で聞いたときに言ったもん！ 『てめえ、殺す気か！？ ああ、美味かったから邪魔するな！』 って言ったもん！」

「それはお前が、」

「二人して私を騙してたんだ！ うきやー！ー！ 一生恨んでやる！ 一生呪ってやる！ 私のパイナップル返せー！ー！」

宵子は仰向けに寝転がって、じたばたと泣き叫んだ。

「剣十郎、あなたが生返事するから大変なことになりましたね」

「いや、コイツな、雪兎と模擬戦してる時に俺の〈陣〉食いやがったんだ。雪兎もあいつ、攻撃緩めねーし。それにその前にお前が下らない冗談でからかったからだろ？」

かぐやが、ため息を吐いた。

「分かりました。帰ったらパイナップルを手に入れて上げますから」
宵子の動きが止まる。

むくっと上半身だけ起こして。

「ほんと？」

「本当です。良い子にしていたらですけど」

「かぐやちゃん、大好き！」

宵子が飛び起き、かぐやに抱きついた。

かぐやが、その頭を撫でる。

次に宵子は剣十郎に抱きつき、バツハにも手を伸ばして引っ掛かれた。

しかし気にせず、一人で飛び跳ねている。

「大丈夫なのか？」

剣十郎は、宵子に飛びつかれて乱れた衣服を直しているかぐやに、尋ねた。

外洋の果物は、高級品だった。

流通も少なく、金を出しても簡単に手に入るものでもない。

「もちろん」

かぐやが胸を張る。

「わたしは、烏壬本家本流ですから……なんとか笹原の責任にして、用意させましょう。それが無理なら、いつものように、織姫にたかりましょう」

「……がんばれ。成功したらいいな」

「ジャングル！ ジャングル！ パイナップル！ ジャングル！
ジャングル！ パイナップル！」

宵子が、奇妙な踊りで、はしゃぎ回っている。

「宵子！　パイナップルは良い子にしていたら、です！」

かぐやに叱責され、宵子が口を押さえて、背筋を伸ばす。
こくこくと頷いた。

「長い旅になります。その間、宵子が良い子してると思えば、安い
ものですね」

かぐやが口の端で微笑み、虚勢気味に胸を張った。

そして、宵子は、静かになった。

ただし、かぐやが想像していたよりも、静かになった。
こてつとその場に崩れ落ちた。

寝息を立て始めた。

「……まさかこいつ、辿り着くまで寝続けるつもりじゃないだろう
な」

剣十郎がうめく。

「さあ、どうでしょうか……確かに眠っていれば、さすがの宵子も
静かで良い子ですが」

「……いや、良い子ではないだろう、これは、すでに」

修験者の中には、宿した神の影響を色濃く受け継ぎ、人間離れし
た特殊な能力を発揮する者がいた。

特に〈くだぬき九狸〉を修験しているとされている宵子は、遊ぶこと食べ
ること寝ることに関しては、常人を凌駕していた。

連日連夜眠らないではしゃぎ通すことも、眠り続けることもあっ
た。

「とにかく、先に進みましょう。さすがに此処で引き返すのは……恥です」

かぐやはしゅると袖口から帯を取り出し、剣十郎に差し渡した。

「……仕方ないな」

剣十郎は溜息を吐く。

帯を受け取り、縛るようにして、宵子を背中に背負った。

009 月夜視と山賊（一）

学院を出てから、七日が経っていた。

その間、一度だけ宵子は起きたが、直ぐにまた眠った。

移動の間、ずっと剣十郎は背負いっぱなしだった。

剣十郎を先頭にして、かぐやたち一行は、腰ほどの高さの草を掻き分け、進んでいた。

「くわっ」

かぐやが牙を剥く。

剣十郎の背中ですやすや気持ちよさげに眠る女の子を、羨ましげに見つつ、

「いったい何時になったらこの獣道を抜けて、月夜視聖道に入るのですか？」

抗議の声を上げる。

五〇年前、たった一隻の朽ちかけた〈黒船〉が浦賀に漂着してから、この国の様相は大きく様変わりした。

流れ込んだ技術や外洋の異能者の協力によって、朝野勢力は山界と対抗する術を手に入れた。

砦を建て、道を切り開き、ひたすら山域を開発してきた五山・修験勢力は、方針の転換を余儀なくされた。

朝野に誕生した〈維新政府〉や外洋に対抗すべく、または朝野や外洋に勢力を拡大すべく、山に広く分散していた修験者を集結させ、再配置を行った。

重要でない枝葉の砦が次々と放棄された。

割を食ったのが、山域の村々だ。

彼らの多くは、山に取り残された。

修験者の居なくなった山域では、妖が繁殖し、山賊が跋扈するようになった。

特に九年前、五山筆頭・烏壬と、同じく五山・出雲が全面抗争を起こし、二年に及ぶその戦争の結果、出雲が滅んでからは、うち捨てられた村の数は激増していた。

かぐやが学院を興した桃山も捨てられた山の一つであり、

「すでに月夜視聖道に入ってる」
のんびりと、剣十郎が答える。

「この草むらが月夜視聖道とでも？」
嫌みっぽく呟るかぐやに、

「そうだ。元、だけどな」

月夜視聖道は、烏壬本山と〈月夜視城〉を繋ぐ、重要な大動脈の一つだった。

しかし出雲との抗争で、烏壬の前線基地だった月夜視城は壊滅。月夜視聖道はその役割を失い、街道や途上の砦の大半が切り捨てられていた。

「……ここが、月夜視聖道ですか？ この草むらが？」

「よーく、観察しろ。聖道だった名残がそこかしこにある」

かぐやは、辺りを見回す。

左右を見、前を見、そして後ろを振り返る。

高い木々に覆われた森の中だが、かぐやたちを中心に、進路方向に向かってまっすぐ草むらが延びている。

荷馬車が楽に行き来出来る、ほぼ均一の幅で。その草むらには、

高い木々は一本も生えていなかった。

「……この草むらが、月夜視聖道ですか？」

「そうだ」

「……言われてみれば、地面も平ら、のような」

かぐやはその場で何度も足踏みする。

草が生えて所々盛り上がり、デコボコとしているが、張りだした根などもなく、足場はわりとしっかりしていた。

「まあ、道だからな。もう少しで、村があるはずだ。そこで食料と水を補充する」

「……これが、月夜視聖道ですか」

かぐやの声は虚ろだ。

訪れたことは一度もなくとも、かぐやは自らが宿した神の名を与えられた城と街道に、少なからぬ興味と愛着を持っていた。

いずれは復興したいとも思っていた。

だからこの旅の途中、僅かながらも月夜視聖道を通過することを知って、楽しみにしていたのだ。

「これが月夜視聖道のなれの果てだ。長い聖道の途中には、完全に断線した箇所もある。この辺りはマシな方だ。山は日々、変化している。人の手が絶えて数年も経てばこうなる。山の主は神でも人でも獣でもなく、バツハ」

さして熱も込めずに講釈していた剣十郎が、突然、かぐやの式神の名を呼んだ。

「バツハ？」

山の主がバツハ？ とかぐやが剣十郎を見る。

「かぐやは気づいていないふりをしろ。山賊だ。あの松の下にいる。かぐやは見るなよ。見張りだろう。三人だな。バツハ、俺が歩き出したら見つからないように迂回して制圧してこい。狼煙を上げさせるな」

剣十郎は、身体の陰に隠すようにして、小さく指だけで方向を指示した。

進行方向、月夜視聖道の右側に、小高く盛り上がった尾根状の地形があった。

三本の松が生えていて、その下は藪になっている。
まだかぐやたちから随分と距離はあった。

ゆっくりと剣十郎が歩き出す。

かぐやも無言でその後が続く。

二人が進むことによって、がさがさと草むらが揺れる。

その揺れの中、白い子猫は草むらを揺らさぬように注意しつつ草の中を進む。

しばらくして、松の下から、男の野太い悲鳴が二つ迸った。

「あー。皆殺しか」

尾根に転がる三つの死体を前に、ぼりぼりと剣十郎は頬を搔いた。
誇らしげに背筋を伸ばし、つんと顎を反らして座っていた子猫は、背を少し丸めて俯いた。

「ああ、いや良いんだ、バツハ。よくやった。大した手際だ、上出来だ、えらいぞ」

慌てて剣十郎はぎこちなく微笑み、子猫を褒める。

バツハの有用性を、剣十郎は高く評価していた。

人ではこうも鮮やかに標的に近づき、不意打ちなど出来ない。

「山賊ですか？ まさか村人ではないでしょうね？」

少し遅れて尾根に上がってきたかぐやが不安そうに問う。

かつてかぐやと剣十郎は、というより剣十郎が、山賊と間違えられて善良な村人から矢を射掛けられたことがあったりする。

「山賊だ。村人が村から離れたこの地点に潜んで、」

剣十郎は、藪の中に転がっている道具を一つずつ集めていく。

水の入った竹筒。印の違う三本の狼煙。火縄。弓と矢。そして、小さな壺。

昼飯の後だろう、米粒や肉汁の付着した笹の葉。

その中から壺と矢を手に取り、矢の先端をかぐやに見せる。

「矢尻に毒を塗って、修験者を待ち伏せたりしない。もしやったのなら、殺されたって自業自得で村のやつらも納得する」

冷たい剣十郎の物言いに、かぐやは僅かに眉をひそめる。

山頂にいた頃は別にして、桃山で学院を開いてからのかぐやは、〈村人〉に対して、随分と保護欲が強まっていた。

それと比べ剣十郎は、全ての生死に対して、達観しすぎていた。じとりとしたかぐやの視線を受け、剣十郎は軽く苦笑し、補足する。

「それに、俺はこの先にある村に何度も立ち寄ったことがある。桃山に行く少し前にもここを通った。三人とも見かけない顔だ」

かぐやは近づくことなく爪先立って死体の顔をのぞき見た。

三つの死体は、剣十郎が検分のために仰向けにして並べてあった。驚愕に引きつったその顔は、どれも剣十郎以上に、山賊然としていた。

これは山賊だと、少し、かぐやはホッとする。

剣十郎は目をすがめ、山の向こうを見ていた。

「この先にある村。まだ村が残っていればだが、おそらく山賊が占拠しているな。狼煙を用意していた以上、こいつらには知らせる相手、仲間がいる」

かぐやを振り返り、

「さて、どうする？」

問いかける。

「もちろん山賊が居るのなら殲滅するのみです。行きましょう」

「まあ、そうだな。作戦も何もこっちはこの人数だし、引き返すという選択は――」

「わたしの学院にはありません」

勇ましく言うてから、かぐやは肩を落とした。

「それにしても、名高き月夜視聖道に山賊ですか」

「嘆くな本家。出来ることからやっていけばいいさ」

「その通りです。行きましょう」

かぐやは胸を張ると、がさがさと雄々しく藪を掻き分け、尾根を降りていく。

「おい、慎重に歩け。罾が仕掛けてあるかもしれないぞ」

剣十郎の言葉で、かぐやの足が止まる。

剣十郎がかぐやを追い抜き、前を進む。

その後を離れないようにかぐやが続く。

目の前、剣十郎の背中では、気持ちよさそうにくうー、と宵子が小さく寝息を立てている。

かぐやがためらいがちに言う。

「宵子を背負っているのは、戦う時に邪魔ではありませんか？」

「……起こせば起こしたで、面倒だけだな」

010 月夜視と山賊（二）

音もなく、剣十郎が木から下りてくる。

眠る宵子を背負ったままだ。

村の偵察から戻ったところだった。

途中で道を外れ森の中を歩み、一行はすでに村の目前まで辿り着いていた。

「どうですか？」

「やはり山賊が居座っている。ざっと百から二百程度。まだ俺たちには気づいていない」

「大した数ではありませんね」

「確かに、数は大したことはないがな」

山域の村々は、無防備に山に転がっているわけではなかった。

山賊や妖から身を守るため、出来うる限りの備えは常になされていた。

この村でも、村の周りを堀がぐるりと取り巻いていて、堀も掘つてある。

物見櫓も数カ所、建てられている。

男も女も、最低限の武具は扱える。

そんな村を襲撃して占拠するような山賊団だ。百人や二百人なら小規模といえる。

しかし、山賊の数は、それほど重要ではなかった。

剣十郎もかぐやも、それにバツハも〈陣〉を張れる。

百人いようと千人いようと、常人に後れを取ることではない。

「問題は、修験者が居るかどうかだが……」

警戒すべきは、敵に修験者がいる場合だった。
滅多にないが、山賊に修験者が複数人いた場合、苦戦ではすまなくなる。

「一人は居るだろうな。この人数で村を襲うからには」
剣十郎は結論づけた。

略奪はただ勝てばいいわけではない。
奪える物が、失う物より多くなければ意味がない。
圧倒的な戦力差がなければ、山域の貧しい村など襲わない。
つまりこの人数で襲うからには、山賊達は圧倒的な戦力、〈修験者〉を要していると見て間違いないだろう。

「偵察を続けるか、夜を待つか、このまま斬り込むか」

夜になれば、かぐやは月夜視の力を発揮できる。
敵に何が居ようと圧倒的な破壊力で蹂躪することが出来る。

「ただし、月が上がるまでにはまず間違いなく俺たちが見張りを殺したことが知られるだろうな」

「つまり？」

かぐやが尋ねる。

「今攻め込めば不意をつくことが出来るが、敵の陣容によっては勝てる保証は出来ない。夜まで待つと、仲間の死体を発見した山賊たちが、どのような行動を取るか予測出来ないが、まあ月夜視なら問題なく勝てるだろう。要するに今攻めれば、俺たちの危険があり得

る。夜まるで待てばその危険はほぼ無くなり、かわりに村人の犠牲はふえる。ちなみに、」

と剣十郎は言葉が続け、

「偵察を続けるのはその折衷案だが、より正確な情報を得ようと思えば、村に進入する必要がある、見つかる危険も増す。俺が一人で動いたところで大した情報を得られるとも思えない。先制攻撃の機会を捨てるほどの価値はないだろう。それをするくらいなら見張りがいた地点に戻り、発覚を遅らせる工作をした方が良いな」

かぐやはこくりと頷いてから、目をつむり、しばし考える。

それぞれの選択で得られる物と失う物。

じっくりと意識する。

ただし、答えは考えずとも決まっていた。

「偵察も不要。工作も不要。いま攻めましょう。修験者に危険はつきものです」

かぐやは目を開け、朗らかに、微笑み答える。

「そうだな。そうしよう」

剣十郎も、満足そうに、だが寧猛に口元をゆがめた。

「このまま斬り込み、山賊どもを追い落とす。不意をついて、斬れるだけの山賊を斬る。俺は空を駆って上空から強襲する。少し間を空けてからバツハが来い。かぐやは山賊たちが村から逃げ出すのを確認してから、ゆったりと門から村に入って中央を目指せ。間違つて村人を殺すのが怖いなら、足を狙え。この状況だ。折られても文

句は言うまい」

「わたしが参加するのは、山賊が逃げるのを確認してからですか？」

「ああ。いきなり質量共に不明の修験者の襲撃を受けて全く崩れない山賊団は、相当に自信があるか、ただの馬鹿のどっちかだ。馬鹿なら俺一人でも十分だが、手練れの修験者が居るとやっかいだ。一旦撤退して、夜に出直す。その場合、出来るだけバツハが囧になって敵を引きつけ、かぐやは逃げる事に専念しろ」

背筋を伸ばして座っている子猫は、力強く頷いた。

バツハはかぐやより逃げ足が速いし、身を隠すのも得意だ。そして主を守るのは式神の誇り高き使命だ。

「逃げる場合、どこで落ち合いますか？」

「月が昇ってから、この村で」

剣十郎の返答に、少し考えてからかぐやが頷いた。
つまり月夜視になって踏み込めと言うことだ。

「それでいきましょう」

最近ではさほど厳密ではないが、作戦の立案と指揮は、剣十郎の仕事であり、その承認はかぐやの権利であり義務である。

「それで宵子は？」
かぐやが尋ねる。

剣十郎は、自らの背中をのぞき込む。
気持ちよさそうに、宵子は眠っている。

くいいーと寝息を立てて、両手で剣十郎にしがみついている。
しばし剣十郎は目を瞑って考える。

寝かせたまま置いていくか、起こして置いていくか。

寝たまま連れて行くか、起こして連れていくか。

それぞれの状況を、色々と考えた結果。

「寝かせとこう。背負っていく。俺の背中が一番安全だろうしな」

しばし考えてから、かぐやは頷いた。

続いて、子猫も頷いた。

「行ってくる」

かぐやの目の前。

剣十郎が、空を、駆け上がるように上昇していく。

足下の空気に〈陣〉を張り、足場とし、それを蹴って移動しているのだ。

修験者なら、理論上は誰にでも出来る技だが、しかし実戦でそれを使いこなせる者は、そうはいない。

かぐやも剣十郎に師事し、数歩空を歩くくらいなら出来るまでになっているが、攻防の〈陣〉を維持したままの俊敏な空中歩行は、とても出来そうになかった。

飛ぶ鳥のような速度で遠ざかる剣十郎を、何とも羨ましそうに、かぐやは見送った。

011 月夜視と山賊（三）

村の上空にたどり着いた剣十郎は、物見櫓を目掛け、〈空〉を蹴って稲妻のように急降下。

そこに陣取っていた二人の見張りを容赦なく斬り捨てた。

斬り捨てると、そこから村の中に進入。

単純に〈陣〉を維持するのに比べ、空を走る技は、一蹴りごとに〈靈気〉を消費する。

二魂だった当時と違い、今の剣十郎には長時間、長距離の空の移動は出来なかった。

剣十郎は、村の中を隠れるように進み、山賊を暗殺して廻った。

離れた地点の敵を殺しておくことによって、襲撃者の数を多く思わせる。

一人で流浪をやってきた剣十郎の常套手段である。

剣十郎が九人目の山賊を始末した時、村の中がざわつき始めた。

一カ所で騒ぎが始まると、別の箇所でも死体が見つかる。

多少、村の西南に偏ってはいるが、目論見通り、ばらばらの場所から敵襲が告げられ、山賊達は混乱を来した。

剣十郎は、そこに悠々と姿を現した。

山賊が剣十郎を発見する。

わらわらと寄ってくる。

威嚇の言葉を吐きながら、山賊が剣十郎の肩口に剣を振り下ろした。

その瞬間、剣十郎は〈陣〉を張った。

剣十郎は山賊の剣を避けようともせず、右手に握った小烏丸で山賊の胴をなぎ払った。

山賊の剣は剣十郎の〈陣〉によって防がれ、しかし〈陣〉を張られた小烏丸は、革鎧の上から山賊を真っ二つに断ち斬っていた。

「こ、こいつ、」

「修験者だ！」

山賊たちが青ざめる。

練達した修験者と常人では戦いにはならない。

山賊達は我先に逃げようとする。

剣十郎は逃げまどう山賊を、容赦なく後ろから斬り捨てる。

その山賊の身体が崩れ落ちるより早く、剣十郎は次の山賊目掛けで走った。

剣十郎は、年の頃は七歳の眠る女の子を背負ったまま、靈気によって強化された脚力で、次から次へと山賊に肉薄し、斬り続ける。

一方的な殺戮。

だが、容赦はしない。

下手な仏心は山賊よりも弱い者たち、村人への災厄へと繋がっていく。

次の山賊を間合いに捕らえ、剣十郎は小烏丸を振り下ろそうと、

――しかし、瞬間的に剣十郎は横に移動した。剣十郎が居た位置を、槍の穂先がすぎる。

その穂先が引き戻されたときには、剣十郎は槍の使い手に向かい合う形で、青眼に刀を構えていた。

「ほう、かわすのか」

かすれた声で呟いた男は、鎧を着ていなかった。

羽織袴に脚絆と手甲。

軽装だが、しかしその身体を赤黒い〈陣〉が覆っている。

「お前が頭領か？」

剣十郎の問いかけに、男は答えない。

男は、すでに人の顔をしてはいなかった。

剛毛に覆われた犬の顔をしていた。

頬まで裂けた口にぞらりと並ぶ牙。尖った耳は、人にしては上部に付いている。

修験者には、神の魂を宿した者と、宿さない者が居る。

剣十郎は、今は一魂の修験者で、神の魂を保有していない。

神なし、と呼ばれることもあるし、山域では、修験者とすら見なされないこともある。

それに対して神の魂を、つまりは神が死して残した勾玉を身内に宿した者を、〈二魂〉の修験者という。

引き出す神気の量にもよるが、〈二魂〉の修験者は神魂の影響を受けて、変化^{へんげ}する。

容姿が人からかけ離れるほど、強力な力を有している可能性が一般的には高くなる。

しばし、両者はにらみ合った。

互いに、相手の力量を推し量ろうとしていた。

そして互いに、第三者の襲撃を警戒して、辺りに注意を払っている。

男は、平三角の直槍を、穂先を下に向けて構えていた。一見だらりとしているが、これは全方位に対する備えでもある。男の犬顔には、極度の緊張が張り付いていた。

二人の修験者がにらみ合っている間に、山賊が村から逃げ散っていく。

騒動に誘われるように、村の本来の主、村人達が怖々と顔を出す。その中の一人が、剣十郎に気づいて、呟いた。

「剣十郎さま？」

直槍を手にした犬の男の耳が、ぴくりと動いた。

「剣十郎だと？」

男が、ゆっくりと槍の穂先を剣十郎に向ける。

「烏壬剣十郎か？」

剣十郎は表情を変えず、内心で舌打ちする。

流浪をやっていた剣十郎は、山賊にとっての天敵だ。

名を知られていてもおかしくはないが、知られていた以上、おそらく手の内や力量も知られている。

「つまり、一魂だな？」

犬顔の問いに、剣十郎は答えない。

青眼に構えた刀も動かさない。

「〈風〉を使うそうだな？」

「……」

「背中に背負っているガキは、なんだ？」

「気になるか？ さすがに」

剣十郎が始めて質問に答えた。

青眼に構えた刀は動かさない。

剣十郎は嘲笑するように口元を歪めてから、真顔になり、

「教えてやらん」

「……まあいい。とにかく死ね」

男の〈陣〉がふくらみ、密度が上がった。

二間半近い間合いを一息でつめ、直槍を繰り出して来た。

剣十郎は、青い〈陣〉を張った小烏丸で、赤黒い〈陣〉の張られた槍を弾く。

男が、二撃、三撃、四撃と、突き、薙ぎ払う。

その全てを剣十郎が防ぐ。

五撃目を反らすと同時に、剣十郎は踏み込んだ。

瞬間的に小烏丸の〈陣〉を強化、犬男の胸元を斬り裂いた。

血筋が飛ぶ。

だが、男がまとう〈陣〉に阻まれ、致命傷には至らなかった。

「おのれ、魂なしの分際で！」

男は血の滲む胸元を押さえ後ずさり、牙を剥いた。

悪罵には、うなり声が混じっている。

その時、村の離れた場所から、悲鳴が聞こえてきた。
山賊たちの悲鳴だ。

次々と、移動しつつ悲鳴がこだまする。

「仲間が居るのか！」

犬顔の男は飛び退き距離を空け、剣十郎に背を向け逃げ出した。

剣十郎が跳躍して追い打ちを掛ける。

男が振り向く。その口ががばりと開いた。

瞬間的に、剣十郎は空中で急停止して、前面に〈陣〉を展開した。
ハッタリの可能性もあるが、敵の能力が不明である以上、最大の警戒を取らざるを得ない。

結果的にその選択は正しかった。

男の口から大量の火炎が放出された。

靈気を宿した凶悪な火炎だ。剣十郎の〈陣〉が、火炎を防ぐ。

男は、そのまま山に逃げていく。

剣十郎は、その男を陰しい顔で見送ると、身をよじって宵子を背負い直し、村の中に残る山賊の討伐を再開した。

012 月夜視と山賊(四)

剣十郎が村に奇襲を仕掛けてから、僅かな間を置いて。

「バツハ、修験しなさい」

かぐやは足下に付き従う子猫を見下ろして、命じる。

バツハは、鳴き声を発することなく、小さく顎を引いて頷いた。

バツハを包む白毛が、ふわりと逆立ち、稲穂色の〈陣〉に覆われ揺れる。

白い子猫の丸い目が雄々しく引き締まり、尻尾がくるっと上向いて丸くなる。

変化し終わったときには、肩が幾分盛り上がり、体軀は、三倍ほどの大きさに逞しく膨張していた。

バツハの修験した神は、異国の鷹神らしい、そうである。

そう言って〈青竜王〉がかぐやの住まう〈山頂〉に連れてきた。

彼の偉大な修験者は、惜しいが、どうしようもなく惜しいが、どうしても欲しいのなら、くれてやろう、とかぐやに譲ってくれた。いずれはかぐやを乗せて空も飛べるようになるかもしれない、と胸を張っていた。

しかし擬神化したバツハの姿は、犬っぽかった。

それも純和風の柴犬っぽかった。

顔つきは幾分、丸みがあって猫の愛嬌も残しているが、翼らしきものはどこにも見えない。

犬神を宿している事は、すでに濃厚である。

勾玉は大きさや色合い、気配で、ある程度の神力を推し量る事が出来る。

ただし神の種族や生前の姿形までは、判別しようがない。

五山では、神の生前の有り様や、修験した修験者の一生を書籍に記し、勾玉と共に管理している。

〈神話〉や〈系譜〉、〈血統書〉と呼ばれている。

〈月夜視〉ほどに歴史のある大神になると、膨大な書物が烏壬本山山頂に保管されている。

しかし全ての勾玉に〈血統書〉が有るわけではない。

そのような出自不明の勾玉は、〈無銘〉や〈お神籤おみくじ〉と呼ばれている。

バツハが宿した異国の鷹神らしいというような不確かな噂も、同じく〈無銘〉や〈お神籤〉に分類されている。

笹原や剣十郎に言わせれば、山界に古くからある詐欺だそうで、血統書のない勾玉が、噂どおりであることはないそうだ。

青竜王が誰かに騙された、と考えるのは難しく、青竜王にかぐやが騙された、と見るのが妥当だろう。

それでも、かぐやは青竜王に感謝している。

バツハと巡り合わせてくれた事を。

きっとバツハほど賢く愛らしく頼もしい式神は世界のどこを探しても他に居はしないだろう。

かぐやは、修験し犬っぽくなったバツハを見下ろし、満足そうに微笑んだ。

「気を付けてお行きなさい」

かぐやが言うと、式神は顎を引いて頷いてから、大きな歩幅で駆け抜け、村に突入していく。

入り口付近の喧噪が増した。

かぐやは、まだ動かない。

じっと、バツハが突入していった村の出入り口を、見つめている。

その彼女の髪は、淡く輝き、ふわりと柔らかくたなびいていた。
輝く白銀の月色の〈陣〉が、ほぼ均一にかぐやを包んでいる。

平常の〈陣〉。

または、〈平常陣〉と言う。

八方全ての角度で隙のない事から八方の〈陣〉や〈八方陣〉と呼ぶこともある。

身体を均一に〈陣〉で覆う〈平常陣〉は修験者が最初に覚える陣形であり、これはかぐやも山頂にいた頃から取得していた。

かぐやは矢玉を警戒して、随分と遠くで〈平常陣〉を張ってから、村に近づいていた。

容姿はかぐやのままだ。

昼のかぐやは、勾玉の力をごく僅かしか発揮出来ない。

それでも修験した神が強力であるため、平均的な〈二魂〉程度の力は十二分に備えていた。

かぐやが見つめる先、村の出入り口から転がるように、荒々しい男達が逃げ出してきた。

かぐやは表情を引き締める。

その後、口元だけ小さく微笑まし、誰にともなく、

「では、参りましょう」

宣言する。

かぐやの右の袖口から、帯状になった織物が一反、白銀の〈陣〉を纏わせながら、しゅるしゅると流れ出していた。

かぐやの得意とする武器である。

烏壬先代本家本流、〈織姫〉の編んだ帯で、今のところ、かぐやが思い通りに操れる数少ない素材の一つだった。

〈陣〉を張ったかぐやは、堂々と村の入り口から侵入する。

逃げようとする山賊を、容赦なく〈陣〉を張った帯で中距離から打ち据える。

〈陣〉はかつて〈神^{じん}〉と記されていた。

まさしく生物の枠を超越した神の力の顕在化であり、薄い布に打たれた山賊は、数メートルを飛翔する。

ゆったりとした歩みを崩すことなく、村の中心を彼女は目指す。彼女の視界の中、〈陣〉を張ったバツハが駆けずり回り、山賊を討伐していた。

その村から山賊達を追い出すのに、そう長い時間はかからなかった。

村から山賊を追い払ったかぐやたちは、たいそうな歓迎を受けた。

「おお！ 剣十郎様だ！」

「流浪の剣十郎様だ！」

「烏壬剣十郎様がいらしゃった！」

ただし、その人気はたった一名に集中していた。

名乗りを上げる前から、剣十郎の名が、村のあちこちに伝播していく。

山域の村々を巡り、妖を退治して山賊を成敗する、特に何処の山にも属さない修験者を、〈流浪〉と呼ぶ。

剣十郎は学院に属す前は、一人で流浪をやっていた。

流浪の修験者は、山で孤立した村にとっては、まさしく神のような存在で、正義の味方だった。

ただし、流浪の中には山賊と変わらぬくらい素行の悪い者もいる。と言うより、素行の悪い者が主流だ。

そのため、たった一人で山域を練り歩き、僅かな食料と情報を対価に気軽に妖や山賊を退治してくれる剣十郎の人気は、相対的に高かった。

「この村に、も？」

「ああ、何度か立ち寄ったことがある」

「ずいぶんと人気そうですね……」

かぐやは何とも複雑な表情だった。

「まあ、流浪やってたからな」

剣十郎が、しれっと答える。

涙や鼻水を垂らしながら群がってくる村人達。
一人の女性がその輪を押しわけ、親しげに剣十郎に抱きついた。

「……なじみの村なら、話が早そうですね」
かぐやが空を見上げ、呟いた。

013 月夜視と山賊(五)

村の中央、小高くなった丘の頂。

客殿を兼ねる村長の屋敷。

奥の部屋には布団が敷かれ、すでに宵子が寝かされている。

まず剣十郎は、村の代表者たちに、今は流浪ではなく桃山のかぐや学院に所属していること、奥駆けの最中であることを説明してから、烏壬本家本流のかぐやを紹介した。

彼らはただ平身低頭。

うち捨てられた山域の村人達にとって、修験者の頂点に君臨する五山・烏壬のお姫様は、ありとあらゆる意味で遠い、雲上人だ。

どう対応していいか分からない。

この村だけではなく、ほぼ例外なく、かぐやが始めて訪れた村では、同じような困惑が示された。

かぐやは、微笑み、

「確かにわたしは烏壬本家本流です。なれど、今は桃山に居を構えたかぐや学院の一人の修験者。剣十郎と同じように接してくださいませんか」

流ちょうに告げる。

かぐやはこの手の宣誓が嫌いではなかった。

言い慣れていた。コツは冗長にならないことだ。

もっとも言われて直ぐに村人達がうち解けるわけでもないし、いきなりうち解けられても対応に困るが。

その後、村人達の話を通り聞いてから、剣十郎は、山賊の頭領は山に逃げた、まだ村に危険が残っているが、奥駆けの途中であり、

今後どうするかは、「へかぐや学院」の学院長であるかぐやと二人で相談したい」だから席を外してくれと、村人たちに願い出た。もちろん彼らは了承したが、剣十郎が来たからには必ず助けて貰えると思っていたのだろう、複雑な顔をお互いに向け合った。烏壬の二人、特にかぐやに対し、畳に擦りつけるくらい頭を下げ、中腰に立ち上がり、平身低頭しつつ部屋を出ようと……。

「かまいません。山賊は成敗します」

かぐやが、はっきりとした声で言った。

退室しようとしていた村人達の動きが止まる。

そろそろと、剣十郎の表情を伺い、かぐやをちらちらと盗み見る。かぐやは、剣十郎をじとりと睨む。

目が少しつり上がっていた。表情で「あなたは私を悪者にしたいのですか？」と語っていた。

「……いや、そう言うわけじゃ、ないんだがなあ」

剣十郎がぼりぼりと頬を搔く。

〈烏壬かぐや〉と〈学院〉の名を売るために、流浪の剣十郎ではなく、〈かぐや学院〉が助けるのだと、村人たちが理解出来るように手順を踏んでいただけなのだが……。

と剣十郎は頭の中で言い訳しつつ、

「普通はこの場合、」

「かぐや学院は、普通はこの場合、必ず山賊を討伐します。村を見捨てて先に進むことはありません」

かぐやが胸を張って宣言する。

「まあ、その結論で良いんだが。とりあえず相談させてくれ」

剣十郎が苦笑しつつ言う。村人達が改めて退出していく。彼らの顔には、少し安堵が広がっていた。

「まず現状だ。敵の中に最低一人、修験者が居る。火を扱う二魂の修験者だ。山賊の数は百五十程度」

「恐れるほどのことはありませんね」
すまし顔のかぐやは、どうも拗ね気味のようだった。

「修験者の数は確定していない。最低一人、他にもいる可能性はある」

剣十郎が念を押す。

敵の陣容は、剣十郎達が実戦によって得た情報と、村人の証言から。

ただし、山賊が村人相手に、全ての手の内を曝していたとは限らない。

事実、犬らしき修験者は、村の襲撃したときに、火炎息を使用しなかったそうだ。

「次に敵の出方だが、これを完全に予想するのは不可能だ。山賊がこのままこの山域から逃げていく可能性もあるが、俺たちが村を離れるまで山に潜んでやり過ぎすか、襲撃してくる場合もある」

「襲撃ですか？ 山賊ふぜいが向こうから？」
かぐやが目を見張る。

「山賊の陣容次第だ。逃げのびた先で情報を寄せ合い、こっちが少人数であることはすでに理解しているだろう。勝てると思えば、仕掛けてくる。なんせ、」

かぐやのお腹を指し示し、

「その胎はらの中の勾玉は、金で買えないお宝だ。俺が一魂なのはすでに知られているようだが、バツハとかぐや、宵子――はどうだか分からないが、二つ三つあると思えば、死ぬ覚悟で攻めてきてもおかしくはない」

「なるほど」

難しい顔で言ってから、かぐやは微笑んだ。

「しかしそれはこちらも同様です。向こうから勾玉が飛び込んでくるのですから」

二魂の修験者を倒せば、労せずして勾玉が手に入る。
それはお互い様だった。

「ただし、時間を取られるぞ。奥駆けの情報、あれが本物だったとしたら、金峯山との競争だが、確実に先を越されることになる」

「かまいません。元々は金峯山の情報。それに、居るか居ないか分かりもしない蛇神の勾玉よりも、目の前にある犬神の勾玉の方がよほど魅力的でしょう」

「まあ、いいけどな。……犬神とは決まってるが。上意下達が大原則の修験者が、与えられた任務を途中で放棄しちゃ懲罰ものだが……かぐやだしな」

そう言う剣十郎も、山に属する頃から随分と自由にやっていた。本来、修験者の離脱を一切認めない烏壬で、流浪をやっていたくらいだ。親の七光りであるが。

「そうです。わたしが良いと言えぱいいのです」

かぐやは、えらそうに胸を張った。

率いる勢力は矮小ながら、実際、烏壬かぐやは偉かった。

五山筆頭・烏壬に於いて、かぐやに命令出来る人間は、建前上はたった一人しかない。

それどころか、本家本流であるかぐやには、烏壬本山の全ての法を、踏みにじる権限が与えられている。

「では、確実に、山賊を殲滅して、村を救い、勾玉も手に入れますよう」

一言一言、強く区切って、かぐやが言う。

「いいだろう」

剣十郎は満更でもないように笑って、作戦を練り始めた。

その夜だった。

剣十郎は一人、村を抜け出て、山に踏み入った。

敵の戦力を知るため、出方を探るためと、先制攻撃を加えるため、そして敵を誘い出すために。

だいたいにおいて、霊山に属する修験者や、山賊狩りを生業とす

る流浪は、山村を襲う山賊よりも戦力で勝っている。

だから山賊はその差を逆転するため、ありとあらゆる手段を講じてくる。

山に逃げた彼らが、一カ所に固まることはまず無かった。

常套手段としては、村を取り囲むように分散して隠れ潜む。

今回のように敵に修験者が混じっていて、こちらが少人数の時には、特にそうだった。

もしこちらの修験者が総出で山狩りを行えば、敵の修験者は手薄となった村に切り込み、家を焼き、村人を惨殺する。

嫌がらせだが、効果はある。

村を見捨てない場合には、戦力を分散してでも、常に必要なだけの守りを残す必要が生じる。

それに対して、山賊達は守るべき拠点を持たない。

自由に山の中を移動し、罠を仕掛け待ち伏せる事が出来る。

不利になればなりふり構わず逃げる事が出来る。

いつでも好きな時に全戦力で村に押し寄せる事も出来る。

その為、お互いの総戦力が把握できない状況では、村を守る修験者は下手に攻め込む事が出来ない。

相当の自信がない限り、村に籠もり、受け身に回らざるを得なかった。

しかし剣十郎は、一人で山に踏み入った。

かぐやには敵を侮るなど言っているが、村人の話や自ら戦った感触から、敵に修験者は一人しかいないと睨んでいた。

もし他にいたとしても、自分なら逃げ切る自信があったし、自分がない隙に村が襲われても、月夜のかぐやが後れを取るとは思わなかった。

作戦としては常道から外れるが、かぐやと剣十郎の特性を考えれば、最良の判断だろう。

常態化した慣例が必ずしも最善でないのは、世の常である。

剣十郎はその夜、一二人の山賊を斬って捨てた。

014 月夜視と山賊(六)

剣十郎の山狩り、三夜目が明けた。

山は朝靄に煙っていた。

狼の修験者。

今は人の顔をしていた。

名を、佐々木永昌ささきながまさという。

かつて出雲に属していた時には、永昌は別の名を持っていた。

烏壬によって出雲が滅ぼされてからは、彼は山を下りて維新政府に属する朝野の大名に仕えていた。

この山賊家業も、実は立派な仕事の一つだ。

彼は、齒ぎしりしていた。

たかが一魂の修験者だが、剣十郎の実力は、明らかに二魂の永昌を凌いでいた。

〈陣〉の量は僅かばかり永昌が勝っていたが、陣の〈統率力〉でその差は逆転している。

不意をついた一撃は難なくかわされ、奥の手だった〈神通力〉も防がれた。

神通力とは、その名の通り、神に通じる力であり、個々の神が秘める特有の能力だ。

全ての神や修験者が持つわけでもない。

中には〈宿業しゆくごう〉と呼ばれ、修験者の意志に反して勝手に発動する神通力もある。

永昌の神通力は人の意志で自在に発現可能で、使い勝手のいい火炎の息だった。

火であり、気であり、〈陣〉でもある。

単純な〈陣〉より広範囲の攻撃が可能で破壊力も高い。

それを剣十郎は初見で見切った。

烏壬剣十郎。

名の通った流浪だけのことはあった。

たった一人で山域を練り歩き、賊や妖を狩りまわるだけのことはあった。

修験者が勾玉から引き出せる神の力は、森羅万象の影響を受け増減する。

永昌の宿した勾玉は、日中より夜間の方が、三割ほどその力を増す傾向にあった。

夜の戦闘ならば、と思わなくはないが、しかし、烏壬剣十郎も噂では夜間の戦闘、特に暗殺を得意としていると聞く。

夜の森で迎え撃つ、という気にはとてもなれない。

そこいらの二魂より明らかに腕が立つ癖に、倒しても勾玉を得ることは出来ない。

出来ることなら関わりたくない疫病神だった。

永昌は悩んでいた。

撤退すべきか、戦うべきか。

手下の多くを失っていた。

村で四三人。山で二六人。

大失態だ。

何も得られず、これだけの被害。

手下の大半は、国には属さないただのならず者だったが、だからこそ、かき集めるのに、それなりの手間と金がかかっている。

このまま撤退すれば、流浪の野郎の名声を高めただけで終わる。耳の奥に、侍たちの嘲りの声が、聞こえてくるようだ。

しかし、まだ汚名返上の機会はあった。

勾玉だ。勾玉さえ手に入れば。

「いいだろう。誘いに乗ってやる」
かすれた声で、永昌は呟いた。

剣十郎は一魂だが、連れの修験者、少なくとも変化していた式神は間違いなく、二魂のはずだった。

朝野に人は溢れているが、勾玉は常に欠乏している。
入手すれば大手柄になる。

場合によっては今の大名から離反し、直接、維新政府に自分ごと売り込んで良い。

「明日の夜、こっちから仕掛けてやる」
今のままだと、一夜ごとに、手勢が削られていく。
士気も下がり、すでに逃亡者も出ている。
行動するのなら、早いほうが良い。

剣十郎による連夜の山狩り。
昨夜などは、村からかなりの距離を移動している。
しかし夜が明ける前に、必ず剣十郎は戻っている。

日が昇ってから、村に籠もって出てこようとしな。何を目的としているのかは分からないが、夜間、誘っているのは明らかだった。

しかし、それに乗る。
乗ってやる。

目の前に勾玉があるのだ。
だからこそ、永昌は逃げずにこの山域に留まっている。

最低一つ、式神の勾玉を。
そして出来れば後二つ。

帯を操る小娘と、剣十郎が背負っていた少女。
彼女たちも、勾玉を保有している可能性が高い。
変化する式神を従えているくらいだ、きっと名家のお嬢様たちだろう。きっと良い勾玉を保有している。

永昌は剣十郎の連れている少女たちが〈何者〉かを見抜いては居なかった。

烏壬の姫が桃山にママゴトのような寺院を建てた噂は聞いていたが、剣十郎がそこに属することまでは、知りもしなかった。

小娘と遭遇した手下の多くは逃げのびていた。
帯を得物にしているようだが、まだ〈陣〉を上手く操縦出来ていないようだ。

そして、殺さず足を折る、甘さ。戦い慣れていない。
流浪を護衛に雇うくらいだ、当然だろう。

修験者の力は、宿した神の力だけで決まるわけではない。
どれほど強大な神を宿そうと、扱いきれなければ意味はない。

出雲と烏壬の大戦でも、それは明らかだった。実戦経験のない良家の息子と、山野での経験を積んでいた良家の息子とでは、年端のいかぬ子供と修練を積んだ剣豪ほどに、実力の差が開いていた。

小娘は、見た目そのまま、年端のいかぬ子供のはずだ。

「とにかく、殺すだけだ」

村に残る二人の少女と式神を解体する。そして、勾玉を手に入れる。

永昌はそのことだけに思考を注ぐ。

「早く来い、夜よ」

呪うように呟く。

その夜も、剣十郎は山に踏み入った。

初日は比較的村の近くに潜んでいた山賊達も、二夜目には遠巻きとなり、三夜目には更に遠ざかった。

この夜は前夜よりも遠く、輪も崩れている。

その山賊達を見つけだし、容赦なく斬っていく。

山賊達は、剣十郎に気づくと、恐怖に顔を引きつらせ、戦うことなく散り散りに逃げていった。

剣十郎が、竹串に〈陣〉を張って投擲する。

逃げる山賊の背に、深々と突き刺さる。

のたうちまわるその山賊を放置して、別方向に逃げる山賊を殺害する。

戻ってくると、倒れる山賊にトドメを刺す。

軽く場所も取らず、山野で手軽に製造できる竹串や木串は、〈陣〉を張れば便利な飛び道具となる。

〈陣〉をまとう神妖や修験者相手には通じないが、山賊や獣には十分な殺傷力を発揮する。

剣十郎は、手甲や脚絆に詰め込めるだけの竹串を忍ばせてあった。

剣十郎はすでに敵の全容を把握していた。

ただ斬るだけではなく、夜ごと、何人もの山賊を尋問した。

身を潜め、山賊の行動を監視、会話を盗み聞いた。

山賊達は明らかに剣十郎に怯えていた。

山域から逃亡する者もいる。

一定の空間に隠れる山賊達の数が、斬った以上に減っていることから、逃亡者は相当に多そうだった。

山賊達から聞き出した情報通り、修験者は火を吐くあの一人の間違いないだろう。

もしも他に強力な修験者が仲間にいるのなら、山賊達は剣十郎よりもその修験者を恐れ、逃げようとはしないし、面構えも変わってくる。

しばらく山を徘徊していると、遠く村の方から、犬の鳴き声や人の叫び声が聞こえて来た。

「始まったか」

剣十郎は飛翔し、高い枝の上に立った。
村の方角を見る。村の中央、丘の上で、五つ並んで篝火が燃えて
いる。

敵修験者の襲来を剣十郎に伝える合図だ。

「思いの外、早く済んだな」

剣十郎一人では、村から遠く離れるわけにも行かず、随分と時間
を食っただろうし、村の被害も膨らんだはずだ。

しかし、今回はかぐやがいた。

烏壬本家本流・烏壬かぐや。

剣十郎が出会った限りでは、彼女より強力な神を宿した修験者は、
烏壬青竜王、ただ一人のみ。

かぐやは随分と気負っていたが、おそらく勝負にもならないだろ
う。

月夜のかぐやとあの山賊では、その力に、青虫と柴犬ほどの差が
あった。

それでも一応は、

「戻るか」

剣十郎は木から下りると、村を目指して駆けだした。

山に、怪鳥のような叫び声が響く。
今宵も、流浪の修験者が暴れている。

しばらく、目を瞑って耳を傾けていた永昌は、ゆっくり目を開いた。

「ふっく」

鼻から息を抜くように、笑う。

遠い。声が、手下の断末魔が遠かった。

剣十郎は空を自在に駆けるそうだが、この距離ならたとえ空を駆けたとしても、即座に村に戻ることは出来まい。

永昌に今付き従うのは、一五人の山賊だけだった。

此処にいる手下以外には、今夜の行動は教えていなかった。

大人数で攻め寄せれば、その動きを剣十郎に悟られる恐れがあった。

それに〈陣〉を張れない手下では、相手が修験者では実際の戦力にはならない。

しかし、囷や陽動、監視にはなる。

それで、一五人。その内五人は、出雲からの馴染みの山徒で、二人は朝野で付けられた目付だった。

「いくぞ」

永昌を含め、一六人の山賊が村を目指して動き出した。

015 月夜視と山賊（七）

村の大半は放棄され、村人達は、一カ所に集中して防衛線を張っていた。

中心地は、村長の家。

その一角は有事の際には、村の最終籠城地点となるよう元から整備されていた。

丘一つが小さな山城の様相を呈している。

村に着いてから一度だけ目覚めた宵子は、また直ぐに眠りについた。

今は本丸である村長の家に寝かされている。

その本陣に、かぐやはいない。

防御線の外。

放棄されたはずの地点。

平屋の粗末な小屋で、運び込まれた長いすに寝そべり、かぐやはまんじりとしていた。

長いすには、薄い布団が敷かれている。

村の東北で、犬が吼えた。

それを皮切りに、次々と村の各所に繋がれた犬たちが吼え始める。かぐやの小屋の近くでも、犬が騒いでいる。

山域では何処の村でも犬は飼われているし、山賊達も犬を引き連れていた。

ばたばたと村人達が駆け回る気配がする。
本陣の方で、篝火の数が増える。

「山賊だあ！」

村の男たちの怒鳴り声が響く。鐘を叩く音が響く。

たとえ熟睡していても叩き起こされただろう謙遜の中、かぐやは目を開いた。

「来ましたか」

ゆっくりと、身を起こす。

戦いだ。

表情を引き締める。

今この場には、剣十郎も双葉も雪兎もない。

頼れるのは、自分とバツハのみ。

この作戦の要は、かぐやだった。

剣十郎の居ない間、村を守り、さらに敵の大將を仕留めるのが、かぐやの役割だ。

剣十郎に認められ、信用されていることが素直に嬉しく誇らしい。
自然と、胸が高鳴ってくる。

かぐやは衣服を脱ぎ始めた。

神化のための準備だ。

強力な神を宿した修験者ほど、神化する時、人とかけ離れた容姿になる。

なので強い修験者ほど、神化によって衣服を破損させないように、大きく作ったり細工を加えたり。

それぞれ工夫し個性的な衣装を纏っている。

しかしかぐやほど極端な変貌を遂げる場合は、衣服の形状だけでは対応しきれない。

かぐやとしても、一々裸にならず神化したいと常日頃から考えてはいる。

今は室内で一人だが、いつもそうとは限らない。

修験者が神化しなければならぬ状況は、往々にして敵や味方の眼前であることが多い。

織姫の帯を大事な箇所巻いたまま、神化しつつその帯を徐々に緩め、神化し終われば首なり足に巻く。人に戻る時には、その帯をまた大事な箇所巻く。

それが出来るように修行中であるが、成功率は芳しくない。

人から月夜視に神化する過程であふれ出る膨大な〈気〉を、かぐやはまだ上手く制御することが出来ないのだ。

完全に月夜視に神化し終われば、〈気〉は〈陣〉となり安定する。戦闘中は別にして、身に絡めた絹や綿を、破壊することはない。織姫の帯なら、戦闘中でもまず無事だ。

月夜視から人に戻る時も、かぐやの〈陣〉は比較的安定している。

なので、月夜視から人に戻る時には、帯を体に巻くことが出来るが、神化する時だけは、服を脱ぐか、服を犠牲にする必要があった。

学院の支配域では、主に後者を選択していた。

しかし長旅の間は、所有する衣服は貴重であり無駄には出来ない。

使い捨ての服を村人から譲り受ける方法もあったが、今回、かぐやは服ではなく、小屋を譲り受けた。

かぐやが待機するこの場所を決めたのは、剣十郎だ。破壊する許可は、村人から得ている。

壊すのは作戦であり、必然である。遠慮することはなかった。

外では、バツハと敵の修験者が交戦を始めたようだ。騒音からそれが判断出来た。

全ての衣服を脱ぎ終えたかぐやは、上を見上げる。

小屋の屋根は、数カ所に穴が空けられていて、月明かりが注ぎ込んでいる。

月明かりは多くの神妖や修験者にとって、力の源になる。特に、月夜視には。

かぐやは陰から移動して、全身に月明かりを受ける。

月光に呼応するように、かぐやの中から、白銀の〈陣〉があふれ出た。

村にたどり着いた永昌は、山賊達を村の周りに散開させる。村から小娘を逃がさないためと、剣十郎が戻ってきた時の見張り

だ。

配置に付く手下を横目に、永昌は宿す神魂に意識を伸ばし、力をくみ出した。

神の魂から靈気が溢れ、身体の中に満ちていく。

満ちた〈狼神〉の靈気によって、みるみる永昌の容貌が〈狼人〉へと変貌していく。

服に隠された肉体も筋肉がふくらみ、剛毛に覆われていく。

爪が厚く鋭く伸び、顎が張り出し、目が赤い光を放つ。

山界では永昌のような神と人が混じり合った半神半人の状態は、ぎしん擬神やごんげ権化、はんしん半神、ようか妖化と色々な呼ばれ方をする。

権化が上等な呼び方であり、妖化は侮蔑、または下層に対する表現だ。

完全に人とかけ離れた神の姿になる場合は、しんか神化やごんげん権現と呼ばれる。

ぎしんか擬神化した永昌は、配下を置いて、一人村へと乗り込んだ。

犬の吼える村の中を、強化された足で爆走し、村の中央を目指す。数日、村を占拠していた永昌は、村の形状を熟知している。

全ての村人を収容出来、なお防衛に適した箇所など限られている。盛大に燃やされている篝火からも、間違いはない。

中央の丘だ。

足を緩めることなく、目指して、駆ける。

永昌が、丘下の開かれた平地に出た。

狼男の身体が、篝火に赤々と照らし出される。四方に注意を向け、永昌は走る速度を緩める。

が、矢玉の飛来はない。
待ち受ける村人の姿もない。

だだっ広い広場に。

敵影は一つ。

式神がいた。

すでに変化している。

その式神の〈陣〉を永昌は凝視する。

〈陣〉を見れば、お互いの力量はだいたい推し量ることが出来る。
〈量〉も〈統制〉も取るに足らない。

永昌は容易く勝てる相手と判断し、口元を笑みで歪めた。

永昌は緩めた足を完全には止めることなく、加速して式神に走り
よった。

時間は永昌にこそ貴重だった。

間合いに踏み込み、素槍を突き込む。

式神が横に跳ねてかわした。

二度、三度と槍を繰り出す。獣の動きで式神がそれをかわした。

なかなか素早い、この式神。

だが、

と永昌は笑った。

槍を振るいつつ笑った。

本来、獣は人ほどに二魂を操ることは出来ない。

それがこれだけやれるのだから、この式神、なかなか良い勾玉を
保有している。

そして式神でこれなら、きっとあの小娘達はもつと良質の勾玉を宿しているはずだ。

永昌は槍を操り、式神を誘導する。
神通力の間合いへと、誘い込む。

（獲った！）

永昌が火炎息を放とうと、口をすぼめた瞬間だった。
式神の〈陣〉が動いた。

広く身体を包んでいた〈陣〉が式神の前面に集中し、防壁となった。

防壁の向こう、式神が後ろに飛び退く様を永昌の目が捕らえる。

（読んだのか！？）

永昌が火炎息を放つ。

火炎息が式神の〈陣〉とぶつかり、瞬間、〈陣〉と〈陣〉がせめぎ合った。

〈炎〉は威力を弱めながらも式神の〈陣〉を焼き尽くして、突破——しかし、火炎が〈壁〉を破ったときには、すでに式神は更に後ろへと逃れていた。

先ほどの式神の動きでは、槍をかわすことは出来ても、火炎息の効果範囲からは逃れられないはずだった。

仕留めきれずとも火炎息で動きを止めれば、槍術でトドメを刺すことが出来る。

そう確信しての攻撃だったが。

（そうか、剣十郎から聞いたのか）

火災息のことを。

つまりこの式神、人語を解す程度の知能はあると言うことだ。

「くそっ、すばっしこい！」

火災息を外したことにより、永昌に焦りが生まれた。

（こいつ、時間稼ぎをしてやがる！）

式神は一切の攻撃を仕掛けてこなかった。

捕らえきれない相手ではないが、捕らえきるには時間が掛かる。

（ならば、先に小娘の勾玉をいただく！）

出来れば各個撃破が理想だが、時間に制限がある。

剣十郎が帰ってくる前に一つでも手に入れておきたい。

式神を牽制しつつ、永昌は中央の丘を目指そうと――。

永昌の動きが止まった。

肌が泡立つような、圧迫感。

体毛が逆立ち、体中から、汗が噴き出していた。

近隣、急速に満ち始める、神気。

背後を永昌が振り返る。

七つほどの小屋が寄せ集まっている一角。

小屋の一つが、内側からはじけ飛び、白銀の光が溢れ出た。

目映いばかりの光は瞬間だけだった。

ふっと光が弱まり収縮すると、そこには、優に、平屋小屋の二倍近い巨体の。

ふさふさとした白毛に覆われた、精悍な犬がいた。

身体全体が、月ほどに淡く輝いている。

銀色の瞳には、稚気と老成した知性が同居している。

かぐやの神化した、月夜視の権現。

「なっ、なん——神！」

永昌は呻く。

膨大で濃密な〈陣〉を纏う白い犬と、狼の修験者は至近で目を合
わせた。

月夜視が、永昌に〈敵意〉を向けた。

それだけだったが、格の違いに永昌は気圧され、よろめいた。

「う、あ」

呻き、振り返り、永昌はよたりと逃げようとする。

月夜視は、機敏な動作で二歩跳ね寄ると、永昌を。

踏んだ。

にじる。

数秒、制止してから。

ゆっくりと、足を上げる。

男の〈陣〉は、すでに解除されていた。
気を失っているのか死んでいるのか、ぴくりとも動かない。
人の姿に戻っている。

巨大な白犬は、少し首を傾げた。

げしっ、げしっ、と踏んでみた。

ゆっくり足を上げる。

前肢でつつく。

ひっくり返す。

男はぴくりとも動かない。

月夜視は、首を傾げ、

もう一度踏んでみた。

剣十郎が帰還したとき、月夜視となったかぐやは、行儀良く犬座りしていた。

身じろぎもせず、じいーと大の字になった一人の山賊を監視していた。

近づく剣十郎に気づき、耳がぴくんと動いた。

月夜視の大神は、嬉しそうに、そして誇らしげに、口元を歪めた。前肢で山賊を指し示す。

無意識だろうが、尻尾を少し振っていた。

まるで鼠を捕った後のバツハである。

剣十郎は笑いをかみ殺し、出来るだけしかめっ面を作り、大きく頷いてみせた。

学院の一行は、七日ほどその村に滞在した。

その間、かぐやは剣十郎を知る一人の女性と交流を持ち、少し吹き込まれた。

016 新しい時代

かぐやたちが学院を旅立ってから、すでに二五日が経っていた。

旅の前半は、比較的楽だった。

寂れているとはいえ、道があった。

村もあり、砦もあった。

剣十郎が旅慣れた道行きでもあるために、迷うこともなかった。

あとどれくらい歩けば水場があるのか、村に着くのか、剣十郎は正確に把握してあった。

柔軟に予定を組みつつ、一日一日、進むことが出来た。
水や食料、寝床に困ることはなかった。

しかし旅の後半には、そうもいかない。

剣十郎も、詳しい地勢は知らないし、道らしき道も、目印もない。
状況によっては、大きく迂回を強いられることもあった。

倒木を乗り越え、小川を渡り、藪を掻き分け、小さな崖をよじ登り、風に吹かれ、雨に打たれ。

行きつ戻りつし。

「くわっ」

烏壬かぐやが、怒りの悲鳴を上げた。

顔に蜘蛛の巣が引つかかったのだ。

立ち止まり、蜘蛛の巣を顔から引きはがす。

ごしごしと袖で顔をこする。

学院からかぶっていた麦わら帽子は、すでに無くしている。

髪にも、蜘蛛の巣と木の葉が絡まっていた。

ちよこちよことかぐやの少し前を歩くバツハが立ち止まり、またか、と言いたそうに、でもちよつと心配そうに、主人の顔を見上げている。

「剣十郎」

剣十郎の背中に向かい、かぐやが尖った声を投げる。

「なんだ？」

答えはしたが、先頭を歩く剣十郎は、立ち止まることも振り返ることもしなかった。

「蜘蛛の巣があるときは、その棒きれで払いなさい、と言っておいたはずです」

「これは棒きれじゃなく、刀だ。刀で蜘蛛の巣が斬れるか」

剣十郎は、幅の狭い尾根道を、どんどんと進んでいく。

しぶしぶ足を動かして後を追いかけながら、かぐやが言う。

「斬れるでしょう。蜘蛛の巣ごとき。あなたの腕では蜘蛛の巣も斬れないのですか？」

剣十郎は答えない。

黙然と歩いていく。

かぐやは、踏み外さないように足下に注意しながら、後を追う。

「怒りません。怒りませんから、正直に言いなさい。道に迷ったのですね？」

かぐやの後ろで、疲れ果てた――というか山歩きに飽きた宵子も、うんうんと頷いている。

その宵子が、叫んだ。

「お兄ちゃん。お腹空いたよー」

剣十郎は振り返ることなく、

「さつき食ったばかりだろ」

疲れた声で、窘めた。

自らの属する霊山から遠く離れ、神を求め、幽谷を彷徨いうことを、〈奥駆け〉と言う。

また、それを成す修験者を、〈行者ぎょうじや〉と呼んだ。

かつて奥駆けは、修験者最大の見せ場であり、同時に、苦行でもあった。

対象となる神が生息している森は、まず例外なく、人里離れた奥山である。

人里に近い神は、大体が収獲されているか、友好関係にあるか、

人では遠く及ばない神だからだ。

広大な山嶺から神を見つけ出すのは、勇気と忍耐と幸運の居る作業で、

ただひたすら、風雪に曝され、藪に分け入り、雪山を踏み越え、崖をよじ登り、

風の吹きすさぶ尖った尾根道を突き進み、修験者たちは、あてどなく彷徨い、

そして、神を発見して。

命を落とした。

神と会合すれば、戦って奪わなければならないからだ。

神の魂たる秘宝、勾玉を。

貴重な修験者たちが、貴重な情報と共に、大勢、山に、神に喰われて姿を消していった。

そういうことがないよう。

二百年ほど前から、役割を分けるようになった。

神の搜索は、まず聞き込みから始まる。

無為無策に山嶺に踏み入ることは、余りしなくなった。

村々を廻ってそれらしい情報を集めるのは、情報部員、つまりは〈足〉の仕事だった。

彼らの大多数は、修験者ではない普通の人間——山徒、と呼ばれる山門に従う民——である。〈足〉は必ず集団で行動する。

〈足〉が神に繋がる情報を掴むと、〈足〉から査察担当に、つまり〈目〉に情報が送られる。

〈目〉は熟練した、特に敏捷な修験者が受け持つことが多かった。〈足〉の集めた情報を解析して、神と相性の良い修験者が〈目〉として派遣される。

〈目〉が神を確認すると、その後は〈手〉が収穫に向かう。

神の強弱や性質を考慮して、最低でも三人、多いときは数十人が駆り出されることもあった。

状況によっては、〈目〉を省略して直接〈手〉が送られることもあるし、〈目〉がそのまま神を狩り取ってくることもある。

命をかけた真剣勝負から、洗練された狩りへと姿を変えた奥駆けだったが、最近はしかし、逆行しつつあった。

新しい技術が流れ込み、新たな〈概念〉が生まれている。

五山の一つ、出雲が消滅し、弱小勢力だった厳島が、五山の一角に食い込んだ。

山界外勢力との小競り合いも、日々、激化しつつある。

山域にあった多くの村や道が廃棄され、活動の利便性も失われている。

割ける人員にも時間にも限りがあった。

うねりにうねった、時代の過渡期である。

悠長なことはやってられない。

規律はそこらで綻んでいる。

数百年続いた五山支配の体制が崩壊しつつある。

修験者の中でも、血統より能力が少しずつ重視されつつあった。

若者は、命をかけて、英雄を目指した。

それが許される時代だった。

017 金峯山のおずみ、そして風乱坊と武蔵坊

此処にも一人、英雄を目指す男。

女性に好かれたいが為に英雄を目指す男、
金峯山きんぷせんの若き修験者、風乱坊ふうらんぼうは。

大木の先端に神通力で風の座布団を作り、その上にあぐらをかいて、四方を遠望していた。

この辺りにあるはずの蛇神の森を探して、定期的に木の登っているのだが、なかなかそれらしき地形が見つからない。

猿のような顔を歪ませ、あくびを噛み殺していた彼は、

「ん？」

と一点に視線を留め、しばし眺めた。

それから、風の座布団の上に立ち上がった。

「人がいるぞ！ ……しかもあれ、剣十郎じゃねーか！？」

大木の先端から、降ってきた風乱坊の声に。

木の幹にもたれ掛かり眠たげに目を細めていた葉桜はざくらあずみは、目を丸くし飛び起きた。

「うそ？ まじで！？」

真上に向かって、声を張り上げる。

「剣十郎？」

眉根にシワを寄せて、横で尋ねる中年の修験者、武蔵坊むさしぼうに対して、

「ほら、流浪の。青竜王の息子。うちにも長居していたじゃん？」
あずみは早口で伝えると、擬神化ぎしんかし、するすると木を泳およぐように登っていった。

武蔵坊は木を見上げ「あの噂の自由人か？」呟いた。

頂に達すると、木の先端に、風乱坊が立っていた。
手を翳し、北東を睨み付けている。

あずみは邪険に風乱坊を押しつけた。
風乱坊が「うおっ！」と声を上げ落ちていく。

あずみは空いた木の先端に水の尾を絡ませ、きよろきよろと彼の見ていた方向を見渡す。

突き飛ばされ、一度木から落ちていった風乱坊が、風に吹かれて
纏い上がってきた。

「何処？」

あずみが尋ねる。

あずみの横の〈空〉にあぐらをかき、風乱坊は、一方を指さした。
怒った声で、

「あの三人組だ。先頭が、剣十郎」

あずみは風乱坊の指し示す先を、じっと目を凝らして探した。
遠く、尾根の上を、三人の人影が歩いている。

……ような気がする。

まばらに生えた松の木の間から、ちらりと見える。

しかし此処からでは遠すぎて、あずみには人相どころか、性別の判断さえ出来なかった。

ごしごし目を擦りながら、疑るように、

「あれ、剣十郎？」

「そう、剣十郎」

風乱坊が不機嫌に、しかし自信満々、うなずき答える。

「へー。三人って事はあいつ、今はどこかの用心棒かな？」
目を細めて眺めながら、うきうきとした声であずみ。

「おそらく、烏壬だろうよ」

不機嫌に、風乱坊。

「うそ？」

あずみが風乱坊に視線を向ける。

「真ん中のヤツ、烏壬の装束を纏っているぜ」

「まじで？　ふうん。なんだかんだで、烏壬に帰ったのかな、あい
っ」

寂しそうに呟いた後、明るい声で、「神、見つかったのかな？」
とあずみ。

風乱坊がうざったそうに、「さあな」と吐き捨てる。

下で武蔵坊が声を張り上げ呼んでいた。

あずみは、するすると木の表面を流れるように滑り降りた。

その横を風乱坊が、一息に風を巻いて不機嫌に飛び降り抜かして
いった。

剣十郎と、その胸元くらいの身長少女、そして少女の肩ほどしかない女の子。

序でに子猫一匹。

簡潔な風乱坊の説明を聞いて、武蔵坊は反応に困った顔をした。

「本当か？」

「本当だ」

武蔵坊に尋ねられ、不機嫌に風乱坊が答える。

風乱坊は一里離れた雀の巣に、雛が何匹居るかを識別出来るほど目が良かった。

それは武蔵坊もよく熟知していた。

「で、どうするよ？」

風乱坊は、巨漢の武蔵坊に向かい、苛立ちの混じる声で、問う。

武蔵坊は顎に手を当てつつ、

「それが本当なら、このような山奥で出会うような陣容ではないな。何らかの事情があって迷い込んだ……」

修験者の能力は年齢で決まるものではないが、それでも経験は重要だ。

一魂の修験者と、年端も行かない少女二人の連れ立ちなど、事情なしにまずあり得るものではない。
が、

「……………いや、迷い込んだと考えるには、少々人里離れすぎているな。…………ふうむ」

武蔵坊が唸る。

「たしか、烏壬って言ってたよね？ あんた。女の子、烏壬の衣装を着てたって」

風乱坊の腕をつつき、急かすようにあずみが言った。

「ああ」

不機嫌に、風乱坊。

「烏壬だと？」

武蔵坊が風乱坊を見る。

それを先に言え、と言う視線で。

烏壬と金峯山には、血なまぐさい歴史もあるが、今は一応の友好関係にある。

率先して協力し合う関係ではないが、殺し合う関係でもない。

「本当に、烏壬剣十郎が率いていたのだな？」

「ああ」

「そうか。なら、」

武蔵坊は重々しく頷いた。

「彼らが烏壬で、烏壬剣十郎が居るのなら会って事情を聞いてみようか」

武蔵坊は、剣十郎と直接会ったことはなかったが、噂は嫌になるほど聞いている。

烏壬青竜王の子息で、優れた神を宿していた当時も、それを失って流浪——五山では修験者の離脱を一切認めていない（違反すれば死罪）ため、公式には烏壬青竜王の組織に籍が残っている——となつてからも、彼は山界の有名人だった。

所属する山に縛られる修験者の中にあつて、どこまでも自由な男だと聞いている。

金峯山の支配域にぶらりと入ってきて飯をたかり寝床代わりに四ヶ月も好き勝手利用して最後には公然と公認された他山の修験者は、武蔵坊の知る限り、彼が唯一だった。

その時にあずみや風乱坊に多大な影響を与え、結果として武蔵坊の生活にも変化をもたらしていた。

一度会ってみたいと常々思っていた相手だ。

たとえそんな男でも敵対勢力に雇われていた場合はやっかいだが、五山・烏壬との組み合わせなら、命の取り合いになることもないだろう、と判断し、うなずく。

武蔵坊の言葉に、あずみが嬉しそうに破顔した。

「あれ、あの衣装。烏壬本家の金羽だったぜ」

風乱坊がぼそりと言う。

あずみと武蔵坊が目を見開き、勢いよく風乱坊に詰め寄った。

「なんだと!?!」

「なにそれ!?!」

風乱坊が気圧されたように後じさる。

「烏壬の〈月姫つきこめ〉か」
武蔵坊が唸った。

烏壬本家本流でその年頃の少女と言えば、〈烏壬月姫かぐや〉一人しかない。

そしてその月姫が本山を離れ、桃山に学院を開いた事実は、金峯山でも把握してあった。

少人数の供のみを連れて、精力的に活動していることも。ただし、噂程度の情報しかない。

当たり前だが、烏壬の支配域に他山の修験者が進入して、当代本家本流の動向を嗅ぎ廻って穏やかに済むはずはなかった。

ひとしきり唸っている武蔵坊に、風乱坊が、低い声音で囁いた。

「どうする？ 奪うか？」

奪う。勾玉を。

つまり殺すと言うこと。

「冗談でしょ？」

あずみが割って入った。

風乱坊は、あずみに顔を向け、猿顔を歪ませ、

「烏壬本家といえどもまだ子供。神化する間も与えず仕留めりやい。それに月夜視は月夜のみ、だ。怖れることはないだろう」

月夜視ほど歴史のある勾玉になると、他山の修験者でもその特徴を知っていた。

「露見したら全面戦争よ？ 出雲の二の舞になるつもり？」

烏壬と出雲の戦争は、出雲が烏壬の本家本流を殺めたことで止まらなくなった。

「おいおい、露見しなきゃ、問題ないんだぜ？ 超常識だろうが？ 烏壬だってやってることだし、どこでもやっていることだ。もちろん、うちもな」

金峯山でも、毎年幾人もの修験者が山野で姿を消していた。伯耆で姿を消した火炎坊かえんぼうの一行は、烏壬青竜王に討たれたと噂されている。

苦勞して神から勾玉を奪うよりも、修験者が持っている勾玉を奪う方がよほど簡単で、良質の勾玉が手に入るのだ。事実かつては、当たり前のように出会えば奪い合っていた。だから今も、修験者が山に消えると、必ずきな臭い噂が立つ。

「やめておいた方が良いつて。剣十郎が神を見つけてたら返り討ちよ。取り戻してなくてもあんたくらいは返り討ちだし」

「なんだとおい！ 俺が神なしの坊やに劣るとでも？」

「勝てるの？」

少し嘲笑を含んだあずみの声。

「当然だろうが。俺はあいつには負けたこたあーない！」

風乱坊は、錫杖をこれ見よがしに振り回した。

「負けてたじゃん」

あずみが呆れたように呟く。

しばらく喧々囂々言い争い、二人は睨み合っていたが、

「……おもしろいな」

黙考していた武蔵坊が、呟いた。

二人は、同時に年長者・武蔵坊に向き直った。

二人の人生を合わせた以上に、武蔵坊は生きている。

二人より見識も深く、必然、方針の最終決定はいつも彼が下していた。

「まさか、本気でやる気じゃないでしょうね？」

あずみの声が擦れた。

風乱坊も、何故か心配そうな顔になって、武蔵坊を見つめていた。二人の視線に気づいた武蔵坊が、慌てて手を振った。

「いやいや、勘違いするな。不逞を働くつもりはない」
言ったが、にやりと企み顔になって、

「後を付けてみようかと、そう思っただけだ」

「後を付けて、気づかれたら？ 剣十郎なら絶対気づくわよ」

山で他山の修験者を尾行する行為は、それだけで敵対行動に該当しかねない。

「へへ。そのときは戦争だな」

「だから剣十郎に、」

「俺たち金峯山疾風怒濤組しきふうどとうぐみが〈魂無したまなし〉と小娘二人に負けるわけねーだろー！があ！」

「だからへんな名前付けるな！ 金峯山はぎくらどくりつさんばんたい葉桜独立三番隊よ！」

喧々囂々、唾とばし合って言い争う二人の首根っこ掴んで、武蔵坊が引き離した。

「気づかれたときは何食わぬ顔で挨拶すればいいさ。今こちらも気づいた、という顔でな。大丈夫だ。烏壬とうちは今は友好関係にある。うちと烏壬が争えば、山界がどういう事になるかくらいは理解しているだろうし、本家の月姫さまなら、目先のちっぽけな勾玉に血迷うこともあるまい。活動の噂を聞く限りでは、お人好しの人格者だ」

「向こうがもし、殺し合うつもりになったらよ？」

「剣十郎が居るのなら、それはないと思う」

あずみが口を尖らせて言う。

「思うじゃ困る。青竜王の隠密、とか噂が有るんだぜ？ あの坊主。烏壬に戻っている時点で、そうだった可能性は高いだろう？ 本性むき出しでいきなり襲われるかもよ？」

あずみが言い返そうとするのを武蔵坊は手で制して、

「その時は逃げよう。こちらから仕掛けることもしない。釈明は後で金峯山を通してすればいい」

武蔵坊は、 「逃げるってどーいうこつ」 とわめく風乱坊と、 「剣十郎はっ」 とわめくあずみの頭を押さえつけ遠ざけて、大きな声で続ける。

「とにかく！ 後を付けよう。桃山から此処に來たということは、きっと彼らも同じ情報を手に入れて、蛇神を狩りに來たのだろうさ。いつまでも山をうろうろしていてもしょうがない。とにかく後を付けければ、たどり着けるかも知れないしな」

「ちょっと待てよ！ そういや何であいつら此処にいんだよ！ なんで蛇神の情報持ってるんだよ！」

風乱坊が武蔵坊の手を振り払って、声を荒げる。

「良くあることさ」

「そうそう」

武蔵坊が言い、あずみも頷く。

「とにかく、神の居場所にさえ辿り着けば、後は先に來た振りをして、神を分捕ってもいい」

「……揉めないかな？ ばれて月姫が怒ったらどうする？」
気弱なあずみに、

「もともと、うちのもんだろうが！」

風乱坊が吐き捨てる。武蔵坊は、

「その時は諦めて、譲ろう。この程度のことで、烏壬本家とは争えない」

風乱坊が喚き立てているのを無視して、

「もし、さ……あっちも迷子だったら？」

あずみが尋ねる。

「その時は諦めて、帰ろう。まがい物の地図を掴まされたのだろう。うちも烏壬も」

達観した顔で、武蔵坊は答えた。

道のない未開地域だ。

目的地を探り出すのも一苦労だが、地図も正確とは限らない。情報自体が嘘であることもある。

蛇神を求め、すでに日にちも分からぬほどに、彼らは迷っていた。喧々囂々、あずみと風乱坊が言い争っている。

「とにかく、跡を付けてみよう。そうすれば彼らがなぜ此处にいるのかも分かるはずだ。蛇神を求めてか、それとも、別の目的があるのか。どうするかは、追々考えればいい」

聞いていない二人に、武蔵坊が告げた。

どちらかというと、自分に言い聞かせるようだった。

「くわっ」

かぐやの悲鳴。

「剣十郎、その棒きれで――」
「るせえ！」

「お兄ちゃん、お腹すいたあ――」
「さっき食ったばかりだ！」

あずみたちが尾行を始めてから、三日後。

剣十郎の我慢が限界に達する前に、一行は辿り着くことが出来た。

018 蛇神たちの支配する森（一）

四方を高い山嶺に囲まれた窪地だった。
窪地には、乳白色の分厚い霞が満ちていて、霧の下をうかがい知ることは出来ない。

この近隣には、村も里もない。

朝野の地図は当然として、まだ山界の共通地図でも、空白となっている地域だった。

烏壬独自の地図でも、蛇神の居る窪地までは、地名は定められていない、はずだった。

日本列島の八割は、森や山である。

森や山は、神妖が住む世界である。

人が神を狩って修験する術を編み出してから、未だ七百年。

五山が切り開いた〈浄土〉と呼ばれる人の世界よりも、〈未開〉〈神界〉と呼ばれる手付かずの地域は、どこまでも雄大に広がっている。

しかしかぐやたちが渡された地図には、〈白蛇の白海〉や〈蛇海〉と、ちよっとお洒落な名称が書き込まれていた。

〈蛇海〉の真ん中で、一つだけ霧の上に突き出している山などは、ちよと島のように見えるためか、〈白蛇の孤島〉と記されている。地図を作製した人物が勝手に名付けた地名は無視されることも多いが、そのまま定着することもある。

「思ったよりも、広いですね」
かぐやが、感慨深げに呟く。

霧の海は、朝日を浴びて、明るく照り輝いていた。どこことなく、本山の山頂から見渡す雲海と、似ていなくもない。しかし風に流れる雲海と違い、〈白蛇の白海〉を構成する霧は、より濃密な白さで、窪地に囚われ、留まっていた。

霧の海は、東西で十五キロ。南北で二十キロ程度の範囲に広がっている。

霧の深さがどの程度かは不明だが、下に広がる森も、同程度の広さと判断できるだろう。

細かく踏査するのには、数日を要するかもしれない。

神を見つけて捕縛するのは、どれほどの日数を要するのか。しかしかぐやは、妙な達成感に酔っていた。

片道で三十日を超える長旅は、今までに経験したことがない。

「あそこに、神さまが居るんだ、パイナップルがあるんだ」

宵子が中央の山を指さし、感動的な声音で呟いた。

こちらにも興奮に目を潤ませている。

「いいえ、おそらくは霧の下に点在しているはずの湖か、森の何処か。蛇神の行動範囲は、全て霧の下です」

かぐやが嬉しそうに、資料に記されていた通りに、答えた。

パイナップルに関してはあえてスルーした。

「霧の下の大地上には、四方の山嶺や中央の山に降った雨が流れ込んどおり、深い森の間にいくつもの河と、湖が広がっています」

かぐやは、資料の通りに、続けて言う。

確かに、この地形ならそうなのだろう、と言うことは、かぐやにも判断できた。

「……お腹、空いた……」

宵子がお腹を押さえ、呟いた。

宵子は物欲しそうに、親指をくわえ、

「なんだか、霧が牛乳に見えてきちゃった。……お米のご飯も……恋しいです」

「……暖かい布団とお風呂もです」

今までの昂揚を消滅させ、かぐやがしみじみと、付け足した。

女の子二人の嘆きをよそに、剣十郎はじつと霧と、霧から突き出た中央の山、周りを取り囲む山嶺など、見える限りの景色を脳裏に焼き付けていた。

山肌を滑り落ちる滝の音が、小さく辺りに響いていた。

比較的なだらかな斜面を、剣十郎を先頭にして降りていく。

ぬかるんだ土の上に、シダが密生している。

深い霧が、視界を覆っている。

しかし下降するにしたがって、樹木の間隔が広がっていき、シダの下草も少なくなる。

変わりに地面が苔むしていった。

「危惧したほど、視界は悪くありませんね」

崖下に降り立ったかぐやは、上機嫌に、周りを見渡しつつ、言った。

水の流れ落ちる音が、遠く、いくつも重なって反響している。

湿度が高く、日が薄くしか差し込まないせいか、崖の上よりも気温がずいぶんと低い。

しかし、かぐやの上気した頬には、心地よく感じられた。

「相手は白い蛇神だ。見えにくい部類だけに、警戒は怠るなよ」

釘を刺す剣十郎の声にも、安心した響きがあった。

降りてくる途中に比べると、底の霧は、深くなかった。

四十メートル程度先まで、十分に見渡すことが出来た。

苔むして緑色に染まった樹木が、疎らに生えている。

樫やブナの巨木だ。

太く高く育っていて、日差しが弱いせいか、幹の低い箇所には視線を遮る枝がない。

下生えも少なく、所々にシダがまばらに生えている程度。

代わりに、厚い緑色の苔の絨毯が、びっしりと広がっている。

緑の苔は、白い霧の中にあって視界の助けになり、距離感も掴みやすくなる。

かぐやが小さな登山靴で、苔の感触を確かめる。

しっかり育った苔は、弾力に富み、泥地や藪よりも、歩きやすそうだ。

自然とかぐやの表情は、緩んだものになった。

剣十郎の背中に避難出来る宵子と違い、小柄なかぐやは、学院からここに至るまでの行程で、随分と草むらには悩まされてきていた。

崖に沿うようにして、五分ほど歩いた辺りで、大きな湖に出くわした。

湖面から立ち上る霧で視界が悪く、湖の全貌や対岸は見えない。目視できる範囲で三本、断崖絶壁から滝が流れ落ちている。

湖の上には、霧を透過した日差しが障子越しのような明るさで差しており、頭上を木で覆われた森の中よりは、幾分明るかった。

剣十郎は水辺に張り出した木を選び、するすると登っていく。

「どうですか？」

かぐやが上を向いて、滝の音に負けないよう、大きな声で尋ねる。

剣十郎は渋い表情で、遠くを見つめ、

「……霧が深い。下よりも見えにくいな。つーか見えねー」

かぐやが無表情に小さく肩をすくめた。

それからしばらく、三人は、湖に沿うように、ただし湖からは少し距離を取って歩いた。

湖に蛇神が潜んでいた場合の警戒だ。

突然襲われ、水中に引きずり込まれると厄介なことになる。

注意深く進む。

湖畔は芦やシダが繁殖していて、歩きにくい。

その上、植物は霧で湿っていて、触れるたびに衣服に水が染み込

んでくる。

剣十郎が立ち止まった。

「どうしたのですか？」

じくじく濡れる腰から下の衣装を鬱陶しそうにつまみながら、かぐやが尋ねる。

「蛇だ」

剣十郎はじつと森の中を睨んでいる。

「何処ですか？」

抑えた声に緊張を漲らせ、かぐやが慌てて〈陣〉を張る。
バツハも〈陣〉を張り、宵子が一步後ろに下がる。

しかしどこにも蛇神らしい姿は見えない。

「だから蛇だ。ただの蛇。神じゃなく蛇」

剣十郎が、手甲から竹串を引き抜き、〈陣〉を張って森に向かって投擲する。

竹串が刺さった場所で、うねうねと長い〈何か〉がもがいている。

竹串が蛇の首を正確に居抜き、地に貼り付けていた。
ゆっくりと剣十郎が歩み寄り、蛇の首を摘み持ち上げた。

真っ白い蛇だった。

長さは二メートル程度。

刀の鞘で、蛇の口をこじ開け、牙の確認をする。

「毒はないな。ただのシロダイショウだ」

剣十郎はぶっきらぼうに呟いた。

列島に広く生息していて、神妖に為りやすい蛇だった。

かぐやは真顔で頷くと、剣十郎からその蛇を受け取った。

蛇の口を開けて覗き込んだり、左右に引っ張って伸ばしてみたり、子細に観察する。

「たしかにシロダイショウです」

かぐやは目を瞑り、今度は靈氣を使って、蛇の中の気配を探り始めた。

神性の結晶である勾玉を捜しているのだ。

しばらくしてから、かぐやは首を横に振った。

「ありませんね。勾玉は」

「当たり前だ。とにかく、神が居たとしてこいつから神化したとは限らないし、こいつから神化したとしても、同じ形態とは限らないが、一応、頭の中に入れておくといい」

神は長く生きれば生きるほど、巨大に成長するだけでなく、元の外見や知性から乖離していく事が多かった。

しかし元となる身体の特徴、生命としての因果から完全に自由になるわけでもない。

「今のところ、蛇海に降りて以降、目にした蛇はこの種類だけだ」

剣十郎の言葉に、かぐやは頷いてから、少し眉を動かした。

「どのくらい目にしましたか？」

「二十四匹は確認した。結構繁殖しているぞ」

「そんなに居ましたか……ということとは？」

「神が居る可能性が格段に高くなったな」

蛇神の居る環境には、大量の蛇が繁殖していることが多い。

この短時間、それだけの蛇を目撃したのなら……。そこでかぐやはちよつと頬を赤らめた。

周囲に注意を払っていたのに、一匹も見えていない。

こほんつと咳払いする。少し頬を赤くし、

「とにかく、先に進みましょう」

019 蛇神たちの支配する森（二）

湖の縁を、そのまま数分歩いて、剣十郎がまた立ち止まる。

数メートル先に、細長く落ち込んだ場所があった。

湖に繋がり、水に沈んでいるため、湖に注ぎ込む河のように見える。

しかし剣十郎はじっとそれを睨み、

「……なかなか、大きいな」

かぐやが剣十郎の横に早足で歩み寄る。

「河、ではなく………蛇神の這った、跡ですか？」

窪地の幅は一・五メートル程度。緩やかに蛇行している。

河のように見えたが、しかし、水は動いていない。

水底はかすかに宴曲しているが、ほぼ平らで、土がむき出しになっていた。

上流から流れてくる河なら、角の取れた石が転がっているものだが、それがない。

蛇が這って土を抉った後に、湖から水が流れ溜まったのだ。

「居るの、神さん？」

宵子は手に持った薙刀を構え、辺りを見渡した。

「早々と、見つかりましたか」
かぐやが、嬉しそうに言う。

「この辺には居ないかもな」

かぐやの声に、剣十郎が言葉をかぶせた。

蛇行した水たまりの近くでは、倒木がいくつも転がっていた。

剣十郎はその倒木と、地に残った切り株を調べていた。

「新しいので、一年以上は経っているな」

「新しいので？」

かぐやが、眉をひそめる。

「ああ、古い切り株と新しい切り株が混じっているが……古いのも、時期に違いがある……もつとも古い倒木は……」

ぼろぼろに腐った倒木の欠片を手ですくいながら。

「剣十郎は視線を上げ、かぐやを見る。」

「適当だが、五十年は経っている」

「じゃあ、神さんのお歳は、五十歳!？」

宵子が大きな声を出す。

もつとも宵子は、神にとって、その年月が長いのか短いのかまで分かっていなかった。

「いや、齢までは解らないな。適当だし。最低でも木をなぎ倒せる程度まで成長してから、五十年は歳を得ている、と言うだけだ。とにかくこの道は余り使われていないようだ」

「それでも、有益な情報であることに変わりはありません。適当でも」

「違うないな。適当だが。……まあ、そこそこ自信はあるんだがな、

鑑定に。蛇は不必要に動かない動物だし。よし、この河に沿って森に入ろうか」

「それは、私が決めることです」
かぐやが言って、剣十郎が顔をしかめた。

「この河に沿って、今から森に入ります。では、参りましょう」
取り澄ました顔で、宣言。

けつきよく、剣十郎の指摘した方向に歩き出した。
ちよこちよこ、とバツハが足下を歩く。

剣十郎は何か言おうかと口を開けかけたが閉じ、肩をすくめて後に続く。

十分ほど蛇神の道に沿って歩いたが、新しい手がかりは、まだ何も無かった。

小さな丘を上がった辺りは、下草が少なく、苔が広がっている。

その上に、比較的丈の短い木が生い茂っていた。

道行きの途中、数匹の蛇を剣十郎が捕らえ、検分を繰り返したが、一匹目と同じくただのシロダイショウだった。

この辺りの蛇神の跡は、ぬかるんでいたが、水は溜まってはいなかった。

さらに五分歩いた辺りで、蛇神の道は、小さな湖に突き当たった。湖からは、合計三本の蛇神の道が伸びている。

「造ったな」

剣十郎が、呟く。

「道をですか？」

いまさら何を言ってるのですか、と言う顔でかぐやが剣十郎見る。

「湖だ」

「湖を、蛇神が、ですか？」

少し目を見開き、かぐやは湖を見渡す。

「湖というか、窪地と言うべきか。全体的に縁が盛り上がっているだろう？ 蛇神の〈道〉にもあった特徴だが、蛇神の巨体が抉り這う事によって土が押し出され、堆積した跡だ。近場の高低を見ても自然と湖が出来る地勢じゃないしな。ここも蛇がぐるぐる回って造ったんだろう」

言われ、かぐやは湖に近づいていく。

しゃがみ込み、土を直に触って確かめる。

その横で宵子が怖々と湖を覗き込む。

湖は浅く、底が見通せる。

小さな魚が数匹泳いでいるが、あまり動植物は繁殖していない。

剣十郎も、二人の横に歩み寄り、ゆっくりと講釈する。

「人だろうと獣だろうと、根城は住みやすいように変えていくものさ。特に長命で巨大な神は、呆れるほど大規模な巣を造ることもある。さしずめこの小さな湖は、………蛇の座布団と言ったところだな。この森全部が、蛇神の家だとすると」

「……分かりやすい例えですが、あなたはもう少し考えてから命名したほうがよろしいかと常日頃から思わぬでもありません」

「……わかるかったな」

かぐやは真剣な顔で、湖を睨み付け、唇に指を当て、考えこみ始めた。

「湖の縁が数カ所、堅く押しつぶされていますね。おそらく蛇神が乗り上げた跡でしょう。しかしその先には、蛇の這った跡、〈道〉はない」

「ああ。そりゃ、蛇神が得物に食らいついた痕跡だな。湖からずどんっと姿を現して、獲物を捕らえ、湖に引きずり込んだんだろう」

湖を、その中を泳いでいる魚を凝視していた宵子が、じりじりと後ずさって剣十郎の腕にしがみつく。

「いや、今は居ないから大丈夫だ。さほど新しい痕跡もないしな」
「なるほど」

と、かぐやが呟いた。

それから湖の周りを歩き始め、湖から出る蛇神の道を、順々に確認していく。

しばらく検分してから、かぐやが剣十郎を振り返る。

「この道を行きましょう」

一本の蛇神の道を、かぐやは指さした。

「理由は？」

「道が、新しいからです」

自信たっぷり答えた。

「なるほど……藪がなくて歩きやすそうだったから、ではないわけだな」

「……………それが、何か問題でも？」

かぐやが剣十郎を睨め付ける。

「いや、ない」

剣十郎は、右手を軽く振って立ち上がると、かぐやの指さした道に歩き出した。

獣が、森の中にいる。

烏壬の三人を探るように、見つめていた。

赤い目が、木の陰で光っていた。

霧にとけ込むような、
白い胴体に――

020 蛇神たちの支配する森（三）

獣が、森の中にいる。

烏壬の三人を探るように、見つめていた。

赤い目が、木の陰で光っていた。

霧にとけ込むような、白い胴体に――

ひっこり突き出た二本の、お耳。

宵子は、獣を――うさぎを――指さし、叫ぶ。

「お昼ご飯さま！」

その時にはすでに剣十郎は竹串を投擲していた。
寸分違わず、兎の首を貫通する。

かぐやが両目を瞑って手を合わせた。

宵子も両手を合わせて、「いただきます」言った。

剣十郎は一撃死したうさぎを拾ってくると、腰につり下げた。

蛇神の道は、また湖に繋がっていた。
今度は大きな湖だった。

「最初の湖でしようか？」

「いや、違うな。滝の音が遠い。歩いてきた方向も合わない。別の湖だ」

剣十郎は、懐中時計と方位計を取り出し、確認し、一人納得したように小さく頷いた。

「なおさら、やっかいですね」
気落ちした声で、かぐやが言う。

かぐやたちにとって湖の中は死角であり、絶対的に不利な戦場だ。こんな大きな湖の中まで搜索する事は出来ないし、例えば蛇神を見つけても逃げ込まれればもう手が出せない。

初めから覚悟していた事だが、蛇神の森を歩いた今になって、大きな湖が点在する厄介さを強く実感していた。

剣十郎は、ぽりぽりと頭を掻きながら、

「一度、慎重にこの湖を一周してみようか。この調子だと、森の中には蛇の道が相当有りそうだ。どの程度、湖から蛇の道が伸びているか、水の流れがどうなっているのか確認しておきたい」

かぐやは、ちょっと考えてから、小さく頷いた。

並んで、二人が歩き出す。

宵子が二人の間に割って入る。

かぐやが微笑み、その頭を撫でる。足下をバツハが続く。

けつきよく湖には、三本の川が流れ込んでいて、二本の川が下流に流れ出ていた。

そして川とは別に、九本の蛇神の〈道〉が森の中に向かい、奔っていた。

「多いな」

剣十郎が、呆れた声を出した。

「蛇のくせに随分と活動的だぞ？ 蛇海一帯が〈神為的な要塞〉、蛇神の狩り場だと認識した方が良いな」

「活動範囲がこれだけ広いと、見つけるまで、時間が掛かりそうですわね」

「どうだろうな。案外あっさり会えるかもよ？ 蛇神がこの限定された森の何処かにいるのは、もう間違いないしな。下手すると複数いる可能性もある」

「複数ですか？」

かぐやが驚く。

「可能性だ。森の全域を見て回ったわけではないからな。検分が不

十分で、数の特定は出来ない。それに古い足跡は風化も進んでいるし、水の流れによって土が堆積したり削られたりと、揺らぎが大きく、蛇神が通った証拠にはなっても、大きさを断定するには役不足だ。で、比較的新しい蛇神の這った跡、期間としては一年程度、に限定して観察すると、二種類の大きさがあった」

「つまり、二匹は居て間違いないと」

かぐやの声が、少し甲高く上擦る。

剣十郎はのんびりと、

「しかし、地面の固さ、今の固さではなく蛇神が通過したときの状態で、とうぜん痕跡の付き方も変わってくる。今辿って来た道だつて、所々で太さが違っていたしな」

「……要するに、どちらですか？」

「だから可能性だ。まだ断定出来ない。だが複数居る可能性は十分にある。人跡未踏の山奥では時に同種の神による集落が形成されていることもある」

「……………」

かぐやは少し黙っていたが。

「とりあえず、頭の中には入れておきます」

「そうしてくれ」

「今度は天然の川を遡りましょうか」

「そうだな。法則性の見えない蛇神の道より、まずは水の流れから把握していくか」

川を遡ると、小さな滝に出くわした。

滝つぼからは、蛇の道が一本、森に向かい奔っている。

滝上に登るか、蛇の道を追うのか、かぐやと剣十郎は話し合って、蛇神の道を追跡することにした。

滝つぼから出る蛇の道が、今までになく新しかったからだ。

先頭をかぐやが歩き、宵子、剣十郎と続いている。

足場は苔に覆われ、高い樹木が疎らに聳えていた。

五分ほど歩いて、かぐやは立ち止まった。

その背中に、下を向いてとぼとぼ歩いていた宵子がぶつかった。

「うくっ」

と呻いて、宵子は鼻を押さえ、かぐやは二、三步、前によろめいた。

宵子が抗議の視線で、かぐやを見上げる。

謝る代わりにかぐやは宵子を抱きしめるようにして、頭を撫でた。しかし表情は真剣。

黙ったまま、ひくひくと鼻を動かし、気配を探っている。

しばらくしてから、かぐやは口元で笑った。

「見つけました。間違いありません」

〈道〉の先に、神が潜んでいる。

漏れ漂ってくる濃密な神の気配を、かぐやは感じ取っていた。

「まあまあだな」

そのことに気づきながら知らぬ顔をしていた剣十郎が、満足そうに笑う。

「思ったより、早く出会えたな」

「ですね」

かぐやが頷く。

「行くか」

剣十郎が肩に刀を担ぎ、歩き出す。

「行きましょう」

かぐやも言って、その後が続いた。

021 烏壬VS蛇神（一）

とぐろを巻いた白い蛇神が、鎌首をもたげて、ほおずきのような赤い目で、三人と一匹を見下ろしていた。

巨体には、特に頭部には、紫色の靈気が、液体ほどの質感でもって絡みついていた。

「どうですか？」

かぐやが尋ねる。

剣十郎はじつくりと蛇神を睨んだまま、

「問題ない。殺れる」

答え。

そして、

かちり、と剣十郎が、鯉口を切った。

鞘を払い、鞘を投げ捨てる。

太刀を鳩尾の前に構え、切っ先を蛇神に向けた。

「俺からいく。適当に判断して入ってこい。宵子とバツハは離れてろ」

「りょうかい」

かぐやが弾むように答える。

剣十郎の身体が、さらには構える刀身が、青白い靈氣――〈陣〉――に包まれた。

剣十郎が、蛇神に向かって疾走する。

蛇神が、大きく口を開けた。

そこから、紫色の靈氣が、ゆらゆらと溢れ出る。

蛇神は、

『しゃあああああああーっ！』

と啼いて剣十郎を迎えうった。

蛇神の胴回りは、直径で一メートル程度だった。

しかし大きく開けられた口は、五メートル近くまで裂けていた。

蛇は、自らの頭部の数倍大きな獲物ですら、容易に飲み込んで消化する事が出来る。

その蛇神の口が、剣十郎を飲み込もうと、覆い被さる。

剣十郎は、地を蹴って方向を転じて、飲まれる前に逃れ、跳躍した。

上空で〈空〉を蹴って蛇神の背後を取る。

剣十郎の深奥から流れ出る靈氣が、小烏丸に注がれる。

小烏丸を包む〈陣〉が膨らみ、青白い炎のように立ち上る。

蛇神の後頭に、それを打ち落とす。

〈陣〉と〈陣〉がぶつかり、せめぎ合い、浸食し合い、靈氣の塵が空間に散った。

蛇の頭部が、ぐるりと振り返る。

蛇の目が、剣十郎を見据える。

剣十郎は、〈空〉を蹴って、飛び離れた。

蛇のアギトが襲いかかり、数瞬前まで剣十郎の居た空間で、閉じられる。

瞬間の攻防が終わった後、

『しゃあああああーっ！』と蛇が啼いて、剣十郎を、威嚇する。

蛇の鱗には、傷一つついていなかった。

剣十郎の剣は、蛇神の〈陣〉を突破できなかったのだ。

ふわりと大地に剣十郎が降り立った。

横に飛び跳ね、突撃して来た蛇の頭部をやり過ごす。

かわしざまに、蛇の胴に斬りつける。

剣は蛇神の〈陣〉に阻まれ、傷つけることは出来ない。

蛇神が『しゃあああああーっ！』と啼いて胴体をうねらせ、剣十郎は巻き込まれないよう素早く飛び離れた。

辺りの樹林をなぎ倒して、蛇神が剣十郎を追撃する。

022 烏壬VS蛇神(二)

かぐやは満足そうに、口元をほころばせていた。

蛇神の〈陣〉と比べると、剣十郎の敷いた〈陣〉は、あまりにも見窄らしかった。

気の総量が違いすぎるのだ。

気の総量だけで判断すると、数万の大軍に、数百騎で挑むような行為だった。

しかし剣十郎が後れを取ることはないだろう。

修験者には、神の魂を宿した者と、宿さない者が居る。

剣十郎は、一魂の修験者で、神の魂を持たなかった。

神なし、と呼ばれることもあるし、山域では、修験者とすら見なされないこともある。

かぐやも山頂にいた頃は、一魂を修験者とは思っていなかった。

しかし今は、彼の力を認めていた。

笹原が好条件で、さらには騙すようにしてまで引き入れた理由も分かる。

剣十郎は風の修験者もかくやと言う俊敏さで、空を駆け、蛇神と渡り合っていた。

〈陣〉の統率に関しては、烏壬青竜王に匹敵する、との笹原の評価も、あながち誇張とは思えない。

もし、失った神を取り戻すことが出来れば――。

思考にふけっていたかぐやは、口元を引き締めた。

そろそろ良いだろう。

蛇神の力は、大まかに理解できた。

前に仕留めた神より、僅かばかり劣っている。

もっともその戦いでは雪兎と双葉の二人が居たけれど。

今までも神妖との戦いでは、最初に剣十郎が渡り合うのが、通例となっていた。

神性を確かめるためだった。

神を相手にした時は、その次に、仲間達が参戦した。

ある程度、神の手の内を探るまでは、かぐやの手出しは禁止されていた。

しかし今回は、双葉も雪兎もない。

剣十郎の相棒は、今、かぐやただ一人なのだ。

そろそろ、参戦すべきだろう。

「なかなか……。さて、行きましようか」
照れくさそうに、かぐやは呟いた。

その前に、忘れてはならないことがある。

かぐやはゆっくりと宵子に歩み寄った。

宵子は、剣十郎と蛇神の戦いを見つめながら、青白い顔で、ぼんやりと立ちつくしている。

「宵子」

宵子はびくりと身を竦まして、かぐやに顔を向けた。

真横まで歩み寄り、かぐやは、優しく宵子に語りかける。
視線は、剣十郎と蛇神に向けている。

「宵子、あなたは野生の神を見るのが、初めてでしたね」
「……ん」

「ここで、ゆっくりと見学していなさい。戦う必要はありません。
戦ってはいけません。あなたの陣喰いも、こうまであからさまな実
体を持った神には無意味でしょうから」

宵子は、唇を尖らせた。

かぐやは意識して、さらに微笑んだ。

「わたしも、最初の戦いは見学でした」

「え？ かぐやちゃんも？」

宵子の目が丸くなった。

「そう」

かぐやが頷く。

「悔しかったのですが、確かに必要なことではあるのです。視る、
と言うことは……。神を知るためにも、戦い方を知るためにも。仲
間を知るためにも。そういうわけで、最初は見学。これが、かぐや
学院の決まりです」

かぐやは片目を瞑ってみせて、びつと指を一本、立てた。

「だからここは、私と剣十郎が受け持ちますので、手出しはしない
ように。もしもの時は、あなただけが頼りなのですから」

かぐやは宵子のプライドを傷つけないように気を使いつつ、念を押した。

かぐやが優しく見つめていると、宵子は無言で頷いた。
かぐやは頬を緩め、微笑んだ。

宵子は直接的な戦闘で役立つことは滅多にないが、大切な仲間だった。

宵子の能力・陣食いは、人にとって有害な気・瘴しょうき気を祓える浄化に分類されている。

霊症を治癒できる希少な能力だが、それを別にしても、かぐやにとって宵子は大切な仲間だった。

山頂からの付き合いで、そろそろ二年になる。

学院を始めるその前から、共に歩んできた。

若いかぐやが唯一お姉さんぶれる相手でもあった。

いずれ宵子を立派な修験者に育てるのは、かぐやの夢の中でも、大切な一つだった。

しかし、この蛇神と宵子とでは、相性が悪すぎた。

下手に挑めば命の保証が出来ない。

そして宵子は臆病のくせに無鉄砲で、熊や猪に喧嘩をふっかけた前科がある。

猪には太ももを貫かれ、熊には腕を折られていた。

その時の気持ちをもう二度とかぐやは味わいたくはなかった。

身体の中に霊気が満ちあふれている修験者は、〈陣〉を張らずとも怪我をしにくく治りも早いのだが、どうにも陣食いである宵子は常人並みに討たれ弱い。

ただし、治りは誰よりも早い。

「バツハ。宵子のことを、頼みましたよ」

かぐやは足下に付き従う子猫を見下ろして、言った。

この子猫にも、まだまだこの神と〈陣〉を合わせるほどの力はないかった。

とたんに宵子の顔が、強張った。

バツハは小さく頷いた。

それから、とんとと宵子の肩に飛び乗って、つん、と顔をそらして見せる。

そして宵子の肩の上で、これ見よがしに〈陣〉を張った。宵子の顔が、さらに歪む。

しかしその時には、かぐやの視線も意識も、すでに剣十郎と蛇神に移っていた。

「さて、わたしもそろそろ参加しましょうか」

かぐやの髪が、薄い白銀に輝き、ふわりと浮き上がった。

体中を、月色の〈陣〉が包み込む。

かぐやの右の袖口から、帯状になった織物が、淡く発光しながら、しゅるしゅると流れ出していた。

かぐやは辺りをゆったり見回した。

蛇神の位置と周りの地形を確認して、少し離れた木の枝に視線を止める。

真剣な眼差しで、木の枝を睨む。

ふわりと織物が、かぐやの袖からその枝に向かって真っ直ぐに伸びて行く。

絡みついた瞬間、しゅるりと巻き取る。

帯に引き寄せられるようにして、かぐやの身体はその枝の上に飛び移った。

しゅるりと、帯が袖の中に戻っていく。

満足そうに、かぐやは微笑んだ。

最初は、飛ばすだけで精一杯だった〈帯〉も、今は手足のように、彼女の靈氣に良く馴染んでいる。

何度となく練習を繰り返した成果が出ていた。もちろん、この旅の間も練習を続けている。

かぐやの右手がゆっくりと前に持ち上がる。

まっすぐ蛇に袖口を向ける。かぐやの目が細く、険しくなる。

「行きなさい！」

かぐやの叫びと同時に、しゅっ、と空気を切り裂き、帯が蛇を目掛けて打ち出された。

帯はみごと、蛇の身体を絡め取った。

『しゃああああああーっっっ！っ！』

蛇がのたうち、帯が引きちぎられる。

かぐやは僅かに鼻にしわを寄せ「すんっ」と鳴らしたが、

「わるくない臂力ですね」

不適な笑みで、口元を歪めた。

「では、これではどうでしょう！」

かぐやの両袖から、帯がするすると二本ずつ流れ落ちた。

かぐやが身体を舞わすように、両腕を振るう。

帯はふわりと飛んでいき、それぞれ別の木の幹を何度か巻き込んだあとに、蛇に向かってさらに伸びていく。

四本の帯が、蛇の胴体を這い、絡め取った。
木々と蛇神の間で、ぴんっと四本の帯が張った。蛇神の動きが制止した。

「上出来だ！ かぐや！」

剣十郎が吼えた。

大地を蹴って宙も蹴る。

全ての靈気を注ぎ込んだ小烏丸を、蛇の眉間に打ち下ろす。

密度を増した剣十郎の〈陣〉が、蛇神の〈陣〉を斬り裂いた。

蛇の頭部も斬り裂き、紫色をした鮮血が迸った。

蛇はあがき暴れた。剣十郎が飛び離れる。

同時に帯が引きちぎられ、木が折れる。

「思ったよりも、丈夫ですね」

言葉のわりに、かぐやが嬉しそうに微笑んだ。

『しゃあああああああーっっっっ！！』

蛇神が、剣十郎に向かい、圧縮された〈陣〉の息を吐いた。

剣十郎が、難なくかわす。

それを見て、かぐやは少し口元をひき結んだ。

遠距離攻撃を意識していなかったのだ。

シロダイシヨウからの連想で、毒はないものと思いこんでいた。
かぐやは緩みかけていた気を引き締める。

神の一撃は、どれも人にとっては致命に繋がる。

そう自戒しつつも。

しかし烏壬かぐやは、わくわくしていた。

自分は確実に成長している。今この瞬間にも。

023 烏壬VS蛇神(三)

宵子が始めて意識して〈陣〉を食べたのは五歳の時で、自分が修験者だと知ったのもその時だった。

それを契機に笹原と引き離され、山頂に連れて行かれて、怖い人たちに囲まれて、

殺されそうになり……………かぐやに助けられた。

始めて会ったときから、かぐやは宵子の憧れだった。

ずっと後について回った。

かぐやに手を引かれ、共に山頂を降りた日の興奮を、宵子は一生忘れないだろう。

それから五ヶ月。

烏壬かぐや学院が始まってから、五ヶ月。

かぐやは、あまり学院にいなかった。

剣十郎と二人で、〈浄域〉を駆けずり回っていた。

宵子から見ても、かぐやは日に日に格好良くなっていく。

その間、だいたい宵子はお留守番で、猫の世話係だった。

まだ七歳なんだからしょうがないじゃない、とみんなに言われて納得出来るほど、宵子は大人じゃなかった。

それに宵子が闘えない理由は年齢ではなく、〈陣〉を張れないからだ。

大人になっても〈陣〉を張れなきゃ、このままずっとお留守番で、どんどん先に進むかぐやちゃんに置いてかれてしまう……。

そう思ってこっそり後を付けたときに、猪に襲われた。

陣食いは役に立つ、陣食いは素晴らしい能力だと褒められて嬉しかったのも最初だけ。

陣食いに目覚めてからこの二年間、一度も自分が誰かの役に立つたことがない事実気づいたとき、宵子を襲った衝撃は半端なく大きかった。

どんなに記憶を漁ってみても、イタズラと修行以外に陣食いを使った記憶がどこにもないのだった。

宵子はかなり落ち込んで十日ほどふて寝した。

〈陣〉を張れないことが、日々宵子を傷つけていた。

宵子は〈陣〉に恋い焦がれていた。

〈陣〉さえ使えれば。

〈陣〉さえ使えれば。

〈陣〉さえ使え

れば。

念仏のように唱えてみても。

彼女は〈陣〉を持てなかった。

〈陣〉さえ使えれば。

そうすれば、きっとかぐやの隣に……。

上唇を反らすように唇を尖らせて、宵子は今、ご立腹だった。

やっとやっとやっと、〈浄域〉の外に、連れて行ってくれたのに。

旅の間中、おもしろくなかった。

旅立って直ぐに気づいた。何か違う、いつもと違うと。

学院にいる時は、もっと構ってくれたのに。

かぐやちゃんは、お兄ちゃんばかりで構ってくれなくなった。
お兄ちゃんは、かぐやちゃんばかりで構ってくれなくなった。

これでは宵子はおじやま虫でお荷物で、猫のお守り役だ。

三人の旅は絶対に楽しいと思ったけど、全然楽しくなかった。は
しゃげばはしゃぐほど疎外感が広がっていく。

それならこうだといつものように眠ってみたけど、背負ったまま
にされてしまった。

それはそれで暖かく、悪くはなかったけれど……。

宵子は、手に持った薙刀の柄を握りしめる。

刃が鞘に収まったままの薙刀を、大蛇に向け、正眼に構える。

宵子は気を吸収するだけで、放出することが出来なかった。

そのため宵子は、靈気の固まりである〈陣〉を張れない。

だから宵子の防御力は、〈陣〉を持たない普通の子供と大差はな
かった。

猪と喧嘩して、泣かされたこともある。

熊と出会って、漏らしたこともある。

料理にイタズラして美鈴に引っぱたかれたこともある。

宵子は齡七歳にして、鼠よりも猫が強くて、猫よりも犬が強くて、犬よりも猪が強くて、猪よりも熊が命に関わるくらい強いという、そして美鈴は意外ときれるという、要するに大きな者がより強い！食べ物にイタズラしてはいけない！という自然の掟を実体験から学んでいた。

そして神はそんな自然の摂理からはみ出て威張り散らしている存在だ。

でかい！。

蛇神の巨体は宵子が想像していたよりも、遙かに巨大で巨大で巨大だった。

まさか蛇のくせに熊よりも大きいとは思わなかった。

大蛇を見上げた瞬間、宵子の心は空白になった。

かぐやはきつと、宵子がびびったと思ったのだろう。

実際宵子は、びびっていた。

だから宵子は悔しかった。

かぐやに声を掛けられ、空っぽになった思考が動き出したとき、その空白には、恐怖ではなく羞恥心が忍び込んでいた。悔しい。悔しい。

宵子は、薙刀を、再度、蛇神に向ける。

……かなり離れた場所から。

怖かった。

しかし悔しかった。

宵子が役に立つことを見せたかった。思い知らせたかった。蛇だけでなく、かぐやと剣十郎にも。学院のみんなにも。

熊でなく、神となら闘える、はずなのに。

あんな〈陣〉、全然怖くない、のに。

でもちよつと、蛇自体は、怖い、かも。

噛まれたら、死ぬかも。飲み込まれたら……。。

ごくりと、つばを飲み込む。

足が震えている。

その時、ぺちり、と何かが宵子の頬を叩いた。

宵子は飛び上がった。産毛が総毛だった。

宵子はギクシャクと横を向く。

宵子の頬を叩いたもの、それは、肩の上に乗っているバツハの尻尾だった。

猫は主人の奮闘が嬉しいのか、戦いに興奮しているのか、ゆらゆらとリズムを刻むように尻尾を振っていた。

その尻尾が宵子の頬にぺちぺちと当たる。

宵子の頬が引きつった。

小癪な猫だ、こいつは。

蛇よりも。

かぐやの一言を思い出す。

「バッハ、宵子をお願いします」……気に入らなかった。

なぜ宵子が猫に頼まれなければならないのだ。

宵子は〈陣〉を食べれる偉大な修験者なのに。

あろう事か、この無口で影の薄い猫は、その宵子様の肩に乗って、これ見よがしに、ちっぽけな〈陣〉を張ってやがる。

見せびらかすつもりか、肩こりを起こさせるつもりか。

宵子は怒りのままに、猫の尻尾を左手でぎゅっと掴んだ。

猫が、宵子に顔を向ける。

「あやまれ」

宵子は猫を睨む。

熊でなく、蛇神でもなく、猫となら闘える自信が宵子を強気にさせていた。

しかし猫は、尻尾を捕まれたまま、欠伸した。

宵子の頬が真っ赤になった。宵子は、歯を剥いた。

……おのれ毛玉。

宵子は「あむっ」と、バッハの〈陣〉に食らいついた。

そのまま蕎麦をすすするように、〈陣〉を吸い込む。

バッハの〈陣〉が、ずるずると、宵子の口に流れ込む。

身体の中を素通りして、一瞬にしてお腹の一点に吸い込まれていく。

宵子必殺の〈陣食い〉だ。

〈陣〉の無くなったバツハが、ヒゲを振るわし、目を見開き、宵子を見た。

宵子は舌を出して、口元を舐める。

それから「ばーか」と声に出してバツハを嘲笑した。

ぱりっつ

猫爪が、宵子のホッペタをひっかいた。

そして、バツハが飛び降りる。

バツハが〈陣〉を張り直す。

バツハも猫口を歪めて、舌を出して、口元を舐める。
それから子猫は、音を出さずに笑った。

宵子はほっぺたを触る。

その手を見る。血が付いてる。

「おのれ、毛玉！」

ふるふると怒りに震え——宵子は薙刀を青眼に構えた。

「宵子とバツハの喧嘩が始まった。」

024 烏壬VS蛇神(四)

「しぶとい！」

叫ぶ剣十郎の声には、喜色が混じっている。

「……帯が、……私の帯が」

かぐやの声は、湿りがちだ。

織姫の織った帯は、薄く軽く、かさばらない。

それなりの量を携帯してきてはいたが、これだけ纏めて引きちぎられると、さすがに哀しくなってくる。

景気よく、使いすぎた。

「たわけ！ 後で回収すればいい！ 今はこいつを仕留めることが先決だ！」

剣十郎が叫ぶ。

かぐやは僅かに眉をつり上げた後に、こくりと頷いた。

剣十郎の言うとおりだ。

ちぎれた帯は多少、短くなっているが、使えないことはない。

結べば長くなる。

が、それは不格好だし、強度が不安になる。

命と美観に関わることにだけに、帰還したら、長さのある新品を補充した方が良さそう。

しかし新しい帯を補充するためには、〈織姫〉のご機嫌を取らなければならぬが、多量に補充するのなら多大にご機嫌を取らなければならぬが、今はその心配よりも、目の前の神を仕留めること

が先決だ。

そう、
剣十郎の言うとおりだ。

「くわっ！」

かぐやは鼻にシワを寄せ、両袖から、計四本の帯を引き出し、蛇神に放つ。

四本が、現状のかぐやの扱える最大の本数だった。

それ以上の帯を同時に統率しても、〈陣〉が薄く不安定になるだけで、動きもぎこちなくなる。

「いい加減、諦めなさい！」

かぐやが叫ぶ。

蛇神は森の奥に逃れようとする。

「逃がしません！」

四本の帯が、蛇神を絡め取った。

劍十郎が、蛇を目掛けて降下する。小烏丸が打ち下ろされる。

『ふうしゃあああああ————つ——つ——！——！——！』

粘液をまき散らし、一際大きく、蛇神が吼えた。

宵子の薙刀が、空を切る。

バツハが宵子に飛びかかり、腕をひっかいた。

「おのれ！」

宵子は猫のように唇を尖らせて、猫を睨み付ける。

宵子は笹原直伝の薙刀を嗜むが、バツハは宵子の癖や薙刀の間合いを、幾度もの戦いから完全に見きっていた。

宵子はぶんぶんと薙刀を振り回し、空を切り、猫はそのたびに器用に左側の口の端を持ち上げ、小さな犬歯を覗かせて笑っている。

バツハは時たま隙を見つけては間合いに踏み込み、宵子の足や腕をひっかいていく。

宵子の怒髪は天をつく状態だった。

そのとき。

『ふうしゃあああああー！！！！！』

蛇神の絶叫が森に奔った。

宵子はバツハに薙刀を振り上げ――。

そして宵子とバツハの戦いが、唐突に終わった。

バツハが宵子に背を向けた。

牙を剥く。

威嚇する。

〈陣〉を強化して、擬神化する。

宵子は、口の端を引きつらせ、息を飲んだ。

周りの草むらから、わらわらと白い蛇が、小さな白い蛇が、這いずり出てくる。

それが、宵子とバツハに群がってくる。

バツハが、蛇を迎え撃つ。

小さな蛇たちは、大多数が〈陣〉を持っては居なかった。

〈陣〉を持つ蛇も、辛うじて、というところで妖としては最下層だ。

だから〈二魂〉を持つバツハの敵ではなかった。

バツハは爪と牙で、時には尻尾で、次々と蛇をねじ伏せていく。

バツハの奮闘に、宵子は口を尖らせた。

この程度の蛇。

熊や猪に比べれば、怖れるに値しない。

猫に出来て、宵子に出来ないはずはない。

宵子は、薙刀の鞘を払った。

飛びかかってきた蛇を払い落とす。

一匹の蛇が、両断された。二匹目の蛇も斬り落とした。

三匹目の蛇もたたき落とし、しかし宵子に勝ち誇る間はなかった。

四匹目の蛇が薙刀の間合いの中、宵子の顔めがけて飛んでくる。

宵子は咄嗟に両腕で顔をかばった。

蛇は、右腕に噛みついた。

牙が、服の布地の上から、突き刺さる。そのまま蛇は腕に絡みつき、締め付ける。

宵子の全身に鳥肌がたった。

次々と、次々と、蛇が宵子に飛びかかる。

宵子は薙刀を取り落とした。

小さな蛇たちが――と言っても大きな個体は全長二メートルに達していたが――宵子に噛みつき、手に足に絡みついていく。蛇に身体を絡め取られ、宵子は身動きが出来なくなった。

宵子は軽くないパニックに落ちた。

溢れる自信は消し飛んでいた。

恐怖が魂を振るわせた。

「うきやーーーーーう！ かぐやちゃーん！ おにいちゃーん！
」

宵子は、絶叫していた。

絶叫は、森に広がり、かぐやの耳にも届いた。

025 烏壬VS蛇神(五)

次の足場と定めた枝の上で、かぐやは、悲鳴を聞いて、振り返った。

見ると宵子の身体は、ほぼ半分、のたくる蛇に飲み込まれ、白く膨らみ揺れていた。

よたよたと揺れ、今にも崩れ落ちそうだ。
地上にも白蛇が溢れている。

バツハが少なからぬ善戦をしているが、数に押されかけている。
足元を見ると、小蛇たちは、かぐやの木にも殺到していて、次から次へと登ってくる。

「眷属ですか！」

甲高い声で、かぐやが叫ぶ。

神は強い靈気をまき散らしているので、神の居る場所には、同系統の神が生まれやすい。

中には意識的に靈気を発して、同族を妖に押し上げる神もいる。
そして強い神は、そのへ小さな仲間を往々にして支配していた。

それが、眷属だ。

眷属の大多数は〈陣〉を持たない動物であり、神妖にまで成長するのとはごく僅かである。

しかし、かぐやの頭には、下野で発生した鼠の神の話がよぎった。
神化した鼠が靈気をまき散らし、子ネズミを次々に妖化させた事

件。

鼠の神妖は短期間でねずみ算式に増えていった。

最終的には十万匹を超える鼠が妖化したと言われている。

妖になりたての鼠たちは、熟練した修験者にはどうと言うことのない妖であったが、〈陣〉を持たない常人にとっては、どう猛な猛獣と一緒にだった。

犬や猫どころか、馬や牛も襲われ、そして大勢の人が喰われた。

村が三つ、町が一つ、消滅した。

かぐやの顔から、血の気が引いた。

「宵子！」

かぐやは迷うことなく蛇神を拘束していた帯を引き戻し、それを別の木の枝、宵子に最も近い木の枝に巻き付けた。

かぐやは蛇神に背を向け、宵子の救出に飛んだ。

地に降り立ったかぐやにも、蛇が群がり寄ってくる。

かぐやは四本の帯を短く振るって蛇を切り裂き、宵子に向かってさらに歩を進める。

しかし蛇の数が多く、かぐやの技では思うように前に進めない。逆にかぐやは押し包まれそうになる。

全体の状況を把握しつつも、剣十郎は直ぐに宵子の救助に向かうとはしなかった。

無防備に蛇神に背を向ければ、この蛇神を彼女たちの元に誘導してしまう恐れがあるからだ。

蛇神と剣十郎は、しばし睨み合った。

が、すぐに傷ついた蛇神は後ろを気にするように反転すると、逃げていった。

剣十郎は、蛇神の姿が遠くなってから、すぐに宵子の救助に向かう。

逃げる蛇神を追いかけたところで、たった一人で仕留めるのは剣十郎には難しかった。

そして逃げる神を追うよりも、仲間の救援を優先するのは、修験者の常識でもある。

それでも、剣十郎は内心で落胆していた。

追いつめ逃がした神は、用心深くなる。

長命な神は、総じて気が長い。場合によっては、数年、数十年、全く姿を見せなくなることもある。

そこまで長く付き合うことはないが、一月くらいは覚悟した方が
良いだろう。

かぐやと宵子の面倒を見ながら。

その期間の安全な寝床や水と食料の確保も必要になる。これから
季節は徐々に冬へと向かっていく。

その上、他山の動向にも注意する必要があった。

ずっと後を付いて来ていたあずみたちだけでなく、滞在している
間に、危険な新手がやってこないとも限らない。

剣十郎は空を駆って、宵子の元に辿り着く。蛇にたかられたまま

の宵子を抱えて上げ、上空に逃れる。

その瞬間、風の刃が辺り一帯の蛇を根こそぎ薙ぎ払った。

金峯山の修験者たちは、気づかれないように距離を取って、高みの見物としゃれ込んでいた。

先に神を横取ることも考えていたのだが、風乱坊が先行して蛇神を確認したところ、烏壬に気づかれぬほど容易く仕留められる神には見えなかったので、それは止めにした。

能力の不明な神に焦って手を出すと、命を失う結果に為りかねない。

それよりは、烏壬の手並みを拝見しよう。
と言うことになった。

烏壬を物差しにして、蛇神の力を計ることも出来るし、三者三様、それぞれの思惑で、烏壬の戦いぶりが見たかったせいもある。

「なんでえ、情けねえ」

蛇の〈陣〉に、剣十郎の刀が弾かれる様を見て、風乱坊はげらげらと笑った。

あずみはむつつりと黙っている。剣十郎は明らかに、まだ一魂のままだ。

それは喜ばしいような、かわいそうなような。

「ふむ、大した身のこなしだな」

しかし武蔵坊は、剣十郎の動きに、感嘆の息を漏らした。

修験者たちは、〈陣〉を自らの手足のように動かすことが出来る。が、人間には、器用不器用があり、修験者にも、器用不器用があった。

指を動かすことの出来る人間全てが、一流の芸術家では無いのと同じように、修験者の全てが、思い通りに〈陣〉を操れるわけではない。

「けっ、どこがよ？ あの名まこみたいな飛び方。俺なら三秒で空から叩き落とせるぜ」

「落とせなかったくせに……って、あんた、なまこの動き知らないでしょ？ 全然違うから」

ほおづえを突きながら、ぽつりとあずみが呟いた。

「んだと、こらあ？」

風乱坊があずみに食ってかかるが、あずみは木の枝の上に座って脚をぷらぷらさせながら、鼻歌を歌い、完全に無視。

剣十郎の戦いを見つめている。

武蔵坊は苦い顔をしていたが、二人の間に割って入るようなことはしなかった。

三人の見つめている前、ゆっくりとかぐやが戦線に参加する。

「ふむ」

武蔵坊が、呟いた。

「さすがに、まだ子供か……。〈陣〉が安定してないな」

「でもさ、月夜視は月夜のみって言う割には、結構、頑張ってるんじゃない？」

「そーか？ 大した技じゃないぜ？ あの程度の動き。敵がところこいだけだろう？」

「ま、たしかにね。でも、まだ子供だしね」

あずみと風乱坊が、気楽に批評している。

かぐやが四本の帯を使い始め、戦況が動き出した。

「あら、まあ。これは、蛇、捕まっちゃうかも？」

かぐやの帯が拘束する蛇神を、剣十郎が的確に崩していく。

〈陣〉は意識によって統率された霊気だ。

逆に言えば意識の強弱で、〈陣〉の厚みはいびつに変化することになる。

剣十郎は〈陣〉の薄い尻尾に攻撃を集め、蛇の意識を尻尾に向かわせ、尻尾の〈陣〉が膨らみ、頭部の〈陣〉が散漫になるのを待って、頭部に重い一撃を加えていた。

腹部の〈陣〉が極端に弱まれば、腹部にも攻撃を加える。

教科書どおりの手法だが、面白いように、蛇神は剣十郎に翻弄され、血しぶきをまき散らしていく。

「ちっ、意外と大したことねーな。大きさと〈陣〉の厚みに騙されたか」

風乱坊が悔しそうに吐き捨てる。
武蔵坊が、

「それならそれでかまわないさ。簡単に捕まる神なら、それほど貴重でもあるまい。烏壬の戦いが、それも本家月姫の戦いを拝めただけでもよしとしよう」

「他山の戦いなんて、そーそー見れないからね」
あずみが楽しそうに笑う。

手の内が知られて困るのは何も神だけではなく、修験者も同じだった。

同じ山に属している修験者にも、どんな神を修験したか、知られただがらない者もいる。

たまに、これ見よがしに見せびらかす者も居たが、それは風乱坊みたいな馬鹿だけだ。

自らの神性は、信頼できる仲間以外に、気軽に教えて良いものはなかった。

他山の、それも烏壬本家本流の戦いなど、そう簡単に拝めるものではない。

「しかし、あの子、動かないね」

あずみがぼつりと呟いた。

あずみの視線は、宵子に向いていた。

烏壬本家の月姫さまが戦っているというのに、近代的な、つまりへんてこな格好をした女の子は、戦おうとしない。

〈陣〉を張る気配すらない。

金峯山の最大の興味は、実は宵子だった。

月姫が連れているところからして、ただ者であるはずはない。

きつと月姫に近い貴人で、特別の神を宿した修験者だろうと、それはきつと月夜視の弱点を補うため、昼間に真価を発揮する能力なのだろうと、烏壬の跡を付けているこの三日、彼らは話し合っていた。

見つめる三人の前で、その女の子が、式神の子猫と喧嘩を始めた。
しかし少女は、全く〈陣〉を張るそぶりを見せない。

「……………」

「……………」

「……………」

「…………お優雅、ですこと」

あずみが呆れた声を出した。

「…………あのガキ、さっき猫の〈陣〉を」

〈陣〉食いを目撃した風乱坊が、目を擦り、呟く。

怪訝に、あずみが横に座っている風乱坊を見る。

その時、わらわらと眷属が湧いてきて。

金峯山の三人の間に、緊張が走る。

「今度こそ、確認出来そうね」

あずみは戦場に目を向ける。

風乱坊と武蔵坊も注視した。

しかし、女の子は〈陣〉を張るそぶりを見せなかった。

「あれ？」

あずみが首を傾げる。

個人差はあるが、だいたい修験者は五歳頃には〈陣〉を張れるようになり、七歳頃には擬神化出来るようになる。

あの年頃なら、神魂を宿していれば〈陣〉が張れるはずだった。

しかし、女の子は、〈陣〉を張る気配はない。……蛇に食いつかれているのに。

「まさか、ただの付き人、なの？」

あずみが、呻く。

修験者の中には、時に旅の慰めとして、常人を付き人として連れ歩く者が居た。

しかし身を守る術のない付き人の死亡率は、修験者の比ではない。特に体力のない子供を連れ歩くなど、尊敬される行為では決してなかった。

「ちょっと、まずいんじゃない？」

「だな……どうするよ？」

「助けよう。売れる恩は、売っておく」

急いで三人は救助に駆けつけるが、距離があった。間に合ったのは、風乱坊だけだ。

風乱坊が風を纏って飛翔する。

瞬間だけ、彼は剣十郎と視線をかわし合った。

剣十郎が少女を抱え上げる。

それと同時に、風乱坊は広範囲に風の神通力を放った。

呆然自失した宵子は、草むらにしゃがみ込んでいた。

剣十郎がゆっくりと彼女の腕や脚を確かめていく。

体のあちこちに咬み傷や絞められた痣があったが、骨や筋に損傷はないようだ。

どの噛み傷も小さく、毒の痕跡もない。

剣十郎は心配そうに見つめているかぐやに、「心配ない。軽傷だ」
言ってから、ザックから消毒薬を取り出し、宵子の傷口を消毒し、
新しい布で拭いていく。

かぐやは、能面のように強ばった顔を緩ませ、ほっと息を吐いた。
それから、直ぐに表情を引き締める。

まん丸に育った櫨の木の上だった。

そこに、視線を向ける。

太い枝に座って、女性が、所在なげに両足をぶらぶらとさせていた。

その左横では、幹に寄り添い大柄な体格をした男が、仁王立ちしている。

二人よりも一つ高い枝では、枯れ木のように細い身体をした猿顔の男が、しゃがんで、にやついた笑みを浮かべている。

三人とも、鈴懸に結袈裟をまとっていた。

編み笠も被っている。

大柄の男は鉄の六角棒を、猿顔の修験者は、錫杖を手に持っている。女性も、手ぶらだった。

おそらく金峯山で、先ほどの風の神通力は、彼らの中の誰かだろう。

助けられた、つまり敵意はないとも取れるが、あまりにもタイミングがよすぎた。

監視されていたと考えて、間違いはない。

かぐやは、両足を肩幅に開き、両腕をだらりと下げ、一見のんびりと構えつつ、しかし服の下では、身体を包むようにして携帯している織姫の帯に、霊気を渡らしていた。

烏壬かぐやは、他山に属する修験者と、幽谷の中で出会ったことはなかった。

そして、かぐやの叔母である月夜視の前修験者は、かぐやが生まれる僅か前、他山の修験者に討たれ、死んでいた。

あずみたちは、初めて会った帯を使う修験者を、すでに月姫かぐやと断定していた。

剣十郎や洋装の女の子が「かぐや」と呼んでいたし、へ烏壬の金羽は、烏壬の本家本流以外が理由もなく使えば、死罪となる代物だ。

たとえそれが他山の修験者でも、五山協定に基づき、烏壬は容赦なく命を奪う。

しかしあずみたちは、三人で話し合い、相手が名乗るまでは、月姫とは気づかなかったことにするつもりだった。

他山といえど格上の相手にはタテマエとして礼儀を通す必要があった。

後をつけて行動を観察するだけで糾弾される理由になる。

「ただし素性を知らないのなら、お互いただの修験者だ。互いに詮索しないのは山での慣例でもある。知らなかったで誤魔化せばいい。逆に偶然出くわし助けたのだから、貸し一つだ」

と武蔵坊は言っていたが。

そのかぐや姫が、白磁のような白い顔で、三人を見据えている。

警戒しているのか、僅かに張られた不安定な〈陣〉は、まるで毛を逆立てている猫のようだった。

微動だにせずじっとこっちを見上げている姿勢も、敵を前にした猫である。

あずみは、遠慮がちに、手を振ってみた。

しかし少女は、無表情のまま無反応。

あずみは、ちょっと口の端を、引きつらせた。

そろそろと手を引っ込める。

下手に手を出すと引っ掛かれそうな雰囲気だ。

剣十郎が女の子の治療を終えるのを、待つことにする。

しばらくして、少女の手当を終えた剣十郎が、立ち上がった。

あずみは精一杯の笑顔で手を振った。

剣十郎は、横柄に顎をしゃくって、降りてこい、のジェスチャーをした。

あずみは苦そうに顔をしかめる。

なかなか感動の再会の雰囲気ではなかった。

あずみは、座頭である武蔵坊を見た。

武蔵坊はうなずき、あずみに頭を下げた。

「たのむ」

「……わたしが？」

自分を指さし、あずみが言う。 武蔵坊が緊張した顔で頷いた。

街道ならまだしも広大な山の中、そう簡単に修験者同士が出会うことはない。

出会うてもやっかいごとをさけるように、距離を取って行きすぎることも多い。

特定の状況、信用できる顔見知りだったり、獲物が重なった場合や、お互い、あるいはどちらかが獲物でもない限り。

しかしあずみは彼と顔見知りだった。

信用出来る顔見知りであるはずだった。

「ま、いつか」

あずみは、枝から飛び降りた。

ほっそりとした体格。豹を思わせるしなやかな動きで、優雅に着地する。

「やつ」

片手を挙げ、出来るだけ友好的な、笑顔を浮かべる。

「偶然、変なところで会っちゃったね。その、もしかして、お邪魔だった……かな……」

最後の方が消えていった。

小さな美しいお姫さまが、冷ややかな目であずみを見返している。

「何か用でしょうか？」

「いや、用って……言うか、さ」

あずみは少し、ひるむ。あずみの「やつ」は、かぐやにではなく、剣十郎にだったのだが、しかし剣十郎は、久しぶりに再会したあずみではなく、枝上の風乱坊を見上げていた。

見上げている、と言うよりは、ガンを飛ばしあっていた。

——まじですか？

あずみは顔を歪まし、頭をがりと掻きむしった。

「くはははっ」

軋るような笑いが爆発した。猿顔の男——風乱坊だ。

ふんわり、と音もなく、羽根のような身軽さで、あずみの横に降り立った。

「よーう、剣十郎、久しいじゃねーか！」

その声に、かぐやの表情が動いた。
少し抑えた声で。

「知り合いですか？ ……彼女も？」

「ああ」

ぶっきらぼうに剣十郎が答える。

「昔に世話になった。風乱坊とあずみ。金峯山の修験者だ」

かぐやはまだ、問いつめるような目で、剣十郎を見上げている。

「大丈夫だ。この二人は信頼できる。後一人は……」

剣十郎が、視線を巨漢の修験者に向けて。

「初顔だ」

慌てて武蔵坊が、枝を軋ませ飛び降りた。

ずずつと足形に、大地がへこんだ。手にした棒も、地に深く刺さっていた。

武蔵坊は、ずぼつと、六角棒を地から引き抜き、三步前に出て、
恭しく片膝をついた。

「お初にお目に掛かる。わたしは金峯山の武蔵坊」

「わたしが、あずみ」あずみも名乗り、「こいつが」と猿顔を手で示すと、

「風乱坊だ」

風乱坊が自分で名乗った。

「さようですか」

どうやら敵ではないと認め、かぐやは、ほうつと小さい息を吐い

た。

肩からも力を抜く。

それから、直ぐにすまし顔になった。

「わたしは、かぐやです。以後、よろしく」

声は伸びやかに澄んでいたが、まだ少し警戒しているのか、音程も強弱も全く同じで暖かみはない。

「そちらの方は？」

武蔵坊が、遠慮がちな声で、尋ねる。

視線の先は宵子。

剣十郎が、

「宵子。猫はバツハ。俺は剣十郎」
説明した。

「それだけ？」

あきれ顔で、あずみが言った。

しかし簡略に名乗ったのは、あずみたちが先だった。

詮索しないのは山での慣例でもあるし、そっちの方があずみ達には都合も良い。

「ま、いいや。それよりさ」

につ、とあずみは笑った。

「どう？ わたし、あれから行者になったんだ？」
くるりと一回転する。

次にあずみが言葉を発する前に、あずみを押しのけ、ずいっと、猿顔の修験者、風乱坊が前に出た。剣十郎を憎々しげに睨み付ける。が、直ぐに相貌を崩し、

「なあ、おい。預けていた決着、此处で付けようじゃないか？」

剣十郎に向かって、錫杖を突きつけた。

「おい」

武蔵坊が咎め、

「ちょっと！」

あずみが抗議するが、

「いいぜ」

剣十郎は無愛想に答えた。

かぐやは無言で無表情だったが、ほんの少し、右の眉が、ぴくつと跳ねた。

「ただの試合だ。殺し合いじゃない」

剣十郎が言い、しぶしぶかぐやが頷く。

「やろう、風乱坊」

腰を落とし、剣十郎が刀を構える。

刀は、鞘に収まったままだ。

風乱坊も、にやけた笑みを浮かべ、錫杖を構える。

「……好きねー」

あきれ顔で、あずみは呟いて、髪をぼりぼりかき上げた。

「あつ、よろしく……ね」

柔らかい笑顔で、かぐやに手を差し出し——応じないのを確かめてから、宵子に、握手を求めた。

宵子が怖々、握り返した。

かんこん、きんこん――

剣十郎と風乱坊が舞うように跳ね、

森には、木と木の打ち合う音が響いていた。

あずみは頬杖を付き、楽しそうに哀しそうに、それを眺めていた。どちらも僅かな〈陣〉のみを張って、得物のみでやり合っている。

修験者と言うよりも、まるで朝野の修行者だ。

もつともこんなところで死力を尽くしてやり合われても困るが。

あずみの隣では、美味しそうに宵子が蛇を焼いて食している（注・蛇は修験者にとってごく平凡な食料である）。

親子ほどにも年が離れている武蔵坊とかぐや姫は、意気投合して、話し込んでいる。

こんなこととして良いのかなあと、思いつつ、あずみは、ぼんやりと考えた。

他山の者が、それも同じ神を追ってきた修験者同士が、幽谷でこのように仲良くすることは、普通ではあり得なかった。

神の住む森の中で、たき火に当たり、馬鹿男たちのじゃれ合いを眺めるなど。

考えようによっては今は、二度と来そうもない、得難い、時間なのかもしれない。

「そう言えばさ」

あずみは宵子に視線を移して、気になっていることを、尋ねるところにした。

「はい？ 食べますか？」

宵子が串に刺した蛇を焼いた切り身を、前に出す。

「いや、要らないけどさ」

「遠慮しなくても沢山ありますよ？」

「じゃあ、貰おうかな？」

串を受け取りながら、

「宵子ちゃんだっけ？ 剣十郎、いつ、山に復帰したのかな？」

宵子が小首を傾げる。

「お兄ちゃんは、」

指を折って宵子が数えていると、早足でかぐやがやって来て、宵子を制した。

あずみは少し身構える。

彼女があずみたちに心を許していないことは、その無表情な顔から、ありありと見て取れる。

「半年前——学院の創設と同時です。それが、何か？」

かぐやが言う。

咎めるような、探るような視線だ。

「いや、別に」

あからさまに敵意の籠もったかぐやの視線に、あずみは頬をぽりぽりかいた。

宵子から組織の内情を探ろうとしていた、とでも疑われたのだらう。

苦笑いしながら。

「特に深い意味はなくてね。たださ、烏壬にはもう戻らないって言うてたからね、あいつ」

親しみを込めた視線を、剣十郎に向ける。

「……あいつ、ですか」

かぐやの瞳が、ほんの少し、揺れ動いて戻った。

かぐやは、小首を傾げ、唇に指を当てて。

可愛らしく、微笑み——しかし目は少し笑っていない——冷たい声で。

「そうでしたか。そんなことを言っていましたか。しかしそれは随分と古い話でしょう」

あずみはちよつと嫌な顔をした。

「なにか？」

かぐやが、笑ってきく。

「いいえ、別に」

あずみは、微笑んで応えた。

相手は烏壬の本家で、世間知らずの子供。少々なことは我慢しよう。

それにしても、かぐや姫の美しさは、他山にも聞こえていた。

しかし烏壬本山雲上の奥に暮らす貴賓のこと。

美化誇張されるのが当然であり、話半分に聞いていたが、確かに

可愛らしい。

そして噂どおり、生意気だ。（ちなみに、それらかぐやの噂をせつせと広めているのは、烏壬青竜王である。）

剣十郎が烏壬に戻ったのは、この可愛くも生意気なお姫さまに惹かれたのではないか、と僅かながらも頭の中をよぎらせながら、しかし、剣十郎の好みは、年上の女性、だったはず、野山で山賊を切つて回るような――どっちかというかそのままに野性的な。こんながきんちよ、ともあずみは考え――。

「それであなたは、剣十郎とはどのような関係で？」

かぐやの問いで、あずみは思考を中断した。

「気になる？」

あずみの問い返しに、他意はなかった。

ただ説明する前に、勿体振って見せたただけだ。

いや、ほんの少しは、悪意があったかもしれない、無意識の内に。しかし、

「別に」

つんつとした、かぐやの答えは、予想以上に素っ気なかった。

あずみが、眉を寄せる。

「聞きたいんなら――」

「いいえ、興味はありません」

あずみはかぐやの顔を、まじまじと見つめた。

「もしかしてさ」

すまし顔だったかぐやが、少し赤くなり、きつとあずみを睨み付けた。

「私は、烏壬本家本流、月夜視のかぐやですから、神無しになど、全く興味は有りません」

強弱の乱れた早口で、まくし立てる。

「そ、そう？」

あずみはかぐやの顔を見つめていた。
もしかして、この子――。

見つめていると、かぐやの顔が、更にほんのり赤くなった。

「興味はありません。興味はありませんが――しかし、あの女たらしの穀潰しなどに好意を寄せる物好きが他山に居るとなると――多少は興味が湧いてきます」

最後にかぐやは、口の端を嫌な角度にひくつと歪めた。

あずみはむっとした。

そして、確信した。

この少女の態度は、他山の修験者を警戒してではなく、いや、それもあるだろうけどそれ以上に、他山の女性、剣十郎と過去に知り合っている自分に対してだ。

どうやら、剣十郎ではなく、姫の方が彼をご所望のようだ。

烏壬には戻る気はない、と言っていた剣十郎が烏壬に戻った理由。おそらく本家の権力を使って、この姫が、剣十郎を拘束しているのだろう。

可愛そうに、剣十郎。

かぐやを見るあずみの視線が、厳しくなった。
すると、かぐやの眉が、少し下がった。

そして、

「あたり、なのですか？」

「え？ あ」

かまをかけられていたことに気づいて、今度はあずみは赤面した。

「物好きですね」

かぐやが、勝ち誇ったように、口の端を歪める。

——このガキ。ガキのくせに。

「心配ご無用、あなたには関係有りませんから」
頬を引きつらせつつ、あずみは暗に肯定するようなことを言う。

お姫さまは、口をちよつともぐもぐした後、小さな胸をつんつと
反らした。

「わたしは、学院の学院長で、学級委員長で、烏壬の本家本流です。
そして剣十郎は当学院の副委員長で、わたしの右腕であり、いわば
つまり、今はわたしが剣十郎の主。関係なくありません」
色々と並べ立てた。

「本家とか全く関係ないでしょ。主だからってそんな権利——ああ、
そうね。確かに烏壬のお姫さまは、私たちとは違うようだけどね」

あずみは態とらしい笑みで、嘲笑した。

かぐやはむっとして、

「何か言いたいのなら、はっきり言いなさい」

「奥駆けに、修験者でもない小さな女の子を連れてこれるなんて、ね。私たちの常識ではちよっと、ね」

連れてきた少女は危険な目にあっただ。

修験者として、少しでも恥を知っているのならこれは痛烈な皮肉になる。

二人の後ろで蛇を食していた宵子が、ぽとり、とくわえていた蛇を取り落とした。

「しゅ、しゅげんしゃ……しゅげんしゃ……」自分を指さし呟いた。

しかしかぐやの方は、至ってすました顔で、

「宵子は優秀な修験者です」

胸を張り、はっきりと言い切った。

そして最後には口の端に冷笑を浮かべ、「あなたなどよりも」と続ける。

あずみが少し、腰を浮かせる。

「わたしより？ ふざけないで、私はこう見えて超優秀な修験者よ。いや、見たまま超優秀な修験者よ」

「ほう」

かぐやの馬鹿にする声。

天下に鳴り響いた月夜視を修験している余裕だろう。

しかしあずみとて、そこいらの修験者とは違う。

烏壬かぐやほどではないが、金峯山の中でも十分な名門である。自ら宿した神に対する自負もある。

〈陣〉も張れない付き人と比べられ、劣るなど、暴言にもほどがあった。

あずみの中で、対抗意識が爆発していた。だから、つい、言ってしまった。

「わたしは、精霊系よ」

かぐやの表情が、少し強張った。

「それも、水のね」

付け足すと、さらにかぐやの表情が強張った。

言ってしまった、思いながらも、あずみは、ざまあみろ、と気持ちよく笑った。

「おい、あずみ」

今まで知らぬ顔を決め込んでいた武蔵坊が、小声で窘めた。

神妖の殆どは獣から神化しているが、時には水や火の無機物から神化することがあった。

しかしこうした存在は非常に不安定で、〈神〉と呼べるほどに育つのは、まれにしかない。

さらに、精霊系の勾玉で修験したからと言って、必ずしも、そうした能力を獲得できるとは限らない。

そんなわけで、精霊の勾玉は、当然のように貴重で、引く手あまた。

勾玉を身に宿した修験者も、格好の標的だ。

少なくとも売り言葉に買い言葉の口げんかで、他山の修験者に吹聴して良い内容ではない。

命に関わる。

特に精霊の中でも水の精霊は、近代に入り海戦の重要性が増してからは、その価値が鰻登りに上がっている。

「いいのよ。どうせ剣十郎はよく知ってるから！」

しかしあずみは、開き直っている。

かぐやは、あずみを鋭い視線で射抜いていた。

長い葛藤の末、しばらくして、口の端を持ち上げた。

「はったり、ですね？」

精霊系でなくとも、水や火を操る神は多い。

そしてそれを修験した修験者も腐るほど居て、彼らも水や火を操ることが出来る。

彼らの中には精霊系を詐称する者が後を絶たない。

しかし両者は、鳥と風ほどに、魚と水ほどに、モグラと土ほどに、大きな相違があった。

「あなたごときが、精霊のわけがありません。大方、鮒かゲンゴロウか糸みみずの修験者でしょう——あなたは、糸みみずと見ましたが、いかが？」

「……このがき」

あずみは、口の中で呟いた。

ぐっとかぐやの目の前に、腕を差し出し、

「触ってみ」

かぐやが、僅かに眉を寄せた。

「良いから、触ってみ」

念を押され、かぐやはゆっくりとあずみの腕に、手を伸ばした。触れる。

引き締まったほっそりとした腕。

だがそれだけだ。怪訝な顔で、かぐやがあずみを見上げた。

あずみが、にたりと笑った。

瞬間、じわり、かぐやの握っていた腕が、透明になり、ぱしゃり、とかぐやの手は、腕だった水の中に包まれていた。

かぐやは驚いて手を引き抜いた。

引き抜いたときに、水滴が何滴か散った。

「神化すれば、身体のはぼ全てを、水に変えることも出来るわ」

あずみが言う。

誇りを感じさせる声音だ。

まじまじと、かぐやはその腕の形をした水を見つめ、濡れた自分の手を見つめ、そしてあずみの肩から伸びる水に、視線を戻す。

水が、まるで蛇のように妖艶に蠢いている。

その水が、肌色となり、あずみの腕に戻っていく。

かぐやは悔しそうに、物欲しそうに。

奥歯で少し、ぎりりと歯を噛みしめた。

「水と同化すれば、例え一等級の神が相手でも、無敵」
あずみは勝ち誇るように、胸を張る。

「無敵ではないな。丸飲みされたらお終いだ」
武蔵坊が横から釘を刺した。続けて、

「それに、神の〈陣〉に浸食されてもお終いだろう」

むっとアズミが武蔵坊を睨み付ける。

「そういうへまを、私はしません」

「水がない場所でも、苦勞するな」

武蔵坊が言うことは、何もあずみに限ったことではなく、精霊系の修験者に少なからず当てはまる常識だった。

「水があれば、私は無敵です」

拗ねた口調であずみは言う。

「あれば、な」

「あんた一体、どっちの味方よ？」

うろんな目で、あずみは武蔵坊を睨み付ける。

かぐやは悔しそうに、物欲しそうに、でも無表情で無言。

あずみの腕を見つめている。

「いい加減にしてくれ、あずみ。他山に喧嘩を売るのは御法度だぞ……それも烏壬の本家相手に何をムキになって——」

「うるさいわよ、おっさん。この小娘に、お姉さんの偉大さを教えて上げただけじゃない」

「お、おっさん——」

「こ、小娘ですと。この烏壬本家本流の――」

「本家本家ってうるさいわね。言っておくけど、山の中で、しかも他山にはそんな肩書き、意味がないのよ。お嬢ちゃん」

あずみは、さほど大きくもない胸を見せつけるように突き出し、勝者が上から見下ろしたような、声と笑顔。

しかし実際には名乗られた以上、明らかな格上はきっちり尊重する必要があった、本当は。

しかし世の中は往々にして言った者勝ちである。

かぐやが口元を、引きつらせ、逆襲に出る。

「それを言うなら、お婆さん。山の中では、年齢など、意味がありません、お婆さん」

あずみはまだ一九歳だった。

一瞬、言葉に詰まる。

だいたい年齢は関係ないと言いつつ、お婆さんとは。

強張ったあずみの顔を見て、かぐやは、すっごく嬉しそうに、口の端を歪めていた。

「だいたい、今時、そんな山伏然とした格好で歩き回って恥ずかしくもないとは、魂から老けている証拠です」

「……格好のことで、あなた達に言われたくはないけどね」

あずみは、眉根を寄せて、こめかみを揉みながら、弱った声で抗議する。

確かにあずみ達の格好はおしゃれではないし、少し時代遅れだが、旅の装いとしては洗練されている。

場所を考えれば、かぐや達の格好の方が場違いだ。

かぐやは、心の底から驚いた顔をした。

見せびらかせるように袖を抓んで、両手を広げ、

「あなたは、何を見ているのですか？　これは、烏壬本家本流のみ許された至高の装束ですよ？　しかも〈織姫〉の糸で、〈織姫〉自らが織りました。水を弾き、それで居て通気性も抜群。絹のように軽くて滑らか、皺になりにくくて暖かく、鋼のように丈夫です。わたしはこの装束を手に入れるために、どれだけ肩を揉んで腰を揉んでお世辞を言い続けたことか」

「……それは、ご苦勞様」

「なにごとも、威厳の為です。威厳を保つのは、本家本流としての責務でもありますから」

かぐやが胸を張る。

「……威厳、ね」

あずみは半眼でかぐやの格好を見た。

かぐやの白かっただろう巫女装束は、薄汚れていて、あちこちに蜘蛛の巣が絡まっていた。

特に袖口の汚れは凶悪で、泥に浸した後、草汁で染めたような状態になっている。

それに対して、あずみたちの装束は、さして汚れていなかった。水の修験者であるあずみの〈洗濯力〉のなせる技だった。

「威厳、ねー」

「……何か、文句がおありのようですね？」

「いいえ、別に。私ごとき場末の修験者が烏壬本家の月姫さまのお美しいお姿に、とやかく申すつもりはございませんと」

あずみは立ち上がると、直角になるくらい大きく腰を曲げて、お辞儀をした。

しかし声の調子は明らかに馬鹿にしたものだし、しぐさ自体、道化的だった。

「で、次は月姫さまの番ね——私より、立派な、何ですって？」
あずみが上げた顔には、意地の悪い笑みが浮かんでいた。

ふふっ、と余裕の笑みで、かぐやが受けて立つ。

「宵子」

呼ばれ、元氣なく、宵子が振り向いた。

蛇の眷属に敗れて助けを求め、みんなに迷惑をかけたことを改めて落ち込んでいた。

これでは修験者でないと思われても仕方ない。

「……要るの？」

六匹目の蛇をもそもそとくわえていた宵子が、その蛇を、差し出した。

「要りません」

かぐやの答えに、宵子が、元氣なく、また蛇を囓る。

「あなたの力を、見せてお上げなさい」

宵子がきょとんと顔を上げて、かぐやを見る。

かぐやが歩み寄って、耳打ちする。

宵子がかぐやの顔をまじまじと見つめる。

かぐやが強く頷く。

宵子の肩を叩く。

宵子が少し嬉しそうに、頷いた。

かぐやは、あずみに、

「もう一度、水」

「……いいけど？」

あずみの腕が、水になった。

宵子が、その水に触れる。

「うわっ、ほんとに水だ！」

宵子は楽しそうに、かぐやを振り返った。

かぐやは、真剣な顔で睨んでいた。

宵子は慌てて、前に向き直り、水を構成する〈靈氣〉を吸収した。

水が、あずみの腕に戻っていく。

驚愕する、武蔵坊とあずみ。

かぐやがふふふふ、と微笑み、宵子に腕を絡め引き寄せた。

宵子もかぐやの顔を見上げた後、あずみに向き直り、ふふふふふ、と胸を張ってかぐやに寄りかかった。

〈陣〉は、より強い〈陣〉によって、破壊することが出来る。

しかし無色の靈氣は別として、〈陣〉は本来、排他的だ。

他者の〈陣〉——つまりはそれを構成する〈靈氣〉は、他者にと

つては有毒であつた。

破壊せずに、解除したり、操作したり、吸収したりは出来ない――ごく一部の、例外を除いて。

宵子の行った他者の色を持った霊気をそのまま吸収する〈陣食い〉は、長い歴史の中でも、未だ七例しか報告されていなかった。

もっとも有名な陣食いは、〈神喰らいの九狸〉。

かつて烏壬や金峯山とも肩を並べる五山の一つ、出雲の主尊だった神。

〈神喰らい〉は、ありとあらゆる〈陣〉を吸収したという。

だが、すでに居ない。

烏壬との抗争で、烏壬青竜王に討たれていた。

現在、確認されている陣食いの力を持った神は、一神のみ。そして、その力を持った修験者は、

――歴史上、ただの一人も存在しないはずだった。

希少対決では、明らかに宵子の勝ちだった。

もちろん、水の精霊以上に気軽に見せびらかして良いものでもなかった。

「どうです？　烏壬宵子のこの神通力」

かぐやは、我が事のように自慢する。

「烏壬、ですか？　彼女も？」

武蔵坊が尋ねる。

烏壬の姓を名乗れるのは、本家本流とその子息のみ。
その子息も結婚すれば、男女問わずに姓を変える必要がある。

「そう、烏壬宵子——青竜王の隠し子です」

「って事は？」

あずみが、背後を振り返った。

剣十郎と、風乱坊が、飽きもせずに打ち合っている。

「剣十郎の妹になります」

かぐやが、胸を張って答える。

宵子は、かぐやに抱きかかえられ、照れたように笑っていた。

森には、剣十郎と風乱坊の木と木を打ち合わせる音が響いていた。

028 蛇神を求めて、金峯山

烏壬の三人と別れた後。
蛇の道を辿りながら。

「へへっ、どうよ？ 剣十郎よりも、俺の方が押していただろうが？」

猿顔を満面の笑みで歪めて、風乱坊はご機嫌だった。
あずみは、彼の足を無言で蹴りつける。

「いってえな！ おい」
「うっさいわね」

風乱坊は、しばしばと目をしばたいて、あずみの横顔を見た。
あずみは前を向いたまま、

「ばっかじゃないの」

「なっ、なんだよ一体？」

風乱坊は、戸惑ったように、武蔵坊に助けを求めた。

武蔵坊は無言で首を横に振る。

「ああ、もう腹が立つ。なによあの子。反則じゃん！ あっ」
そして、あずみは、気づいて立ち止まり、素っ頓狂な声を張り上げた。

「わたし、剣十郎と話してないじゃん！」

続けて、風乱坊の足を二回、けっ飛ばす。

「いってえなあ。蹴るコトねえーだろうが？」

「死ねばいいのよ、あんたなんて。気持ちよく敵と技比べしてるあんたが馬鹿！」

風乱坊は、顔を歪め、武蔵坊に視線を向けたが。

「まあ、お前も悪かったな」

武蔵坊は、棒読みで言って、関わり合うことを避けた。

「それで、これからの方針だが」

「決まってるでしょ？ 烏壬よりも先に勾玉手に入れて、見せびらかす！」

あずみが拳を、空に向かって突き出した。

「あれだけ手ひどくやられたんだぜ？ 当分は、姿を見せないだろうよ」

心持ち控えめな声音で、風乱坊が主張した。

「分かってるわよ。でも、平気でしょ？ わたしは水の精霊、その修験者よ」

「どうするつもりだ？」

武蔵坊が尋ねる。

「片っ端から湖をほじくって、神を見つけ、強制的に陸に追い立てる」

「それは、数日後だな」

「なんでよ？」

むっと、あずみ。

「水の中に居るのなら焦ることはない。烏壬には絶対に手が出せないのだから」

「ま、そうだけどさ」

「問題は、陸に陣取っている場合だな。風乱坊」

「なんだ？」

「ざっと飛んで、偵察してきてくれ。蛇神が居るかどうか」

「いねーだろ？ とつくに逃げてるぜ」

「いや、居るかもしれんな。きつと、居るだろう。その場合は、烏壬に獲られないためにも、今日中に収穫するか、それが無理でも、追い立てて水の中に蹴落とす事が出来れば、あずみのいるこちらが随分と有利になる」

「……しゃーねえな。ちよつくら行ってくるか」

「期待してるからね、風乱坊。絶対、見つけて来てよ」

笑顔で、あずみ。

「へへっ、任せておきな」

嬉しそうに、そしてほっとしたように笑って、風乱坊が、風を纏って偵察に向かう。

彼が行った後、あずみは、

「ほんとに、居るの？」

「いや、居ないだろうな」

武蔵坊はあっさり言った。

あずみが、眉間にシワを寄せる。

「ああ言っておかないと、あいつは真面目に捜さないからな」

「……なるほど。苦労するね、座頭ってのも」

「全くだ」

「できの悪いのが一人いるとね」

「……」

「しかし、腹が立つなあ」

あずみは顔を歪ませて、足下の小石をけっ飛ばす。

「いい加減に落ち着け」

「でもさ、全く頭に来るじゃん、あの嬢ちゃん」

「どっちもどっちだったと思うがな」

む、とあずみは口を閉ざした。

二人はゆつくりと、蛇の道に沿って、歩いていく。

「しかし浄化の修験者とはね。参った参った」

あずみは、力なく、ぼやいた。

「ねえ、あれってさ、もしかして、〈九狸〉、じゃないよね？」

あずみは、不安そうに、武蔵坊に尋ねた。

神喰らいの九狸にとどめを刺した修験者は、烏壬青竜王と言われている。

しかし九狸の勾玉は、見つからなかったそうだ。

死力を尽くし、霊気を使い果たした神は、勾玉を残すこともなく消滅するので、そのこと自体は不思議ではない。

が、しかし、『青竜王が、烏壬本山を謀って、九狸の勾玉をくすねた』との風評は山界で根強く囁かれていた。

隠し子・宵子に、それを修験させていた、とすれば彼女の年齢から見てもつじつまは合う。

「それは、ないだろうな」

武蔵坊は、特に気負うこともなく否定した。

「〈神喰らいの九狸〉はただの〈陣〉食いではない、〈神喰らい〉だ」

「どう違うのよ？」

「神を、喰らう」

「……つまり？」

「……………神を喰らう、らしい」

じとりとしたあずみの視線に、武蔵坊は軽く咳払いした。

「まあ、憶測や噂なら、俺もいくつか知っている。ただ、その中のどれが真実か、その中に真実があるのか、俺には判断のしようがない。ないが、九狸は多くの神を屠って出雲を五山にまで成長させている。それに烏壬は、神喰らいを討ち取るためだけに、数十人の修験者や神を失っている。だからただの〈陣〉食いではない、神喰らいだ。その九狸を宿していれば、あの程度の蛇神、どころか眷属に後れを取ることなど考えられないだろう」

「九狸は、死力を尽くすまで烏壬とやり合ったそうだから……枯渴していても、おかしくはないでしょ？」

勾玉は、神にとっての仮死状態に等しかった。

『胎児還り』や、『揺りかご』と表現されることもある。

力を失った神が、力を蓄えるために取る、休眠期……だろうと推測されていた。

生前の力をそのまま発揮する勾玉は極少ない。

特に死にたての神、つまりは出来たての勾玉は、神性が枯渇して

いて当然だった。

そして宿した神力の全てを、修験者が引き出せるわけでもなかった。

二魂を融合した状態でも、神の総力を五割解放できれば良い方だった。

それ以上を求めれば、胎の中で神が目覚める危険が極めて高くなる。

武蔵坊は、あっさりと首を横に振った。

「枯渴していても、九狸は九狸だぞ？ それに九狸は高い知性を持ち、烏壬を呪っている。いわば烏壬にとって最大の〈崇り神〉だ。万が一、奪われたり、復活するようなことがあれば、山界の、特に烏壬の被る被害は甚大ではすまない。だから烏壬本山は『絶対破壊』に拘った。青竜王が烏壬本家を謀ってまで保有していたとして、そんな危険な勾玉を宿した修験者を、圧倒的な戦力になるのならまだしも、あの程度でこんな場所を連れ歩くか？ それも青竜王当人ではなく、なぜ月姫が？」

「それは……」

九狸ほどとは言わずとも身に過ぎた神を宿して、魂を食い破られた者は多い。

特に高い知性と力を持ち、恨みを抱いて死んだ神の勾玉は、暴発する可能性が高かった。

目覚めた神に腹を引き裂かれただけで済んでいる剣十郎など、まだ幸運な方だ。

九狸が目覚めればその崇りは、まず側にいる月姫かぐやに、そして青竜王を含めた烏壬に向かうことになる。

「青竜王が九狸の勾玉を隠しているかいはいかは別にして、おそらく彼女が修験しているのは、別の陣食だろう。それを青竜王がかぐや姫に与えた、または貸し出したと見る方が自然だな」

青竜王の登場によって烏壬はかつてほどの一枚岩ではなくなっている。

烏壬青竜王は、何かと曰くのある人物で、五山の中でも特に封建的な烏壬にあっては、異色の存在だった。

人をたらし込む天才で、彼の組織は烏壬を中心として、烏壬以外の五山、朝野、外洋にまで広がっている。

金峯山にも数人、たらし込まれた信奉者が居ると、噂されていた。まさしく新しい時代、秩序の中心にいる人物だ。

「要するに青竜王が、かぐや姫を懐柔しようとしてる？」

「そんなところだろう、おそらく」

「でも、別の陣食いねえ」

「青竜王は出雲を制圧した男だ。出雲が保有していた勾玉なり類似の神を捕獲していてもおかしくはないし、場合によっては、造ったか」

「造った？ 人工的に？ 陣食いを？」

あずみの声は驚きで、少し甲高くなった。

そちらの可能性など、考えていなかった。

「金峯山でも、研究はしているからな。烏壬の、それも青竜王がやっていないはずはない」

武蔵坊は、のんびりと答える。

様々な神を人工的に創り出す研究は、何処の霊山でも公然と行われていた。

それに成功すれば、わざわざ危険を冒して神を求め、幽谷を彷徨う必要はなくなる。

好きなだけ、好きな数の修験者を産み出すことが出来る。
が、まだ実用段階にはほど遠かった。

すでに猫や犬などを神妖化させることには、五山全てが成功していた。

しかし式神としての利用以外は、まだ出来ていない。

有益な勾玉が取れるほどに育てるには、人の一生程度の時間は必要なのだ。

今は、どれだけ迅速に成長させるかの研究に移っている。

業火の中から、火の精霊を産み出す実験も、一度だけなら青竜王の学院が、成功させている。

勾玉を持たない程度の精霊もどきなら、金峯山も二度、成功を収めている。

他者の〈陣〉を無効化できる浄化に纏わる神の研究も、それらと同様に、場合によってはそれら以上に行われていた。

陣喰いを含めて、浄化の神が産まれやすい土壌は、判明している。
神喰らいの九狸が生まれた出雲本山・旧名、神捨山には、多くの神の亡骸が埋められており、かつては禍々しい妖気が吹き荒れていた。

俱浄王の生まれた緋竜山も、地獄と呼び習わされるほどに靈的に濁った峡谷だった。

浄化の神が産まれた環境は、すべて、常態の生き物では生き残れない鬼気に溢れた環境である。

そのような瘴気吹き荒れる環境を〈幽世^{かくりよ}〉という。

そして五山・富士が、青木ヶ原の幽世で何百匹もの獣を育てたところ、一匹だけ、浄化の神妖が産まれた、との実験結果があった。他の獣は、全て死んだ。

そして神妖となった一匹も、長く生きることにはなかった。妖気を取り込みすぎて破裂、勾玉も残さなかった。

「青竜王は今も出雲を押さえている。神も人も大勢が死んだ影響か、出雲には未だ亡者が溢れていると聞く。そこでならもしや可能かもしれない」

「成功しちゃったわけだ……量産されると、山界の調和が狂いかねないわね」

あずみは難しい顔をした。

頭の中で、宵子の大群を従えたかぐや姫が、ふんぞり返っていた。しかし九狸と比べれば、まだしも重苦しくはない。

「どうだろうな。式神ですら量産までは難しいというのに、陣喰いとなると。偶然に近い成功例だろう……とは、思うが」
そこで武蔵坊は顎に手を当てて唸った。

「出雲を制圧して何らかの知識を手に入れた可能性もあるか。なんせ出雲は神喰らいの九狸を頂点に頂いていた組織。陣喰いに対する知識が何処よりもあっておかしくはない。場合によっては九狸以外の陣喰い、たとえば眷属を出雲が隠していた可能性も。それを青竜王が――」

武蔵坊は、あずみの視線に気づき、苦笑する。

「まあ、気にしてもしょうがない。いずれ分かるさ。それに、陣食

いは有益な能力だ。ありとあらゆる人に恩恵がある。創造できたのであれば、これほどありがたいことはない」

「でもさ、他山じゃん？」

「他山でもさ」

武蔵坊は何かを思い出すように、少し寂しそうに笑った。

それから、いつもののにやりとした笑顔に戻り、

「だいたい、あれは数を揃えたところで、実際の戦力としては大して役に立たないな。ただの眷属、〈陣〉を持たない普通の蛇に、遅れを取るくらいだからなあ」

武蔵坊の言葉に、あずみは苦笑した。確かにあれでは、戦力にはならない。

「ってことは、隠し子って言うのも？」

「まあ、嘘だろうな。烏壬は特に血を重視するからな。上流の方が何かと便利だ。青竜王には二、三十人、子供がいるが、大半は真っ赤な嘘で血の繋がりはないはずだ。そんなことよりも、今は蛇神をどうするか、だが――」

武蔵坊は懷中時計を取り出し、覗き込む。

「その前に、寢床の心配だな。そろそろ午の刻だ。風乱坊が帰ってきたら、一度戻ろう。烏壬よりは、良い場所で眠りたいからな。出来れば酉の刻までには拠点を決めたい」

「そうね。劍十郎って、猫みたいに快適な場所捜すの、得意だったから。こっちは早めに動かないと。でもおじさん。酉の刻とか、ち

よつと古い。六時ね」

時間や距離を表現するとき、若い修験者は、外洋の単位を使う頻度が高くなっていた。

従来よりも、より正確に細かい数字を指定出来るので、何かと便利だった。

もちろん、外洋から持ち込まれた精度の高い時計技術があつてこそ、ではあるが。

「ごほん」

武蔵坊は咳払いして、

「出来れば湿気の少ない洞穴でもあると、助かるのだがなあ」
遠く、森を囲む、山嶺を見渡す。

「わたしは別に、雨が降っても平気だけどね」

水の修験者であるあずみは、雨の中でも不快ではなかった。

風邪をひくことはあっても、雨に打たれて風邪をひくことはない。
逆に湿気が多い方が、風邪をひきにくいくらいだ。

遠くから枝を軋ませ、葉を鳴らして風が吹いてくる。

「へへっ、見つけたぜ。さっきの蛇神だ！ この先の森に潜んでやがる！」

してやった、と言わんばかりの顔で、風乱坊が、風を纏い、舞い戻って来た。

「まじ？」

あずみは武蔵坊と、顔を見合わせた。

武蔵坊が、重い顔で、頷いた。

「あるいは、とも思っではいたんだがな。蛇神は、修験者を喰っている」と記載されていた。一度、修験者を喰った神は、なかなかその味を忘れない……」

「つまり、喰う気満々で、待ちかまえていると？」

あずみは痛そうに顔を歪ませた。

もつとも面識のない修験者の死に心痛めるほど、この世界は甘くもない。

あずみは、婉然と笑って言った。

「あの程度の神の癖に、不逞だね。おしおき、してあげましょう」

「くわっ」

かぐやが怒りの声を出した。

「宵子！ 塩をまきなさい」

「たわけ！」

剣十郎が、慌てて自分のザックを引き寄せる。

現地調達の比較的楽な水や食料と違って、山の中での塩は、貴重だった。

こんなことで浪費されてはたまらない。

烏壬と金峯山、どちらが先に蛇神を捕まえるのか。

別れ間際、その勝負を持ちかけたのは、かぐやだった。

「良いけど？」

あずみは、不適に笑った。

「剣十郎でも賭ける？」

「……………」

「賭けるのは、蛇の勾玉だけで十分だ。それで、よろしいですか？」
武蔵坊が言った。

かぐやは小さく頷いた。

「あら、残念」

そうあずみはかぐやを流し目で見て、口元で笑った。

烏壬の本家に対し、なんたる不遜な態度。
かぐやは奥歯をぎりりと鳴らした。

……なのに、かぐやたちは、不条理なことに千切れて辺りの木に引っかかっている〈織姫の帯〉を回収しなければならなかった。
随分と、出遅れてしまっている。

放棄しようかとも思ったが、織姫の帯は、（かぐや学院の財政力では）金で買えない貴重品だった。
短くなろうとも、いくらでも利用価値もある。

「おのれ、糸みみずめ！」

ぼやきながら、かぐやは帯の端をつまむ。

霊気を通すと、帯はしゅるしゅると巻かれて、かぐやの袖から装束の中に消えていく。

帯はかぐやの身体を巻くように保存されている。

「糸みみず？」

剣十郎が怪訝に尋ねる。

「くわっ！ 手伝え！」

鼻にシワを寄せたかぐやに歯を剥かれて威嚇されて、剣十郎は「なんだ一体？」と言いたい気持ちを含んで、木に登る。

高い枝に引っかかっている帯に、指を触れる。

しゅるしゅると帯は綺麗に折りたたまれて、剣十郎の手に納まった。

この帯を持ったかぐやは、剣十郎が想定していた以上の戦力にな

っていた。

昼の間は生命線になる。

全てを回収しておいた方が良さだろう。

剣十郎は、ため息を吐きながらも木を移動し手際よく次の帯も回収する。

かぐやは複雑な顔で、それを見ていたが、直ぐに帯の回収に戻る。

「このままでは、糸みみずに先を越されてしまいます」

かぐやが、焦燥に満ちた声を出す。

「あの糸みみずめ。腹正しい糸みみずめ。発情した糸みみずめ」

そしてぶつぶつと呟いている。

「だから、糸みみずって何だ？」

剣十郎は、何本か帯を集めると、かぐやの横に降り立って聞いた。その質問に、かぐやは陶人形のような無表情になって、剣十郎を見上げた。

そのままじっと、剣十郎の目を見つめている。

剣十郎は、作り笑いを浮かべて、慰めるように、かぐやの肩を叩き、

「まあ、そう嫌ってやるな。糸みみずだって、あれで良いところがある」

魚の餌になるところとか、魚の餌になるところとか、魚の。

しかしかぐやは冷たい顔で。

「やけに庇うのですね？ あの手みみずのことを」

「……………」

剣十郎は、困ったように、顔を歪ませた。
控えめに、肩に置いた手を撤退させる。

剣十郎は、ちょっと後悔していた。

他山との交流は、かぐやにとって、良い経験になるだろうと思ったのだが、あずみたちと引き合わせたのは、早計だったのかもしれない。

せっかくいっぱしの修験者になっていたのに、ほんの少々、目を離した隙に。

おおかた、糸みみずに驚いて、からかわれたのだろうが、烏壬自慢のわがまま姫に、戻ってしまっていた。

半年前、笹原の手引きによって否応なく会わされたかぐやは、噂のとおり、つーんとした、生意気な姫だった。

本家本流であることを鼻にかけ、剣十郎を見下していた。

だから、剣十郎は笹原の話に乗ったのだ。

気楽にやれそうだと踏んだから。

半年の間、ままごとのような学院の活動に協力する。

それだけで対価にはそれなりの金と、天女の手形。

滞在中の飯と寝床も学院が用意する。

好条件だった。

天女の手形は烏壬に於いて最高の免罪符だ。烏壬系の霊山で、自

由に飯と路銀をたかることが出来る。

しかし了承して数日で盛大に後悔した。

かぐやと宵子、笹原と剣十郎の四人から始まった学院ごっこ。

笹原と宵子が学院に留まり、剣十郎とかぐやの二人が山域を駆け回った。

「足手まといにならないように」

出発する前、つんけんとした態度で、勇ましい言葉を発した烏壬かぐやは、しかしあっという間に足をくじき、歩くことも出来なくなり、終始、剣十郎の背中におぶられていた。

しかし口だけは喧しく、ただひたすらに我が儘三昧。やれ、虫がいるだの、ご飯がまずいの、雨が降ったの、廁がないの、風呂がないの、布団がないの。

夜は夜で喚き続け。

朝は朝で喚き続け。

昼は自分だけ背中でごっすり眠り。

起きると、また喚く。

どうしようもない、足手まといだった。

想像していた山と、現実の山。

想像していた自分と、現実の自分。

本家本流に産まれたかぐやはどとは言わずとも、青竜王の血を引く剣十郎にも、覚えはあった。

山頂で大事に育てられたかぐやの空想は、彼岸のように遠く、現

実とは掛け離れ。

そしてそれを認めるには、かぐやの持って生まれた地位は高すぎ、若すぎた。

……と庇ってやるのもむかつくほど、我が儘だったのだが。

そんなことを思い出していた剣十郎に、

「くわっ」

かぐやが鼻を歪ませた。

「ぼけっと突っ立ってないで、早く回収しなさい！ 金峯山に先を越されてしまいます！」

「別に、かまわないだろう」

ため息混じりに剣十郎が言うと、かぐやは驚いた顔をした。

剣十郎はかまわず、

「修験者最大の敵は、神じゃなく、功名心だ、と誰かが言っていた気がするが、誰だったかな？ 功名心は犬を殺す……ああ、笹原だ。当てにならないな」

「下らないことを言っていないで！ 命に代えても勾玉を手に入れて見せる、あなたには修験者としてのその程度の気概もないのですか！？」

「ないなあー」

「くわっ、修験者なら——」

「なあ、かぐや。お前が修験している神は、何だ？」

「……月夜視ですが。それが、なにか？」

かぐやが、警戒感を漂わせた怪訝な顔で、問い返す。

「そうだ、月夜視だ。教えておいてやる。奥駆けでの基本、もっとも大事な心構え、優先順位だ。まず大切なのは人の一魂、次が宿した神の一魂、最後が、獲物の一魂だ。あの程度の神を捕らえるために、お前の胎の神は、失って良いような安い神じゃない。その月夜視にだって、かぐや、お前を犠牲にするほどの価値はない」

師から教わった修験者としての常識の話を、半分は冗談めかして立てた人差し指を振りつつ、剣十郎は言った。

けつきよく、修験した人が死ねば、何もかもを失うのだ。

もつとも、剣十郎の師は異端であり、修験者の大半は、人の魂よりも宿した神魂を第一に考える傾向にあった。

剣十郎は、どうせ喧しく言い返してくるだろうと決めていたが。

かぐやは、ちょっと固まって。

二歩、三歩と後ずさって。

黙々と帯を集め始めた。

剣十郎は、眉を顰めた。

ぼんやり、それを眺めながら。

直ぐに、苦笑する。

たった半年、かぐやは、見違えるほどに成長している。

剣十郎は、まるで師のような気分で、誇らしくすらあった。

自分に、道を示してくれた大勢の大人たちも、こんな気持ちで居

てくれたのだろうか。

「何が、おかしいのですか？」

「別に」

剣十郎はぶっきらぼうに呟いた。

剣十郎が帯を回収しようと手を伸ばしたら、バツハが帯の端に齧り付いていた。

手伝おうとしているのか、帯はバツハの靈気で、バタバタと揺れているが、いっこうに枝からは剥がれない。

剣十郎は、遠慮がちにその帯をつまみ、しゅるりと巻き取った。

バツハはとぼとぼと歩いて、たき火の側で、丸くなった。宵子が、蛇を喰っている横で。

「かぐや、この帯少しくれないか？」

「かまいませんが。何に使うのです？」

「鞘つけたままやり合ったら、鞘が割れた」

言いながら剣十郎は、割れた黒呂の鞘を合わせ、帯で縛っている。

「……馬鹿ですか。あなたは」

かぐやが、肩を落としてため息をつく。

「宵子！　いつまで蛇を食べるつもりですか！　見ているこちらのお腹が痛くなります！　行きますよ！」

全ての帯を回収し終え、かぐやの、子供っぽい声が響いた。

烏壬の出発だった。

030 蛇神を求めて、烏壬（一）

蛇神の森の、中央に聳える〈白蛇の島〉

外から見下ろしていたときとは逆に、麓の地形は見取れるが、山頂付近は霧に覆われ、目視することが出来ない。

蛇の道は、その〈白蛇の孤島〉に向かい延びていた。

「ところで剣十郎」

「なんだ？」

「あなたは金峯山の修験者が後を付けていることに、気づいていましたね？」

「そりゃ、まあな」

「いつ頃から？」

「三日ほど前から」

「三日！？」

かぐやが目を丸くし、立ち止まる。

「この森に先に来ていたのではないのですか？ 彼女たちは」

「そんなこと言ったのか？ あいつら？」

剣十郎も立ち止まり、のんびり振り向いた。

「……………そのような話は向こうも……………私もしませんでした」

「だろうな」

「教えてくれればいいのに」

斜め下を見て、ぶつぶつと恨みがましくかぐやが言った。

「教えて気づかないふりが出来たか？」

「……どうでしょう」

言われて考えると、「もちろん出来ましたとも」と言いきれぬ自信はかぐやになかった。

なので、かわりに質問する。

「こちらが気づいていることに気づかれて、何か困ることでも？」

「行動が変わる」

「どう変わると？」

「どう変わるかは分からないが、もし俺たちがあいつらを尾行して気づかれたのなら、今まで通りだらだらついて行くか？」

少しかぐやは考えて、

「それはまあ、出来ませんね」

「だろう。だから行動が読めなくなる。まあ、風乱坊とあずみの性格ならこっちより先に蛇海に入って出し抜こうとしただろうけどな。知らない修験者が座頭みたいだったので、あの段階では断定出来なかったが、あの三人の関係を見ていた限りでは、やはりそうなっていただろう」

「そう言えば何故彼らは出し抜こうとしなかったのでしょうか？」

こちらが気づいていないと思っていたのでしたら、私なら蛇海に入った段階で確実に先回りして勾玉を回収しようとしてはますが？」

「焦って神と戦うのは危険だからな。それに意外と動きにくいんだよ。尾行してて、相手が気づいているか気づいていないか分からないときは。確実に気づかれているとか、気づかれてないとか、断言出来れば踏ん切りも付くんだけだな」

「そんなものですか」

「そんなものさ。互いに命の取り合いならまだしも、ただの獲物の競合だからな。金峯山と烏壬の微妙な関係を考えれば下手な行動は取りにくい。ましてかぐやは本家本流の金羽を纏っているしな。喧嘩になると大変だ。無意識のうちにどうしても遠慮してしまう」

「なるほど」

逆の状況だった場合、確にかぐやも決断しにくかっただろう。

剣十郎なら、平然と動いた気もするが。
ちらりとかぐやは剣十郎を見る。

剣十郎は、のんびりと、

「それに張り付いていて貰えた方が色々とありがたかった。風乱坊とあずみの性格や力量は知っていたし、万が一の余剰戦力に最適だったからな」
しれっと言う。

「金峯山の助けをあてにしていたのですか？」
啞然とするかぐや。

「計算には入れていた。神は予想が付かない存在だ。俺たち三人だけならもう少しは慎重に行動したさ」

「つまり、」

かぐやが唾を飲み込み、緊張した表情で尋ねる。

「二人で勝てるというのも、嘘ですか？」

「いや、」

言いかけ、真剣なかぐやの視線に気づいて、剣十郎が黙った。
それから、問い返した。

「戦ってみてどう感じた？」

かぐやは一呼吸置いてから、挑むような視線で、

「勝てる、相手でした」

「そうだな。俺たち二人だけで十分に狩れる体勢に持ち込めていた」

かぐやがホッと息をつく。

「それでも、あの神を見つけるまでは何が潜んでいるか不明だったし、戦力は多いに越したことはない。それも都合の良い戦力なら尚更な」

「まあ、そうですね。………競合する他山の修験者を戦力扱いるのはあまりに都合が良すぎると思います」

「これから先は使えない。俺たちだけでやるしかない。気を引き締めていくぞ」

言って剣十郎が歩き出す。

「望むところです」

頷き、その後をかぐやが続く。

031 蛇神を求めて、烏壬（二）

烏壬の三人は、〈白蛇の孤島〉を眼前に望みつつ、蛇神の道を進んでいく。

しばらく行くと、蛇神の道は、〈白蛇の孤島〉に断ち切られるように、二つに分かれていた。

その片方の道に、僅かながらも人の足跡あしあとが続いている。辺りは、水で濡れていた。

「こっちに行ったようですね、金峯山は」

かぐやが、呟いた。

そのままそちらに歩いていこうとする。

剣十郎は難しい顔で、近場の木々や、水の中を検分していたが。

「それは、どうだろうな」

かぐやは立ち止まり、

振り返って、「どう、とは？」 言った。

「反対方向の道の方が、蛇の這った跡が新しい」

かぐやは、急いで分岐点まで戻ってくると、蛇の道をのぞき込む。水の濁り具合は同じ程度。

しかしよく睨み付けて見比べると、足跡あしあとのない道の底には、新しく刮かがれた跡があった。

逆に足跡あしあとのある道の底には、苔が群生していて、しばらく蛇神が

使用した様子がない。

ゆつくりとかぐやは顔を上げ、

「つまり、金峯山は、方向を間違えたと？」

剣十郎は、何も言わない。

しばしかぐやは、黙考していたが、

「足跡が、偽物である、と？」

「そうだな。金峯山の足跡はアテにならない。あずみは水の修験者だし、風乱坊は、風の修験者だ。反対の道に足跡を付けた後、武蔵坊一人くらい、どちらも担いで移動することが出来る。行者はこういう偽造を良くやるんだ。あまり意味ねーけどな」

自嘲気味に苦笑する。

「つまり足跡は、私たちを引っかけるための偽物だと？」
かぐやは眉を潜めた。

「その可能性もある。そう思わして、本物かもしれない。水のあずみなら、蛇の這った跡でも偽造しかねない――してないとは思うけどな。で、どっちに行く？」

しばらくかぐやは、蛇の道や足跡を調べていたが。

「では、足跡のない方を進みましょう」

「なぜ？」

「私たちにとって、金峯山がどちらに行ったかは、関係がありません。金峯山が居ても、蛇神が居なければ意味はありませんから。重

要なのは、蛇の進んだ方向です。そちらが、正解です」

「他にも選択肢があるぞ」

剣十郎は歩んできた道を振り返って見つめていた。

「蛇神が出てくる可能性は少ない。あっさり出てくるのなら、金峯山に先を越されているだろうし。なら、今日のところは引き返して、拠点を決める、という選択もある。長丁場を覚悟するなら、普通は到着して最初に安全な拠点を構築するものだしな。初日としては、少し森に深入りしすぎている。それに確実を期すためにも、狩りは夜間に限定して、明るい内は休みたい。蛇神は月夜視が単独で屠つて、俺は眷属対策として宵子の守りに残る。そういう体勢だ。どうする？」

かぐやは、唇に指を当て。

「そうですね。異存はありません。ですが、今日はもう少し、歩きたいです。せっかく新しい痕跡が目の前にあるのですから。うまく行くと、蛇の住み処が見つかるかもしれません」

剣十郎は、何気なく辺りを見回した後、

「そうだな。じゃあ、そうしようか」

三人と一匹は、足跡のない道に向かい、歩き出そうとした。

その時、足跡のある道の奥から。

『しゃああああああああ』と、誘うような、鳴き声。

水の弾ける音。

少し、距離はあった。それが、遠ざかっていく。

かぐやと剣十郎は、顔を見合わせた。

「今のは、なんですか？」

かぐやが問う。

「蛇神だろう」

ぼそりと、剣十郎が呟く。

「と、いうことは、……金峯山は？」

「道を間違えたか……いや、」

剣十郎は意識を研ぎ澄まし、耳を澄ました。

先ほどの鳴き声とは別の方向から、時折、遠く小さく蛇の鳴き声
と、木が倒壊する音が聞こえて来る。

滝の流れ落ちる水音に混じって山々に反響している。
不確かだったけれど。

「あいつら、戦っているぞ」

かぐやは眉を寄せ、耳を澄ませる。

しばらくして、眉を寄せ。

「何も、聞こえませんか？」

「微かだが、間違いない。聞こえてくる。始めてるようだ」

かぐやは耳に意識を集中させる。

しかし、何も変わった音は聞こえない。
水音、風の音。鳥の鳴き声。穏やかな幽谷の響きのみ。

「と、いうことは？」

「蛇神は、二匹いる」

「居ましたか」

「居たようだな」

「このような狭い場所に、蛇神が二匹もとは……」

「狭い場所だから、だろう。こういう天敵のいない閉鎖された環境で蛇が一匹、神になったんだ。ましてあれだけの眷属を抱える蛇神に。妖はいずれ神になる。溢れかえる眷属のうち数匹、神に育っていてもおかしくはない……場合によってはあれよりも大きい神がいる可能性だってある」

「あれよりも、ですか？」

「可能性としては、だけどな。蛇神の這った跡を見る限りでは、あれよりも大きいのは居ないと思うが……。相変わらず断言するには情報が足りない」

「……自信はないと？」

「そりゃあな。ガキの頃は大人の後をついて回るだけで必死だったし、一魂になってからはずっと流浪やってたからな。俺もそんなに神狩りの経験はないさ」

剣十郎は真剣な目で、森の奥を見つめたまま、
「どうする？」

「二匹いるのなら、戦っている方に行きましょう」
「なぜ？ 捕らえるなら、空いている方だろう？」

剣十郎の問いかける表情に、かぐやは笑顔で答えた。

「戦いを見られたお返しです。それに他山の戦いを目にするなど、滅多にない機会です。それに金峯山は蛇神が複数居ることに気づいていないのでしょうか？ ならもう一匹は、彼らが帰ってからゆくりと捕獲すれば良いだけの話です」
かぐやが自信たっぷりに胸を張った。

「なるほど。じゃあ、そうするか」

剣十郎も、あっさり同意した。

しかし、その顔はまだ険しかった。

遠く、音の聞こえてきた方を見る。

木々を押し倒す音に、蛇神の鳴き声。

音は薄く、風の音や水の音にかき消されながら、途切れ途切れに、聞こえてくる。

森や白蛇の孤島に反響しながらの音からは、正確な距離も方向すらもつかめなかった――それなりに遠いこと以外は。

今からそれを追跡しても、おそらく間に合わないだろう。

「もしかしたら」

宵子が怖々と、

「蛇でなく、熊と戦っているかも」

「それはないでしょう。さすがに」
かぐやが否定した。

032 蛇神との戦い、金峯山（一）

武蔵坊は、四八歳。

一度は実戦を退いた修験者だった。

金峯山で、棒術を中心とした道場を開き、後人の育成に当たっていた。

あずみも風乱坊も、その道場の門下生である。

武蔵坊自身は、有名な修験者でも、有能な修験者でもなかった。宿した勾玉の価値でも、あずみや風乱坊に遠く及ばない。十把一絡げの修験者だ。

あずみの父・葉桜才蔵の部下として、それなりに山域を渡り歩いてきたが、彼の部下だったことと、未だ生きていること以外に、自慢できる武勲など何一つ持たなかった。

そして武蔵坊は、葉桜才蔵の引退に合わせて行者から身を引いて、道場を始めた。

武蔵坊は、有名な修験者でも、有能な修験者でもない。だから道場は、寂れていた。

あずみが武蔵坊の道場に通っていたのは、武術を学びに来るというより両親の昔話を聞きに来る意味合いの方が強かったし、風乱坊はあずみの尻を追っかけてきただけだ。

彼らは幾つかの道場を掛け持ちしていて、金峯山では、そちらの門下生として認識されていた。

じっさい武蔵坊は、それほど二人に何かを教えた覚えがない。

あずみが、流浪になると我が儘を言い出した。
のは、彼女が一七歳の時。

あずみから父を説得してくれと、口やかましく頼まれた。

武蔵坊はもちろん、断った。

しかし二週間後、武蔵坊の道場に、葉桜才蔵が、娘・葉桜あずみを連れてやって来た。

「すまん、頼む、復帰してくれないか。君も若くはないが、引退するほど、年老いたわけでもないだろう。このあばずれの面倒を見してくれる人間が、お前以外に思いつかなかった。行者として、指導してやってくれないか」

精も根も尽き果てた、そんな弱り切った顔で、葉桜才蔵は武蔵坊に項垂れるように頭を下げた。

彼の横では、あずみが、挑戦的に、含み笑っていた。

どこの山にも属さず、たった一人、己の才覚のみで幽谷を渡り歩く流浪——ではなく、靈山の実戦部隊——行者、で手を打ったのは、葉桜才蔵のなした交渉の成果か、全面降伏か。

武蔵坊としては、願ってもない申し出だった。

武蔵坊には、のんびり道場をやるほどの才覚など始めから無かったし、日々蓄えは減少していた。

武蔵坊は、流行らない道場をたたみ、行者として復帰した。

葉桜才蔵が新設した独立部隊の座頭として。

一流の修験者の供ではなく、今度は、その娘の先達として。指導者として。

そういう意味では、この森で出会った烏壬の三人、烏壬剣十郎の役割と似ていなくもなかった。

神の勾玉を入手するのは、確かに大事な目的なのだが、それよりもあずみと風乱坊、二人の腕白修験者たちを一人前に成長させる事が、武蔵坊にとっての最重要の仕事だった。

「二人とも。俺たちの相手は烏壬ではなく、蛇神、更には自分だと言うこと、間違うなよ」

「もちろん、分かってるわよ」
「とうぜん、わかっているさ」

一抹の不安を感じつつ。

「……なら、良いんだが」

武蔵坊は、眼前の、神を見上げた。

蛇が、鎌首をもたげた。

『しゃあああああああああーっっっっっっっっっっっっ！』

武蔵坊たちを威嚇してくる。

取るに足らない、蛇神だった。

033 蛇神との戦い、金峯山（二）

相手は、この程度の蛇じゃなく、間違いなく烏壬だ。

それはあずみにとっての確信だった。

あずみは、自らの深奥に、自らの人魂に、そして宿した神魂にも、意識の触手を伸ばした。

神の色で染めた人魂は、神の色より薄いけれど、神と同じ彩りを持っている。

あずみの色は、水の彩り。

精霊の御魂も、もちろん水の彩り。

小さな井戸、人の魂。

大きな井戸、精霊の魂。

二つの井戸の奥から、水が溢れるような意識。

水が溢れてくる。

水が溢れてくる。

二つの水流が交わり一つとなり、身体の間々まで広がっていく。いつものように、不思議な記憶が水にのって、漂ってくる。

ほんの少し、不鮮明な、澄み渡った泉を泳いでいる、流れている、漂っている、感触、香り、音——霊夢。

眠る神が見ている夢。

産まれる前の胎児のように、安らかに夢見る神を起こさぬように、赤子をあやすように、あずみは、精霊の神性を借り受ける。

神の神性で、自らを染め上げる。

あずみの濡れた黒髪が、薄い青色に転じていく。

浅黒く豹のように引き締まった身体も、透き通った白く柔かな水の質感に変わっていく。

あずみの身体から、色素という色素が、流れるように抜け落ちていく。

両足が柔らかく溶けて融合し、蛇の道を満たす水とも一緒になる。

意識が水の中を広がっていき、意識の及ぶ範囲で、水はあずみの身体となる。

水の修験者。二魂融合、水精霊のあずみ。

あずみが腕を振るう。

水となった腕を。

腕となった水を。

水流が空中を奔って、蛇神に絡みつく。

『しゃあああああああああああーっーっーっーっーっ
っ！っ！』

蛇が身体を軽く振って、拘束を引き裂いた。
水しぶきが飛び散った。

034 蛇神との戦い、金峯山（三）

風乱坊。

二一歳。

風の修験者だ。

もつともあずみのような〈精霊〉を修験しているわけではない。

風乱坊が修験した神は、強風の吹き荒れる溪谷で生まれ育った猿の神。

その名もそのまま〈風陣猿^{ふうじんざる}〉。

風乱坊は、風の験力は好きだが、この猿神は大嫌いだった。猿を宿して猿顔になった、と周りの奴らから、馬鹿にされる。

風乱坊も、猿を宿したからこーいう顔になった、そう思っている。

蛇や猫とは違い、〈魄^{ハク}〉の厚い人間が、神を修験出来る期間は、〈魄〉の成長しきらない生まれてから僅か三年の間だけ。その間だけ、人魂を、神の色で染めることが出来る。

しかし産まれて直ぐに気に入った勾玉を自分で選ぶ、など出来るわけもない。

修験する勾玉は、大人任せになる。

修験者の力は生まれで決まる、そう言われる所以だ。

風乱坊は、産まれて直ぐに風陣猿の勾玉を与えられ、風陣猿の修験者となった。

剣十郎のように、〈崇り神〉を宿して腹を割かれるのも考えものだが、両親にはもう少しマシな勾玉の候補は無かったのかと、愚痴りたい心境である。

出来ればもっと、弱くても良いので男前の神を修験させて欲しかった。

と、恋する男はそう思う。

風乱坊は、意識を集中するために、両手で印を組んだ。

風乱坊は、一魂から、風を呼び起こす。

神魂からも、吹き荒れる風を。

心の奥にある溪谷から、風が吹いてくる。

風に乗って漂ってくる見慣れた神の記憶。

いつもの溪谷を、風の谷を、飛翔する、俺。

「いっくぜえ！」

風乱坊が、とんと地を蹴り跳躍した。

その時には、薄い茶色の〈陣〉に包まれている。

上顎が突き出し、大きく開いた口からは、鋭い犬歯が覗いていた。ぼさぼさだった黒い髪は、茶色の髪に変わって風になびいている。

振り上げた両腕にも、ふさふさとした茶色い獣毛が強風になびいていた。

強風が、風乱坊の周りを渦巻いている。

風乱坊の周りだけを、渦巻いている。

吹き荒れる風に包まれ、知性と活力を秘めた猿が、にやりと笑う。

風の修験者。風乱坊。

の戦闘態勢、擬神となった姿。

風をまとい、歩くよりも簡単に。自由自在、空を泳ぐ。
風を吹かし、風に吹かれ。

案外猿も、悪くない。

そう思える時間だ。

風乱坊の〈風〉は宿業しゅくごうであり、勾玉から放出される気の三割程度は自然と風になる。

力を秘めた風であり、〈陣〉でもある。

風乱坊は、錫杖の先端に靈気を集中する。

錫杖の先端で、風が渦を巻く。

〈風〉が風を呼び、辺りの風を取り込み〈風〉として密度を増す。

風乱坊の手にする錫杖、その穂先ぶら下がった六つの輪・鳴環が踊るように震動する。

環錫杖を、蛇神に打ち落とす。

〈風〉の刃が放たれ、〈風〉の刃が蛇を引き裂く、

——筈だったのだが、錫杖の一撃は、蛇の鱗に小さなひっかき傷を作っただけだった。

風乱坊の風は辛うじて蛇神の〈陣〉を突破していたが、神の〈陣〉を突破したからといって、蛇神の守り全てを無効化したわけではなかった。

鱗も、鱗の中の肉体も、靈気によって満たされている。

生半可な攻撃では、神に致命傷を与えることなど出来ない。

「けっこう、かてえじゃないか」

風乱坊が、猿そのままになった猿顔を、歪めた。

褒め言葉の半分は、烏壬の修験者たちに対してだった。

蛇を比較の物差しとすれば、かぐやの帯は、あずみの水よりも拘束力を発揮していたし、剣十郎の斬撃は、風乱坊の真空よりも、ダメージを与えていた。

『しゃあああああああああーっっっっ！』

蛇が大口を開けて、風乱坊を襲撃した。

風乱坊はそれを余裕を持ってかわした。

「だがよ！」

風乱坊が錫杖を下から上に振り上げ、叫ぶ。

風が真下から真上に吹き上がる。

烏壬と違い、こっちはもう一人いる。

頼れる修験者が。

蛇神の巨体に、あずみの水が巻き付き、動きを鈍らせた。

風乱坊の吹き上げた風が、風乱坊の前に、巨体を持ち上げた。

暗赤色の光沢を放つ、岩熊の修験者、武蔵坊だった。

「ぬん！」

武蔵坊が、迫る蛇の頭を鋼鉄の六角棒で殴りつけた。

衝撃に、蛇神の大口が一瞬で締まる。

剣十郎に切り裂かれた頭部の傷が、ぱくりと開いて、紫色の血を吐き出した。ずん、と蛇神は勢いよく大地にたたき付けられる。

「ひょう！」

喜色満面。

風乱坊は錫杖を振りかぶって重力よりも早く急降下、蛇の頭部に有りっ丈の靈力を注いだ〈風〉の追撃を仕掛けた。

乱れた蛇神の〈陣〉を切り裂き、ぶしゅり、と蛇神の頭部から、紫色の粘液が迸る。

『しゃあああああああああー！ー！ー！ー！っ！！』

蛇が身体を大きく揺り動かして、転がりもだえた。辺りの樹木が次々となぎ倒される。

風乱坊と武蔵坊は巻き込まれないように、跳び離れ、距離を取った。

「へへっ、烏壬にや悪いが、この獲物、俺らのだな！」

「風乱坊、油断はするな。神の一撃は、全てが致命に繋がる」

「解ってるよ、俺やあずみがそんなへまやるもんかよ。あんただけが、気を付けてりゃ問題はねえーよ！」

風乱坊は、上機嫌で軽口を叩いた。

風乱坊は擬神化すると神魂の影響を受け、普段よりも昂揚する癖があった。

蛇神は、武蔵坊たちに尾を向けると、水しぶきを上げて、泳ぐように道を遡って逃げていく。

035 蛇神との戦い、金峯山（四）

「へっ、逃がすかよ！」

風を纏った風乱坊は、疾走する蛇神よりも、速力がある。

あっという間に追い越して、蛇神に追撃を加える。

巨大な蛇神に挑む風乱坊は、蛇にまわりつく蜂のようだった。

蛇の長い胴体は、とぐろを組み、攻撃するときには伸縮自在の武器になるが、逃げるときには、無防備な死角をさらけ出す。

風乱坊は、蛇の攻撃をかわし、その隙だらけの軀に、真空の錫杖を蜂の針よろしく、突き刺していく。

蛇に対してか、風乱坊に対してか、それとも小回りの利かない自分に対してか、武蔵坊は困ったように顔をしかめた。

どすんどすと地響きを立て、後を追う。

武蔵坊の前に、しゅるりとあずみが身を出した。動き自体は、まるで水で出来た蛇のようだ。

「乗ってく？ 旦那？」

「頼む」

あずみの背中、人だったらお尻の辺り、今は水の尾となっている場所に、どすんと武蔵坊は身を投げた。

水に揺らぐあずみの服を、手綱のように掴む。

「重いね」

顔をしかめてぼやきながらも、あずみは軽快に流れ進み、蛇の後

を追っていく。

『しゃあああああ——っ！』

蛇神が怒りの鳴き声を発して、あずみに食らいついた。

水しぶきの煙幕を張りながら、あずみが身をかわす。剣十郎たちの戦いを見、蛇神の動きはあらかた視えている。

「ぬんっ」

あずみの上から、武蔵坊が鉄棒を振るう。

蛇神の胴体がきしみを上げる。

あずみも、水を鋭く尖らせて、蛇神に突きかかる。

鞭のようにうねらせて、眼を叩く。

風乱坊が舞って、蛇神を削っていく。武蔵坊が鉄棒を振るう。

『しゃあああああ————っっ！！』

蛇神の体中から、紫色の粘液が滲み出ていた。

しかし頭部の傷以外は、それほど深くはない。

仕留めるまでには時間が掛かるだろう。

しかしそれは時間の問題であり、この場合問題ではなかった。

持久戦は、神と戦うときの基本である。状況によつては、数ヶ月かけて追い込むこともある。

じわりじわりと神の力を削いで、神の情報を集め、無力化していく。

神の一撃は強力であり、人は総じて脆く、喰らえば、致命にいたる。

特にこのような山奥で大けがを負えば、死に等しい。

焦りは行者のもつとも忌むべき行為。

だが。

「ちっ」

風乱坊が、舌打ちした。

蛇の道の進行方向に、湖が広がっていた。上空から彼はそれを確認した。

蛇神は湖に逃げ込もうとしている。

逃げ込まれると厄介だ。

水の中だとあずみしか戦えなかった。あずみだけでは、この蛇は捕らえきれない。

時間が掛かる、それはいやだと、風乱坊は思考した。

烏壬には、剣十郎には、負けたくねえー。その想いが彼を決断させた。

この相手なら、真っ正面から大きな一撃をたたき込むことが可能だと。もう一押しで、仕留められると。

判断を狂わせた。

風乱坊は、風を巻き起こして、蛇の前方に回り込んだ。

真っ向、神の鼻先、進行方向ど真ん中に。

蛇神が、

『しゃあああああああああああーーーーーーっ
っ！！！！！』

と怒った。

「風乱坊！」

武蔵坊が叱責の声を荒げる。
だが聞いてない。

「俺をなめるんじやねえ——よ！」

風乱坊が風を唸らせ、風の弾丸となり、真正面から突撃する。

『しゃあああああああ————』

「っつ！っ！」

あずみは水の鞭を盛大に伸ばし、蛇神の頭部を縛り付けようとした。

少しでも神の動きを制するために。

神の一撃は致命になる。

蛇神の氣息を浴びれば。飲み込まれれば。風乱坊は。

蛇神が、風乱坊に食らいつく。

風の弾丸が、真横へと軌道を変える。蛇のあぎとは空しく虚空を咬んだ。

再度軌道を変えた風乱坊は、蛇神が振り向くよりも早く、横つ面に体当たりをかます。

風圧に押され、蛇神は蛇の道から外れ、樹林に倒れ込む。

〈風〉の刃が、森の木々を切り裂き、騒音と土煙と、水しぶきを盛大に巻き起こした。

「へへっ。逃がさねーぜ」

風乱坊は、勝ち誇るように笑み、鼻の下をこすった。

湖の縁に着地する。

「ばか」

あずみは、ほっとため息を吐いた。

蛇が、森の中で、ちろりちろりと舌を出し。

ゆっくりと鎌首を動かして、すでに三方を取り囲む、風来坊、武蔵坊、あずみを順繰りに威嚇していた。

が、湖を背にした風乱坊ではなく、武蔵坊に、向きを定めた。

『しゃあああああああああー！ー！ー！ー！っ！っ！』
と蛇は啼いた。

「てめえ」

風乱坊が、猿顔を軋ませ、じりつと腰を落とす。

「風乱坊！」

あずみが叫んだ。

「何かが、来る！」

あずみの水が、震えていた。

風乱坊が、湖を振り返った。

ぶくぶくと泡立ち、湖が暴れていた。

湖が盛り上がり、岸边へと高速で迫り来る。迫りながら、盛り上がった湖が弾けた。爆音をとどろかせ、水柱が三つ、立ち上った。

巻きあがった水が滝のように落下し、岸边へと降り注ぐ。

水の瀑布が落ちきった時、そこに、蛇神が居た。

山のようにそびえる三つの頭を持つ蛇神。

ほおずきのような赤い眼が六つ、ぬらりと輝いていた。

三つの頭が、風乱坊を、ゆったりと見下ろしていた。

三つの頭が、ちろりと舌を揺らめかせる。

一つ一つの頭部が、一つ首の蛇神よりも、太く逞しい。

それが、ずんぐりと太い胴体で一つとなり、岸边に乗り上げ、後ろは湖に沈んでいた。

「……おおもの、じゃねーか」

見上げる風乱坊が、かすれた声を出した。

完全に、蛇神の間合いに取り込まれている。

『しゃあああああああああああああ——————
っっ——！』

風乱坊に、中央の蛇の頭が打ち落とされる。

風乱坊は、風を纏って跳躍した。跳躍したところに、右の鎌首が、食らいついてくる。

風を吹かし、方向を転じ、余裕を持ってそれをかわす。

そこに、大きく口を開けた左の大蛇が、待ちかまえていた。

もう一度、風を吹かし、風乱坊は方向を転じ、かわし——

真ん中の蛇のあぎとが、目の前で開いていた。

風乱坊の動きが止まる。

右の蛇のあぎとも開いた。

左の蛇のあぎとも開いた。

風乱坊は、真上に、上空に逃げようとした。

すべての蛇の口から、濃紫色の靈氣が迸った。

至近、致命の靈氣が吹き荒れ、風乱坊を包み込んだ。

広範囲の風を占有する風乱坊は、その風を穢されると、行動力を一気に失い、ダメージを受ける。

風系修験者最大の弱点だ。

風乱坊は、一度上昇してから、錐もみしながら落下していった。

「風乱坊！」

あずみは叫んだ。

紫色の靈氣に巻かれた風乱坊は、深奥の神魂から風を吹かし、体勢を立て直そうともがき、あずみの呼びかけに恐怖に引きつった顔をちらりと向け、そのまま待ち受ける蛇神の口腔へと呑み込まれていった。

真ん中の大蛇が、ゆっくりと喉をうねらせた。

満足そうに、舌をちろちろと揺らして。

勝ち誇ったように、左右に生えた蛇の顔を交互に眺めた。

左右の蛇頭が、顔を見合わせた。

二つの首は、揃ってあずみに向き直り。

『しゃあああああああー！！！！っ！！！』

悔しげに、啼いた。あずみは、中央の首を睨み付けていた。

「撤退だ！」

「どうやって！」

三つ首の蛇神が殺到してくる。

あずみは水滴をまき散らしつつ、木の枝を縫うようにして逃げる。三つ首の蛇神は樹木を押し倒して押し寄せる。

三つの首の攻撃をかわしながら、あずみは水の鞭を鎌首にたたき付けた。

鞭は、蛇神まで届かなかった。

蛇神の〔陣〕に侵され、ただの水となつて蛇神に降り注いだ。

「おまえは、湖に飛び込め！」

武蔵坊は一つ首の蛇を鉄棒で殴り倒す。

一つ首の蛇は起きあがると頭を振った。

鎌首をもたげて、ちろちろと舌を出し、武蔵坊の退路を断ち、威嚇している。

あずみの身体に、三つ首の一つが、食いついた。

食いついたときにはあずみは水と同化して水の中を逃れていた。ぱしりと水が弾けて飛び散っただけ。

あずみの本体は、すでに蛇の道に溢れた水に逃げ込んでいた。

『じゃああああああああああああああー————————』

ーっっ！』

蛇神が悔しそうに啼いた。

三つ首の蛇は、あずみを諦めて、武蔵坊に標的を定めた。

蛇の頭が、武蔵坊に迫る。

武蔵坊は横に跳び、よける。

そこにまた蛇の頭が打ち落とされる。

それもまたかわす。

風乱坊を咀嚼した首は、ちろちろと舌を出しながらそれを観戦していた。

二つの首だけがまるで競争のように、お互いに牽制し合いながら、武蔵坊に襲いかかる。

手傷を負った小さな一つ首の蛇は、森の入り口、蛇の道にたたずんで、悲しそうにその情景を眺めている。

武蔵坊が辺りを見回した。

武蔵坊の背後は、だっ広い湖だった。

しかし飛び込むのは、武蔵坊には自殺行為。

森は、一つ首の蛇神が回り込んで、退路を塞いでいた。

あずみは水の鞭を振るって、武蔵坊に襲いかかる三つ首の蛇に挑んだ。

「退け！ あずみ！ 散開だ！」

武蔵坊が叫ぶ。

あずみは答えない。水を操り、蛇に挑む。

「おまえなら、退くことが出来る！」

それはあずみも知っていた。

あずみなら退くことは出来る。

だが、武蔵坊は、この状況から退くことは出来ない。

あずみは水を振るい続けた。

大蛇を打ち据え、縛り付け、突きつけた。

しかしどの行動も、三つ首の大蛇は意に介さなかった。

霊力が違いすぎた。

蛇神の身体に到達する前に、あずみの霊気はそぎ落とされ、
／＼はただの水に戻っていた。

そして、首の一つが、武蔵坊に喰らいついた。

武蔵坊は、両手両足を踏ん張って、喰われまいとした。

『しゃあああああああああ————————っ！
』

余った蛇の首は、悔しげに啼いた。

武蔵坊の〈陣〉が、どろどろと浸食されていく。

武蔵坊は、対抗するため、持てる全ての神性を解放する。

許容量を超える力を搾り取られ、深奥の神が——岩熊が——眠り
から覚めようとしていた。

「行け！ あずみ」

青銅色の眼をあずみに向け、

「行って、烏壬に伝えてやれ。彼らと合流して、ともに、森を抜け出せ、あずみ」

武蔵坊は、微笑んだ。

この状況、修験者としてあずみに課せられた責務は、生きて帰って金峯山に知らしめること。

たとえ相手が本家本流でも、烏壬に知らせる義務はない。

それに水の修験者であるあずみなら、烏壬などと合流するよりも、単独で撤退した方が、より安全でもある。

武蔵坊は、それを理解している。

しかし武蔵坊は、あずみと言う人間を知っていた。

彼女の抱える恋心も知っていた。

だから仲間を失った後に、彼らを見捨てろとは、命じられない。そしてその安易な逃避はあずみがこれを生き残り、歩むだろう長い人生のためにもならない。

武蔵坊は崩壊しかけた顔で笑った。

「それが、生きた行者の勤めだ、あずみ」

あずみは、呆然と見上げていた。

諭すように優しい韻律の言葉が、彼女の耳に流れ込んでくる。

武蔵坊の表情が怪しく揺れ始めた。

武蔵坊の思考の中で、武蔵坊の記憶と岩熊の記憶。

砂嵐の不鮮明な映像の中で、それらが無意味に切り替わり、混じり始めていた。

意味を成さない獣の記憶。

記憶が混濁していた。

葉桜才蔵とともに山野を渡り歩いた記憶。

武蔵坊が産まれる前——金峯山の修験者と戦い、討ち取られた記憶——岩熊の無念。

……すまぬな、相棒よ。

一首でも——せめて一首でも——我が愛弟子のために手向けて——
絞るような祈り。

——報いてくれ。

——我が身内の神よ。

武蔵坊は、人魂から、絞れるだけの靈気を絞り出す。

そして、自らが修験した岩熊の神魂に、ありったけの験力を、叩き付けた。

自らが修験した岩熊を、起きかけては居るが、まだ寝ぼけている岩熊を、強制的にたたき起こすために。

どくんつと、体の中で、勾玉が脈動する。

神と人との、奇妙な同居状態。

それを強いられた魂から。

怖ろしいまでの怨嗟が、漂ってくる。

捕らえられ奪われていた神の怒りだった。

それが、武蔵坊に吹き付けてくる。

岩熊の怒りが、武蔵坊の魂を捕らえ——武蔵坊は、穏やかに受けた。

見とどけ。

あずみは嗚咽をかみ殺して、背を向けた。

三つ首の大蛇が、背後に迫る。

『しゃあああああああああああああああー！ー！ー！ー！
！っっ！！！！』

追ってくる。

しかし恐怖はない。

あずみは水の修験者で、この大蛇を殺すことは出来ないが、多量の
水がある場所で、大蛇に殺されることもない。

恐怖はない。

悲しみだけがある。

あずみは、水しぶきをあげ、湖に飛び込んだ。

水に同化する。

水にまわりつく邪魔な服をおとりとして流し捨てる。

三つ首の蛇神も湖に巨体を投じて。

湖が爆発したような水柱があがった。

あずみは水の中で水となりながら、泣いていた。

036 たき火の向こうに（一）

烏壬の三人と一匹は、しばらく走るように進んだ。

濡れた地面。

折れた木の枝。

辺りには、蛇神と金峯山のやり合った後が散見された。

「どうやら間違いありませんね。急ぎましょう」
興奮気味に、かぐやが言う。

「いや、ゆっくり行こう」

剣十郎は、道の先を見つめながら、呟いた。

かぐやは、肩で軽く息をつきながら、怪訝な顔で、剣十郎を振り返った。

「もう音が止んでいる。終わったようだ」

言われて、かぐやが耳を澄ます。

確かに何も聞こえなかった。

しかしかぐやには、最初から何も聞こえなかったので、よく分からない。首を左右に振る。

「今から行っても間に合わない。それより戦いの跡を検分して行こう」

剣十郎が、刀の鞘で、いくつかの痕跡をなぞるように指し示した。「山の中では些細な形跡の判断や見落としで、生死が別れることがある。幸いここには、わかりやすい痕跡が残っている。見ておいて損はない」

あまり表情を変えず、剣十郎。

かぐやが頷いた。

周りを調べ始める。

「風乱坊は、〈風〉の修験者だ。〈風〉は〈先陣〉〈後陣〉〈偵察〉〈支援〉、どんな役割にも適合しやすい使い勝手の良い能力で、その分、修験した人間の個性が色濃く出る。あいつは先陣を好む。幹や枝に切り割かれた跡が残っているだろう、それがあいつの神通力だ。〈風〉を凝縮させて、刃を形成させる。その丸太の切れ味からして、随分と腕を上げているようだな」

かぐやは、両端ともに切断されて、ごろりと森に転がる丸太の切り口を指でなぞりながら、ちらりと剣十郎に視線を投げ。

「剣十郎と、どちらが上ですか？」

何気ない風を装ったかぐやの問いかけは、しかし僅かながら挑戦的な響きが宿っていた。

「正面から真剣に殺し合えば、あいつだろうな」

剣十郎は、平然と答えた。

かぐやが剣十郎に向ける視線に、どこか抗議するような色が混じった。

「俺は一魂だが、あいつは二魂だからな。それに、あいつの〈風〉はやっかいだぞ。遠近両用の攻撃が可能で、凄まじく速い。その上、水の中の魚みたいに、自在に空を飛び回りやがるときたら。〈風〉は拡散しやすい性質があるから、〈陣〉の分厚い神には苦戦するが、修験者同士の戦いなら、かなり侮れないぞ」

楽しそうに語っている。

「青竜王となら？」

「……比べる相手が間違っている。安心しろ、夜のお前とも勝負にはならない……〈陣〉の分厚い修験者にはかすり傷すら負わせられないさ。実のところ、支援でこそ真価を発揮する能力だしな、〈風〉は」

ほんの少しだけ、剣十郎の声が不機嫌になった。

剣十郎はしゃがむと、一本の枝を拾った。

「この濡れた切り口は、あずみの〈水〉だろう。あまり鋭くないな。叩き折った、と言ったところか。らしいな」

剣十郎が、肩を揺すって小さく笑う。

ほんの少し、かぐやの表情が不機嫌になった。

剣十郎が、ひょいとその拾った枝で、水の中を指し示した。

「川の底がへこんでいる。形からして蛇の頭が叩き付けられた跡だろうが、大きさからして、俺たちが戦った蛇とおそらく同一の蛇神だ。風乱坊の風である蛇神を此処まで叩き付けるのは難しいだろうから……武蔵坊の能力だろうな。殴り落としたのか、引きずり落としたのか。はっきりとは分からないが、まあ、見た目そのまま怪力型の修験者だな」

かぐやは真面目な顔で、しげしげと確認していく。

道の周りは、水浸しになっていた。

そして道の脇に生えた木々には、水に混じって紫色の粘液が付着していた。

蛇神の体液だ。

「人の血は、見あたりませんね」

「ああ。ここまでは一方的に、金峯山の圧勝だな」

じっくりと見聞してから、すこし先に進む。

解せない顔で、かぐやが振り返った。

「痕跡が消えました。さっきの場所で、仕留めたのでしょうか？」

「いや、逃げたんだろう。亡骸もないし。水底を見てみる。大きく刮げた跡がある。道の周りにも、水が溢れてぬれた跡が続いている。俺たちと戦って逃げたときにも、同じ痕跡が出来ていた。急いで這って逃げ出した。だから戦った跡が無い。もう少し進むと出てくるはずだ」

こくりと、かぐやが頷いた。

真剣な目で辺りを見回しながら、ゆっくりと、先に向かって歩いていく。

その背中を見送りながら、剣十郎は、

「やけに、素直だな？」

「剣十郎こそ、随分とご機嫌ですね。いつになく、饒舌ですが」

「それほどでもないがな」

剣十郎は苦笑し、ぽりぽりと頬を掻く。

「……わたしも、それほどではありません」

「夫婦喧嘩ですか？ それは早く食事にすべきです」

半分、眠りながら歩いていた宵子が、むにゃむにゃと呟く。

「……宵子。あなたも少しは勉強したらどうですか？」

「宵子は何でもよく食べる良い子です」

「それは知っています。……良い子は別にしてよく食べるのは」

しばらく進むと、切断された枝や、紫色の体液が散見された。

剣十郎は、森の頭上を見上げ、懐中時計を取り出し、

「そろそろ、戻って拠点を築こうか。それなりに滞在することになりそうだから、簡単な小屋も出来れば造りたい。せめて屋根と壁だけでも欲しいだろう」

こくりとかぐやは頷いてから、

「斧やノコギリは持って来ていないはずですが？」

「これが、ある」

剣十郎が、刀を掲げた。

確かに、斬れるだろう。

剣十郎なら、刀に〈陣〉を張れば。

が、蜘蛛の巣を斬れと言った時に斬れないと怒っていたのを思い出す。

蜘蛛の巣は駄目で、斧の替わりはアリ、かつては小烏丸で石材も切り出していた、そんな剣十郎の刀剣観に、多大な疑問をかぐやは感じたが、

「なるほど」

とだけ、とりあえず呟いた。

「場合によっては風乱坊をおだてて、手伝わせる手もある。それに、あずみは魚を捕るのが得意だ。晩飯時を狙って奴らの拠点を訪ねれば、色々のご相伴にあずかれるぜ？」

かぐやの無表情に、微妙な葛藤が渦巻いた。

「とにかく、もう少し進みましょう。金峯山が捕らえたにしろ、逃がしたにしろ、結末が知りたいので」

ゆっくりと、道を進もうとしたとき。

ざわざわと水が揺らいで、水の中から、水の固まりが盛り上がった。

「……良かった。やっぱり、此处にいた。剣十郎なら、来るんじゃないかと思った」

水が、ゆっくりと色を持つ。

水の中から肌色の身体がせり上がる。

「あずみ、か？ どうした？」

気軽な口調で、剣十郎は尋ねた。

おおかた、神を収獲したことを伝えに来たのだらうと、剣十郎は決めつけていた。

もう一匹いる可能性がある、それを言うべきか言わないべきか、言うとしたらどの様な形で伝えれば烏壬に有利に働くか、心の中で考える。

あずみは、ゆっくりと顔を上げた。

青白くなった顔。

水の中にあずみには、珍しい顔。

自らの身体を抱くようにして、震えていた。

そしてあずみは、一糸まとわぬ姿だった。

「……どうした？ 何があった？」

剣十郎の表情が引き締まる。

急いで上着を脱ぎ、あずみの肩からかけてやる。

「負けた。二人がやられた」

抑揚なく言ったあずみの瞳から、涙があふれ出た。

剣十郎の瞳を見つめ、

「うふふ、あははは、わたし、逃げちゃった。二人が、喰われたのに」

あずみは、剣十郎に縋り付いた。

「わたし、逃げて来ちゃった！」

顔をうずめ、声を上げて慟哭する。

「風乱坊が？」

信じられないと言いたげに、剣十郎は呟いた。

あの程度の神に？

いや、違う、

「なにが、いた？」

剣十郎は、強張ったあずみの身体を強く抱きしめ、真正面から見据える。

「……三つ首の、化け物……あれの数倍の」

まさか、と剣十郎は信じ切れていなかった。

そんな痕跡はどこにもなかった。

そんな大神の移動した痕跡は森のどこにも見つけられなかった。

風乱坊の猿顔が、頭にちらついた。

殴りつけられるような衝撃の中で、しかし剣十郎は理解していた。

金峯山の二人が喰われたのなら、つまりこの場所は危険だと言うことを。

「場所を移そう。話はそれから聞く」

剣十郎は、あずみの耳元で優しく囁くように言った。

軽く、背中をさするようとんと叩く。

こくりと、項垂れるように、彼女は頷いた。

あずみを抱きしめる剣十郎の視線は、鋭く森の奥を睨み付けていた。

037 たき火の向こうに（二）

孤島の上層、霧の上まで素早く移動する。

辺りの安全を確認した後、剣十郎たちはあずみの話を聞いた。

剣十郎は目を瞑って黙考する。

神と人では流れている時間が違った。瀬戸内には、〈お亀さま〉と呼ばれる聖地がある。

眠る大亀神の甲羅の上に建てられた社で、その中で育てられた赤子は、七人に一人の確率で一魂の修験者に成長する。

三百年経った今も島のような大亀神は眠り続けている。

三つ首の蛇神も、それと同様、眠り続けていたのか。

それとも蛇海の中でも更に狭い場所を縄張りとしていたのか。

「今夜はこの山で、夜を迎えよう」

剣十郎が告げる。

「武蔵坊は、逃げろって言ったわ」

あずみが、責めるように言う。

彼女は、剣十郎の予備の服を着ていた。

「分かってる」

「分かってない。私もあの神を見てる。逃げるべきだと思う」

「わたしたちが、月夜視が負けるとしても？」

かぐやが口を挟む。

あずみがそちらに向き直る。

剣十郎は両手で、あずみとかぐやを制した。

大きな戦いになりそうだった。

意志の統一と結束が勝敗を分けかねない。

剣十郎は普段以上に静かに口を開く。

「負けるとは思わないが、必ず勝てるとも言いきれないだろう。俺たちはその蛇神を見ていないし、あずみも武蔵坊も月夜視を噂でしか知らない」

「それは……そうだけどね」

あずみが少し口ごもり、視線をかぐやから外した。
かぐやもしぶしぶ頷く。

九狸や烏壬権現、月夜視など、古くからその名が轟く大神には、
積み重ねられた噂がある。

九狸が陣食いであること、烏壬権現があまたの神妖、修験者を屠ってきたこと。

月夜視の修験者が夜間にしかその力を発揮出来ないこと。

そして十年前の三日月の夜に、かぐやの前の月夜視の修験者が、
出雲の修験者に討たれたこと。

それ以来、月夜視の評判は芳しくない。

しかし噂は噂でしかなく、全ての真実を伝えているわけではない。
そして同じ神を宿していても、宿す人が、修験者が違えばその力は変わってくる。

「それに今はここを動けない。少々、深入りしすぎた。この森は蛇の根城で、蛇はこの森をよく知っている。だが、俺たちは何も知ら

ない。下手に動いて蛇神の巢に踏み込んでしまうとやっかいだ。まして俺たちは疲労している。逃げるにしろ、蛇の狩り場を強行軍で抜けるのはぞっとしない。何処に湖や川があり、蛇の道があり、蛇神が潜んでいるか解らないからな」
噛んで言い含めるように話す。

撤退戦は、危険が大きくなる。
特に宵子を連れている。

風乱坊すら喰った神から、宵子を背負って逃げきる自信は、今の剣十郎にはなかった。

「月夜視なら、」

「たとえ月夜視でも、湖の中にも引きずり込まれると、苦戦するだろう？」

瞬間、かぐやが返答を逡巡する。

剣十郎は答えを待つことなく、

「それでも勝てるのなら、それこそ陸地で、この場所で迎え撃った方が確実だ」

むっ、と眉を寄せた後に、かぐやがこくりと頷く。

「それに蛇神は複数居る。あずみたちが出会った三つ首の大神と、俺たちが手傷を負わした蛇。そして、もう一匹、分岐点で誘うように啼いていた蛇神だ。これで全部と断定できない。他にも居ると仮定して慎重に行動すべきだろう。その上、蛇は元来、夜行性だ。昼よりも夜の方が活動的になる。大多数の神妖も、夜にこそ活発に動く。もしも今夜、ここを襲撃してくるぐらいなら、蛇海の中では確実に襲ってくる。どうせ戦うのなら有利な場所で迎え撃ちたい」

「来なければ？」

あずみが尋ねる。

「蛇が動かないようなら、最優先で、蛇神の踏み込めない地形を見つけたい。無いのなら、断崖にでも穴を開けて、安全な避難場所を作る。それから、慎重に情報を集めながら、戦うか逃げるか――籠城するかを判断する」

「こんなところに閉じこもっても、援軍なんて来ないでしょ」

「確実にくるさ」

「来ても生半可な修験者じゃ、あの蛇神に勝てるとは思えない」

「烏壬本家本流の烏壬かぐやが消息を絶ったんだ。下手すりゃ青竜王なり大天狗が出張って来かねない」

剣十郎の言葉に、あずみが黙る。

烏壬かぐやは当代の本家本流で、宿している勾玉は、烏壬の至宝・月夜視だ。

烏壬かぐやは生きていようと死んでいようと、無視出来る存在ではなかった。

「それにあずみなら、水になってこの森を安全に抜け出れるだろう。場合によっては金峯山を通して烏壬に事態を告げて貰う、ことも頼めるか？」

あずみが答える前に、かぐやが拒絶した。

「そんな恥ずかしいまねなど、できません」

「もしもの場合だ。最低でも安全な寝床が確保出来て、敵の姿を見極め、太刀打ち出来ないと判断して、数ヶ月経っても誰も来ないような、限定的な状況で。頼めるか？」

「……良いけど。でも時間が掛かるわよ、ここからだ。……わたし、方向音痴だし……あいつらないと……いても方向音痴だけど

……それでいいのなら……」

剣十郎が頷く。

「援軍が来る前にここから撤退する場合は、地形と敵を把握して、移動経路を定めてからになる。こちらから仕掛ける場合は、蛇神の数と実力をきっちり確認してから、各個撃破でやっていく。それでいいか、かぐや？」

問いかけられ、かぐやは少しためらってから、頷く。

かぐやは、まだ風乱坊たちを食った大神の存在を信じ切れていなかった。

先ほどまで一緒だったあの二人がすでに死んだということも含め、現実感が乏しい。

あずみに謀れているのでは、と少し疑いを抱いていた。

しかし剣十郎が信じた上で話を進めていくので、剣十郎を信じて、腹の底で覚悟を決める。

「わたしは、かまいません」

「調査なら、わたしも協力するわ。出来ると思う」

少し言葉を探すように、あずみが言った。

「川と湖は、私に任せて」

「助かる。一番知りたい情報だ。俺とあずみとで、地形を調べる。

かぐやと宵子は――」

バツハが剣十郎を見つめていた。

「――それにバツハは、拠点から動かないでくれ」

かぐやが露骨に、顔をしかめた。

ちらりとあずみを見るときもなしに見ている。

「不服かもしれないが、昼間のお前は一魂と同じだ。それによ——」
「一魂ではありません。二魂です。たとえ真昼でも、月夜視の神は、ちゃんと私の中にいます」

拗ねたような口調で、かぐやは言った。

「それは知って……いや、どういう意味だ？」

それは知っているさ、と軽くなだめかけ、しかしかぐやの表情と言葉の端に引っかかりを覚え、剣十郎は聞き返した。

かぐやは、少し身構えてから、

「月夜視は月夜のみ、昼は眠っている、などと言われて居ますが、あれは比喻です。勾玉が寝ているのは当たり前ですし……。あずみの精霊だって、二四時間態勢で眠っているはずです」

かぐやの視線を受けて、

「それは、まあ……そうだけど」
あずみが肯定した。

かぐやは慎重に言葉を紡いでいく。

「水の精霊であるあずみが、砂漠ではその力を発揮しきれないように、月夜視は日だまりの中ではその真価を発揮できない。月夜と比べれば昼は寝ているに等しい。月夜視は月夜のみ、とはその程度の意味です。短期間なら、月夜視に神化することも可能です」

「本当か？」

剣十郎が、膝を乗り出した。

「本当です。あなたが勝手に決めつけていただけです」

かぐやは非難する視線で、剣十郎を見る。

剣十郎は、小さく唸った。

昼間のかぐやは一魂だと、そんな固定観念がいつの間にか剣十郎の中で、出来ていた。

「月夜視は月夜のみ、昼は眠っています。夜の私なら、あの程度の神妖、烏壬本家の敵ではありません！」

同意するまで延々と、事あるごとに、かぐやが繰り返していたせいの気がしなくもないし、それ以前にこの半年でかぐやが昼間に神化したことはなかったし……。

が、かぐやの言うことが事実なら、戦略的な幅が劇的に広がることになる。

「どのくらい、神化できる？」

真剣な剣十郎の視線に、かぐやが顔を伏せ、

「……………二秒くらい」

「短すぎだ」

剣十郎は、浮かした腰を、ゆっくりと下ろした。

あずみも小さく、口元で苦笑いした。

二人の態度に、かぐやは、むっと眉を寄せる。

あずみは、かぐやに対して、いたわるように微笑み。

「砂漠の水の精霊と同じなら、無理はしない方が良いね。命に関わるから」

「……月夜視とまではいかずとも、少しは………なら出来ます、昼でも」

「ま、それはそれとして、拠点が決まってからになるが、二人には拠点の絶対防衛を頼みたい。昼は宵子、夜はかぐやに頼む」

剣十郎はあぐらをかいたまま、かぐやと宵子に頭を下げる。
今まで黙っていた宵子が、少し顔を強ばらせてから頷いた。
その様子を確認してから、

「分かりました」
かぐやも頷いた。

要するに夜の主戦力であるかぐやは昼間は休息。宵子は下手に出歩くな、ということだ。

「それからバツハには臨機応変、拠点周辺の偵察を頼みたい」
剣十郎が猫の鋭い視線に気づいて付け足し、猫が頷いた。
それぞれの役割がとりあえず決まったところで、かぐやがあずみに向かい言った。

「では、取り分を決めましょうか」

「取り分？」

あずみが、怪訝な顔をする。

「あなたの取り分です。烏壬と金峯山の共闘になる以上、必要でしょう。一つ首の蛇神、その勾玉を一つ差し上げます。それと二人の遺品、勾玉です――が、もしも残っていればですが、数日以内なら、残っている可能性も高いでしょう」

「くれる、の？」

あずみの声には、極大の疑いが籠もっていた。

「それは最初から、あなた方の魂ものですから」

確かにそうだ。

金峯山の所有だった。

ただし喰われた時点で、その勾玉は誰の物でもなくなっている。
神の腹から出た勾玉は、手に入れた修験者たちの物になる。

特別な取り決めのない限り返却する必要はない。

あずみとしても二人の勾玉がもし回収出来るのなら、頭を下げ、
情に訴えてお願いするつもりだったが、かぐやからその申し出があるとは思っていなかった。

一つ首の勾玉一つがそれに付くのなら、あずみと剣十郎達の戦力
比、今の立場を考えれば、破格の好条件だった。

あずみは、探るように、剣十郎を見る。

剣十郎はあっさりと頷いた。

「ただし、あまり期待しないでくれ。どうしても戦わざるを得ない
場合を除き、こちらから仕掛けるつもりはない。遺品の優先順位は、
俺たちの命よりも低い」

「分かってる。いい、それで。その条件で、金峯山と烏壬の共闘……
でも、」

あずみは、自嘲するように、口の端持ち上げた。

「私は役に立たないわよ。ちょっと、珍しいだけで……戦力にはな
らない。あの神には、触れることすら出来なかった……無駄な取引
よ。対価には見合わない。失望、するわよ？」

「重要な情報を伝えてくれたことに感謝する。その対価も込みなら妥当だろう。それに役に立たないというなら、俺もきつと役に立たないさ。湖や川を調べてくれるだけでも大いに助かる。上手くすれば、蛇神の生態や数も掴めるかもしれないしな」

剣十郎が言う。

「そうです。私たちは、あなたを必要としています。水の精霊は、けっして珍しいだけではありません。かねがね、水の修験者さえ居てくれればと、何度思ったことでしょうか」

思いの外に、かぐやの言葉には、力が籠もっていた。

「あなたにお願いします」

あずみは、まじまじとかぐやの顔を見つめた。

「……そこまで、言うのなら」

「魚を捕ってきてください」

「……へ？」

「蟹とか居れば、なお、ありがたいです」

「いや……え？」

「ですから、水に潜って、魚、取ってきてください。得意ですよね？」

「……………それは……………まあ……………」

「わたし、パイナップル！」

うつらうつらしていた宵子が跳ね起きて、言う。

「宵子、きつとパイナップルはありません」

「じゃ、桃！」

ぽつとかぐやが頬を染め、

「……わたしも、桃を」

「……あの、さ？」

あずみはうろんに二人の少女を見て、目を泳がせて、剣十郎に視線を移した。

「そうだな。食事にしよう。蟹を多めに、頼む」

あずみは小さく頭を振ってから、体中から空気を抜くような深いため息を吐いた。

どうやら、ぜんぜん、いたわってはいくれないらしい。

彼らにとって死んだ二人は他人で、……いや、これは逆にいたわってくれているのだろうか？

……どちらにしろ、ここは神の縄張りで、神との戦いは続いている。

嘆くのは、ここから生きて帰ってから。

烏壬との共闘。

わたしが今は三人の代表。

やれる限りのことをやろう。きつと、敵は討つ。

あずみの決意をよそに。

「俺はその間に、薪を拾いがてら、軽く周りを調べてくる。かぐやと宵子は少しでも寝ておいてくれ。特にかぐや、夜はお前が主力になる。あずみも魚を捕ってきたら、休んでくれ。料理は俺がしておく。バッハは寝ながら周りの警戒。異変があればかぐやを起こせ」

全員が頷くのを確認してから、剣十郎は背を向け、森に入っていく。

「では、少し失礼します」

かぐやは、あずみに言って、宵子の横で丸くなった。相当に疲れていたのか、すぐに寝息を立て始めた。

小さく、あずみは微笑んだ。

まずは、共闘の最初の仕事。

魚を捕ってくるのは、いつもあずみの仕事で、自慢だった。彼らはもういないけど。

「うん、まかせて」

誰にともなく、空に向かってあずみは呟いた。

038 たき火の向こうに (三)

剣十郎は薪を拾ってくると、沢から石を運び、円形に置いて、焚き火の枠を作った。

その中に薪を組んで、火を付ける。

人が座るための石も、焚き火の周りに配置する。

あずみの取ってきた岩魚やドジョウを竹串に刺して焼く。

朝方獲った兎も捌いて、串に刺す。

沢蟹は石の窪みに水を浸してゆでる。

果物等は剣十郎も少し探してみたが、見つからなかった。

食事の準備が終わると、宵子とかぐやを起こし、たき火を囲んで、夕食を取る。

すでに日は落ち、月が昇っていた。

かぐやの時間だ。

霧の上に突き出た孤島からは、星空が見渡せた。

場所は少しだけ、移動してある。

かぐやがその真価を発揮出来るように、霧によって月明かりが遮られない、より星空に近い場所。

そして、巨大な蛇神が遡れないような流れが速く川幅が細く、しかしあずみが利用出来る水量の豊富な上流域。

その条件を満たす孤島の上層部で、月夜視が自由に身体を動かせる、ある程度の広さを持った河原を選んだ。

河を流れる水は、三十メートルほど先で、小さな滝つぼに落ち込んでいる。

河には、丸太を渡して、即席の橋が設けてある。

短時間で探したにしては、戦うためには、それほど悪くない場所だった。

剣十郎がざっと見渡してきた限りでは、麓を除き、孤島の中腹から上には蛇神の入った痕跡は何処にもなかった。

しかし同時に、蛇神が絶対に踏み込めないと断言できるほどの避難場所も、見つけられなかった。

避難する場所も、迎え撃つ場所も、明日以降、じつくりと探し直す必要があった。

かぐやと宵子が、競うように食べている。

競うといっても、宵子が五匹食べる間に、かぐやは一匹程度の割合だった。

あずみがちよっと取りすぎたかな、と思っていた三十匹の魚たちは、恐ろしい勢いで、宵子の胃袋に消えていく。

あずみも焼き魚を口にしながら、呆然と宵子の食いつりを眺めていた。

「宵子、食べ過ぎです。あなたはお昼に蛇を食べたでしょう」
最後の一匹に手を伸ばした宵子の手を、かぐやが、はたく。

「蛇は別腹だよ！」

「どんな腹ですか、それは」

「それにあれば、お昼ご飯だもん」

宵子が手を押さえ、唇を尖らせる。

目は、ほどよく焼けた魚に向いている。

「わたしは、お昼に何も食べていません」

かぐやが言って、最後の一匹を手にとった。

宵子が目尻に涙をためて、

「わたし言ったもん！ お昼ご飯にしようって何度も言ったもん！
でもかぐやちゃんとお兄ちゃんが全然聞いてくれなかったんだもん！」

じたばたと暴れ出す。

かぐやが、手元の魚と宵子を見比べ、真剣に悩み出す。

「こらこら、すぐ捕って来るから、けんかしないの——それは、あなたが食べなさい」

微妙にお姉さん言葉で、あずみがかぐやに微笑み、立ち上がる。

服を着たまま、川に飛び込む。

かぐやは宵子の視線を避けるように後ろを向いて、魚を口にする。
飛び込んですぐに何匹かの魚が、河原に放り出された。

宵子がすぐに拾い、かじりつく。

「宵子！ 焼いてから食べなさい！」

かぐやが、あわてて注意した。

「お魚は生で食べられるんだよ！」

「川魚は原則焼いて食うもんだ」

剣十郎が魚を宵子の口から取り上げ、串にさして、たき火に当てる。

宵子は膨れながらも、焼けるのを待った。

039 たき火の向こうに（四）

美味しそうに魚を頬張る二人の少女を、ほおづえを付いて、あずみは見つめていた。

あずみは元々小食だったし、武蔵坊たちと昼飯を取っていた。

「ちょっと、真剣に聞きたかったんだけどさ」

遠慮がちに、あずみはかぐやに尋ねた。

かぐやが、顔を上げ、あずみを見る。

「烏壬のお姫様が、何故、こんなところで、こんなこと、してるの？
かなって？」

行者は修験者の花形だが、貴賓のやる仕事ではない。

かぐやは、魚を持った手をすっと下ろし、胸を張った。

「大勢の人を幸せにするためにです」

予想もしなかった答えに、あずみは、目を見開いてまじまじとかぐやを見る。

かぐやは照れくさそうに、顔を少し伏せ、

「すこし、格好をつけました。強く、なるためです。守りたい人たちを守るために……これもちょっと格好をつけてますか」

照れくさそうに、かぐやは鼻の頭を搔いてから、真顔になった。

「でも、本当のことです。守りたい人を守り、幸せにしたい人を幸

せにする。そのためには力がある。青竜王のような力が。そのためにわたしは山を下り、学院を造りました」

「それってつまり………」

あずみはゆっくりと言葉を探す。

守りたい人を守る。

幸せにしたい人を幸せにする。

当たり障りのない言葉だが、しかし青竜王のように、と続けば話が変わってくる。

それはつまり、烏壬本山に対する――。

「あなたは、青竜王が何を考えているか、ご存じですか？」

「……いいえ、知らないわ」

他山のことはいいえ、下手な返事は出来ない。

「私も、知りません」

胸を張って、かぐやが断言する。

「なにそれ？」

あずみは少し肩を落とす。

「知りませんが、あの男が何かを企んでいるのは、間違いありません。そしてそれは〈山頂〉にとって見過ごせない事であるのも、間違いありません」

「……それは、そうでしょうね」

烏壬青竜王は、近代では烏壬最大の英雄だった。

出雲戦争最大の功労者であり、彼が作り出した研究育成機関〈学院〉は、烏壬に多くの恩恵をもたらした。

が、彼は少し、力を持ちすぎた。

烏壬では、勾玉や寺院、砦、神具、修験者は全て建て前として天女の所有であり、私することは禁止されている。

ただし、〈本家本流〉だけは例外とされている。

〈本家本流〉は自らの子も含め、自らが手に入れた全ての物を占有する権利を持っていた。

烏壬本家から外れた私有組織を作ることが原則として許されているのも、本家本流のみだ。

烏壬の法を破ることも、烏壬本山が発した命令を勝手に取り消すことさえ、許されている。

だから、慣例やしきたりを廃し、確固たる組織を築き上げた青竜王は、三年前、自らの力で堂々と烏壬本山の宝庫を破って、勾玉を始め多くの財を手に入れた。

そして烏壬に属する砦や鉱山をも、私物化していった。

烏壬に属する組織のすでに三割が、今では公然と青竜王の傘下の下っている。

彼の勢力は朝野や他山、外洋にまで及んでいる。

そこまでのことをしながら、烏壬青竜王はまだ烏壬に籍を置いている。

烏壬天女の間責には、「必要だから借りている」「天女に害をなすつもりはない」「俺が死ねば全て返す」と青竜王はのらりくらりと答えていた。

本家本流の自由裁量はあくまで本家本流にのみ許された特権であり、たとえば本家本流の子息といえど、相続することは出来ない。

つまり、青竜王が死ねば、その全ては烏壬本山に召し上げられることになる。

だからそれまで待て。

数倍にして返してやる。

と青竜王は言うのだが。

ここまで傍若無人に作り上げた組織だ。

簡単に手放すとは誰も思わない。

時が来れば、力が足りれば、必ず青竜王は烏壬の〈山頂〉に牙を剥くだろう。

「〈大天狗〉を中心とする長老たち、そして、〈烏壬権現〉を頂点とする神々たち。青竜王がどこまでを視野に入れているのか、どのような世界を思い描いているのか分かりませんが、必ずいつかは動きます。〈山頂〉か〈竜王〉、どちらが先に動くかは分かりませんが、烏壬はきっと割れます。その時までにはわたしは、わたしと私の守りたい人たちを守る力を手に入れる必要があります」

「でもそれじゃなおさら……本家のあなたがこんなところまで来て、命がけで蛇神の相手をしてる理由にはならないと思うけど？　普通、こう言うのってさ、頭目のする仕事じゃないでしょ？」

かぐやは少しうつむき、唇をかみ、

「……そうかもしれませんが――」

情けなそうに呟き、しかし、すぐに顔を上げた。

「しかし、そうではないのかもしれない」

胸を張って、言った。

「この半年で、そしてこの旅で、わたしは私の識らない多くのこと

を学びました。だから、これは私にとって、きっと必要なことなのだろうと思います。学院とは本来、学び、自らを磨き、高めるための組織です。ただひたすら、そのただけに集い……今はまだ、名ばかりですが、ですがいつか、そう遠くない日に、わたしは学院を学院にしてみせるつもりです。剣十郎や、雪兎たちに追いつき、追い越し、高め合い、彼らが学ぶべきことを手伝い、手伝われ……今はまだ手伝われているだけです……いつかは、そう遠くないいつかに、そうなりたいと思っています。そして、青竜王を超えます。わたしも、わたしたちの学院も。青竜王を超えてみせます。誰にも譲らず、守る物を守って、みんなが笑って暮らせる〈浄土〉を作り上げるために。……宵子！ この魚は私の分です！」

かぐやは、かぐやが手に持っている魚に食らいついていた宵子を、追い払う。

「そっか。なるほどね」

そう言ったあずみは、納得したわけではなかった。

烏壬の山頂は千年続いた秩序の頂点であり、青竜王はそれに対抗する新しいうねりの頂点だ。

神が居るかどうかも分からない山嶺に自ら繰り出しているようで、とどく高みではない。

夢でしかない。

が、あずみだって、仲間と共に、大きな夢を見たことはある。

「じゃあそれに共感して、剣十郎は学院に入ったんだ？」

あずみが、剣十郎に視線を移す。

「いや、………まあ、そうだな。烏壬がどうなろうと今さら興味はないがな」

蟹を嚙りながら、剣十郎が言う。

「お兄ちゃんは、お腹をすかせて行き倒れて居たところを笹原に拾われました」

宵子が言った。

ひもしそうに、かぐやが頬張る魚を見つめている。

「勝手に脚色するな」

蟹を嚙りつつ、剣十郎が抗議する。

あずみが、冷たい眼差しで剣十郎を見ている。

しかしその視線に気づかないまま、剣十郎は、蟹を嚙りながら、

「少々の休憩だ。ただ飯が食えて、寝る場所があつて、修練を積む機会がある。だから居る。それだけだ。いずれはまた流浪うさ」

剣十郎の言葉に、かぐやと宵子が驚いて顔を上げた。

かぐやが唇をとがらせ、強い口調で、

「それは、ぜったいに駄目です」

「何故だ？」

剣十郎が問う。

小さな声でかぐやは、

「……人手が足りないからです」

「そう遠くない未来に解消されるさ」

少し寂しそうに誇らしそうに、剣十郎が告げる。

かぐやは俯いた。

「駄目です。いっちゃ」

宵子が泣きそうな声ですがつた。

「なんでだ？」

剣十郎が、目で優しく理由を問いかける。

「お兄ちゃんいた方が楽しいから。だから、居なくなったら駄目です。志織が居て、かぐやちゃんが居て、お兄ちゃんが居る。雪兎が居て、双葉さんが居る。ついでに生意気な猫も……いないけど」

魚を食べ終え、たき火の側で丸くなっていたバツハが少し耳を動かした。

「だから、お兄ちゃんは居なくなったら駄目です。寂しいから。楽しいのに。居なくなったら、寂しいから」

剣十郎は星空をぼんやりと見上げた。
小さく口の中だけで、呟くように。

「……楽しいか」

……だからこそ。

剣十郎は隣に座っている宵子の頭を、くしゃくしゃかき混ぜ。

「まだまだ、少し先の話だ」

すぐに手を引っ込めて、蟹を食う。

「楽しいから、か」

あずみが懐かしそうに、笑った。

「なんかそれ、解るな。私も、楽しかった。すごく、楽しかった。なくしてみて、初めて解るんだよね」

いたわるような眼差しで、爆ぜるたき火を、見つめていた。

「うらやましいな。わたしも、もっと早く気づきたかった。最高に楽しかったこと。最高にいかしてたのに。今なら、いっぱい言いたいことがある。すごくいっぱい、一晩かけても二晩かけても言い足りないくらい、沢山ある。でも、」

うわずった声で呟いてから、自嘲気味に口元をゆがめ。低い声で、

「……昨日までは想いもしなかったけどね」

精一杯の笑顔を作って、三人に笑いかけ、

「だから、もっと素直になった方が良いよ……お二人さんも……って言いたかったんだけどさ……」

あずみは抱えた膝に顔を埋めた。

涙が堪えきれなかったからだ。

「……なんかわたし、なんだか、生きたまま……死んじゃったみたい」

ここまで自分が弱いとは思わなかった。

あの二人に依存していたとは思わなかった。

心の中に、ぽっかりと隙間が空いているようだ。

それとも、此処に剣十郎が居るからだろうか。

彼と知り合わなければ、行者になることもなく、そしてこの悲しみを知ることなかった。

本当は流浪になりたかった。

そんなあずみの我が儘で二人を巻き込み、二人が死んで、ふと、

思う。

自分だけ——生きていて良いのだろうか？

「生きてます」

強い口調で、宵子が言う。

年に似合わぬ、深い眼差しで。

「あずみさんは、生きてます。生きている間は、絶対に死ぬことは出来ないって。どれだけ死んだ気になっても、生きてます」

あずみが顔を上げる。

宵子が、あずみを睨んでいた。

宵子が、続ける。

「志織が言ってた。生きてる人間は、生きてるんだから、生きている間は楽しまないと駄目だって。生きてる間に楽しまないと、きっと、本当の終わりが来た時、後悔するって」

あずみではなく、宵子の視線は、その背後の闇に、向かっていった。

死神でも見えるのか、挑むような口調で、拒むような眼差し。

「そう、ね」

気弱にあずみが呟き、視線を宵子から焚き火に落とした。

「ありがとう」

ぱちぱちと、たき火が爆ぜている。

宵子、かぐや、剣十郎、あずみ、それぞれの顔が、たき火に照らされ、白く赤く揺れている。

剣十郎が、立ち上がった。

「少し、休もう。一応、俺が見張りをする。蛇神の巨体が森を抜けてくれば、盛大な音がするだろうが……万が一に備えて、な。三時間たったら、かぐやと交代しよう。かぐやは二時間だ。その後はあずみ、バツハ、宵子と順番に二時間ずつ交代で見張りをする。見張りの人間は、たき火に薪をくべるように。薪は、俺が集めておく。些細なことでも何かあったら、迷わずに起こしてくれ」

かぐや、宵子、あずみは、眠っている。

急流の水音、それが滝に落ちる音。

風に吹かれる枝葉の音。

焚き火の爆ぜる音。

三人の寝息。

それらを聞きながら、剣十郎は、焚き火に薪をくべる。

おそらくは焚き火のあるなしに関わらず、蛇神は来るなら来るだろうし、来ないなら来ないだろう。

しかし蛇神が人に慣れていれば、焚き火は、敵を招き寄せる目印にもなりかねなかった。

その逆に、本能で火を警戒して近寄らない場合もあり得る。

情報の少ない今の時点では、何が正解かは、分からない。

分からない以上、自分たちの都合を優先した。

ゆっくりと身体を休めるためにも、焚き火の温もりは必要だったし、戦闘になった場合にも、明かりは必要だ。

「風乱坊が、死んだか」
誰にともなく、呟いた。

山界、朝野を問わずに流浪っていると、多くの人間の死と出会う。
剣十郎には助けられなかった人もいるし、剣十郎のせいで、死んだ人もいた。

助けた人も、いた。

死んだ人間は死んだままで、生き返らない。
誰に言われるまでもなく、剣十郎は、それを理解しているつもりだ。

そして、生きている人間は生きている。
宵子があずみに言った言葉は、笹原が剣十郎に言った言葉とほぼ同じ。

言われるまでもなく、理解している。
だからこそ、死ぬ瞬間まで生き抜いてやるつもりだ。

森の中、枝ではなく下生えから、かさかさとした音が聞こえてくる。

一カ所ではなく、数カ所同時だった。
何かが動いている音。

下生えの中から、小さな白い蛇が一匹、顔を出した。
ちろちろと赤い舌を出して、焚き火を囲む剣十郎たちを見つめている。

二匹目の蛇も、顔を出した。

眷属を使った偵察だろう。

剣十郎の顔見知りにも、眷属を操り偵察を行う修験者が居る。

剣十郎は、石を拾い、打ち殺すかどうか、僅かに悩んだ……が、

足下に石を落とした。

石を放っても、全ての蛇を打ち抜けるとは思えなかった。
小蛇の一匹や二匹を殺したところで、意味はないだろう。
疲れるだけだ。

三匹、四匹と小蛇が顔を出し、姿を消し、また新しい小蛇が顔を出す。

その繰り返し。

剣十郎は、目を瞑って氣息を整える。

「やはり、来るか」

蛇がどの程度の情報伝達能力を持っているのかは分からないが、
今夜襲撃してくる可能性が高いと初めから予感していた。

だからこそ下手に逃げようとせず迎え撃つ体制を整えた。

夜は獣の世界で、神の世界だ。

そしてなにより、修験者を喰った神妖は、狂ったように好戦的になりやすい。

さて。

勝てるかどうか。

風乱坊の〈風〉や、あずみの〈水〉で、手も足も出なかったのなら、
剣十郎の〈陣〉も役に立ちそうもなかった。

三つ首の大蛇は、かぐやに任せるしかない。

おそらく三つ首の大蛇の他に、二匹は居るはずの一つ首の蛇神。

剣十郎とあずみで、そいつらの相手しなければならぬ。

同時にやってこないことを、祈るしかなかった。

二匹以上、存在した場合は――

剣十郎は、ぼんやりと焚き火を見つめていた。

力が欲しかった。

守りたいと思った人を、守れる程度には。

一魂となった剣十郎には、守りたいと思った人を、守れるほどの力はなかった。

剣術を学び、どれほど、手練を積もうとも。

剣十郎は、顔を上げた。

厳しい眼差しで、黒く染まった森を見つめる。

蛇神の気配は、まだしない。

しかし。

麓から、めきめきと木を倒す音が轟いて来る。

まだ遠いはずのその音は、しかし夜の闇に、大きく響き渡っていた。

剣十郎が起こすまでもなく、あずみとかぐやが、目を覚ました。眠そうに目を擦っている。

「神が来る。顔を洗って目を覚ましたら、出迎える準備をしてくれ」

剣十郎は、立ち上がり、端的に告げた。

かぐやとあずみは、すぐに覚醒して、跳ね起きた。

040 蛇神との最終決戦（一）

かぐやは、臨戦態勢を取ろうとして、襟元に手を伸ばし、止まる。剣十郎をきつく睨み付けた。

「見えないところに……いえ、見えるところで、後ろを向いていてください」

「まだ余裕はあるが——急いでくれ」

剣十郎がかぐやに背中を向けて、森に向い、立つ。

かぐやは、疑うように、剣十郎の背中を少しの間、見つめていた。

剣十郎にお尻を向けてから、しゅるりしゅるりと脱いでいく。衣類の山が、出来てくる。

半分以上は、武器を兼ねる織姫の帯だった。

「ずいぶんと中身、少なかったのね……」

感慨深げに、あずみが呟いた。

かぐやが、あずみを睨み付ける。

くしゅん、とかぐやは、小さくくしゃみした。

頬が赤い。

「いや、褒めたんだけどね」

たじろいだように水の中で、あずみが言い訳する。

まだ、擬神化はしていなかったが、あずみも服を脱ぎ捨てていた。

対岸の枝に、さっきまであずみが着ていた剣十郎の服が掛けられている。

かぐやは、鼻を吸り、恨めしげにあずみを睨み、片腕で隠されている彼女の胸元を見、ぷいっとあずみに背を向けてから、また衣服を脱ぎ始める。

くしゅんと小さくくしゃみをして、鼻をすする。
さらしのように巻いていた織姫の帯をゆるめる。

ぱさり、と最後のひと布を、かぐやは足下に落とした。

そのまま、手を月に向かって高々と掲げる。

まっすぐ背筋をのばし、背伸びするように……。

くしゅん、と小さくくしゃみをして、身体を折る。

どうも少し、熱っぽい。

が、神化すれば問題はない。

意識はかぐやでも、身体は〈陣〉の固まりとなる。
生半可な病気だとそれだけで治癒される。

ずずずつ、と鼻の下をこするかぐやの鳥肌たった裸身が、淡く白銀に発光する。

月の光のように、ふわりと髪が浮き上がり、漂う。

小さく細いかぐやの裸身は、白い影絵のように瞬間的に膨張し。

光が弱まり収縮した時には、巨大な白い犬が、たたずんでいた。

ふさふさとした白毛に覆われた、精悍な犬だった。

銀色の瞳には、稚氣と老成した知性が同居している。

三角耳が、ぴんっと立っている。

くるっと尻尾が、お尻の上で丸まってる。

薄墨色のお鼻は、少々湿っぽい。

それは、

烏壬本山、月夜の守護者。

月夜視の犬神。

月夜視の犬神には、影がなかった。

影があるべき大地には、月夜視の〈陣光〉が、月明かりよりも濃厚に明るく降り注いでいる。

月夜視となったかぐやは、月を見上げてから、満足そうに、小さく口元を歪めた。

月が出ていなくとも、日が沈めば神化出来るが、やはり月がある方が気分が良いし力も出る。

月夜視は、自信に満ちた動作で、ついつと足下を見下ろした。

「……これが、月夜視」

呆然と、あずみが呟いた。

あずみを見下ろす月夜視の犬神、その頂点である耳の先は、十メートル近い高さにあった。

山界どころか朝野にまでその名が知られる月夜視の犬神を、このときあずみは初めて目にした。

あずみの呟きを聞いて、月夜視は勝ち誇ったように、嬉しそうに、口元のゆがみを大きくした。

犬の表情が子供っぽくなった。

宵子が、かぐやの足にしがみつく。

「暖かい」

『……わたしは、防寒具ではありません』

銀鈴を振ったような声が、少し困ったように、地に降った。

月夜視が生前から体得している術の一つだ。

〈意識〉の届く範囲なら、離れた場所でも声を届けることができる。口を開ける必要もない。

もっともまだかぐやは術の行使に不慣れであり、ところどころ聞き取りにくい発音だった。

「来るぞ！」

剣十郎の声が、闇に広がる。

月夜視が森に顔を向けた。

剣十郎は、まだ月夜視に背を向けていた。

森をかき分ける騒音が、随分と近くなっている。

見える範囲の森が、揺れ動いた。

月夜視の足から、宵子が離れる。

木々をかき分け、蛇神が姿を現した。

頭部に裂傷のある一つ首の蛇神だった。

蛇神は自らよりも巨大な月夜視の姿に僅かにひるんだが、

『しゃあああああああーっ！！』

と絶叫して、犬神に躍りかかった。

蛇神の力を、かぐやはすでに知っていた。

他の蛇神が集まる前に、素早く確実に仕留める方法も理解している。

この程度の蛇神は、月夜視の敵ではなかった。

月夜視は、微動だにせず待ち受けた。

その無防備な犬神の首筋に、大蛇はおどりかかって喰いついた。蛇の目が、赤々と輝く。

その目に、途惑いの光が宿り――。

逆に月夜視のかぐやは――微笑んだ。

蛇神の牙は、かぐやの〈陣〉を突破できていなかった。

口から漏れる妖気も、かぐやの〈陣〉に触れる端から燃やされ消滅していく。

蛇神は、それならばとその長い胴体をくねらせ、月夜視の軀に巻き付けようとうねった。

犬神は、それを嫌った。

跳躍して、軀を一回転させる。

首に噛みついた蛇神は、振り回された。が、食い込ました牙を、放さなかった。それが蛇の敗北を完全にした。

月夜視が、顔を軀と逆回転に捻る。

顔の前に流れてきた蛇の首筋に、犬歯を突き立てた。
着地するときには、蛇の胴を、前肢で踏み躪っている。

お互いがお互いの首筋に喰いつき、一見すると、相打った格好にも見える。

しかし月夜視の牙は、たやすく蛇神の〈陣〉を食い破っており、鱗を貫いていた。

蛇神の軀から、紫色の体液が、にじみ出て来る。

あずみと宵子、バツハは、硬直して見上げている。

しかし剣十郎は月夜視が着地したときに、躊躇なく駆け出し、跳躍していた。

剣十郎は、〈陣〉を刀身に凝縮して漲らせ、苦悶する蛇神の無防備な頭部に、小烏丸を振り下ろした。

かぐやの〈陣〉に浸食された蛇神の〈陣〉は、強風に吹きなぶられ消えかけた火のように乱れきっていた。

剣十郎の〈陣〉が、小烏丸が、それを斬り裂いた。

蛇神の頭蓋がばくりと割れ、紫色の粘液が溢れる。

『しゃあああああああああああああー！ー！ー！ー！ー！ー！
つつつつ！！』

絶命までには至らなかった蛇神は、たまらず犬神の首を解放し、逃れようと身を揉み、暴れる。

だが月夜視は、逃がさない。

口腔の〈陣〉を強化、蛇神の〈陣〉をさらに浸食し、鱗を噛み砕

いた。

前肢の〈陣〉も強化して、蛇を踏み潰す。

四肢を伸ばして、蛇の身体に左右に引っ張り、蛇神を真っ二つに引き裂いた。

紫色の〈陣〉や蛇神の体内を駆けめぐっていた霊気が神の統制を解かれて、一気に四散する。

『オオオオオ』と、不吉な〈神鳴り〉を鳴り響かせて、蛇神の〈陣〉は無色の霊氣に戻っていく。

〈神の断末魔〉と呼ばれる現象だ。

〈陣〉の守りを持たない者達にとっては、それを浴びるだけで命を落としかねない危険な現象だった。

しかし月夜視の軀は、至近からの断末魔にも、小揺るぎもなかった。

ぶんつと首を振って、かぐやは蛇の半身、頭部側を河原の隅に投げ捨てる。

残り半分もその近くに蹴り飛ばした。

勾玉の回収は後回しだった。

かぐやは、誇らしげに、河原の隅で見つめている宵子たちを見下ろした。

宵子とあずみ、それにバツハは惚けたように立ちすくんでいた。

宵子は学院で、月夜視となったかぐやを何度か目撃してはいたが、その戦は今初めて目にしたのだ。

強烈な怒性を秘めた神の気配が、じわりと河原に漂ってきた。
森を踏みつぶす地響きが、近くなる。

「来るぞ！ 本命だ！」

剣十郎が、叫んだ。

かぐやはゆっくりと、顔を引き締めた。

精悍な犬の顔を、南西の森に向ける。

盛大に木々をなぎ倒して、神が接近してくる。

ぬっ、と一つの首が森の中に起立して、木々の上からかぐやを見つめた。

続けて二本目の首、三本目の首と、同じように姿を現す。

三つの首の全てが、直径で一メートルを超えていた。

それが胴で一つに繋がりが、胴体の太い部分は、直径四メートルを超えている。

尾の部分はまた三つに分かれ、長く長く伸びている。

身体を覆う〈陣〉は密集しており、液体のような質感を持ったまま、鬼火のように揺らめいていた。

一つ首の蛇神の五倍近い濃度、月夜視にも遜色のない〈陣〉だった。

剣十郎の表情に、途惑いが広がる。

月夜視となったかぐやの顔にも、緊張が奔った。

そして三つ首の蛇神。

左の首は、かぐやを視て、たじろいだ。

右の首は、それを恥じるように、前に突き出て、『しゃあああああ

ああーっ』と威嚇した。

中央の首は、かぐやを値踏みするように、ちろちろと舌を出しながら、眺めている。

それから右の首が、河原にうち捨てられている仲間の亡骸を発見した。

月夜視を睨み、高ぶるように『しゃああああーっ！』と鳴いた。

真ん中の首も亡骸を一瞥、直ぐに月夜視に視線を戻し、嘗めるようにちろちろと舌を出す。

左の首は、亡骸には見向きもしない。

三つ首の蛇神は、月夜視に向かい突進を開始した。

動き自体は緩慢で、まるで巨船が海を割って進むかのようなだった。

蛇神は月夜視を間合いに捕らえ、雪崩のように高所から、三つの頭を打ち下ろした。

月夜視が、月夜に高く跳躍する。

三つ首の攻撃をかわし、蛇神の後ろに着地する。

そのまま、蛇神に襲いかかろうと踏み込む。

三つの首が次々と振り返る。

月夜視が躊躇、踏みとどまる。

『しゃああああああああーっ！』

蛇神の三つ首が、揃って威嚇した。

鳴き声には、蛇神の霊気が怒りとなって籠もっていた。

音の速さで河原を席卷する。

しかし実戦を繰り返してきた修験者にとっては、虚仮威しにもならない。

剣十郎も、〈水〉となったあずみも、もちろん月夜視も揺るがない。

陣喰いの宵子も平然としている。

バツハだけが僅かに蹠跟めき、〈陣〉を強く張り直す。

真ん中の頭部が、ちろりと舌を出した。

右の頭部が、ぐるりと辺りを、睥睨する。

左の頭部は、じっとかぐやを見つめていた。

太い蛇の胴が、ずずずずと、また前に流れた。

河原の一角で、互いの生存をかけた、神と修験者の戦いが始まった。

040 蛇神との最終決戦（二）（後書き）

ラストバトルです。

約二章分なので少し長めです。

最小単位で細かく区切っています。
次から短文の更新が続きます。

041 蛇神との最終決戦（二）

かぐやは、月夜視に匹敵する巨大な神と、戦った経験がなかった。

その上、蛇の頭は三つある。

三つの首が、自在に動き、前から右から左から、かぐやに食いつこうと隙をうかがってる。

月夜視が最初の攻撃をかわして以降は、互いにけん制が続いていた。

互いに堅牢な〈陣〉を持つため、浅い攻撃は体にまで届かない。たとえ届いたとしても、互いの体内は霊気によって満たされている。

生半可な攻撃で破壊することは出来ない。

剣十郎は、地を駆けて三つ首の蛇神を挑発する。

剣十郎の〈陣〉では、蛇神の〈陣〉を突破するのは難しい。

が、剣十郎は、敵の〈陣〉が多少でも薄い場所を探して、斬り込んでいく。

陽動だ。

しかし空には上がらない。

目の前を飛ぶハエ程度の役割しか果たせないし、無用に霊力を消費する。

長期戦を考慮すれば、出来るだけ霊力を温存したかった。

この三つ首以外にも、まだ神が残っている可能性を剣十郎は考慮していた。

その時にこそ、剣十郎は剣十郎が必要になることを理解している。

剣十郎は、攻撃の数も制限して、目立つよう動き回り、囀の役割に徹する。〈陣〉と〈陣〉が触れ合えば、靈気を消耗する。

削り合いは一方的に剣十郎に不利になる。

右の首が、剣十郎に気を取られた。

あずみも参戦する。

清流から水を吸い出し、水の触手を長く伸ばす。

触手を槍のようにとがらせ、蛇神の目を狙って、突きこむ。

あずみの〈水〉は風乱坊の風と同じく神の宿業であり、勾玉から放流される気の半分ほどは勝手に〈水〉になる。

靈気を秘めた〈力ある水〉であり〈陣〉でもあるが、あずみの〈水陣〉でも、やはり蛇神の〈陣〉を突破出来ない。

しかし、目くらましにはなる。

河原であり、水は無限にあった。

目くらましと割り切って、水を取り込み自らの一部と変えて休むことなく〈水〉の槍を突き込んでいった。

五月蠅そうに、左の首が頭を振る。

蛇の頭部、二つの意識が逸れた。

その隙を狙い、かぐやが躍りかかる。

一時的に引き出す神の力を増強し、前肢の〈陣〉を強化して、真ん中の首を引っぱたく。

真ん中の首が弾かれ、左右の首も引きずられ、蛇神が横倒しとなる。

壮大な地響きと砂煙の中、かぐやは素早く蛇の三つに分かれた尾と胴の境界に食いついた。そこが、もともと三つ首の〈陣〉が薄い箇所だった。

月夜視の牙が、蛇神の〈陣〉を突破して、蛇の肉体に突き刺さる。蛇神の鱗がえぐれ、体液がにじみ出す。

かぐやは蛇神を持ち上げ、振り回そうとする。が重い。

僅かに胴体が浮いた時には、三つの首が体勢を立て直してかぐやを狙う。

かぐやは噛みつかれるより早く牙を抜いて、距離を取った。

巨大な犬神である月夜視の戦闘術は、犬の戦い方そのままになる。獣同士の戦いなら、首を押さえた時点で勝利となる。

しかし蛇神には三つの首があった。

一つの首を捕らえた時には、他の二つに食いつかれることになる。背後を取っても、蛇の首は柔軟に回り込んでくる。

ずるい。

月夜視となったかぐやは、とまどっていた。

思いの他、やりにくい。

042 蛇神との最終決戦（三）

幾度かの交戦の末。

三つ首の蛇神が、攻撃を止めた。

左の首は、月夜視を睨み付けている。

右の首は、剣十郎に気を取られていた。

真ん中の首は月夜視を見、

剣十郎を見、

あずみを見、

河原を見、両隣の首を見た。

そしてまた、月夜視に視線を据える。

真ん中の首が、高く高く首を伸ばし、天を仰いだ。

『しゃああああああああー！！！っ！！！』

霊気の声が、蛇海に広がっていく。

しんと静まっていた森が、まるで命を吹き込まれたかのように、ざわざわと騒ぎ出した。

三つ首が踏み倒した木々の隙間を縫って、一つ首の蛇神が現れる。

最初の一匹よりも少し小型だが、神と分かる水準にまで成長して

いた。

わらわらと、一つ首の蛇神に率いられるように、森の中から小さな白蛇も這い出してくる。

「やはり、まだ居たか」

剣十郎は三つ首から距離を取り、状況を分析する。

剣十郎の見たところ、かぐやの月夜視は三つ首より〈神格〉で勝っていた。

ただし、相性は良くなかった。

自在に動く三つの首を封じるには、月夜視の構造では難しい。

あずみや剣十郎が協力しても、三つ首を短時間で討ち取る算段は思いつかなかった。

宵子の陣食いを活用すれば、あるいは……。

そうも思うが、剣十郎の知る限りこれだけ凶悪な〈陣〉を宵子が食べたことはない。

吸収した瞬間内部から破壊されて命を落とす事もあり得るし、分厚い〈陣〉を食うことが出来ず、蛇神の〈陣〉に外側から破壊される事もあり得た。

陣食いについての知識を剣十郎はあまり持ち合わせていない。

取り込める量と速度の限界が分からない。

となると現状では、三つ首は月夜視に任せておくしかなかった。

剣十郎は、三つ首と月夜視に背を向け、一つ首の迎撃に向かう。

「あずみも一つ首だ！ 先にこいつを討つ！ 宵子とバツハは小蛇

の掃討！ かぐやは三つ首を押さえてくれ！」

大きな声で剣十郎が指示を出す。

どれほど神の知性が高くても、人との関わりの少ない山奥の神は、言葉を解することはない。遠慮なく、仲間と話し合うことが出来る。

新たに現れた一つ首の蛇神が、うねり剣十郎に迫り来る。

あずみの〈水〉が、一つ首の胴をぐるりと取り巻き、その動きを弱めた。

『しゃあああああああああーっ！』

蛇神が身をよじり、鳴く。

蛇神の口から漏れる霊気には、それだけで剣十郎の〈陣〉を浸食する力を持っている。

剣十郎は蛇の動きを予測して跳躍、背後から一刀をくわえる。

蛇の〈陣〉を切り裂き、鱗を切り裂き、僅かに肉を切り裂く。

『しゃあああああああああーっ！』

蛇神があずみの束縛を解いて、のたうち回る。

044 蛇神との最終決戦（四）

白い蛇がわらわらと湧いてくる。

「行くよ！ バッハ！」

宵子が薙刀を構える。

背中合わせの形で、バッハは宵子と逆を向く。

剣十郎が発案した作戦であり、かぐやが承認した対眷属用の陣形だった。

主であるかぐやが承認した以上、バッハは全身全霊を持って、忠実にそれに従う。

飛びかかってくる蛇を、宵子は前面に集中して斬っていく。
後ろはバッハが防いでくれる。

絶対の信頼……とまではいかないけど、防ぎきれなかったらその時はその時だ。

後で好きなだけからかってやればいい。
と宵子は腹を決める。

宵子はこちらからかいの言葉と情景を考えることで、無理矢理頭の中から恐怖を追い出し、蛇を迎撃していく。

小さく素早く薙刀を扱い、次から次へと蛇を切り落としていく。

足下をくぐり抜けた蛇が、宵子の足に噛みついた。

「ひゃっ！」

宵子が飛び上がった。

バツハが素早く宵子に食いつく蛇を切り落とす。

「むっ」

礼を言う暇がないから今は言わないことにして、宵子は気を取り直して蛇と対峙して退治する。

恐怖はさっきよりも膨らんでいたが、意地もさっきよりも膨らんでいた。

負けるわけにはいかない。

こんな蛇にも。

バツハにも。

昼間の醜態が頭の中をちらつく。

今がどれほどせっぱ詰まった状況か、それは宵子も理解している。

足手まといにはなりたくない。

ぐっと薙刀を握りしめる。

宵子の動きが、微妙に速くなる。

045 蛇神との最終決戦（五）

あずみの水が、一つ首の蛇神にからみつく。

完全にその動きを殺すことは出来ないが、瞬間には十二分の拘束力を発揮していた。

そのタイミングを的確に掴んで、剣十郎か蛇神に傷を負わしている。

剣十郎は、蛇神に細かく攻撃を加えながら、蛇神の能力、特徴や癖を探っていた。同時に、戦場全体の把握も忘れない。

昼間、最初の戦いの時、鳴き声によって一つ首が眷属を呼び出した。

今さっきは三つ首が鳴き声を上げてこの一つ首と眷属を呼び出した。

蛇神が下層の蛇を、かなりの影響下に置いているのは間違いない。下層の蛇ほど過度の興奮状態にあることから、それが伺える。

ただし、完全に支配しているわけではないようだった。

それぞれの蛇は、連携もなく勝手気ままに行動している。

蜂や蟻のような一個の生物にも等しい統一感を感じられない。

三つ首の三つの頭すら満足な統制が取れているようには思えなかった。

猿程度の知能はあるようだが、群れの規律は、おそらく猿よりも劣る。

蛇神の一撃をかわし、剣十郎が距離を取る。

「一撃をくわえる。神矢を放つ！」

剣十郎の言葉に、精霊となったあずみの顔が強ばった。

神矢。

多対一で分厚い〈陣〉を持つ神を屠るときに、修験者が使う攻撃手段だった。

神通力を持たない剣十郎が出せる最大の攻撃だが、しくじれば命に関わる。

本来、もっと大人数で、長く神と渡り合ってその特徴を掴み、弱らせてから行う戦法だ。

「無茶よ！」

あずみが拒否する。

「大丈夫だ。お前ならこの蛇を押さえられる！」

「だけど！」

「信じる！ お前と俺で出来る！ 最良の選択だ！」

ぐっとあずみが口を閉じる。

「わかった。絶対に止めるから！」

戦場は三つに分かれて、拮抗している。

三つ首と月夜視、一つ首と剣十郎にあずみ、蛇の群れとバツハに宵子。

剣十郎達の戦力はこれで全て。

余剰人員はない。

蛇神の総戦力は不明。

なれど、ここは敵の総本山。

蛇神の繁殖地だ。

蛇海のどこかに未だ眠れる蛇神が隠れていてもおかしくはない。時間を掛けて不利になるのは、剣十郎達の方であり、多少の無理や危険を冒しても、仕掛けざるを得ない。

剣十郎は、のし掛かってくる蛇神の口腔を後ろに跳ね飛んでかわした。

そのまま地を蹴り、高く飛び上がった。

飛んでから、更に〈空〉を踏んで、上昇する。

二度三度と空を蹴り、高く高く星空へと昇っていく。

蛇神が鎌首をもたげた。

上空の剣十郎を見上げる。

ちろちろと舌を出す。

剣十郎は、両膝を抱えるようにして、くるりと反転。

身体全体を一気に伸ばして、爆発的に急降下。

蛇神が口腔を開け、高空から迫る剣十郎を迎え撃とうとする。

ゆらり、と蛇神の口から妖気の息が漏れ出でる。

あずみが動く。

邪神の口を、二重三重に〈水〉で締め上げ、無理矢理に閉じさせる。

あずみは自らが制御できる最大の靈気を〈水〉に込め、蛇神を束縛。

強く引っ張り、お辞儀させるように下を向けさせ、蛇の動きを制する。

重力に導かれ、剣十郎の身体が加速していく。

小烏丸の切っ先をまっすぐ下に向け、剣十郎が有りっ丈の〈陣〉を張る。

自らを一個の矢と化して、狙うは蛇神の脳。

あずみの〈水〉の中で、蛇が抵抗する。

暴れ馬の手綱を引き絞るように、あずみは、蛇神を締め付ける。

数瞬の綱引き、あずみの〈水〉を引きずるように、蛇神が身をよじった。

目標を僅かに逸れ、剣十郎が蛇神に激突する。

蛇神の〈陣〉を突破して、小烏丸は、蛇神の右目を深々と貫いた。切っ先は貫通し、剣十郎の手首まで眼球に埋まる。

『しゃああああああああああーっっっ！！！！』

蛇が苦悶に叫ぶ。

盛大に血しぶきが吹き上がり、狂ったように暴れる。

が、あずみの水で固定されていて、身を揺することしかできない。

蛇神の〈陣〉が乱れ、火の粉のように辺りに舞い散る。

接触していることにより、剣十郎の〈陣〉と蛇神の〈陣〉がふれ合い、壊し合っていた。

だが、〈陣量〉の差は歴然としている。

業火に捲かれたように、剣十郎の〈陣〉が炙られ、焼かれていく。

早く離れるに越したことはないが、今ここで小烏丸を手放すわけにはいかなかった。剣十郎は持てる力の全てを込めて、剣を引き抜き、飛び離れた。

同時に、あずみが蛇の拘束を解く。

あずみは剣十郎の側に、水の帯を伸ばして上体を移動させ、

「ごめん、押さえきれなかった」

「いや、十分だ」

片膝をつきつつ、剣十郎が荒い息で答える。

仕留めることは出来なかったが、決定的なダメージを与えることが出来た。

剣十郎の全身は、蛇神の血に濡れていた。

あずみの水が、剣十郎の身体をつつみ、汚れを洗い落としていく。

「上出来だ」

自らの疲労をねじ伏せるように、剣十郎は立ち上がり、どう猛な笑みを浮かべる。

神は生物でもあり、同時に生物の枠を超えている。

並はずれた生命力や回復力を有している。

神は尋常でない気力によって、ありとあらゆる不足を補うことが出来る。

破損した臓器を〈気〉が代用することもあるし、肉体を完全に失っても〈神霊〉となって戦い続ける事例すらもあった。

が、ごく僅かな例だ。

大半の神は、肉体が傷つけばその機能を失うし、気の流れにも障害を生じる。

そしてこの蛇神は剣十郎の睨み通り、傷ついたことによりその能力を大幅に減じていた。

深手が霊気の流れを乱していた。

〈陣〉量が減じて、統率にも狂いが生じている。

僅かな時間、呼吸や血流に呼応して、〈陣〉に隙間が見え隠れする。

三つに分かれた戦場のこの場所では、天秤は大きく修験者たちに傾いていた。

046 蛇神との最終決戦（六）

剣十郎たちの牽制が無くなって、三つ首の攻勢が増していた。

月夜視の前肢による軽い攻撃を、蛇神は意に介さなくなってきた。
いる。

三つの首は競うように深い攻撃をかぐやに浴びせかけた。

蛇神は幾度か〈陣の息〉を吐いてかぐやを攻撃したが、拡散した
〈陣〉には月夜視の〈陣〉を浸食するほどの威力はなかった。

しかし蛇神の牙が、かぐやの〈陣〉に触れる回数が確実に増えて
いた。

白銀の毛が散り、散った毛は靈氣に戻り、自然へと帰っていく。

不規則に繰り出される三つ首の攻撃を、かぐやも前肢や牙で迎撃
するが、捌ききれなくなっていた。

月夜視がジリジリと後退する。

元々、そう広い河原でもない。

月夜視と三つ首にとっては狭すぎる戦場だった。

かぐやに戦場全域を把握する余裕はなかったし、三つ首に集中し
ろ、とも言われていた。

それでも宵子たちが何処にいるかは把握していた。

水辺近くの、たき火の側だ。彼女たちはそこから動かず、眷属を
迎撃することになっている。

たき火は五ヶ所、そのうち四ヶ所は、彼女たちを戦闘に巻き込まないようにするための囲いだった。

その火が、かぐやの目に入った。

かぐやは、慌てて踏みとどまる。

これ以上下がると、宵子たちを危険にさらすことになる。

左の首が、止まったかぐやの前肢に食いついた。

牙が、かぐやの〈陣〉を破壊しようとする。

かぐやは、〈神魂〉から引き出す力を高めた。

月夜視を包む〈陣〉が強くなる。

ぐつと後ろ足を踏ん張り、前肢を振るう。

食いついた蛇神を、はじき飛ばす。

首筋を狙ってきた右の頭部を叩き、牙をむいて中央の蛇を威嚇する。

飛びかかり、蛇神を押し戻す。

かぐやは月夜視の全力を出しては居なかった。

それ以前に、かぐやは月夜視の潜在力を知らない。

かぐやの扱える限界を超えて酷使すれば、月夜視が目覚めることになる。

二魂の修験者が己の宿した勾玉の限界を知る時は、往々にして死ぬ時である。

笹原や剣十郎の指導の元、学院で少しずつ〈陣〉の上限を上げて試してはいた。

天候や体調など、活動時間も含め色々と条件を変えて修行している。

経験からもう少しは安全に引き出すことが出来るはずだが……。

かぐやは決めかねていた。

力を温存すべきか、勝負をかけるべきか。

食事中に、各状況ごとの大まかな作戦会議は済ませてある。

かぐやが三つ首と一対一で相対せざるを得ない場合、その判断は、かぐやに委ねられていた。

月夜視の限界はかぐやにも分からないが、剣十郎にも把握しようがない。

何より戦いは流動的で、瞬時の判断が勝敗を左右する。

だからかぐやが自分で決めろ、と剣十郎に突き放されていた。

勝てるようなら好きなように仕掛けて良いと言われていた。

どちらとも決めかねる時は、無理をするな。

この三つ首の蛇神は、前肢でぺちぺち叩いて勝てる相手ではない。それは分かっている。

仕留めるためには、全力でもって防壁を張り、全力でもって食いつくしかない。

しかし経験が希薄なかぐやには、敵の攻撃を防ぐ必要最小限の〈陣量〉が見えない。

どの程度の靈力を込めて食いつけば、蛇神の〈陣〉を突破出来るか分からない。

だから攻防に振り分ける〈陣量〉の見極めが出来ない。

もしも仕掛けて力が足りなかった場合には、かぐや一人の死ではすまない。

仲間を殺すことになる。

勝てる、とも思うが、自信が持ちきれない。

仲間の命が月夜視の背中に乗っていた。

万が一にも、判断を誤るわけにはいかなかった。

さんざん悩んだ末、かぐやは温存を選択した。

剣十郎からの、指示を待とう。

かぐやは〈陣〉を安定させ、防御に専念する。

幾度もの死地を踏み越えた剣十郎は、かぐやにとって紙一重にしか思えぬ隙間を、正確に見極める眼力と、その隙間を斬り裂く技量を持っている。

たとい月夜視の限界を分からずとも、かぐやよりは的確な判断が出来るはずだ。

攻勢に出るのは、彼の指示があってから。

かぐやはまだ仲間の命を左右する決断に、慣れては居なかった。

次から次へと眷属がわき出してくる。

宵子とバツハの連携が狂い始めていた。

宵子が噛まれる回数が増えていた。

〈陣〉を持った蛇の妖が、いく匹か混じっている。
それがバツハの活躍を阻害していた。

〈妖〉の牙を、たまらずバツハが飛び跳ねてかわす。

宵子の背後が、がら空きとなった。

その隙間に蛇が潜り込む。

眷属が三匹、宵子のふくらはぎ、太もも、右腕へと食いついた。

宵子の悲鳴が迸った。

バツハが慌てて引き返し、宵子に群がる蛇を駆逐していく。

蛇の妖はバツハの勝てる相手だったが、宵子の背中を守りながら
となると、手の余る相手だった。

バツハの持ち味である敏捷性が封じられてしまうからだ。

何より、敵の数が多すぎる。

バツハは爪を揮い、素早く宵子に集った蛇を排除した。

しかしその隙を逃さず、〈陣〉を持った蛇の〈妖〉がバツハの足
に食いついた。

引きずり倒されたバツハは、前肢に〈陣〉を集中して妖をたたき

落とす。

バツハが起きあがる。
足を引きずるように。

妖も起きあがる。
頭を振るようにして。

バツハの援護がなくなり、起きあがったばかりの宵子に、また数匹の蛇が襲いかかる。一匹二匹に食いつかれると、上手く薙刀を操ることも難しくなる。

またバツハが彼女に食いつく蛇を、爪や牙で引きはがしていく。
その無防備なバツハの背中に妖が襲いかかった。

バツハはしかし宵子の救助を優先させた。

蛇のあぎとがバツハの背中に食いつく、その瞬間、開放された宵子が、バツハの背中、飛んでくる妖の前に腕を出す。

蛇の妖が、宵子の細い腕に食いついた。
が、宵子は勝ち気な笑みを妖に向ける。

宵子の腕が、蛇の〈陣〉を吸収していた。

〈陣〉を持った蛇の妖も、宵子にとってはただの蛇、いや、それ以下でしかない。

自らの〈陣〉に囚われ、身動きできなくなった妖を、宵子の救助を終えたバツハが一撃で引き裂いた。

宵子とバツハは背中合わせになり、蛇の迎撃を再開する。

だが樂觀は出来なかった。

〈陣〉を持った妖は、他にも数匹、河原を這っている。それ以下の蛇は、無限と思えるほどに湧き続けている。

バツハは右後ろ足を引きずるようにしながら敵を迎え撃つ。宵子も傷だらけだった。

やみくもに薙刀を振り回し――。

宵子とバツハを覆うように、水の竜巻が河原で吹き荒れた。

水流が、蛇を飲み込み、揉みくちやにして、引き裂いていく。

宵子の横に、水の精霊と化したあずみが、姿を現した。

剣十郎の指示で、宵子たちの支援にやってきたのだ。

「なかなかやるじゃない、宵子ちゃん、それにバツハも」

「ごめんなさい」

宵子が唇を噛む。

また足手まといになった。

今がどれだけ大切な状況かは、宵子にだって分かっていた。

ここに彼女が来るということは、それだけ他の戦場が手薄になる事を意味している。

宵子さえ居なければ昼間だって……。

「謝ることじゃないわ。上出来。良く頑張ってる。見直した」
あずみが微笑む。

宵子の頭を透明となった手で撫でる。

「剣十郎なら大丈夫。剣十郎だから。でも、いつまでも待たせちゃ悪いから。さ、行くよ。ちゃっちゃと殲滅しちゃいましょう！」

不定形であるあずみの水は、広範囲の攻撃に適している。

あずみの身体から流れる水流が大蛇のように河原をはい回り、白蛇を飲み込んでいく。

右腕を振って、水の弾丸を打ち出す。

威力を押さえて、弾数を多くする。

蛇を打ち碎いていく。

〈陣〉を持った妖は、水の弾丸を弾いた。

が、まずは数を削ることだ。

長く伸びたあずみの身体は、清流と一体になっていた。

その水をくみ上げ、あずみは次々と攻撃を繰り返して、蛇を駆除していった。

水流を逃れた蛇を、バツハと宵子が駆逐していく。

048 蛇神との最終決戦（八）

猛り狂った蛇神の口腔が、剣十郎に迫る。
引きつけてから、剣十郎はかわす。

一つ目となった蛇神の〈陣〉と、剣十郎の〈陣〉が僅かに交差する。

それが剣十郎を疲労させていく。

時たま蛇神が放つ〈陣の息〉も、剣十郎にとってはやっかいな攻撃だった。

逃げるだけでなく、片目となった敵の死角に回り込み、適度な攻撃も加える。

戦場全域を見渡しながら、蛇神を誘導していく。

出来るだけ、宵子やバツハ、かぐやから引き離すように。

一つ首の蛇神は、宵子やバツハの驚異になるのは当然だが、かぐやにとっても危険な存在になりかねなかった。

たとえば月夜視でも、前面で三つ首の攻勢を捌きながら、この蛇神に後ろから食いつかれて、ただで済むはずがない。

後ろ肢一本封じられれば、戦いの均衡は大きく崩れかねない。

絶対にかくやのところにも、宵子達のところにも、行かせるわけにはいかない。

あずみが小蛇を掃討するまで耐えればいい。

今は消耗を押さえつつ、蛇の注意を引きつけておけばいい。

その判断で、間違いはないのか？
もしも、まだ蛇神が残っていたら？

自問を繰り返す。

が、その時はその時だった。

どのみち出来ることなど限られていた。

宵子やバツハを見捨てるわけにはいかないし、剣十郎には、この蛇神を一刀のもとに斬り捨てるような力はない。

一人で仕掛けてしくじれば、剣十郎が死ぬだけで、それこそ戦場の調和が崩壊することになる。

今までも、そして今も。

剣十郎に出来ることなど、限られていた。

やれることをやるしかなく、やれないことまでやりようはない。

その瞬間の最善を尽くす。

開き直って刹那の中を生きてきた。

小烏丸がうねり、蛇神の〈陣〉の隙間を正確に切り裂いた。

が、浅い。

『しゃあああああああー！ー！ー！ー！』

怒り狂う蛇神から、距離を取る。

月夜視の動きが鈍っていた。

宵子たちを巻き込まないようにと、かぐやは河原を外れ、森の中に戦場を移していた。

が、これが仇になった。

木々をなぎ倒しながらの戦いだが、太い胴体を這わせ、首の動きのみで攻防する三つ首の蛇神の方が、月夜視よりも重心が安定していた。

月夜視は攻撃、移動、防御、全てに前肢を使う必要がある。

その上、そびえる木は左右の動きを阻害し、折れて転がる大木は、足運びの邪魔になる。

蛇神の一撃をかわし、着地したかぐやは折れた木を踏み、バランスを崩した。

慌てて踏ん張った月夜視の首筋に、左の頭が食らいついた。

かぐやは〈陣〉を経験のある最大まで強化する。

蛇神の牙の侵入を、月夜視の〈陣〉が押しとどめた。

食いつかれたまま、その蛇の首を引きずるようにして、かぐやは真ん中の首に飛びかかり、食らいついた。

そして噛みつこうと迫る左の頭を前肢ではたき落とし、そのまま踏みつける。

月夜視が、身をよじる。

身体全体で暴れる蛇神の胴体を押さえつけ、真ん中の首をくわえたまま、右の頭部を前肢二本で踏み押さえる。

首筋に食いついた蛇神のあぎとを何とかしたいが、動くに動けない状況だった。

蛇神の口腔内は、攻撃的な〈陣〉に満たされていた。

じわりじわりと月夜視の〈陣〉を浸食していく。

月夜視の白い身体に、じくりと赤い色が滲む。

かぐやは首周りの〈陣〉を強め、その攻撃を押しとどめ、押し返す。

月夜視の傷が塞がり、赤い血も消える。

同時に牙にも霊気を注ぐ。口の中の首を、噛み砕こうとする。

霊気の引き出す量を高めたために、かぐやの心に、月夜視の幻夢が混じりつつあった。

遠い、とても遠く淡い記憶。

おぼろげであやふやな風景が、かぐやの思考に、瞬きのように僅かな瞬間、介在してくる。

この状態をどの程度の時間維持出来るのか、かぐやには分からない。いい。

分からないが、こうなった以上、やるしかなかった。

月夜視の牙が、蛇神の首に食い込んでいく。

じわり、と口内に蛇の体液が溢れてくる。

月夜視は不快気に目元を歪めたが、さらに顎に力を加え、蛇神を締め付ける。

みしみしと鱗がきしむ。

月夜視の口から、だらだらと紫の液体が溢れ、こぼれおちる。

『しゃあああああああああーっっっっ！』

真ん中の蛇神の頭部が、苦悶に啼く。

生前も、そして死後もその名を山界にとどろかす月夜視の犬神。

霊力では三つ首を軽く凌いでいた。

大丈夫、勝てる。

焦る気持ちを蛇神と一緒に抑えつけ、かぐやは蛇神をじっくりと砕いていく。

『しゃあああああああああーっっっ！』

広く、深く、蛇神の叫びが、蛇海に拡散していく。

050 蛇神との最終決戦（十）

月夜視の〈陣〉と蛇神の〈陣〉が密着し、炙り合う事により、戦場の霊相が変わりつつあった。

世界にあまねく満ちあふれる無色の霊気が、かぐやと蛇神の猛る陣に炙られ、色を持ち始めていた。

白銀と紫の気が混じり合い、せめぎ合い、反響し合い、ジリジリジリジリと、擦れるような途切れぬ〈神鳴り〉を起こしている。

あずみの〈水〉は、その煽りを喰らって、僅かながらもざわめいていた。

息苦しいような気分だった。

抑えようも無いほど、不安にさせる。

そして鳴き続ける蛇神の声が、ひたすらに不快であずみを焦らせる。

だが精霊の魂が持つ霊気の井戸は、あずみの中で深く広がっていて余裕がある。

水のある場所で水の精霊が枯渇することはない。

剣十郎の〈陣〉にも、さざ波が立っていた。

気力が絞られるように奪われていく。

剣十郎の表情が厳しくなる。

此処までの戦いで、随分と霊気を消耗していた。

剣十郎の余力は、決して多くはない。

この状態が続けば、長く持ちそうにない。

蛇を掃討するバツハの動きも鈍っていた。

稲穂色の〈陣〉を維持するだけで精一杯だった。

しかし〈陣〉を持たない蛇の眷属たちは、それ以上の消耗を強いられていた。

蛇神のみの〈神鳴り〉ならば眷属にとって害はないが、月夜視と混じり合った神鳴りだ。

眷属にとっても災いとなった。

一匹二匹と、泡を吹き、死んでいく。

宵子だけは、違った。〈神鳴り〉を小さな身体に吸収し、生き生きと蛇を狩っていく。

あずみが目をしばたいた。

彼女の前で薙刀を揮う宵子の身体を、うつすらとまだら模様の〈陣〉が覆っていた……ように見えたからだ。

もう一度彼女が注意深く見た時には、もう〈陣〉は見えなかった。

あずみは頭を振る。

確かに〈陣〉が見えた。

……ような気がした。

白銀と紫の、ちょうど河原に満ちる靈気を煮詰めたような。

気のせい、かもしれない。

周りの光景はすべてその色に染まっているのだから。

それに、あずみには陣食いの性質など分らない。

そしてどのみち、あずみに神鳴りを止める術はない。

ただ急がなければならぬのだけは、確実だ。

蛇の数は減っていた。

残った蛇も弱り、逃げ散っていく。

ここはもう大丈夫だろう。

「宵子ちゃん」

あずみの呼びかけに応じて、宵子が振り返る。

「ここ、任せるよ？」

宵子は僅かに表情を強ばらせた後、

「ん、まかせて」

強く頷いた。

あずみは〈水〉の手で彼女の頭を撫でた後、剣十郎の援護に戻る。

宵子が、薙刀を振り廻すたびに、蛇が両断されていく。
不思議なほどに、宵子の身体は力に溢れていた。
気力が満ちていた。
まるで自分が、自分でないかのように。

剣十郎は転がるようにして、打ち寄せる蛇神の攻撃を、かわす。
〈陣〉と〈陣〉が触れ合うたびに、意識が奪われそうになる。

身体全体から脂汗が滲んでいた。
肉体の感覚が鈍っていた。

落とさぬよう、痛いくらい強く、小烏丸を握りしめる。

白銀と紫の霊気が混じり合い漂い、この世ならぬ〈幽世^{かくりよ}〉を形成
しつつある。

攻撃性を秘めた空間自体が、とどまることなく剣十郎の〈陣〉を
削っていく。

剣十郎の消耗は、激しかった。

瞬間瞬間、意識が持つて行かれそうになり、それを必死に気力で
繋ぎ止める。

一つ首の動きも鈍ってはいたが、剣十郎よりは分厚い〈陣〉に守
られている。

『しゃあああああああーっ！っ！』

剣十郎目掛け、蛇神が迫り来る。

獲物が弱っていると見てか、蛇神の行動が大胆になっていた。その蛇神の横っ面を、水の固まりが殴り飛ばした。

「おまたせ」

あずみの〈水〉が剣十郎に絡まり、返り血や汗を綺麗に流しさる。

「助かる」

腹の底の安堵とともに剣十郎は答え、息を吐き出した。

月夜視と三つ首に視線を向ける。

互いを喰らい合つての壊しあい。

しかし〈陣〉の総量では間違いなく、月夜視が三つ首を圧倒している。

三つ首は、断続的に、苦悶の叫びを上げ続けている。

その声は、切迫して聞こえる。

勝てる。

これで何とか。

こいつを倒して、かぐやの支援に赴けば。

三つ首の〈陣〉は月夜視の〈陣〉とせめぎ合つて、綻びが生じていた。

そして蛇神はかぐやと食い合い、動けない。揺らぐ〈陣〉の隙間を、思う存分、ぶっ飛ばすことが出来る。

剣十郎は今の状態では近づく自信すらもないが、あずみと一緒になら、十分に手助けが出来る。

目前で、一つ目となった蛇神が、ゆらりと頭を振って、起きあが

051 神喰らいの宵子（一）

森から姿を現した蛇神は、一つ首だった。

しかし今までの二匹よりも、幾分か大きかった。

そしてその白い躰には、土が付着していた。

ふらふらと、ふらふらと河原まで這い出、〈土付き〉はそのまま鎌首を重たげに下ろして、その場で丸くなろうとする。

しかし、

『しゃあああああああ——————————つつつつ
つつつ!!!』

という三つ首の鳴き声で、首を大きく跳ね上げ、覚醒する。

ちろちろと舌を揺らし、辺りを睥睨、土まみれ蛇神は、捕食しようとしている同胞、その同胞から逃げる剣十郎へと眠たげに視線を移した。

ふらふらと、
〈土付き〉は剣十郎へと吸い寄せられていく。

「くそっ」

剣十郎は喉の奥から吐き捨て、
 〈片眼〉となつた蛇神の攻撃をか
 わした後、そのまま距離を取る。

が、今まで相対していた〈片眼〉の蛇神は、そう簡単に衰弱しきった獲物を諦めようとはしなかった。

素早く反転、ここぞとばかりに襲いかかる。

その横っ面、死角となった右側から、あずみの水がぶったたく。

剣十郎めがけ、〈土付き〉の蛇神は単調に這い寄ると、単調な動きで食いついてくる。

その攻撃をかわして、剣十郎は胴体に切りつける。
が、小手先の攻撃だ。

〈陣〉に阻まれ、鱗までとどかない。

それどころか、たったそれだけの攻防が、疲弊した剣十郎の魂を痛めつける。

南西方向からも、じわじわと、蛇神の気配が近づいてくる。

その新たな蛇神が、河原に顔を出した。

全身を水に濡らした一つ首の蛇神だった。

今までの三匹よりも、明らかに小柄。

しかし神と呼べるだけの〈陣〉を十分に保有している。

〈小柄〉も河原に這い出るなり、河原の中央で仲間を追われる剣十郎を、標的と見定めた。

身体をうねらせ、前進する。

〈小柄〉が剣十郎に襲いかかり、それをかわしたばかりの剣十郎に、〈土付き〉が食らいつこうとする。

身体を投げ出すように跳ねて、剣十郎は攻撃を回避する。

すでに気力は尽きかけている。

着地の時に膝が楠れ、体勢を崩した。

そこを、〈片眼〉の蛇神が襲う。あずみが剣十郎を抱き上げ、助け出す。

小柄な蛇神があずみごと食らいつこうとする。

あずみの水が、伸縮してそれをかわす。

蛇神たちは一切の警戒を捨てて、次々と捕食を試みる。

あずみは水をうねらせ、ひたすら回避に専念する。

〈片眼〉をかわし、〈小柄〉をかわし、あずみの身体は〈土付き〉の眼前に。

方向転換、間に合わない。あずみはとっさに剣十郎を落とした。次の瞬間、〈土付き〉のあぎとが、透明なあずみの上半身を丸飲みにした。

しかし、おとりだ。

あずみの本体、心魂とも呼べる霊核を宿した本体は、すでに〈水〉の中を移動していた。

落下した剣十郎を、あずみの水が受け止める。

水流の中を押し流すようにして、三匹の輪の中から剣十郎を救いだす。

剣十郎を抱きしめる形で、〈水〉があずみの姿を作り直した。

「どうする！？ 剣十郎！？」

あずみの切迫した声。

しかし剣十郎を見つめる彼女の目は、まだ希望を失っては居ない。何かを剣十郎に期待していた。

あずみに抱かれ、剣十郎は歯を食いしばる。

どう戦うか、どう勝つか。

この状況を打破する方策。

ない、思いつかない。

……いや、ある。

かぐやが健在なら、まだひっくり返せる。

それは作戦と呼べるようなものではなかった。

それでも、可能性は、希望の欠片はある。

かぐやが三つ首を討ち取るまで、三匹の蛇神を引きつける。

三つ首を仕留め、かぐやさえ動けるようになれば、戦局はまた逆転する。

(できるか?)

……できない。

やるまでもなく、結果は見えていた。

眷属である一つ首の生命力の高さ、そして三つ首の〈陣量〉から推し量って、三つ首と月夜視の決着にはまだ時間がかかる。

立っているだけで氣力が削られていくこの〈神鳴り〉の満ちた河原で、今の剣十郎にその時間を耐えるだけの余力など残されていない。

が、やるしかなかった。

やれないことでもやるしかなかった。

「時間を稼ぐ。かぐやが三つ首を討ち取るまで、時間を稼ぐ」

剣十郎を見詰めるあずみの目が、徐々に揺れた。

052 神喰らいの宵子(二)

涙で目が霞みそうになる。

しかし、

「それしかないわね」

あずみは笑って答えた。

それ以上の会話をかわす余裕はなかった。

〈小柄〉の蛇神が迫る。

こいつが三匹の中で、もっとも敏捷だった。

剣十郎が、あずみから離れ、走る。

〈片眼〉の蛇神に向かって。

剣十郎の後を追おうとする〈小柄〉の前に、あずみは、水の肢体を投げ出すように見せびらかし、〈土付き〉の方向へと誘っていく。あずみは率先して二匹の蛇神を受け持とうとした。

今の剣十郎では、二匹相手に立ち回れるとは思えない。

しかし水のあずみは、川の水と繋がっている今、無限の霊気を要している。

あずみは〈陣〉を分散して、〈小柄〉と〈土付き〉の前に、自らの分身を次々と作り出し、誘い掛ける。

全力で攻撃したところで、あずみには蛇神の〈陣〉を突破できないが、時間稼ぎならお手のものだ。

〈小柄〉が釣られ、あずみの分身に食いつく。

が、〈土付き〉はあずみの〈水〉を完全に無視した。
剣十郎に向かおうとする。

あずみは行かせまいと、〈土付き〉に水の槍を打ち込み、気を引こうとした。

しかし〈土付き〉の〈陣〉は眷属の中でもっとも厚い。
あずみの攻撃は一つとして通らない。

〈土付き〉の前進は止まらない。

どうする！？

あずみの心に焦りが広がる。

大事な物が手の中から零れていくような焦燥感。
奪われていく恐怖。

認めたくない現実を認めなければならぬ瞬間がまた近づいて来
ていた。

このまま引きずられるように剣十郎の傍まで行くと、〈小柄〉ま
で近づけることになる。

しかし、あずみが葛藤するまでもなかった。

〈小柄〉の蛇神は、三回四回と囹の水を喰ってから、動きを止め
た。

さも面白くなさそうに、首を振る。

そして〈小柄〉も、剣十郎へと、視線を向けた。

053 神喰らいの宵子(三)

剣十郎は、少しでも気力の消費を押さえるため、極力〈陣〉を接触させないように〈片眼〉の攻撃を避ける。

後ろから〈土付き〉と〈小柄〉の気配が迫ってくる。

蛇神の攻撃が剣十郎に集中することは分かっていた。

あずみの〈水〉は簡単に捕食できないし、何より〈水〉だ。食い出がない。

この戦いが始まった当初から、片眼となった蛇神はずっと剣十郎のみを捕食しようとしてきたし、新手の二匹も、出現して即座、迷うことなく剣十郎を狙ってきた。

やはり蛇神も多く、神と同じように、〈水〉より〈人〉を餌として好む、それだけのことだ。

出来るだけ大きく動いて、剣十郎は〈土付き〉の牙から逃れる。今の剣十郎がこの濃度の〈陣〉と真正面から接触すれば、その場で意識を奪われかねない。

雪兎がいれば、金峯山の二人がいれば、各個撃破で殲滅できる神々だった。

〈聖女〉が居れば、剣十郎一人でもやりようはあった。しかしここに居ない者は頼りようがない。

〈小柄〉が剣十郎に迫る。

動きが敏捷で小回りが利き、今の剣十郎には、三匹の中でもっと

もやっかいな相手だった。

その〈小柄〉の胴に、あずみの水が二重三重に絡まる。
拘束して、引きずり倒す。

「あずみ！ そいつを頼む！」

〈小柄〉の〈陣〉の厚みなら、倒すことや完全に制することは出来ずとも、剣十郎から引き離すことが、あずみなら出来る。

「でも！」

「まかせたぞ！」

僅かな逡巡の後、

「分かった！」

あずみの返事があった。

剣十郎は〈小柄〉への注意を完全に捨て、〈土付き〉と〈片眼〉の動きに集中する。

注意を三方に分散して対応できる状況ではなかった。

あずみを信じるしかない。

〈片眼〉は猛り狂い、ひたすら剣十郎に食らいついてくる。

どれほどいなそうと、一つとなった眼が粘り着くように剣十郎を追ってくる。

二撃、三撃、四撃と。

かわし続けるうちに剣十郎の動きも大きくなり、隙も生まれる。

その隙を待って、〈土付き〉の巨大なあぎとが覆い被さってくる。
無様に転がり間一髪で剣十郎は逃れた。

そこに〈片眼〉の連続攻撃。

右に右に右にと追いやられる剣十郎の退路に、〈土付き〉が回り込み、挟撃するように待ちかまえた。

〈片眼〉が食いついてきた瞬間、剣十郎は跳躍した。

足下に〈陣〉を集中、〈片眼〉の頭部を踏むようにして、更に跳躍。

〈片眼〉を飛び越え、着地する。

心臓が破れそうに高鳴っていた。

肺の機能が低下して、取り込める呼気の量が減っている。

後どれだけやれるのか、気力を使い尽くして死んだ経験のない剣十郎には分からない。

己の魂を信じるしかなかった。

ただ唯一ありがたいことに、剣十郎は一魂の修験者で、胎の中に〈神〉を飼っては居ない。

神の目覚めを恐れることなく、最後の一滴まで遠慮無く自分を使い切ることが出来る。

〈片眼〉が反転して、猛然と剣十郎へ詰め寄せてくる。

剣十郎は起きあがり、背を向け逃げる。

追いつかれる前に左に跳んで蛇神をかわす。

〈土付き〉はゆったりと大きく動き、また剣十郎の追われてくる方向で待ちかまえた。

剣十郎は片眼の猛攻をしのぎつつ、否応なく〈土付き〉へと接近する。

〈片眼〉を飛び越えるタイミングを計る。

〈土付き〉が大きく口を開いた。

激怒と呼べるほどの、大音声。

蛇神の鳴き声が、河原をなぎ払った。

その衝撃に、剣十郎は一瞬意識を持って行かれ、尻餅をつく。

054 神喰らいの宵子(四)

新手の登場、その瞬間、それを察知し、かぐやは焦燥した。

どうする？ どうする？

敵を碎きながら、自問する。

この体勢で眷属たちの襲撃を受ければ、月夜視でも対処のしようがない。

しかし三体もの蛇神は、さしもの剣十郎でも手に余るはずだ。何かをしなければならぬ。

しかし動けない。

月夜視が、三つ首を一方的に捕らえているわけではない。互いに制しあっている。

今この牙を抜いても、月夜視の首に食いつく蛇頭を排除できない限り、仕切り直すことは出来ない。一方的に不利になるだけだ。

剣十郎は、宵子は無事なのか。

……きっと無事だ。

森の中で絡み合うかぐやには、河原の状況を緻密に把握することはできない。

しかし眷属たちの気配。

河原に現れた新手たち。

あれだけの巨体で暴れ回っている彼らの気配は、大地を通し、た

やすく感じ取ることが出来る。

奴らがここに来ないのは、敵がいるから、剣十郎が健在だからだ。

剣十郎なら大丈夫。

そう思いつつもかぐやの焦りは強くなる。

のんびりしている余裕はない。

かぐやはより大きな力を〈神魂〉から引き出し、牙に込める。
じわじわと、靈氣を引き出していく。

幻のような神の記憶が、かぐやの中にあふれてくる。

かぐやは神の記憶に流されないよう、自らを強く意識する。
それが正しいのか間違っているのか分からないままに。

靈夢が増してくる。

かぐやはそれに抗いながら、より強い靈氣を月夜視から借り受ける。

月夜視の〈陣〉が増大していく。

めしめしと、口腔の中で、蛇神の軀が軋みを上げる。

蛇神が苦悶に身をよじる。

より強く、より強く。

僅かでも早く、蛇神を殺すために。

月夜視の月光が強くなり、三つ首の〈陣〉を炙る。

身体の下に組み敷かれた蛇頭が、泡を吹く。

月夜視の光、その膨張がある一点を超えたとき。

のそり。

と。

かぐやの奥、靈気のわき出す深奥で、何かが身じろぎした。

その寝返りのような身じろぎにあわせて、朧気な記憶とは違う、感情。

月夜視の感情。

それはかぐやが未だ経験したことのない、神の感情だった。
大切な何かを失った、悲嘆、悲哀。

沸き上がるそれは、かぐやの心を埋め尽くし、占拠した。

初めて、かぐやと月夜視が真に触れあった瞬間だった。

数瞬、呆然と我を忘れた後、慌ててかぐやは神魂から引き出す力を緩めた。

風景画のような記憶とは違い、〈感情〉は神の目覚める前兆と言われていた。

『じゃあああああああーーーーーっっっ！！』

命拾いした蛇神が、絶叫する。

055 神喰らいの宵子(五)

〈片眼〉 〈土付き〉が雷撃に撃たれたように、動きを停止する。

〈片眼〉のまもっていたぎらつくほどの闘争本能が消失していた。

二匹は剣十郎には見向きもせず、同じ方向へ、怒声を発した森へ、
〈三つ首〉の元へと滑るように這い出した。

剣十郎の視界に、〈小柄〉も同じ方向に進む姿が映った。

「あずみ！ 手負いだ！ そいつを捕縛しろ！ ここで仕留める！」

刀を杖のようにして立ち上がり、剣十郎が吠える。

怒号のような鳴き声が轟き、あずみの〈水〉をびりびりと震動させる。

しかしあずみの水と競り合う〈小柄〉は、それ以上の衝撃で、硬直して制止した。

首がぎこちなく動いたと思うと〈小柄〉は森へと疾走する。

「あずみ！ 手負いだ！ そいつを捕縛しろ！ ここで仕留める！」

一瞬、呆然としていたあずみは、剣十郎の指示で、考える前に動

く。

移動する三匹の蛇神、その中でもっとも最後尾を移動する〈片眼〉を追いかけ、水の帯を絡ませた。

その時にはあずみも状況を把握していた。

三つ首がいよいよ苦しくなって、眷属を呼び寄せたのだ。

蛇神達が持っている〈本能〉を打ち消すほどの〈意志〉を込めて。

あずみの視界の中で、剣十郎が跳躍し、上昇する。

神矢を放つ気だ！

無理だ！

あずみは心の中で絶叫する。

今の剣十郎に其れを撃つだけの霊力はない。

が、止めることも出来ない。

剣十郎という人間が仲間を、月姫を見捨てて逃げるはずもなく、だから戦って勝つ以外に彼を生かす方法もなかった。

信じるしかなかった。

勝つことを信じるしか。

あずみは自らがもっとも効率よく扱える水量と〈陣〉量でもって

〈片眼〉を締め付ける。

『しゃあああああああーっ！！』

絶叫する蛇神の口も、あずみは拘束する。

もがく〈片眼〉が、ぴたりと制止した。

056 神喰らいの宵子(六)

一蹴り、二蹴り、剣十郎が空を昇っていく。

全身を覆う倦怠感と、細胞すべてが沸騰するような激痛。

前者は気力が尽き掛けている症状で、後者は異質な霊気に身体が冒された〈霊症〉の特徴だ。

意識が消えそうな疲労の中、皮肉なことに霊症の痛みによって、明瞭な思考を保つことが出来ていた。

しかしさすがにこいつを仕留めた後は、宵子に〈浄化〉して貰わなければ、身体の方が持ちそうにない。

(まあ何とかなるさ)

努めて気楽に考える。

ただ最善を尽くす。

その時その時の瞬間に。

運が良ければ今までのように生き残ることが出来るだろう。

七歩空を蹴り上がって、剣十郎はくるりと回転、頭を下に向ける。

重力に身を任せて、降下。

切っ先を〈片眼〉の脳天に向ける。

加速していく。

蛇神の肉体が迫る。

衝突する寸前に、身体全体から気を絞り出し、剣十郎は小烏丸の

切っ先に注ぎ込む。

〈陣〉と〈陣〉が接触、
僅かな抵抗の後、

小烏丸が蛇神の脳髓を正確に破壊した。

蛇神の〈陣〉が、急激に乱れる。

蛇神のまもっていた〈陣〉が収縮し、そして飛散する。

『オオオオオオオオオオオオオオ』

神鳴りが鳴り響く。

気の放出が止まった後には、〈陣〉を失って動かなくなった蛇神の骸があった。

「やった！」

あずみが歓声を上げる。

そして、

急いで蛇の骸に滑りより、剣十郎の身体を引きずり出す。

あずみが息を呑む。

「剣十郎！」

あずみの声が甲高く跳ねる。

剣十郎の身体が、紫色の妖気に覆われていた。

じわりと、体内から湧き出るように皮膚が紫に変色し、見る間に濃く、広まっていく。

末期の霊症だった。

霊気を切っ先に集中した状態で、至近から〈断末魔〉を浴びたのだ。

気力の尽き掛けた剣十郎は耐えることが出来なかった。

「剣十郎！」

叫び、呼びかけるあずみの顔がゆがむ。

が、剣十郎は反応しない。

あずみはパニックになりかけ、現状を思い出し、自分にやれることを、剣十郎の代わりにやれることを、月夜視に加勢を。

そこまで考え、あずみは思い出した。

一人の少女のことを。

宵子のことを。

（陣食い！）

浄化に分類される能力。

彼女なら！

あずみの水が剣十郎を抱きかかえ、少女を目指して大地を滑る。

057 神喰らいの宵子(七)

宵子の薙刀が旋回する。

白い蛇が両断され、彼女の足下に散らばっていく。

攻撃してくる蛇だけではない。

逃げる蛇でもその気配を捕らえれば、容赦なく宵子は殺害した。

宵子はただ、無心で薙刀を操っていた。

頭の中は、真っ白だった。

自分の役目を黙々と、機械的にこなしていた。

恐怖も怒りもすでに無い。

ただひたすら、蛇を狩っていた。

どれほど腕を振っただろう、宵子の周囲で動く蛇が、生きた蛇が居なくなった。

それでも宵子は、すーはーすーはーと規則正しい呼吸を繰り返しながら、腰を落として蛇を迎え撃つ姿勢を維持しながら、次の敵を求めて辺りの気配を探っていた。

敵の姿はない。

気配を探る範囲を、じわりじわりと広げて……。

そして、少女は呆然と立ちつくした。

死が、満ちていた。

河原一面に、命の尽きた死の光景が。

白い骸と、滲んでいる赤。

無尽蔵ともいえる蛇の亡骸が、折り重なって散乱していた。

宵子の周りを、死が取り囲んでいた。

宵子は、眷属が生きて彼女を取り囲んでいた時以上の恐怖を感じた。

生きる者のない死の世界が、今ここに広がっている。
恨みが河原を埋め尽くしている。

吐き気がして、口元を押さえる。

胃液が、押さえた手の隙間から零れる。

彼女はひざまずきかけ、慌てて手を引っ込めた。

彼女を取り囲む大地は、白と赤に染まっている。

みんなは、バツハは？

宵子は救いを求めるように、周りを見回した。

辺りは、夜とは思えぬほどに明るかった。

月明かりに、たき火の明かり。それ以上に白と紫の気が混じり合い、淡く発光して辺り一帯を覆っていた。

が、宵子は、見える以上に、良く見ていた。

物を見、音を聞き、臭いを嗅ぐくらい無意識に、ごく自然に。

それが出来ることを疑問に思うこともなく、宵子は河原に満ちた
靈氣を通して、埋もれ横たわるバツハの位置を、正確に見いだして

いた。

（バツハ！）

宵子は骸をかき分けるように走った。

三メートルほど移動して、蛇の亡骸を退かせていく。
埋まっていたバツハを掘り起こす。

バツハの擬神は解け、子猫の姿になっていた。

小さな傷が身体のあちこちを覆っている。

苦しそうに息を荒げている。

宵子は感じ取っていた。

紫色の霊気がバツハの中に侵入して、バツハを苦しめていることを。

宵子はバツハの中から蛇の霊気を吸収していく。

宵子がそうしようと思えば、蛇の霊気はただおとなしく宵子に従う。

バツハが、重そうに首を持ち上げ、宵子を見た。

両の眼を涙にぬらし、宵子はバツハをきつく抱きしめた。

「宵子ちゃん！」

せっぱ詰まったあずみの声が、宵子の名を呼んだ。

振り返る前に宵子は、あずみが傷ついた剣十郎を抱えていること

を理解し、目を見開いた。

058 神喰らいの宵子（八）

「すごい」

万感を込めた一言が、あずみの口から漏れる。

宵子に抱えられた剣十郎から、じわじわと紫色の靈氣がわき出していた。

それが宵子に吸い込まれていく。

修験者なら、他者の〈陣〉を破壊することが出来る。

しかし体内でそれを行う場合、臓器に致命的な損傷を負う。

ここまで汚染されると、たとえ剣十郎の氣が尽きてなかったとしても、助かる見込みはなかった。

浄化の能力。

確かに直接的な戦闘力にはならない。

しかし間接的な戦力としては、計り知れない可能性があった。

あずみの見ている前で、剣十郎の口元が僅かに動いた。

肌の血色が増していく。

あずみは怖々と剣十郎の胸元に、顔を寄せ、耳を当てる。

心臓の鼓動は、規則正しく、力強く打っている。

あずみは顔を離し、唇をかみしめ、涙をこらえる。

大丈夫。死んでない。

死なない。

死なせない。

あずみは立ち上がる。

視線を森の中、月夜視に移す。

宵子の陣食いなら、霊症を直せる。

ただし枯渴した霊気まではどうしようもない。

剣十郎はもうこれ以上戦えない。

だけどわたしはまだ戦える。

あずみは宵子に剣十郎をたくし、かぐやの救援へと向かう。

059 神喰らいの宵子（九）

眷属が迫る気配がする。

そしてその内の一頭が、狩り取られた気配。

眷属が死んだということは、誰かが殺したということ。

無事だ。

剣十郎は。

かぐやは安堵すると同時に、月夜視全体にまんべんなく意識を満たし、腹をくくって衝撃に備える。

動けない以上、耐えるしかない。

が、大丈夫。

眷属は一匹減った。

月夜視は、強い。

無敵だ。

月夜視は、烏壬かぐや学院は、わたしたちはそう簡単に屈しない。

月夜視の右後ろ足に、一つ首の蛇神が食いついた。

痛覚が悲鳴を上げ、月夜視の身体が揺れる。

食いついたまま、眷属は後ろ足に胴体をからみつかせた。

月夜視が押さえつけている三つ首の左頭が暴れ、逃れようとする。

かぐやは浮き掛ける足の〈陣〉を強化して、力づくで押さえ込む。

もう一つ。

右前足に、更に大きな衝撃。

完全に、足が浮いた。

押さえつけていた左頭が逃れ出る。

(しまった！)

『しゃああああああー！ー！ー！ー！っ！』
逃れ出た左頭は、怒りのままに月夜視の腹に食いつく。

『ごふう』

月夜視の口から、苦悶の息が、漏れる。

だが、くわえた首は放さない。

これを放せば、かぐやは一方的に食われることになる。

こいつさえ逃がさなければ、剣十郎が何とかしてくれる。
きつと。何とかしてくれる。

四つの蛇頭が食いつき、ねじり、からみつき。

蛇神の猛攻に。

月夜視の〈陣〉が揺らぐ。

あずみが月夜視の元に駆け付ける。

三つ首の二つが月夜視の首と脇腹、そして〈土付き〉が前足に、
〈小柄〉が後ろ足に食いついている。

月夜視が捕らえている真ん中の首も、今にも抜け出しそうに危うい。

なにより、月夜視の〈銀陣〉は蛇神の〈紫陣〉に攻め込まれ、じ
わじわと削り取られている。

一目見て、危険な状況だと分かる。

あずみは、月夜視の視界に身体を滑らせる。

「みんな無事だから頑張っ！」

まず、それだけを告げる。

月夜視の目の光が、僅かに強まる。

ほんのかすかに、月夜視があごを引いて頷いて見せた。

水の帯を引きずったまま、あずみは月夜視の周りを一周し、蛇神に攻撃を加えていく。

月夜視と接触して炙りあっているため、蛇神の〈陣〉のそこかしこには、揺らぎがある。

しかしそれでもあずみの水は、三つ首の〈陣〉を突破することが出来ない。

かろうじて、〈土付き〉の鱗を削れる程度。

〈陣〉を破って傷を負わせれる相手は、〈小柄〉の蛇神のみ。

せめてこいつだけでもと、あずみは小柄に狙いを定め、水の槍を打ち込んでいく。

小柄はそれを嫌い、月夜視から牙を抜いた。

が、巻き付けた身体までは放さない。

自由になった牙で、

『しゃあああーっ!!』

とあずみを威嚇する。

あずみはそれをいなしながら、攻撃を加えていく。

加えて加えて加えるほどに、あずみは絶望的な状況を理解していく。

こうしている間にも、月夜視の〈陣〉が減じ、蛇神の〈陣〉が堅牢になっていく。

060 神喰らいの宵子(十)

宵子は無我夢中で剣十郎の身体を浄化していく。

この程度の〈陣〉なら一瞬で吸い出すことも出来るが、ゆっくりやさしく、丁寧に吸い出していく。

宵子は浄化の能力で、誰かを救った経験を持たなかった。

が、笹原志織の指導を受けて、十二分の鍛錬は行っていた。

身体が大きいせいもあるけど、剣十郎の体内にはバツハの十倍以上の蛇陣が潜り込んで、我が物顔でのさばっていた。

僅かに残った剣十郎の〈陣〉が、それに抵抗している。

〈陣〉は総じて喧嘩好きで、攻撃性の固まりだ。

しかし両者の喧嘩は、戦場となる肉体を激しく損傷させる。

だから浄化するときは両方をなだめながら、刺激しないよう注意しなければならない。

宵子は絡み合った紐を解くように両者の〈陣〉を解き放し、糸を巻き取るように蛇の〈陣〉を回収していく。

じっくりじっくりその作業を繰り返す。

剣十郎の鼓動が大きくなる。

身体全体の血色が良くなる。

「うっく」

顔をゆがませ、小さく剣十郎がうめいた。

もう大丈夫だ。

ほうっと宵子が息をはく。

そして、気づく。

隣にいたバツハが居なくなっていた。

慌てて宵子はバツハを捜し、見つけた。

五メートルほど離れた場所で、バツハが倒れている。

「馬鹿！」

宵子が駆け寄って、バツハを拾い上げる。

もう一度、浄化する。

バツハが意識を取り戻した。

バツハは宵子の手をかりかりとひっかき身をよじり、抜け出そうとする。

『か、ぐ、や。か、ぐ、や』

かすれた声で、バツハがしゃべる。

拙いながら、唯一、子猫が発音できる言葉だ。

バツハが目指す先に、宵子は視線を向ける。

見るまでもなく、その先には、かぐやが居る。

蛇神と戦い………負けている？

宵子は河原を埋める霊気を通して、それを感じ取った。

バツハが宵子の手から逃れそうとする。

かぐやの救助。

行こうとしている。

宵子は、子猫をきつく抱きしめる。

「バツハには、無理」

バツハにも、そして自分にも言い聞かせるように宵子が言う。

それでもバツハは宵子の手から逃れ出よとする。

このままではかぐやは負ける。

死んでしまう。

……だけど。

三つ首の蛇神。

二匹の大眷属。

熊よりも怖い相手。

宵子の足が震える。

宵子は顔をゆがめ、バツハを抱きしめ、泣き出した。

霊気を通し、宵子の感じる先で、かぐやが血を吐いた。

くわえていた蛇神が、解き放たれた。

そいつの咆哮、勝ちどきが、

『しゃあああああああーっっっっ！』

河原を覆い尽くした。

宵子は揺らめき、一步後ろに下がり、座り込み、顔をゆがめる。

最後の蛇頭が、月夜視に、食いつく。

月夜視の〈陣〉が、消えかけた火のように乱れる。

宵子はぼたぼたと涙を流しながら。

唇をかみしめ、靈氣を通して、視える蛇神たちを、睨み付ける。

「……行こう、バツハ」

抱きかかえたバツハを肩に乗せる。

バツハが宵子の顔をのぞき込む。

宵子は前を向いたまま、頷いた。

宵子は、走り出した。

061 神喰らいの宵子(十二)

〈水〉の槍を駆使して、あずみは小柄を攻める。

小柄の〈陣〉は月夜視の影響下にあり揺らいでいるが、それ以上にあずみの〈水〉は三つ首の影響を受けて弱体化している。

あずみの〈水〉は、小柄に傷一つ追わせられなくなっている。

刻一刻と状況は悪化していた。

月夜視の〈陣〉が押され、蛇神の〈陣〉が森を支配しつつある。終局が迫りつつある。

何かをしなければと駆け付けて、あずみは何も出来ずにいた。

このままでは駄目だ。

何かをしなければ。

しかし何を。

何をすればいい？

自分の無能がいやになる。

自分の無力がいやになる。

ひっくり返す方策が何も見えない。

だから。

あずみは決断を迫られていた。

逃げる、という決断を。

それは同時に、生かす、という決断でもある。

今しかなかった。

今ならまだ、剣十郎と宵子を背負って逃げる事が出来る。
全ての蛇神を月夜視が引きつけている今なら。

月夜視が食われてからでは、手遅れだ。
決断するのなら、今しかない。

剣十郎はもう戦えない。
あずみにも……月夜視を助ける力など無い。
もはや烏壬かぐやは助からない。

逃げるべきだ。
逃げるしかない。

決断しようと踏み出そうとするあずみの心に、風乱坊の顔がちらつく。

武蔵坊の最後がちらつく。
仲間を失う痛みを、あずみは知ったばかりなのだ。
決断することはかぐやを見捨てただけでなく、二人にその辛さを
背負わせることも意味している。

それでも、知ったからこそ理解も出来る。
武蔵坊は自らの死を前にして、あずみを逃がそうとした。
その気持ちも。

生きなければならない。
生かさなければならない。
剣十郎は動けない。
宵子にそんな判断は出来ない。

あずみが、決断するしかない。

それを理解しながら、〈水〉の槍で、小柄と渡り合いながら、あずみは迷っていた。

『しゃああああああああー！ー！ー！ー！』

強大な、蛇神の咆哮があたりを席卷した。
びりびりと水の〈陣〉が揺れる。

あずみは、小柄から、月夜視の後ろ足からとっさに離れ、距離を取る。

状況を確認し、あずみの顔がゆがむ。

月夜視の口腔から、蛇神が逃れ出ていた。

そいつが、月夜視の首筋に食いつく。

月夜視の身体が痙攣する。

あたりを支配する霊気、〈銀〉が散らされ〈紫〉が増大する。

（逃げる、しか、ない！）

ぬるり、と月夜視の後ろ足に絡まっていた小柄が、身体を離した。

『しゃああああああああー！ー！ー！ー！』

距離をとったあずみを目指して、押し寄せてくる。

あずみは、微笑んだ。

けつきよく、決断することが出来なかった。

（……時間切れ）

（ごめん、剣十郎）

生かすことが出来るのに、生かすことが出来なかった。

あずみとへ小柄との戦いが始まった。

062 神喰らいの宵子(十二)

意識が朦朧としてきた。

まずい、まずい。

かぐやは焦っていた。

耐え切る自信はあった。

が、甘かった。

あつと言うまに押さえつけていた蛇神を逃し、この有様。

月夜視の身体は霊気によって創られた霊体であり、〈陣〉である。どれほど破壊されようと、無尽蔵の霊気によって補修出来る。

が、月夜視である間は、月夜視の肉体だ。

神の魂に密接に繋がっていて、傷つけられれば、幻痛を伴う。

そして月夜視の形態は、神の魂によって定められた一種の宿業だった。

膨大な〈陣〉を維持したまま、身体の形を変える技量を、かぐやは保持していない。

神化を解除すれば、もう一度、組み直すことは可能だが、神化がとけた瞬間、ひと呑みにされてしまう。

それ以前に〈陣〉の守りを失ったかぐやは、蛇の〈陣〉に圧殺される。

蛇神の〈陣〉が、じわりじわりと月夜視の幻体に浸透してくる。

蛇神は突き刺す牙を持っていたても、肉を引きちぎる歯は持っていない。

じわりじわりゆっくりと、月夜視の色を、蛇の色に染めていく。

この状況を打破するため、かぐやは神魂からより強い霊気を引き出そうと何度が試みていた。

月夜視が目覚める危険を冒してでも、一瞬で良い、最大の霊気でもって、蛇神たちを払い落とそうと。

しかし、すでに月夜視の限界なのか、それともかぐやの限界なのか、増強することが出来ずにいる。

いや、蛇神の〈陣〉のせいかな。

月夜視の奥深くまで攻め込まれ、意識が、人魂から出る霊気まで乱されていた。

手足の感覚が奪われるのと同じように、月夜視との交信が阻害されていた。

月夜視との繋がりが、希薄になっていた。

自分が、月夜視が、世界が、全てが遠く感じられる。

心が虚ろになりつつある。

自分の色が消えていく。

こんな蛇に、こんなところで、食われるのか。

絶望に落ちようとしていた、かぐやは、奇妙な気配を感じ取った。

蛇神の気配。

新手のその気配に、全てをあきらめ掛け、しかし違う。

視線の中に、それを捕らえたかぐやは、目を見張った。

一人の少女が、猛然と掛け寄せてくる。

河原を埋め尽くす蛇神の靈気。

そいつに炙られるちりちりとした痛みに、剣十郎は目を覚ました。重い身体を起こし、痛む頭を振る。

自分たちの置かれた状況を思い出し、跳ね起きるように立ち上がる。

続けてあたりを確認しながら、意識を失う瞬間も思い出す。

〈片眼〉は間違いなくしとめた。

剣十郎の今居る場所、たき火の側は、宵子たちが居たはずの場所。身体の状態から浄化されたことも把握する。

しかし河原には眷属も宵子もあずみもバツハも居ない。

そこまで把握し、即座、剣十郎は、森を目指して走る。

猛然と、紫色の〈陣〉を吸収しながら、宵子が爆走する。

〈陣〉によって強化された彼女は、猪のように威圧的に高速に。

一步一步、かつて経験したことのない速度で、蛇神へと接近する。

靈気を感じるのとは違い、目で見えるそいつは、近づけば近づくほどに、強大で凶悪で。

だから宵子は眼を瞑った。

堅く眼を瞑って、靈氣を通してのみ、そいつを睨み付ける。
月夜視の首に食いつく三つ首の一頭に。

駆け寄って、飛び上がって。

宵子はなぎなたを振り上げる。

月夜視に食いついたまま、三つ首の蛇神は、不思議そうにそいつを見ていた。

自らと同じ色を持ったそれは、眷属であり、自らの一部分であるはずだった。

しかし止まれ、うせろ。

そう思考しても、そいつは従わず近づいてくる。
自分であるはずなのに、自分でないかのように。

生まれて初めての違和感だった。

それでも、蛇神はその事実をそれほど深刻に捕らえては居なかった。

眷属が自立して行動するのも、時として反抗するのも珍しいことではないし、そいつはとても小さかったし、何より、同色の〈陣〉は味方であり自分だ。

決して蛇神を傷つけることはない。

今この時従わないからといって、何の不都合もない。

はずだった。

そいつのちっぽけな紫の〈陣〉が、蛇神を包む広大な〈陣〉に触れたとき。

ぐわんと、〈陣〉が反転、吸い取られていく。

蛇神は恐怖した。

蛇神を包む蛇神の〈陣〉が、あろうことか、蛇神に殺意を向けていた。

宵子が、なぎなたを振り落とす。

宵子の紫〈陣〉と三つ首の紫〈陣〉が接触した。

接触した瞬間、三つ首の膨大な〈陣〉が宵子の中に流れ込み、溢れかえって宵子の〈陣〉となった。

その瞬間に、宵子は宵子でなくなっていた。

鉈で豆腐を切るようにたやすく、なぎなたが、なぎなたを包む〈陣〉が、蛇神の右目を切り裂いていた。

『しゃあああああああああああああ——————————
——————————』

蛇神が悲鳴を上げる。

痛みよりも、自分が自分を殺そうとした恐怖によって。

063 神喰らいの宵子(十三)

宵子は立ちつくした。

凍えていた油に、火が点ったように。

干涸らびていた土に、水が満ち溢れるように。

膨大な力が宵子を埋め尽くしていた。

その靈氣にあてられ、宵子の深奥で、何かがうごめいた。

そこから、マグマのように噴き上がる――、

神の記憶、〈九狸〉の思念――、

仲間たちが、罪もない山徒たちが次々と殺されていく、その光景に、宵子は滂沱した。

温室のガラスは粉々に碎け散り、パイナップルの果樹園が焼け野原となり、美しい伽藍が崩れ、廃墟となった五山・出雲。自慢の楽園が。

右に向かえば東で、東に向かえば北で、あざ笑うかのように次々と火の手が上がる。

無力な山徒の亡骸がうずたかく積まれ、仲間の勾玉が烏壬によって盗まれていく。

挑発するように空を飛ぶ青竜。

百人を超える修験者に、何万人もの山徒たちは、血と肉と腐臭と怨念に転じた。

烏壬の悪鬼たちの手によって。

三百年の時をかけ作り上げた彼の楽園はもうどこにもない。地獄がそこに顕現していた。

おのれ烏壬――。

青竜を――大天狗を――烏壬権現を――。
必ずこの手で――。

烏壬を根絶やしに――この地獄を貴様らにも――。

一変した宵子の気配に、背中にしがみついていたバツハは飛び離れた。

あずみは小柄の蛇神をいなしながら、水辺へと誘導していく。
水中での勝負に持ち込むために。
そこでならあずみ一人でもこいつを倒すことは可能かもしれない。

『しゃあああああああああああああ――――――
――っ！』

三つ首の絶叫が、山域に轟く。

驚いたように小柄が引き返していく。

何が起こったのか、分からぬままに、あずみもその後を追いかけるように――。

思いとどまる。

あの状況から逆転できるとは思えない。

だから月夜視が討たれた。

そうあずみは判断した。

そうでなかったとしても、戻ったところであずみは何の助けにも為らない。

小柄を放置し、あずみは、剣十郎と宵子の元、たき火を目指した。

右目を失った三つ首の一つ、左の蛇頭は、狂乱したまま宵子に食いつこうとした。

しかし、口が閉じない。

宵子の〈陣〉に阻まれ、何の抵抗感もなく、口を閉じることが出来ない。

ならばと、離れようとした。

しかし出来ない。

彼の〈陣〉がそれを許さない。

蛇の口が逆方向に開き始めた。

限界まで広げられたそれは、そこで止まることなく、更に開き、

口角が裂け、めしめしと蛇の身体が裂けて、左の蛇頭は絶命し、神鳴りが轟いた。

森へと踏み込んだ剣十郎は、崩れ落ちる蛇頭を目撃した。
波のように、神鳴りが押し寄せる。
立ち止まり、その衝撃に耐える。

（なんだ？ 何が起きた？）

神鳴りをやり過ごした後、剣十郎は仲間たちの姿を探した。

河原には蛇の霊気が溢れており、今の弱り切った剣十郎では、気配で探ることが出来ない。

が、すぐに宵子を発見する。

月夜視と蛇神が絡まり合う眼前。

蛇頭が崩壊したまさにその場所に。

危険な場所に。

同時に剣十郎は、別方向から宵子を目差す小柄の蛇神を把握する。

（あの馬鹿！）

剣十郎が走る。

彼女を救助するために。

剣十郎は自らの足に〈霊気〉を集中し、加速しようとする。
が、間に合わない。

剣十郎の身体は自らが思う以上に疲弊していた。

〈小柄〉が先に宵子にたどり着いた。

〈小柄〉が宵子に躍りかかる。

一つの首が落ちる様を、宵子は無感動に眺めていた。
そこに、〈小柄〉が近づいてくる。

宵子に食欲を向けていた。

山界に君臨する大神、この九狸を。
丸飲みにしようと全開に口を開き。

かんに障った。

宵子は、〈小柄〉を〈陣〉で捕らえると、ねじり、引き裂き、固
結びに結んでから、破裂させた。

宵子の〈陣〉と、小柄の〈陣〉が接触した。
その時になって、初めて剣十郎は宵子を覆う強大な〈陣〉を認識
した。

蛇が支配する森の中で、その蛇神と同色の〈陣〉。
〈陣〉が宵子の周りを布陣している。

中空で大きく口を開いた〈小柄〉が、縫い止められたように、静止する。

蛇神は不自然に空中でのたうち、血を吹き上げ、絡まってから、爆発した。

（自爆した！？ いや、宵子か！）

来るだろう神鳴り備えて、剣十郎は身構える。

が、神鳴りは起こらなかった。

僅かにさざ波が起こったが、それは剣十郎が想定したより遙かに微量だった。

小柄の軀は四散して大地に散らばった。

しかし小柄の〈陣〉は、そのまま空にとどまっていた。

制御を失い、神鳴りとなるはずの〈陣〉が。

その〈陣〉が、宵子の〈陣〉に吸収され、宵子の〈陣〉が、より強大になる。

剣十郎が息をのむ。

（これが、九狸の神通力——神喰らいか）

神喰らいの九狸を知らない修験者はまず居ない。

しかしその神通力を詳しく知っている者も、また僅かしか居ない。

〈陣〉食いであることは、確定していた。

この三百年の間に、九狸の〈陣〉食いによって救われた者は、記録にあるだけでも千を超している。

ただしそれ以上の力、多くの神を打ち破った神通力は謎に包まれ

ていた。

出雲は当然のように秘匿したし、九狸と戦って生き延びた者は、青竜王とその手勢しか居ない。

その青竜王たちもまた堅く口を閉ざしている。

いくつか流れる憶測の中に、食った〈陣〉を自らの〈陣〉として使役する、というものがある。

これに近いが、しかし今の宵子は〈陣〉を食う前、取り込む前の段階、触れた時点で完全に支配していた。

知っていてどうなるものでもないが、知らずに触れれば、一溜まりもないだろう。

九狸の力に、宵子が覚醒した。

この土壇場で。

いや、土壇場だからだろう。

鞘から抜かずに斬れる剣はないが、宵子はずっと抜かないように守られてきていたのだから。

「――宵子」

剣十郎の呼びかけに、宵子が振り返る。

憤激に染まった宵子の視線が、至近で剣十郎を射抜いた。

根源的な恐怖を感じ、剣十郎は一步後ずさった。

弛んでいた剣十郎の表情が険しくなった。

（飲まれたのか！）

人の人生では経験することのない深みを持った記憶と感情。

それに飲まれ、自らがその神であると錯覚する、〈神懸かり〉。抑制を廃したそれは強大な力の発露を伴うが、しかし遠からず神の覚醒を促しかねない。

特に人を呪い死んでいった神による神懸かりは崇りそのものであり、人の心を容易く染め上げ破壊する。

宵子の〈陣〉がゆらめき、獣の形を、幻体を形作りつつあった。

064 神喰らいの宵子（十四）

一刻の猶予もなかった。

止まっていた足に活を入れ、剣十郎は駆け寄る。

宵子の宵子である感情と記憶、それがあるうちに呼び戻す。

「宵子！」

宵子の〈陣〉が、ぶわりとふくらみ、剣十郎を待ち受ける。

排他的な気配。

圧倒的な威圧感。

しかし剣十郎は止まることなく、飛び込む。

その〈陣〉に。

ほんの瞬間、押し潰そうとした彼女の〈陣〉は、そのことに怯えたように引き下がり、剣十郎を受け入れた。

彼女の〈陣〉の中で、剣十郎が宵子を抱きしめる。

「宵子！」

強く抱きしめ、耳元で宵子の名を呼ぶ。

「俺が分かるか！ 宵子！ 剣十郎だ！」

「……お兄ちゃん？」

きょとんと、宵子が呟いた。

宵子を取り巻く〈陣〉が急速に四散して、二割程度に減じた。

くしゃりと顔をゆがませて、宵子が剣十郎にすがりついて泣いた。

「私の山が！ 私の山が烏壬に燃やされた！ 全部！ いっぱい作

ったお寺全部！ みんな殺された、〈大黒〉も〈山摘み〉も殺され。

――烏壬が！ 烏壬が！ だから私は――！」

大黒、山摘み。

その名は剣十郎の知識にあった。

出雲で九狸を補佐した神の名だ。

「宵子！」

剣十郎は宵子の両肩をつかんで、強く揺さぶり、宵子の話を中断させる。

それから声量を落として、諭すように、ゆっくりと話しかける。

「桃山は分かるか？ かぐや学院は、分かるな？」

こくり、と宵子が頷く。

「笹原は分かるな？」

宵子が頷く。

「雪兎は？ 双葉は？」

宵子が頷く。

「美鈴は？ 柿の木の長老は？」

思いつく限りの名を剣十郎はあげていく。

剣十郎の足下に、バツハが身を寄せる。

「宵子、こいつは？」

「……バツハ」

「宵子、お前は誰だ？」

「烏壬宵子。……でも烏壬がわたしの山を！」

「それは夢だ、宵子。お前の中にいる神の夢だ」

「……神の？ 夢？」

「そう、神の夢。お前が生まれるより昔の、神の夢だ。お前でない神の記憶だ」

「わたしが、生まれるより……」

血相を変えたあずみもやってくる。

剣十郎と宵子を守るように、位置を取りながら、

「何があったの！？ それに、こんなとこで何やってるのよ！」

いわれ、剣十郎も気づく。

仲間の集まった場所は、月夜視と蛇神が絡み合う眼前だ。
のんきに話し合う場所ではない。

宵子が正気に戻った以上、すぐに離れた方が良い。

「あずみ、宵子とバツハを安全なところに避難させてくれ。出来るだけ遠く、靈気を吸わない場所に」

剣十郎があずみに向かい、宵子の背中を押す。

宵子が九狸を修験していたのは、確認できた。

これ以上〈陣〉を取り込めば、九狸が目覚める危険があった。そうなれば全てが終わる。

少しでも靈気の薄い場所に――。

「いや、待て」

剣十郎が、あずみを制止する。

剣十郎は月夜視と蛇神に視線を向ける。

二つとなった三つ首。

その一つは月夜視の首を捕らえていて、もう一つは腹部に食らいついている。

そして、土付きの眷属。

それが月夜視の後ろ足にからみついている。

月夜視の幻体は、ところどころ紫色に浸食されていた。

浸食され、かぐやは月夜視の制御を失い掛けていた。

このままではかぐやは死ぬ。

そしてかぐやが死ねば――、

宵子も含め、みんな死ぬ。

剣十郎はしゃがみ、真正面から宵子の瞳をのぞき込む。

「宵子。もう一度、今の技を使えるか？」

宵子の身体が震え、顔が引きつり、その目から涙があふれ出る。
拒絶するように、何かを振り落とそうとするかのように、頭を左
右に激しく振る。

自分でない神の記憶。

自分でない神の怨念。

自分でない意志に飲まれ、乗っ取られる恐怖。
その先にあるのは、神の目覚めと自らの死。

「ごめん、宵子」

剣十郎が宵子を抱きしめる。

「ちゃんと、向き合ってやればよかった」

宵子の、九狸の神通力。

きつと笹原は知っていたはずだ。

青竜王の研究所に属していた彼女は、ずっと宵子を研究してきた
のだから。

だが剣十郎は教わっていなかった。

いや、訊こうとしなかった。

訊く機会はいくらでもあったのに。

たった半年のつもりだった。

それが終わればまた神を探す旅が始まる。

だから踏み込まなかった。

それにそこは、一魂となった剣十郎には、あまりに遠い世界だった。

青竜王と、烏壬の山頂。

月夜視と、九狸。

まさに神々の世界だ。

流浪の剣十郎に、関与できる余地など無い。

(いや、違うな。僻みだ、ただの)

剣十郎は宵子を強く抱きしめる。

どれだけ強大な神を宿そうと人は人。

本家本流に生まれようとかがやもやはり人間だし、宵子も僅か七歳の女の子だ。

その背中に背負うには彼女たちの宿命はあまりにも重すぎる。だから、

「一緒に背負ってやる」

こいつらが大人になって、自分で立ち向かえるまで。

宿した神の重みに耐えられるまで。

もうお前などいらないと言えるその時まで。

「だから宵子。帰ろう、みんなで」

みんなで。

「かぐやを助けて、桃山の学院に。俺たちの学院に」

剣十郎の言葉に、泣いていただけの宵子が、月夜視に、かぐやに視線を向ける。

「宵子、やれるか？」

宵子は、歯をがたがたとふるわした後、それをねじり伏せるかのように唇をかみしめ、頷いた。

剣十郎が立ち上がる。

「かぐや！ 今からそいつを料理する。絶対に逃がすなよ！」

大声で告げる。

065 神喰らいの宵子（十五）

三つ首の一つが落ちたことによって、蛇神の侵攻は弱まっていた。

それでも、統制を失った月夜視を凌いでいる。

そんな中、かぐやの心は、平静を取り戻していた。

彼女の目前で、宵子が九狸の力を発動させた。

剣十郎もバツハもあずみも、みんな無事だ。

確認できた。

だからかぐやは、静かに待っていた。

仲間が彼女を救い出すのを。

烏壬宵子は、九狸を修験している。

それは疑惑だった。

その疑惑だけで、長老たちは彼女に死刑を宣告した。

殺して、勾玉を確認をする。

その決定に、青竜王は猛然と異を唱えた。

——宵子が修験しているのは私が制作したただの〈陣〉食いであり、
そして宵子は私の娘だ。あなた方の好きにはさせない。

宵子がかぐやの元に、たまたま転がり込んだことにより、かぐや

はその騒動に否応なく巻き込まれた。

月夜視のかぐやは小さく微笑む。

青竜王に間違いなく、嵌められた。

しかしそれはもうどうでもいい。

彼が何を企んでいようと、かぐやはただ守るだけだった。

守りたいと思った者を守る。

誰が相手だろうと。

何が相手だろうと。

覚悟はとうに出来ている。

強くなる。

強くなれる。

自分も。

そして仲間も。

月夜視の〈陣〉が、少しずつ安定し、強まりつつあった。

066 神喰らいの宵子（二六）

あずみの〈水〉が、剣十郎と宵子を一抱えにして、持ち上げる。

宵子の中で、九狸の怨嗟がずっと渦巻いていた。

今の宵子は、宵子の七年と九狸の三百年、両方の記憶と感情を有していた。

「いくぞ！ 宵子！」

剣十郎が号令を発する。

宵子が頷く。

月夜視に食いついている蛇頭。

その上空であずみの〈水〉が、剣十郎と宵子を投下する。

宵子は、剣十郎の胸にしがみついた。

剣十郎は、片手で宵子を支え、片手で小烏丸を振りかぶる。

宵子は自分と剣十郎を守るように〈陣〉を布陣。

同時に、小烏丸にも、〈陣〉を漲らせる。

二人の身体が、蛇神の〈陣〉の上に降りる。

宵子の〈陣〉と、蛇神の〈陣〉が触れる。

膨大な蛇神の〈陣〉の一角が宵子の〈陣〉となり、また同時に宵子の〈陣〉の幾らかが蛇神の〈陣〉となる。

蛇神は怯えていた。

宵子と月夜視、両方に怯えていた。

〈陣〉を通して蛇神の焦りと脅えが宵子に伝わってくる。

同時に、宵子も恐怖する。

〈陣〉の増加に合わせて、九狸である意識がより鮮明となった。

九狸の怨念が膨張し、宵子を飲み込もうとする。

何百人の修験者に、何万人もの山徒。

九狸は彼らのことを知っていた。

だから宵子も彼らのことを知っていた。

見知らぬ他人ではない。

かけがえのない者たちの不当な死。

宵子は顔をゆがめて泣いた。

飲み込まれそうな自分に気づいて、宵子は〈陣〉の手綱を放り出す。

宵子の〈陣〉の半分が、蛇神の統制下に戻る。

宵子と剣十郎の身体が、敵の〈陣〉に飲まれそうになり、宵子は慌てて〈陣〉を奪い返す。

九狸の感情が活発になる。

宵子は二つの記憶と感情の中、自らに言い聞かせる。

（私は宵子、烏壬宵子。九狸じゃない）

そう言い聞かせることは、出雲の仲間たちに対する裏切りに思える。

それが宵子ではない神の記憶だと頭の片隅で知っていても、宵子の胸を申し訳ない気持ちで痛めつける。

宵子と蛇神の境界が怪しく揺れていた。

その不安定な体勢で、

「宵子！ 剣筋に合わせろ！ 薙刀でぶった切るように〈陣〉を奪え！」

狙いを定め、剣十郎が小烏丸を振り落とす。

宵子は集中する。

小烏丸の刀身に。

小烏丸の剣筋に。

剣十郎に身体を預け、剣筋のみを見、その剣筋をなぞるように、薙刀を想起する。

空想の薙刀で斬るつもりで、〈陣〉を食う。

宵子の中に、蛇神の〈陣〉が流れ込んでくる。

九狸である意識がより鮮明となる。

九狸の怨念が膨張し、宵子の心を飲み込もうとする。

わき上がる記憶と怨嗟。

九狸の呪熱。

（烏壬をみな殺しに――）

九狸の感情が主張する。

宵子の心が抵抗する。

させない、ぜったいにかぐやちゃんを殺させない。

たった二年。

かぐやと出会ってからのたったの二年。

宵子はその絆にしがみつき、九狸の三百年に真っ向から挑んだ。

宵子、私は宵子。

烏壬を皆殺しに。

この地獄を烏壬にも。

させない、絶対に。

私は宵子、烏壬宵子！

かぐやちゃんは、お兄ちゃんは、わたしが守る！

小烏丸を包む紫の〈陣〉が、大きな薙刀の〈形〉になり、蛇の首を両断した。

膨大な神鳴りが、ほとぼしる。

その瞬間に、〈土付き〉を縛る意識が消滅した。

自由となった〈土付き〉は、己の意志で月夜視の身体から離れた。

〈土付き〉は逃げなかった。

親神の意識は眷属を支配するが、感情や記憶までは共有しない。親神にとって〈眷属〉は便利な手足でしかなかった。

『しゃあああああああああーっっ！！！！！！』

まるで今この時に生まれ落ちたかのような、未だかつて無い爽快な気分で、〈土付き〉は咆哮する。

蛇神の森の王者となった〈土付き〉は、当然の権利として、本能のままに獲物を捕食しようと。

〈土付き〉の蛇神が、剣十郎と宵子に迫る。

宵子の〈陣〉は、すでに最小限に減じていた。

九狸の怨念に飲み込まれないように自ら手放していた。

しかし押し寄せる〈土付き〉を前に、少女は戦いを覚悟する。

もう一度九狸の記憶を見て、九狸の怨念にをその身に宿し、この蛇神を退治する。

震えながら、その覚悟を決めた宵子の身体を、剣十郎が引き寄せた。

「もういい、宵子。俺たちの勝ちだ」

剣十郎が宵子の頭を撫でた。

「かぐや！」

呼びかけに応じるように、白銀の巨体が躍動する。

腹部に食いついた一つ首となった蛇神を引きずり、月夜視が、跳躍する。

力強い銀光を発して、真横から、〈土付き〉に食らいつき、押し倒す。

「あずみ！」

あずみの〈水〉が渦を巻き、月夜視に加勢する。

月夜視が残る蛇神、全てを葬り去る様を確認してから。

剣十郎の意識はとぎれた。

剣十郎が意識を取り戻したとき、すでに朝日が昇り、空は明るく輝いていた。

両隣には、暖かく柔らかい感触があった。

左でかぐやが、右であずみが剣十郎にしがみつくようにして、穏やかな寝息を立てている。

身体の上には、宵子。

剣十郎は、軽く眉をひそめた後、捕らわれた両腕をそっと引き抜き、宵子を降ろして、その場を抜け出した。

身体全体が怠く、それでいて、痛い。

軽く息を吐いてから、背伸びをする。

ばきばきと背中が悲鳴を上げる。

深呼吸、空気が美味しい。

もう一度、深く長く、深呼吸。

河原を見渡す。

河原には、蛇神の亡骸があちこちに散らばっていた。

一つ一つ歩み寄り、その亡骸を確認する。

すでに勾玉は全て回収された後だった。

勾玉をそのまま放置しておくとしがが怨霊となり暴れ出す危険もあり、殺した後は出来るだけ早く奪い取る必要があった。

それを実行する前に気を失ったのは、剣十郎としては失態になる。が、その程度の知識はかぐやにも教えてあるし、あずみもいる。

実際きっちり処理できていたから問題はない。

これからはもっと多くのことをかぐやに押しつけていくつもりだった。

勾玉の回収を確認してから、剣十郎は河原の真ん中に足を進める。

そこに、こんもりと土が盛られていた。

一つには、武蔵坊が手にしていた六角棒が、へし曲がった状態で刺さっていて、もう一つには、小烏丸が抜き身で突き刺さっていた。

武蔵坊と、風乱坊の墓だろう。

……さすがに小烏丸を置いていくわけにも行かないから、後で墓標を造ってやる必要がある。

剣十郎は、盛り土の前で目を閉じ、手を合わせる。

此処に剣十郎が立っていて、土の中に風乱坊が埋まっている。

その差がどこから生まれるのか、未だ剣十郎は理解できていない。生き残れたのが不思議なほど、紙一重の死地を、殆ど運だけで切り抜けてきた人生だった。

今の自分よりも強力な二魂の修験者が、あっさり絶命する様も幾度となく見てきた。

きっとその差を分けるのは、ほんの幽かな生きるための執念と、やはり、運でしかない。

これから、山界は乱れる。

出雲と烏壬の大戦争で、大勢の修験者と神が死んでいた。

それによって、かつて無いほど大量の勾玉が、一時に生み出され

た。

その殆どを青竜王が手にした。
百を優に超える数の勾玉を。

その勾玉から、青竜王が創造した〈新世代〉。
かぐやと宵子、その年代に集中する彼らの内、すでに幾人かは表
舞台へと姿を現している。

青竜王と大天狗は露骨に反目し合い、いくつかの小競り合いを起
こしている。

その余波はすでに山界のあちこちに及び始めている。

烏壬が割れるその時は、間近に迫っていた。

九狸を宿す宵子を身内に置く以上、烏壬かぐやは必ずその渦の中
心に引きずり込まれる。

かぐやも、宵子も、剣十郎もその渦の中で翻弄されることだろう。

のぞむところだ。

剣十郎は、目を開いて、墓に背を向ける。

「風乱坊、お前の所に行くことは出来ない。世話の焼ける仲間がい
て、俺の助けを必要としている。お前と試合うのは、遠い先に預け
ておく。せいぜい、腕を磨いておけ。いずれまた、やろう」

風へと、言葉を放つ。

かぐやが目を覚まし、小さく剣十郎に手を振っていた。

剣十郎は、ゆっくり仲間たちの元へと、歩んだ。

067 エピローグ（後書き）

最後までお付き合いくださってありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6961h/>

烏壬かぐやと蛇神の森

2010年10月10日22時42分発行